

浅野誠

人生・生き方

2016～2019

2020年4月編集発行

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」は、2007年にスタートしてからもう13年経過する。「生き方・人生」カテゴリーに分類される記事は、全体のなかで、「庭・畑」「自然」や「沖縄」「南城」「近隣」などと並んで、量的に多いものだろう。

その記事のなかで、2016～2019年に掲載したものを、掲載年月日順に編集した。前号「生き方・人生 2013～2015年」（2019年9月編集発行）に次ぐものだ。「生き方・人生」関連のものは、前号表紙に書いたが、今回で9冊目となる。

楽しく眺めていただければ幸いである。

目次

ブログ掲載年月日順に配列。右端はブログ掲載日

HPに「生き方・人生2013～2015」を掲載する	2019年10月27日
高齢期の生きがい	2019年07月03日～10月14日
15. デジタル化 自叙伝 墓	
14. 「自分」という存在を気にかける 人生を振り返る	
13. 世界発見と交通手段	
12. つきあいのいろいろ	
11. 世代間つながり	
10. 身体機能・脳機能縮小の受け入れと対処	
9. 「しなければならぬ」から「できるならやる」へ	
8. 衣食住など日常生活の楽しみ 整理の楽しみ	
7. 時間を持て余す時 テレビ 旅 孫の世話 介護	
6. 会社員（勤め人）的生き方から卒業する	
5. 趣味活動と地縁的人間関係 老人会	
4. 趣味	
3. 社会貢献	
2. 適度に働く・休む やりがい 創造性 有用性	
1. 「余生」ではなく、本格的人生として	
変わり時のこのごろ 庭畑と「世の中」	2019年07月27日
嫉妬（しつと） ライバル意識 勝負・序列にこだわる意識	2019年06月11日
（続）嫉妬 ライバル意識 勝負・序列にこだわる意識	2019年06月19日
人生で大切にしたいこと 進路選択 看護大学授業	2019年06月07日
高齢者事故と高齢者扱い	2019年05月23日
都会と田舎	2019年02月24日～03月31日
6. 〈自然とのつながり〉〈人間とのつながり〉 祭・共同表現 共同生活	
5. 〈自然とのつながり〉〈人間とのつながり〉の新たな模索 家庭菜園 おしゃべり場	
4. 田舎でも都会でも、自然との人間との新たなつながりを模索する	
3. 都会イメージ・田舎イメージの問い直しと再構築	
2. 都会から田舎へ	
1. 田舎から都会への大移動	
人生後半突入期の激動への対応	2019年01月28日～02月25日
5. ゆっくりと自分の実情に気づき受け入れること	
4. 難題体験の積み重ね	
3. 「頑張る」人の人生観 克己	
2. 「頑張る」人の身体観	
1. 突然ふってきた難題にうろたえる	
読者と創る人生後半期の人生創造物語	2018年12月15日～2019年02月17日
1. 事例1. 転職願望の男性Aさん（46歳）の今後の選択創造	

2. 私が人生後半期の人生創造を考え始めたいきさつ
3. 事例2 大都市から沖縄移住したDEFGさん家族
4. 個人レベルの人生創造 社会レベルの人生創造
5. 事例2. 沖縄移住した家族へのアドバイス
6. 積極的な気持ちで 事例1. 転職願望の男性Aさん(12月15日記事)へのアドバイス
7. 事例3 会社勤め→保育士→学童クラブ開設を検討し始めたHさん クラブ開設の仲間になりそうなIJさん
8. 転職と起業を個人任せにしない支援を 事例Iをめぐって
9. 事例3 学童クラブ開設を検討する三人へのアドバイス
10. 人生後半期創造に困難を抱える人へのサポートが期待される

老年期に思うこと

2018年12月05日～2019年01月21日

7. つきあい
6. いきがい
5. 仕事 収入・実益 健康
4. 老年期の諸活動(仕事・趣味・家事)の意味は、年齢とともに変化する
3. 自動車運転をやめる時
2. アンチエイジングとサクセスフル・エイジング
1. 限られた残りの時間 現在のため? 将来のため?

連載新々人生

2018年08月16日～10月21日

10. エリート的人生と大衆の人生の二分化状況の変化
9. 感性を育む 現在も未来も 仕事と遊び
8. 知性・身体性の新たなとらえ方
7. 激動の今日においては、創造の姿勢が不可欠となっている
6. 既存の枠に従う生き方の有効性の低下
5. 発達に代わる用語があるだろうか
4. 子ども・若者の人生創造 人間関係形成 家族形成
3. 子ども・若者の人生創造 職業
2. 上下支配秩序から対等平等秩序に対応する人生へ
1. 支配・序列・競争・人間の所有物化のなかでの人生

第二次人間関係

2018年07月07日～8月31日

11. 「自分に克つ・勝つ」といって頑張り、相手を見ない人
10. 夫婦関係における対等平等の追求
9. お説教好きな人との付き合い方
8. 会での司会進行
7. 会でのあいさつ
6. 会議・集会・授業 会場配置
5. 手書きからメールへ ボディランゲージ ワークショップ
4. SNS 書き言葉・話し言葉・画像
3. 異次元世界としての電話
2. 電話での会話
1. 多様なコミュニケーション手段と人間関係

平松類『老人の取扱説明書』SBクリエイティブ2017年など関連書を読む

2018年06月11日

人生構図

2018年03月21日～07月03日

15. 社会転換に結び合った人生転換を追求する人、そうでない人
14. 社会転換と個人の年齢転換とがハモル時代
13. 転機としての50代 身体上の転機 医療処置だけですまない
12. 一生にいくつもの人生があり、その各々の人生のなかにサイクルがある
11. 私の事例の特性 身体 自然との付き合い 知性・感性・身体性
10. 私の事例の特性 家族 お金のやりくり
9. 出会いと知人友人づくり 私の事例の特性
8. サバティカル（在内在外研究） 同一職場継続でないと不利になる制度の問題 私の事例
7. 職業生活 私の事例
6. 私の事例を材料にして考える 地縁・結社縁・血縁
5. サイクルをめぐる諸特性 私の事例
4. 外的サイクルと内的サイクルのからみを管理創造する個人
3. 複数サイクルとしての人生 サイクルの管理統制
2. 個人ドラマからのアプローチと平均値からのアプローチ
1. 人生構図が焦点を当てる多様な面

人間関係

2018年3月21日～04月18日

7. 初対面での自己紹介 話し役・聞き役
6. 初対面の際の距離・視線・姿勢・表情
5. 人間関係を育むワークショップでの会場配置
4. 人間関係の苦楽 タテ関係とヨコ関係
3. 物語回し 苦手な人との付き合い方
2. 身体をとおして伝えていく
1. ワークショップの初めにする人間関係づくり

個人ドラマとしての人生構図と老

2018年1月27日～3月14日

7. 老についてのいくつかのこと
6. 私の老のスタートと老のとらえ方
5. 死と健康寿命 老のドラマ 喪失型と創造型
4. 会社人間を終えて、個人・市民、自営業者として生きる
3. 老はいつ始まるか 「区切られる」から「区切る」へ
2. 個人ドラマとしての人生構図
1. 人生構図を老から語る

乾他編『危機のなかの若者たち 教育とキャリアに関する5年間の追跡調査』東京大学出版会 2017年を読む

2018年01月11～13日

稲垣えみ子「寂しい生活」東洋経済新報社 2017年を読む 私との共通点と差異 2017年11月18日

スピリチュアリティという言葉 2017年11月08日

加齢対応への意欲と力量 2017年10月27日

高齢者が作りだす産業 五木寛之「孤独のすすめ 人生後半の生き方」中央公論新社 2017年を読む

2017年09月07日

卓球試合での人間関係の広がり 70代80代の方との出会い・語らい 2017年07月20日

私流・人間関係スタイル 2017年07月06日～2018年01月30日

21. 挨拶状や挨拶を形式化させないで、意味や気持ちをこめる

20. 競争・序列から距離を置く
19. 競争・序列に囚われ過ぎる人
18. ぶっきらぼうな言い方で人間関係がうまくいかない人
17. 「引っ張り型リーダー」から「つながりを支え広げるリーダー」へ
16. プラヴィーダ（素朴な人生を！）というコスタリカの挨拶 気に入った
15. 「若」と「老＝熟」のバランス 引っ張り型リーダーからの転換
14. 「〇〇才にはとても見えない」というほめ言葉と熟すこと
13. 「人見知り」卒業へ
12. 人間関係経験が少ないだけなのに、「人見知り」性格だと決め込んで、人前で積極的にならない人
11. 属する集団をいつも取り仕切っていないとおさまらないリーダー（ボス）
10. (続) 我が子を所有物とみなして、幼児期の親子関係のままではいようとする親
9. 我が子を所有物とみなして、幼児期の親子関係のままではいようとする親
8. 押一引、発一受、働きかけ一対応
7. (続) 初対面の知らない人との会話
6. 初対面の知らない人との会話
5. 初対面の知らない人にあいさつする、会話する
4. 「あなた」などの二人称の使い方 配偶者の呼び方
3. 呼び方 教員相互間 組織のなかで
2. 呼び方 学生相互間 学生と教員間
1. 家族をファーストネームで呼び合う

追悼 根間武雄（義兄） 多くの事があった一週間	2017年07月09日
中座する・途中でやめることも大切なことだ	2017年06月18日
日野原重明「今日すべきことを精一杯」を読む	2017年06月15日
人生の仕上げ作業	2017年05月20日
平井威ほか「ブーケを手わたす一知的障害者の恋愛・結婚・子育て」を読む	2017年04月09日
上間陽子「裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち」太田出版2017年を読む	2017年02月18日
状況を感じ読み取る力と目標設定 集中のため嘔みしめすぎる	2017年01月31日
目標を下げるが必要な時	2017年01月22日
愉快的70歳の日々	2016年12月29日～2017年02月15日

6. 知のインプットとアウトプット 健康寿命
5. 流動食予行演習 体力回復・強化から体力維持・低下への対応へ
4. 30年着続けている冬服の老前整理 スロー運転
3. 体力低下への対応 器具活用修理は人に頼む
2. 「ハンカチ・はなかみ」をズボンにいったまま洗濯 「若く見える」がよいかどうか
1. 忘れ事 「おじいちゃん」とよばれても自分の事と気づかない

近年の若者の人間関係と「希望」 土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」に触れつつ	2016年12月19日
点数序列からの卒業を	2016年10月13日～12月07日

9. 卒業しなくてはならないと思うようになってはいるが
8. 普通高校・実業高校
7. 「垂直的多様性」と「水平的多様性」
6. 日本の労働生産性の低さ 教育と労働とが無関係になっている
5. 学習と職業の並行 生涯学習・職業教育訓練

4. 卒業のために必要なことの基本
3. 私の経験など
2. 賞味期限切れが近づく点数序列依存
1. 点数序列で人間を見てしまうことが浸透している！

夫婦ケンカをどうする 沖縄保育合同研究集会第2セミナー「家族の幸せ&夫婦の幸せ」2016年09月23日

養老孟司・南伸坊「老人の壁」(2016年毎日新聞出版)に刺激される 2016年09月08日

加藤・浅井対談『セクシュアリティ』75号 2016年08月28日～09月01日

1. すれ違い
2. ゆいまーる
3. 両性平等

篠田桃紅「一〇三歳になってわかったこと」幻冬舎2015年を読んで、私と比べて考える

2016年06月27日～8月8日

1. 自由・自由人
2. 自由とつながり・組織
3. 「歳をとるということは、クリエイトする」こと
4. 「いい加減に」衰えていくことに成熟を見いだす
5. 〈目標・計画・規律・規則正しさ〉⇔〈ぼんやり・ボケーッと〉
6. 感覚を磨く
7. 若い 死

伊藤亜紗「目の見えない人は世界をどう見ているのか」光文社2015年を読む 2016年06月22日

親世代の仕事のありようが焦点 「共働き 共子育て」NHK取材班「超少子化」ポプラ社2016年を読む

2016年05月31日

外間守善「回想80年 沖縄学への道」沖縄タイムス社2007年を読む 2016年04月22日

知らないことだらけだった「お経」 島田裕巳「お経のひみつ」光文社2015年を読む 2016年02月12日

藤田孝典「下流老人 一億総老後崩壊の衝撃」を読む 2016年01月06日～09日

1. 身近で我が事の問題
2. 生活保護 下流老人に陥る危険性 経済的事情で大学進学断念の増加

HPに 「生き方・人生2013～2015」を掲載する

2019年10月27日

私のブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」（2013年まで）、その後継版である現在の「沖縄南城・人生創造・浅野誠」では、「生き方・人生」テーマにかかわる記事が多い。それらを編集して、冊子のようにして、HP「浅野誠・浅野恵美子の世界」<https://asaoki.jimdo.com>に掲載したのは、次のものだ。

- 「若者の生き方シリーズ」
- 1 人間関係 大人側の若者への対し方
 - 2 学ぶ・働く・お金・文化スポーツ・旅移住
 - 3 進路創造・仕事
 - 4 若者の人生創造
- 「人生・生き方シリーズ」
- 1 人生後半期の人生創造
 - 2 人間関係・家族・移住・多文化
 - 3 社会のあり方と生き方——スローライフ——

以上は、2013年3月までの、旧ブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」掲載のものである。

2013年4月からの新ブログのなかで「生き方・人生」カテゴリーで掲載した記事について、HP掲載作業を始めた。その第一号となる今回は、「2013～2015年」記事だ。それ以降は、追って編集発行する予定だ。今回の「生き方・人生2013～2015」は、200ページ近くの分厚いものだが、記事項目のいくつかを紹介しておこう。

「テゲー」「あいまいさ」を大切に
 「決断しないの」「やるの やらないの」「どっちにするの」などと迫られて困る時
 年寄りの生き方
 沖縄の長寿問題
 「富裕層」について考える
 元大学教員の退職後生活
 五木寛之「新老人の思想」幻冬舎2013年を読む
 生き方を変える・創る （56回にわたる連載）
 時間に合わせて行動、それとも、行動に合わせて時間がついてくる
 早口で話す人には、気になる人がいる
 過剰な繁忙・ストレスを避ける裏ワザ
 人生後半期生き方 （11回の連載）
 人生後半期の私流の人生創造

高齢期の生きがい

2019年07月03日～10月14日

15. デジタル化 自叙伝 墓

振り返る手段として、近年重要な変化があった。アナログではなくデジタル手段を使えるということだ。物で残さなくてもデジタル化すれば、最小化できるし、検索して必要なものだけ閲覧できる。

写真はわかりやすい。以前は膨大にたまった写真をアルバムに整理保存していたが、デジタル化して分類配

列しておけば、必要とするものだけ取り出すことが出来る。無論、最小化して残せるといっても、ある程度まで削減して、分類整理しておくことが必要だ。私の場合、写真と文章はそうしているし、公開済のものは、HPにファイルに分けて、収録している。

そうした保存の仕方や作法も激変したが、整理することは不可欠だ。最小化できるといっても、それを怠れば、宝の持ち腐れ状態が、後代まで残ることになる。

私は、「私の生き方人生」シリーズをブログに掲載している。現在180回を超えて、おそらく400～500回になりそうだ。この作業の効能は、まずは「自分の見直し」である。書いていると、振り返りやすいことと振り返りにくいものがある。ある程度、整理して落ち着いて書けないものは、後回しにしている。そして、途中で息切れする時もある。ゆっくりやればいいと思っている。人生期間の7、8割でもカバーできれば、いいのではないかと思う。

ところで、個人は物理的に消えるが、他者の思い出で残ることがある。それもいつかは消えるだろう。無理やり残そうと思わない方がいい。しかし、物理的に残そうとする動きが結構強い。わかりやすい例は墓だ。

墓は残りそうなものだが、多くの場合、合葬され、個人墓として残るのは多くない。著名人でない限り、ずっと保存されるわけではないからだ。加えて移動の時代になっている今日、墓の維持管理は難しい。そんなこともあってか、永代墓が広がっている。散骨も徐々に増えているようだ。

余談だが、戸籍は残ると思っていたが、市町村合併で廃棄されることがあることを最近知った。

墓を作ることは、時に、後世の人の祈る対象にしてもらうだけでなく、維持管理することの強制になりはしないかと懸念されることも多い。墓参りが広くあると思込んでいるが、実際にはどうだろうか。3世代、4世代後になると、微妙ではないだろうか。

家もそうだ。家は代々引き継ぐものだという考えが強かった時代があるが、いまではそうでない例が多い。空き家の多さがそれを物語っている。

ところで、近代は移動の時代、自立（離別独立）の時代だったが、近代以後は、再会結合の時代になるのだろうか。再会の時期として高齢期をとらえてみるのも、面白そうだ。自主的自立的再会結合になるのだろうか。もう一つ、発見（再発見 新発見）の時期として、高齢期をとらえてみてはどうだろうか。若返りというのではなく、発見創造を継続していき、かつ円熟していくという高齢期を考えたい。言い換えると、＜若対老＞ではなく、双方とも引き受けることだ。

これらは、別の機会に論じるつもりだ。

14. 「自分」という存在を気にかける 人生を振り返る

自分という存在が、自分自身にとってはどうなのか、他者にとってはどうなのか、ということは、いつの年齢時期にあっても気になることだ。高齢期には高齢期なりの気になり方がある。高齢期には、老病死などに向き合い、自分の人生に向き合う点で、それまでの人生とは異なる気になり方がある。

それには、自分の人生の振り返りが含まれやすい。そして、現時点で「役立つ」ことが減り、「介護・世話」されることが増える点でも、それまでの人生とは大きな違いが生まれやすい。

ここでは「振り返る」ことを中心に述べていこう。

何かを「残す」にしても、「残る」「残す」ことの有効性について、考えてしまう。遺産などとは別に、精神的に、あるいは記念として何かを残す、という場合だ。それには、自分のためと残された人へのものがある

る。自分のためのものは、実際には受け取るものがないから、精神的なものだ。だから、「死後は不要」だといって、出来る限り残さないことも、一つのやり方だ。子や孫などに残すとしても、受け取って喜ぶか迷惑を感じるかは、はっきりしない。

整理することは、現実には減らすことの必要と有効性はわかりやすいが、意識のうえで減らすことは、どういう意味をもつのだろうか。相続する遺産でさえ、相続人が迷惑を感じてしまうものがある。「死後まで、他者を支配するのか」といわれそうなこともありそうだ。

「残すことはいいことだ」とか、「残すべきだ」とかの観念に囚われないで、整理はすすめたいものだ。

人生を振り返る手段として、写真・ビデオ、手紙、記念品、著述などがある。それらを使って、思い出をたどり、自分なりに振り返るのは、時に楽しく、時につらいものがある。振り返りたい時や事もあれば、そうでないものもある。

自分で振り返るというだけでなく、残される人のために残そうとするものがある。だが、そのことをめぐって重要なことを忘れる人がいる。残された人が、残されたものをどうするかは、残された人が決めることである。残す人が命ずるものではないのだ。私の場合、「大量にある蔵書は引き取れないから、自分で処分してよ」と息子にいわれてしまった。「それはそうだな」と思う。だから、一生懸命老前整理をしているのだ。

なかには、自分の銅像とか記念碑を立てて残す人が、テレビなどで出てくる。邪魔ものになる可能性大である。

このあたりについてももう少し次回書いて、この連載を閉じることにしよう。

13. 世界発見と交通手段

いくら年を重ねても、新たな出会い・発見は喜びだ。その機会として、会合など人との出会い目的を除くと、テレビ・新聞・インターネット、旅、読書、そして内面の旅としての物思い（瞑想）などがある。

それらも、徐々に縮小してくる。その一因は、外出のための交通手段が限定されてくることにある。外出には、買い物、所用（会合・役所）、つきあいなどがあるが、交通手段としては、徒歩、公共交通機関、自家用車・自転車などとなる。

わたしのように、田舎に住んでいると、自動車が必需品だ。バスはあるが、もっぱら那覇往復路線だ。坂が多いから、自転車は実用的ではない。電動車いすもあるが、坂が多い我が家近辺では無理であり、使っている人は見ない。

ということで、自家用車に頼る人が多い。だが、近年、高齢者免許の制限が話題になる。車を手放した後、どうするのか、現実問題だ。近隣で、危ないから運転をやめたらと家族にすすめられて、やめたら、急にぼけてしまったという話を聞く。

道での人との出会いは、自動車以前はごく日常的だった。しかし、自動車以後、激減した。なぜだか、田舎のほうがそうである。200メートルしか離れていないのに、自動車を使う健康な若者も多い。

立ち話、井戸端会議、縁側でのおしゃべり、こうしたものが喫茶店、カフェに変化しているが、高齢者にとっては復活してほしいものだ。

ある体育館の軒下では、いつも碁をうっている高齢者がたまっている。なかなかいい雰囲気だ。

近所散歩は、出会いがあって、ユンタクが弾むことが多い。「街歩き」番組は、よく見かけるが、田舎の「街歩き」番組が少ないのが残念だ。道で出会えば、あいさつし声をかけあう姿をもっと増やしたい。

ところで、近くの500年前の遺跡調査では、その集落には道がなく、隣の敷地内を通して移動したとのこ

とである。興味深い。家を越えた相互関係が濃密だったのだろう。

外出距離が短くなるにつれて、身近なところ、とくに自然についての改めての発見が多くなる。我が家近辺で、スズメを見なくなり、カラスが増えたのも変化の一つだ。季節変化での天気・星空・動植物の発見がそうだ。自分の身体という自然の変化にも気づきやすい。

久しぶりに再会した人の表情・肌・体型などの変化は気づきやすく、そのことから話がはずむこともある。

12. つきあいのいろいろ

人との付き合いには、いろんな種類があり、その各々で高齢期の特徴がある。まず血縁（家族親族姻戚）、地縁（隣近所）、仕事つきあい、同級生・部活のつきあい、先生・生徒関係など、これまでの人生のなかで築いてきたつきあいがある。これらのつながりのほとんどは、過去に築いたもので、時とともに消えていく。同窓会・同級会の集まりなどは、70歳代半ばを過ぎると、最後の会ということになりやすい。

それらを通しての付き合いは、人数上減ることはあるにしても、増えることは少ない。それだけに懐かしさと同時に、寂しさを感じさせるものだろう。そこでの出会いを通して、老病死などを考えさせられる機会にもなる。

それらにも例外はある。血縁でいうと、孫やひ孫との出会いは新しいものが含まれる。孫の結婚式で、新たなつながりが生まれることもある。

私の場合、かつての卒業生との再会の機会は多い。卒業生も退職時期を迎え、「同じ老人」として語り合う機会は楽しいものとなる。

それらと対照的なのは、現在のつきあいのなかで生まれるつながりだ。囲碁仲間、ゲートボール仲間、俳句仲間、地域に花を植えるなどの環境保護の仲間など多様だ。それは、当人の取り組みと知り合い作りへの積極性と比例する。老人会とか寿大学などの機会もその一つだ。

高齢者になってくると、過去の蓄積もあって、知り合い（知人）は多い。住所録・電話帳などに記入した件数はどんどん累積していくが、10年以上もつきあいがなく、名簿から消すことになる人も増えていく。今や住所録の時代ではなく、携帯電話・スマートフォンの「電話帳」登録ということになるかもしれない。

こうしたなかで、以前なら友人だと相互に承認して付き合っていた人にも、付き合いが途絶える人が出てくる。そこで、新たな友達探しを始めるが、なかなか思うに任せない。同世代では探しにくいので、異世代からも探したい。

いきずりの出会いも、「一期一会」といって、大切にすることもある。

こんななか、SNSを使っただけの「友だち」探しは、私にはなかなか難しい。フェイスブックでは、会った事もない人から「友だち申請」がやってきて驚く。なかには、数百人もの友達がいるという不思議な人達もいる。どちらかというと、情報提供収集手段となっており、「友だち」関係は存在していない例もありそうだ。そういう一方向関係だけで、相互関係のないのを友達といえるのか、と不思議に思う。「友だち」の「氾濫」「安売り」だ。「友情」とは縁のない世界だろう。

私もフェイスブックに登録しているが、友達はほぼすべてが、年下だ。年下との関係をつくるのに優れた手段なのだろう。

それにしても、スマホなどの新しい手段を使うことは高齢者にとって難関である。私は、パソコンで満足し

ているので、スマホはもたないで来ている。携帯電話も、妻との連絡用と歩数計になっている。

11. 世代間つながり

高齢者にとっても、人間のつながりが重要である。つながりがあるから、生きていくという人さえいる。

つながりには、以前からの長いつながりと、新しいつながりの二種類ある。さらに、同世代ないしは年長世代とのつながり、そして年少者との世代間つながりとの二種類がある。

以前からの長いつながり、そして同世代ないしは年長世代とのつながりは、残念なことに徐々に少なくなっていくことに年々気づいていく。私は、卓球の試合でいつも見かける人がいない時、知り合いに消息を尋ねる。

年賀状の枚数の減少で、そのことに気づく人もいよう。なかには「加齢の為、次年から年賀状の交換を辞退します。」とわざわざ書いてくださる70歳代後半～80歳代の方もおられる。

つながりが減るのは、自然の流れだろうが、ある程度つながりは保っていたい。そのための一策は、年少者とのつながり、新しいつながりを作ることだ。

それは、世代を超えたつながりとなることが多い。世代間のつながりが弱まっているといわれるなかで、なかなか大変だが、挑戦したいことだ。

新しいつきあいの前提に、新しい出会いがある。新しい出会いをきっかけに、つながりが生まれていくのだ。仕事で忙しい時は、出会いがあってもビジネスライクに済ませることが多い。しかし、60歳代後半にもなると、「これ幸いに」と話し込み、つながりを作ろうとすることが増えてくる。

長く務めたところを離れると、名刺交換の機会も減る。名刺を作るのをやめる人もいる。でも、個性的な名刺を作り、自分を売り込む人もいる。私もそうだ。それにしても、徐々に名刺使用量が減っていく。私の場合、65歳までは年間100～200枚使ったが、いまや数十枚にとどまっている。80歳ぐらいになれば、名刺印刷不要となるかもしれない。

つながりのなかで、仕事上のものは減り、地域活動社会活動趣味的活動でのものの比率が高くなっていく。70歳代になると、新しいつながりは、どうしても同世代よりは、年少世代とのものが増えてくる。そして、異世代とつきあおうとすると、世代間差異が大きくて、そこに出てくる差異を楽しめるかどうかの問題となってくる。

そんななかであって、スポーツ・芸術系では、世代間付き合いをしやすい場である。といっても、積極的に異世代と付き合っていないと、つながりは広がらない。私が、卓球やテニポンをしているのは、そういう異世代つながりができやすいからでもある。「変なおじいさん」と見られやすいが、そうみられることをきっかけにして、話を弾ませていく。黙々と打ち込んでいては、広がらないし深まらない。

おしゃべり好きな女性の楽しみ方は参考になる。我が家には、妻の友達の来客が多いが、私もおしゃべりに参加することがある。その逆もある。だから、我が家への来客は、私たち夫婦の共通の友達になることが多い。

10. 身体機能・脳機能縮小の受け入れと対処

高齢期の大きなテーマの一つは、身体機能・脳機能縮小の事実を受け入れ、それに対処することだ。私の場合、記憶力低下はあるが、脳機能全体としての衰えは、まだ感じていない。年間30万字くらいの執筆活動は

変わらない。

そこで身体面に話を絞ろう。今年に入って、気管支喘息の発見と治療のおかげで、数年ほど逆戻りし、体力が向上している。といっても、ここ20年間ほどを見ると、全体としての体力低下は否めない。

最近の一つの問題は、傾斜地の庭畑作業中に転ぶことが増えたことにある。そして、しゃがんだ姿勢から立ち上がるのに一苦労するようになった。

むきになって、立ち上がろうとすると、ふらついて転んでしまうこともある。そこで、きちんと、手で何かにつかまって立ち上がる。また、地面近くの作業では、椅子を使用する。と同時に、私の体力に合わせた作業が出来るように、庭畑を変えていく。たとえば、高い樹木に対応するのは危険が伴うので、樹高を下げるなどをしている。

そんな身体上の問題に直面した時、「気合が入っていない」といって頑張る人がいる。そんな時に、けがなどをしやすい。私にも、心当たりがある。60代も半ばを過ぎれば、自分の身体をいたわりながら、過ごすことを生活習慣にしたいものだ。

私は、姿勢矯正に力を入れている。猫背は、呼吸器・消化器にマイナスになるので、なんとか矯正しようとしている。3年前よりは、よくなったが。姿勢矯正もあってか、腰痛はここ数年間出ていない。それ以前は、いつも腰痛を感じていた。そんな工夫をいつもしている。

ついでに書くと、脳機能がうまくいっていることは、ここ10年間頭痛がないことと結びついていると感じる。それ以前の50年間は、いつも頭痛に悩んでいた。

認知症や死への不安は、現実問題ではないので、書きにくい。いつか書けるようになるだろう。

9. 「しなければならぬ」から「できるならやる」へ

どの年齢にあっても、不安はつきものだ。でも、不安の持ち方には、個人差があると同時に、同じ人でも年齢差があると思う。そして、大きく変化する年齢もありそうだ。私の場合、65歳くらいに、区切りがあったようだ。65歳くらいまでは、「まだやれる」「やってみせなくては」という気負いが強かった。どこかに「力が入って」いた。それ以降は、自分なりのことをしていれば、「何とかなるさ」「流れの中で、なんとかなって行く」という気分の比率が高くなっていく。「うまくいく」ようなことがあれば、「望外の喜び」に近くなる。卓球が強くなったのも、その一つだ。気管支喘息の「発見」も想定外のことだ。南城市史「民俗」編の仕事が「降ってきて」、今その執筆に励んでいるのも、そうだ。

65歳くらいまでは、「しなければならぬ」ものがあって、それができているかどうかで判断していた。今では、そうした感覚が薄くなっているのだ。

〇〇歳までに◇◇をするという目標に対しての、心の持ち方が変わってきたというのだろうか。65歳までは、「絶対にやる」感覚だったが、それ以降は、「できることならやる」「できればラッキー」に近づいてきたのだ。人生の終点、ないしは仕事ができる終点が近づいてきているからだろう。ところが、厄介なことに、「終点」期日が明確ではない。ファジーそのものなのだ。2、3年先までは、多分大丈夫だろうが、その先は、不明そのものだ。

そんなことを話すと、周りの人は、「大丈夫」と根拠なくおっしゃる。それにのっかって、「大丈夫」だと思い込んでしまうのだが。

私は、長年「計画魔」だった。年間計画、月間計画、週計画、日計画をたてて、いろいろとすすめていた。その計画が、徐々に大まかになってきた。65歳ぐらいからは、年間と月間を合わせ、週間と一日が合わさった。仕事量が減って、仕事間の調整に困らなくなってきたことが大きい。いつも手帳を持ち歩いていたが、65歳ぐらいから、手帳がなくなった。コンピュータのなかにある手帳機能で間に合わせている。週当たりの所用も、卓球や外出等を除けば、多くて2～3個になってきたのだ。

8. 衣食住など日常生活の楽しみ 整理の楽しみ

特別な機会ではなく、日常生活のなかでの楽しみも多い。というか、日常生活を楽しむに変えるのが、高齢者にとっては肝要なことである。

食事は、食べるだけでなく、作ることも楽しみだ。時には、いつもとは異なる自分流の創作料理を楽しむのもいい。我が家は、畑・ベランダで野菜を作っているの、それを使う楽しみもある。さらに、育てているハーブ・薬草の活用も楽しい。

清掃も楽しみになる。森のなかに住む私たちは、住宅内に入ってくる動物への対処が大変だが、それも楽しみ気分で行うしかないかと開き直っている。

装飾品・記念品などの飾りつけも楽しみである。我が家では、自作のものを飾って楽しんでいる。時々する模様替えも楽しい。旅で集めた「ふくろう」数十点を並べて楽しんでいる。全国各地世界各地にいろいろな「ふくろう」がいるものだ。

私にとって一番のことは、1万冊もあった蔵書の整理である。いろいろな形で寄贈して、4割ほど減らしただろうか。我が家訪問者には、半強制的に、何冊も持ち帰っていただいている。ほぼ10年で、ここまできたので、あと10年で、保管しておきたいものだけに限定できることを願っている。

月1～2回整理活動を行い、再読するために保存するものと寄贈するものとに仕分けをしている。

衣類整理も大仕事の一つだ。長年にわたってたまった衣類は、私一人で100着を越すだろう。新規購入は、ここ10年間は、肌着を含めて年に数着以内に行っている。年に10着近くが、破れたりして処分しているので、あと数年で、総計50着ほどのリーズナブルな量に収まることを期待している。いまでは30年前以上に購入し、着続けているのは数着となっている。いずれも、しっかりとした素材と仕立てで作られたものばかりだ。簡単には、破れたり擦り切れたりしないものだ。

「生前整理」という言葉よりも、「老前整理」という言葉の方が、「まだ元気うちに」という意味合いがあるので好まれるが、その老前整理に努め始めて10年がたつ。まだ終了が見えないが、残り10年でメドをつけたいと思う。

身体ケアも、楽しみにしたい。病ないしは老化にともなう劣化を、最小にとどめ、日々の生活と身体状況との折り合いをつけていく作業だ。身体現状を知るために、まずは測定や検査が必要となる。

そして、ケアした方がいい点があれば、医療・食事・運動などで対応していく。この点は、このブログでたくさん書いたの、それらの記事をご覧いただきたい。

7. 時間を持て余す時 テレビ 旅 孫の世話 介護

高齢期も時がたつにつれて、時間が「余って」きて、時間をどう使うか困る人が多くなる。健康であれば、特にそうだ。休んで横になるというのもあろうが、睡眠時間が徐々に減少してくると、「手持無沙汰」を感じる人も多い。そこで「時間つぶし」が求められる。

一番よく見られるのは、テレビだ。「テレビに子守りをしてもらう」といった感じだ。銭湯・温泉に行くというのもある。私たちも、平日昼間に近くの温泉に出かけるが、観光客を除くと、高齢者が多い。中には、パンチコという人もいるだろう。公園のベンチに座って、ぼーっとしていることもあろう。緑側で「日向ぼっこ」という光景は、私の祖父母の時代には、よく見られたが、最近ではどうだろうか。

テレビ視聴は、一番アクセスしやすいが、適切な番組があるかどうかが問題になる。高齢者が好むような番組は少ない。民放系だと、平日昼間では商品の通信販売宣伝が多い。NHKだと、旅・風景・自然番組があるが、何度も再放送したものが出てきやすい。高齢者対象は、採算がとれないのだろうか。

こんななかで、高齢者の積極的行動の一つとしては、旅がある。個人旅行もあるが、必要業務、冠婚葬祭、家族親族訪問、同窓会参加など、必要に迫られて出かけることに限られてくる。行く先を選んで、プランを作って、一人で行くというのは、なかなか大変だ。

そこで、団体旅行の比率が高くなる。家族や仲間と一緒にのこともあれば、パック旅行もあろう。それでも、いろいろと面倒なことがあるので、年々回数が減ってくるだろう。そこで、アルバムを見るなど、思い出にふけて、旅気分を味わうこともあろう。

よく見られるのは、孫の世話だが、世話ができるのは、孫が小さいうちだから、50～60歳代に多いだろう。結構体力が必要なので、70代になるとなかなか大変だし、孫の年齢が高くなるので、逆に世話されることも出てくる。

盆正月などでの家族の集いも楽しい。私が住む集落では、字の祭りである豊年祭には、三世代の集う姿がよく見られる。沖縄風の墓前での清明祭もそうだ。家族を超えて、親戚がたくさん集合する。

大変なのは、近親者の介護である。老老介護もよく見られるようになってきた。

6. 会社員（勤め人）的生き方から卒業する

老人会を含めて、退職後の人間関係では、現職時代の組織体験をそのまま持ち込むと、敬遠されることになる。サークルをはじめとする高齢者組織では、比較的ルーズでヨコ並び的なものが多い。タテ社会的で、きちんきちんとなりがちな現職時代の組織での原理とは、かなり距離がある。

ところで、現在の70歳代のうち男性は高度経済成長期以降に職業生活に入ったが、大半は「勤め人」生活を送ってきた。そこでは、終身雇用的なありようがかなりを占め、タテ型の大規模組織に順応するよう訓練されてきた。女性の多くは、「勤め人」であっても、それとは異なる原理で働き、終身雇用の比率は高くなかった。それよりは、地縁血縁を含んで仲が良い人間関係の中を経てきて、70歳代に至っている。

また、私が現在住んでいる「田舎」では、男性であっても、兼業農家をしていた人が一定の割合でみられ、また「勤め人」であっても、転職体験のある人が多い。また、田舎では、大都市における会社組織とは異なる、字会・婦人会・青年会などの地域住民組織に関わってきた人も多い。そうした地縁組織との関係のありようも、退職後生活に大きな影響を与える。

さらに、家族の中でどのような役割を占めたか、家族関係をどう作ってきたか、という事にも大きな違いが

ある。特に家父長的性格の濃淡による差異は大きい。家事をしない人できない人、新しい人間関係をつくれずに、妻についてばかりいる「濡れ落ち葉」の人。このように、外見では威張っているが、日常生活をうまく送れない人が結構いる。家父長制は、そうした男性を生産してきたのだ。

このような「退職」前の組織体験の差異が、退職後の人間関係づくりに大きな差異を作り出す。

そして、近年では、「気の合う」もの同士がつくるサークル的なものの体験の差異が、70代以上の人間関係に大きな影響を及ぼしている。また、家族との関係の持ち方も、同様に大きな差異を生み出している。

こうした人間関係のありようについて当人が持つ習慣・蓄積が、高齢者生活における人間関係に強い影響を与える。

同様なことは、若いころの学校生活の送り方の違いにも言えよう。学校の枠組み・指示に従順で「良い成績」を収めてきた人は、私が長年いつてきた「ストレター型」傾向が強く、終身雇用の大企業で生きてきた人と同じような傾向を持つだろう。部活を熱心にしてきた人には、所属した部活が団体訓練的性格と自主活動的性格とのどちらが強いかで、事情が大きく異なる。残念ながら、日本の学校部活は自主的性格が弱く、結成解散加入退会を繰り返す中で、サークルをつくり発展していく力量を高める点では、生徒に有効な体験蓄積を育ててこなかった。

その点では、「退職」後初めて、自分なりに自主的組織を結成加入解散退会する経験を持つことになりがちだ。人間関係を自主的に築いていく経験を、退職後に本格的に始める人が結構多いのだ。

5. 趣味活動と地縁的人間関係 老人会

会社勤めの人、会社が縁となって人間関係がつくられるという「社縁」が、退職に伴い大幅に縮小していく。それに代わるものを見つける必要が出てくる。それがないと、「ひきこもり」になってしまう。そこで、趣味縁とか地縁が重要な役割を果たすものとして登場することが多い。

近所付き合いも無論ある。挨拶やちょっとしたおしゃべりを超えるものへと濃くなっていくためには、共同活動が重要になる。社会貢献活動も重要な役割を果たすが、趣味活動も重要である。それを、近隣の方々と持てると、ちょうどいい。というのは、徐々に、遠出がしにくくなるからだ。足腰が弱る。公共交通機関は利用しづらい、自動車運転も難しくなる。インターネットを活用した活動が便利でいいかもしれないが、70代以上では、利用している人は多くない。（この事情は、あと10年もすれば、大きく変わってくるだろう）。となれば、否応なしに、地縁的な活動の比重が高くなってくる。

老人会で活発なところには、こうした趣味系のサークルをいくつか持っている。また、社会貢献を活動計画に組み込んでいる。この両者を組み合わせる例もある。音楽芸能の練習を積み上げて、高齢者施設で発表するなどは、その例だろう。

老人会というと、与えられたこと、習慣的にしていることを、みんな一斉にやるというイメージを持っている人がいるかもしれない。しかし、活発な老人会では、多様なサークル活動を育て、会員が好みに応じて、多様な活動をしている例が多い。

高齢者施設やミニデイサービスの活動事例は、余り知らないが、そうした多様な方向へとすすむのではなかろうか。

4. 趣味

今回は、趣味の話だ。

趣味的活動は多様だ。「退職直前」の50代の人への退職後生活のアドバイスとして、「趣味をもちなさい」とよく言われる。しかも、退職後に始めるのではなく、「現役」のときからやっておきなさい、といわれる。それが長続きのコツだし、ひいては長寿にもつながると言われる。そんな人も見かけるから、「そうだろうな」と思うが、そうでなく退職後に始めて定着させる人もいるので、人さまざまだろうと思う。

では、高齢者趣味を並べてみよう。

☆スポーツ系 ウォーキング マラソン 散策 ゲートボール グランドゴルフ ゴルフ 卓球

☆芸術系 絵・写真・陶芸・書道・俳句和歌琉歌・文芸・カラオケ・合唱・歌三線・舞踊・ピアノ・ギター

☆庭畑系 盆栽 花野菜栽培 果樹栽培

☆料理・グルメ系 食べ歩き

☆ゲーム 囲碁 将棋 麻雀 カード

☆その他 読書・映画・DVD

☆趣味になるかどうか微妙なものとして、テレビ・ラジオ視聴、街歩き、郷土発見、買い物などもある。

場所は、自宅内外など、近辺が多い。公民館・ホールなどもある。交通機関を使用して、出かけることもある。なかには、インターネットを通してのものもある。囲碁・将棋などのゲームで、インターネット対戦を楽しむ人がある。私のように、ブログやSNSを楽しむ人もいる。

これらには、一人で行なうものと、共同で行なうものがある。一人で行なうことを基本にしつつも、成果発表の機会などで、共同であることを含むものも多い。発表交流の場にも、地域の文化協会主催といったものから、有志による発表会まで多様だ。スポーツ競技の大会もある。

自分ですることだけではなく、他者がやるのを見るものもある。スポーツ観戦、美術鑑賞、オープンガーデン見学などがそうだ。

こう見ていくと、純粹に一人だけでやるものは少なく、いろいろな人とつながることが多い。時間にゆとりが出来て、高齢期になってこうしたことに開眼する人も多い。

共同でするものは、人間関係を楽しむ要素をはらむ。なかには、その要素が主で、趣味活動そのものは従だというものもある。趣味活動を「口実」にして、おしゃべりを楽しむというわけだ。逆におしゃべりが好きでないので、趣味は一人で楽しめるものに限るといふ人もいる。そんな人は、活動のなかでのおしゃべりを避ける。

このあたりについて、男女差を指摘する人も多い。「おしゃべりが多いから、女性は長寿だ」という人さえいる。黙々と趣味に打ち込む人を見て、「引きこもり」のようなものだという声が聞こえるが、人さまざまということだろう。

人間関係がまずあって、その関係で趣味活動を始めるのか、趣味活動がまずあって、そこから人間関係が生まれ出されていくのか、どっちが先だという事ではなく、いろいろあり、趣味と人間関係が相互に促進しあっていくのだろう。

3. 社会貢献

仕事の次に、社会貢献について書こう。他者との関係でのやりがいのある仕事は、社会貢献と結びつくことが多い。社会貢献の活動には、1) 収入を得る仕事、2) 有償ボランティア、3) 無償ボランティアとがある。

3) は、日常生活の中でしばしばお目にかかる。花いっぱい運動など地域美化活動、登下校の見守りなど交通安全活動、地域の清掃や共同作業などである。長く続いてきた地域慣行には、そうした類が多い。それに強制を感じ避けたいと思う人、習慣的なものだという人、自主的にやろうという人など、対応は様々だ。

それにしても、時代の流れの中で、動員されて義務的に参加するというよりも、自分たちで企画立案し、実行する活動の比重が増している。そして、老人クラブのような既存組織での活動もあるが、自主的グループによる活動が増えている。だが、自主的グループというと、個人的趣味的なものに限られがちだ。社会貢献のためのグループをつくることへの挑戦がもっと広がり、それに習熟する人が増えることを期待したい。会社勤めのように、大きな組織の中で動くことには慣れているが、自主的グループを私的ではない形で結成運営することに未体験の人が多からだ。

さらに、自主的グループが行政などから予算支出を得て、2) の性格をもつ活動が増えている。指定管理者を受託する活動も増えている。となると、2) にとどまらず、1) の性格を帯びてくる。

社会貢献というと、こんなこともあるだろう。

高齢期には、諸組織をまとめる役、代表する役に当たることが多くなる。冠婚葬祭や諸行事でのあいさつや乾杯の音頭の役目があたることもある。実際に忙しく働く必要がある場合もあれば、名ばかりの名誉職的なこともある。

私も、そんな役目をいくつか持っている。懇親会などとなると、乾杯の音頭係が多くなる。

それらの役目を喜んでやる人もいれば、できる限り避けようとする人、様々だ。私などは、流れの中で「引き受けている」感じだ。「役立っている」ということだけで、嬉しいと感じる年頃になってきた。

2. 適度に働く・休む やりがい 創造性 有用性

仕事を60代にとどまらず70才代まで続ける人が増えている。「身体がもつ限り」という人もいるし、「生涯現役」と叫ぶ人もいる。

そうした人の中には、「休むことは悪いことだ」と語る人もいる。そして「休むことが下手」で、仕事のない「空白期間」に何をしたらよいかわからない、という人もいる。「仕事中毒」になっているともいえる。「自分なりに適度に働き、適度に休む」ことがなかなか難しいと感じるのだ。こう書く私も上手くできなかった。自分なりに適度に休んでいるつもりだったが、相当なオーバーワークになり、医師に「退職勧告」されてしまった。54歳の時。

40代50代と同様に、60代以降も、自分の身体・ストレス許容量の範囲内に、仕事量を取めることが必要だ。といっても、この両者にズレがあり、「働きすぎ」てしまい、身体を壊す人もいる。

次に、仕事におけるやりがいの話。仕事におけるやりがいの一つは、仕事の面白さから発する。とくに仕事の創造性から発する。物づくりがわかりやすいが、人間関係の仕事も創造性あふれるものが多い。

次に、有用性とからめて考えよう。その有用性には、自分自身との関係と他者との関係とがある。自分との関係では、自分自身が充実感を持てることが大きいですが、そのなかには自分の生活に有用なものが多い。食事準備・洗濯・清掃などの日常作業に加えて、家具・機器・道具などの修理などもそうだ。なかには60代に入っ

て自宅を自ら建築する人もいる。まさに有用性とやりがい相结合した極致というべきものだろう。庭畑づくりもそうであり、後で述べる趣味と重なるものだ。

収穫物販売にまで至る畑作業をする人も多い。市民農園とかクライネ・ガルテンを楽しむ人もいる。農作業を共同ですすめ、収穫物、さらには売上を分配する人たちもいる。

1. 「余生」ではなく、本格的人生として

話題を大きく変えて、高齢期の生きがいについて考えたい。高齢期といっても幅が広いが、一応60代以上ということにしよう。50代は、その準備期間ということでもいいだろう。とはいっても、長寿化の進行の中では、高齢期というよりも、人生後半期と言う方がいいかもしれない。私が人生後半期という用語を使い始めたのは、1990年代後半だが、その時は、45歳以降ということ考えていた。しかし、長寿化が進んでいる今では、事情が大きく変わってきた。

50代60代では、たいていの人にとって、人生後半期の構想が新たなテーマとして浮上してくる。以前なら定年退職後は、「余生」として楽しむという考え方が広く見られた。しかし、今では「余生」ではなく、後半期に位置づく本格的人生として構想することが、ごく当たり前になっている。

老後資金として2000万円ないしは3000万円が貯蓄が必要といわれ、年金不安がますます高まる中で、「余生」は一層吹き飛びつつあることも注目されよう。

では、生きがいのある人生後半期が構想される諸分野を並べて考えていこう。

本格的人生として構想するうえで、仕事は不可欠の事と考える人が多い。

年金不足や年金減額が予想されるなかで、60歳まで働いて貯めた資金で、生活が可能かどうか心配になる人が急増している。そのなかで、60歳以前と同様に、というほどではないにしても、かなりの額の収入が必要だ、という人が増えている。

と同時に、「人に使われてきた」それまでのありようとは異なる仕事を求める人が増えている。自分なりに起業や自営を始める人は多い。雇われるにしても、それまでの勤務とは異なるありようを求める人が増えている。シルバーセンターの盛況は、それを示しているかもしれない。そんななか、勤務先が用意する「再雇用」の仕事を辞退する例をしばしば見る。それまでの延長線上にある仕事を避けようとする気持ちを持つ人が多いのだ。

なかには、切替えをイメージしない人もいる。だが、早期退職して、それまでの実力を生かす仕事を探そうとしても、なかなか見つからない。それまでと同等の給与を求めるとなると、特に困難なのだ。そこで、再就職での仕事は、金額的にいうとボランティアのようなものと割り切らざるをえない人が増えている。こうして「発想を切り替えるしかないな」と追い込まれてしまう。

収入と生活上の必要経費とのギャップのはざままで、生活の「縮小」に追い込まれる人もいるだろう。公的支援に依存しなければならない人も、高齢者では多くなっている。

変わり時のこのごろ 庭畑と「世の中」

2019年07月27日

「変わり時のこのごろ」にかかわって、庭畑と「世の中」について書く。

庭畑は、我が庭畑のことだ。作り始めて満15年となる。これまでは、基盤を整えて、様々な植物を植え、「殖やす」ことが中心だった。これからは、「整え保つ」になっていく。その「変わり時のこのごろ」だ。その要因は、一応形ができてきたこともあるが、なんといっても、庭畑を世話する私の体力が下り坂に入り始めたことだ。これまでは、「創る」ことが楽しみの中心だったが、これからは「保ち」ながら、「自然の移ろい」を楽しむことになろう。

参議院選挙が終わった。

この十年前後の国勢選挙の動向を見て感じることは、日本の政治力経済力文化教育力といったものの停滞／低下が進行しているにもかかわらず、事態の打開へと大きく踏み出す動きが弱い、ということだ。むしろ、これまでのやりようを変えずに、あるいはより悪質な対処で、別の言い方をすると、「つけ」を先延ばしし、「つけ」を累積させて、停滞／低下というよりも、悪化へとたどりつつあるのかもしれない。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われた1980年代の「栄華」は、今や見る影もないと言えるかもしれない。

それは政治経済だけに限らない。文化教育においても、そう言わなくてはならないかもしれない。私が20年余り前から言い続けているストレーター・コース「いい高校→いい大学→一流企業→出世→定年退職」ということでいうと、いまだに、それにしがみつくと、しがみつかせる構図が、強固なままである。

それは、標準とされる枠にしたがって、生きるありようだ。ストレーター・コースを歩んで「成功」をかちとれる人の数は、30年前と比べれば、はるかに縮小している。それにもかかわらず、それとは異なる道を創造する方向よりは、より狭くなった道にしがみつくと動きはなお強い。

人々の多数をとらえる人生論生き方論としても、旧来の構図が根強いといえるかもしれない。

世界的に創造性が重要だと言われて30年余りがたつ。日本では、変えようとしても、表面的なものに留まる印象さえある大学入試におけるセンターテストの動向が象徴的だ。いまだに30～40年ほど前の事態とそれほど変わらない。

また、小学校から大学までの授業を見ていると、いまだに教師から生徒への一方向的授業が圧倒的だ。

ストレーター・コースを歩んで成功を取めるのは「エリート」たちだと思われがちだが、彼らの創造性は成長しているのだろうか。政治経済のトップに近い人たちを見ていると、過去の枠組みの少しの手直しぐらいの創造性というのが現実だ。たった10年先の将来と限ってみても、それを見通しての政治経済運営といえるものはわずかだ。

沖縄の田舎の私の周辺の方が、創造的に生きる人々に出会うことが多いと感じるこのごろだ。沖縄の政治動向もそうだが、町おこしに取り組む人たちを見ると、そう感じる。このブログでも、いろいろと述べてきたが、私の周辺には、そうしたことに取り組む元気ある人々に出会うことが多い。

そこでは、「下からの小さくて身近な」ところでの創造性に溢れている。「上から降りてきた施策・予算」を消化するというのではなく、自分たちで創造していく方向での営みが広がっているのだ。

嫉妬（しっと） ライバル意識 勝負・序列にこだわる意識 2019年06月11日

ある話。だいぶ前のことになるが、私が、不本意な処遇を受けた時、当事者ではないが、事情が分かる人に原因を尋ねてみた。想像外の応えが返ってきた。「おそらく、相手の人が嫉妬（しっと）しているからでしょう。あなたが上手くやってきたことに対して」

驚いたが、しばしして、「なるほどなあ。そうかもしれない」と思うようになった。でも、私が嫉妬されていることを意識したことは、それまでにはなかったことだ。

でも、私が意識しないでも、そういうことがあったかもしれないと気づきはじめた。「浅野さんをライバルに思っています。」と言われたことが、何度かあるが、それも嫉妬の類だろう。

ひるがえって、私自身を振り返ってみると、ライバル意識を感じたことが結構ある。それには、嫉妬を含んでいることにも気づいた。

それはどういう機会かというと、分かりやすい例でいうと、卓球などで「負けた」相手に、「次の機会こそは」と感じるとき、あるいは、「あの人を目標にして、頑張ろう」といったことがよくあった。仕事上のことでも、優れた論文を読むと、「すごいな。こんな仕事ができるといいな。頑張ろう。」といった具合に、結構あった。しかも、40代ごろまでは、自分の意識の中で、それらがかなり強い役割を果たしていた。

ライバル意識や嫉妬心は、勝負や序列の意識が強いところで生まれやすい。そうしたことは、今日のような競争社会、競争過剰社会では、日常茶飯事のことだ。とくに、社会の中でどんな位置を確保できるか必死で頑張ろうとする若い世代では、そうしたことに溢れかえっている。

そうした気持ちを抑え静かな心をもつことと、そうした気持ちを掻き立て奮闘することとが共存し葛藤しあうことも多い。「カッカッとした気分でやってもうまくいかないから、心落ち着かせ、クールな判断と行動をしよう」ということと、「負けてたまるか。なにくそ！！ 闘志を燃やして頑張ろう」という二つだ。

人生半ばまでは、よくある物語だ。人生後半に入り、老年期にもなると、事態は変わっていく。「そんなに勝とうとすると、息切れしたりくたびれたりしてしまうよ。なるようにしかならないんだから」「自分なりにやっていけば、結果はついてくるよ。果報は寝て待て、というじゃないか」という具合だ。

(続) 嫉妬 ライバル意識 勝負・序列にこだわる意識 2019年06月19日

ライバル意識や嫉妬心は、お互いを励まし合うこともあれば、傷つけあうこともある。そして、人間関係を深めることもあれば、こわすこともある。いうまでもないが、平穏さを打ち破ることが多い。

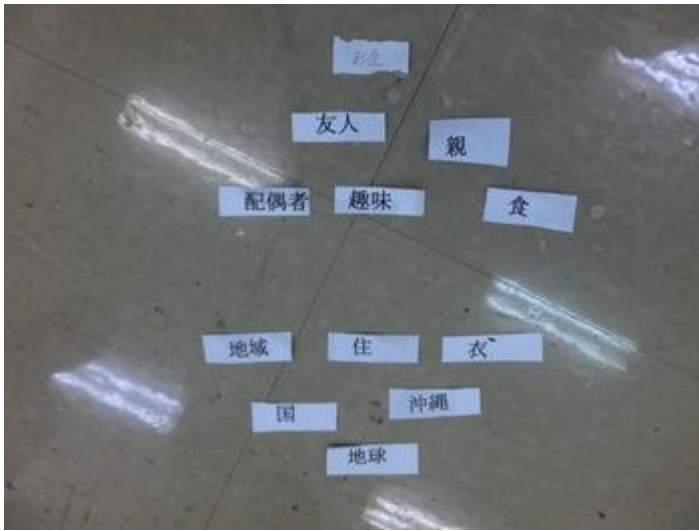
いずれにしても、それらが、どのような波及効果をもつかについて、意識することは大切だ。若いころは、気づきにくいのだが、年をとっても、気づかない人もいる。だが、過敏繊細な人は、気づくことが傷つくことになりやすい。傍若無人の人は、気づかないし、傷つけていることさえ気づかない。

傷つけることを避けたいために、物との関係で、あるいはヴァーチャルなものとの関係で、ライバル意識や嫉妬心を持つ人もいる。そういう人が増えているのだろうか。競争や勝負をそうしたところで展開する。ゲーム機、スマホ、パソコンなどを使用して個人とするゲームに夢中になる人の多くはそうかもしれない。傷つけるにしても、実害が少ないし、喜ぶにしても自己満足の形をとる。

そこに居心地の良さを見いだすと、生身の人間関係とは距離を取るようになる。そして、生身の人間関係の場面となると、気づかい過剰になりがちだ。「人見知り」の背景には、そんな例もあるだろう。

点数や偏差値にこだわって生きる人もこのようになりやすい。そして、点数や偏差値でもって、生身の人間を見てしまうことに陥りやすい。

生身の人間との間に生き生きした関係を築いていくうえで、ライバル意識や嫉妬心は、うまくコントロールすることが求められよう。それらが秘密に扱われることにはとくに注意が必要だろう。



人生で大切にしたいこと 進路選択 看護大学授業

2019年06月07日

看護大学授業も、7回目。今年は11人と少人数だけに、一人一人がはっきりと前面にでてくる。

毎年と同様に、「人生で大切にしたいこと」をダイヤモンド・ランキングする。一人→二人→四人→全体で並べていくのだが、折り合いをつける過程で議論沸騰。実に多様な選択がある。最終的には、写

真のように落ち着いた（落ち着かせた）が、興味深い。

いくつかの議論を紹介しよう。

・最後にもめたのが、「親」「配偶者」「子ども」の順位付け。

家族には多様な形があるので、その定義をめぐって多様な議論。たとえば、配偶者なら、同棲・事実婚・異性婚ではない形……

子どもがほしい、そのためには先立つ配偶者が必要。いや、そうとは限らない。

親がいなければ。といっても、そう考えるのは、若いうち。

・衣食住では、女子学生たちは、衣重視が多い。

そんななか、「お金」のカードがないから、つくれば、いろいろと解決する、ということになる。

尽きない議論だが、おもしろくてたまらない。

次は、進路選択で以下の6つのなかでどれを重視するか。

収入額など生活 夢の実現 親や教師の忠告重視 自然の流れで 今後の社会予測 能力・適性の考慮
これまた、一人ひとりの実際にもとづいて、多様な考えが出てくる。

・私は幼稚園のころから看護師になると決めていたという夢派

・いろいろな要素があるが、看護師になるといって、親が喜ぶという忠告派

・医療関係がいいな、と思っただけだが、流れの中で、看護大学に来ているという自然派

それにしても、看護大学に通う学生は、私が見聞した他の大学生と比べると、図抜けてはっきりしている。こんなに「しっかりしている」若者は「すごい」と感じる。迷いがあったとしても、前向きなのだ。

以前は、「能力、適性」とくに点数の結果、看護大学に来ているという学生が目立ったが、今回はゼロ。

高齢者事故と高齢者扱い

2019年05月23日

このところ、高齢者がからんだ自動車事故についてのニュースがたくさん取り上げられている。事故のなかでも、高齢者がからんでいると、特別に強調される印象さえ感じる。

確かに、高齢者の運転には危険性が高まる可能性はありそうだ。それとからんで、自動車保険にも高齢者には割増料を設定する動きもあるようだ。

だが、これだけ車社会になると、車に代わるものが用意されないと、高齢者の生活は、大変不便なものとなる。私のように田舎に住み、車に匹敵する交通手段の確保が未熟なところでは、車なしでは頭を抱えてしまう。

その私も、車運転放棄が「時間の問題」として迫ってきている。

高齢者のなかには、「自分はまだ若い」と思い、運転規制などに反発する人も多い。たとえば、高齢者マークへの反発が多く、それを付けない人は多い。なかには、自分の持つ危険性を過小評価する人がいる。

私の場合、高齢者マークが大変有用であると感じている。スロー運転の私の車の後続車は、スロー運転につきあうか、さっさと抜き去っていく。マークがないと、車間距離をつめられたりなど、いろいろと「いやがらせ」のようなメッセージが送られそうだ。マークがあると、そうしたことはない。

自動車運転だけでなく、いろんな面で、高齢者は、自分が高齢者であるという自己認識を適切に持つことが大切だと思う。

適切にもった高齢者自己認識を表明していると、いろいろと親切にされることが多い。それを嫌がる人も多いが、私は、それで「得」をすることが多いと思っている。

スーパーのレジなどでは、いろいろな配慮を受ける。先日の散策では、「おじいちゃん、おばあちゃん、この道は危ないですから、あっちの道を歩いてください」と言われた。そんなことが日常的になってきた。

その親切に、反発する高齢者もいるだろうが、私は喜んで受け入れ「得」をしている。

最近、気になることの一つは、庭畑仕事でよく転ぶことだ。わが庭畑は急傾斜地だし、通路も自然石を並べて作ったデコボコ道だからだろう。体力トレーニング向きなのだ。だから、転ぶことは仕方がないと思う。通常の道路で転ぶことは、全くない。イノーの「サンゴ道」でも、転ばない。

都会と田舎

2019年02月24日～03月31日

6. 〈自然とのつながり〉 〈人間とのつながり〉 祭・共同表現 共同生活

前回記事の続きだ。〈自然とのつながり〉 〈人間とのつながり〉を、共同作業として押しすすめる事例について書こう

3. 祭・共同表現 これは、昔からいっぱいある。地域の祭がそうだ。地域にある御嶽や神社を地域住民が共同で維持管理するのもそうだ。そうした場を美しく、時には神聖に形づくる。最近では、そうした場で芸能表現をしたりもする。そうした場で、奉納相撲というようにスポーツをするのもそうだ。

地域の共同体が弱まった現在でも、そうしたことに愛着を感じ、維持する動きは根強い。ときには、そうしたことから地域再興をはかろうとすることさえある。通りの花いっぱい運動もその例だろう。南城市の憩いのオープンガーデン企画もその一例だろう。

4. 共同生活 家族単位・個人単位の住居にかわって、血縁や婚姻関係にとらわれない共同生活をするシェアハウスやグループリビングの動きもそうだ。かつては若者が共同生活を送る若者宿娘宿などもあった。

早川裕子+GLネット『老後は仲間と暮らしたい』主婦の友社2000年刊を、発刊当時に読んで強い刺激を受けた。共同生活の多様な例が並んでいたのだ。刺激を受けて、友人知人たちに、自分たちでも考えてみな

いかと声をかけたが、当時は、まだ時機が熟していない感じで、反応は鈍かった。

シェアハウスが広がりを見せている今、状況は異なっているかもしれない。

5. 体験滞在型観光 観光も一時的な物見遊山ではなく、訪問先に滞在して、いろいろと体験することを重視する動きが拡大している。農業体験・ものづくり体験などいろいろとある。それは、通過しつつ見学するというのではなく、生活スタイルとして実行しようとする。南城市がすすめているエコミュージアムなどもそうした考えにつながる。

5. 〈自然とのつながり〉 〈人間とのつながり〉の新たな模索 家庭菜園 おしゃべり場

前回書いた共同で何かをする過程では、当人がもつ要求・希望が、実は、相手の自然や人間の要求・希望にもなる形が生まれてくる。いくつか例をあげよう。

1. 家庭菜園（アタイグワー） ベランダ菜園でもいい。これを自然との共同の過程ととらえてはどうだろうか。植物が生育するのを人間が助け、喜ぶ。

【便利さ】 すぐに食卓にのぼる有利さがある。外で買って貯蔵しておくのではなく、必要な時に必要なだけ収穫する。植物を人間の手の届く範囲で管理し、植物にとって生育しやすい環境をつくる。おまけに商品・金銭への依存率を少しだとしても減らすことができる。

【快適さ】 無農薬・有機栽培であれば、食の安全から言って、文句なしだ。自分の好きなようにつくれば、味の点でもよい。身近な緑が、マイナスイオンとか酸素を出して、空気を清浄化してくれる。

【美しさ】 美しい植物を、さらに美しく見えるように管理し栽培する。人間生活と植物生活がハモるようにする。

遊休農地を活用した市民農園ともなれば、さらに規模が拡大する。半農半Xであればなおのことそうなる。これらの活動を個人だけでなく、家族で、あるいは隣人とともに共同してやれば、人間相互の共同関係を育む。こうしたことは、都会でも田舎でもできることだ。違いをあえていえば、周辺の自然や人間の密度の違いということになっていこう。これらはテレビ番組にしばしば登場するほど、高い人気を得ている。

難しいかもしれないが、ペットの共同飼育などもありそうだ。ハウライカガミを植え、オオゴマダラが乱舞する地域をつくる取り組みは、すでに存在している。

2. おしゃべり場（沖縄式にいうと、ユンタク場）

田舎だと、縁側、公民館、広場、かつての都会だと、共同の井戸端などでおしゃべりの花が開く。

田舎・都会を問わず、道は元々人と人がつながる場であったようだ。出会えば、そこでおしゃべりが発生する。すくなくとも挨拶が生まれる。今でも登山道はそうだ。そして、森の中の道、海岸（の道）などは、自然とつながる道だ。

もう見かけなくなったが、辻が宴会場であったこともある。二人の宴会に、誰かが通りかかって、人数が増えることもあった。宴会とまでならなくても、辻は今でもおしゃべり場として健全に生き残っている地域は多い。

車が占有し支配する状態から、車に代わって、人と人がつながる道が増えることを望む。最近ではカフェをそのように活用することがある。一つのテーブルでのおしゃべりを超えて、隣のテーブルともつながる。立食式パーティーの人気はそのことを示す。ホールロビーの活用もある。

4. 田舎でも都会でも、自然との人間との新たなつながりを模索する

自然や人々とのつながりの希薄化が都会ですすむと、機械的な関係ではなく温かみを感じられるつながりを田舎で求める動きが広がる。と同時に、都会のなかにも田舎的良さを作り出す動きも広がる。不便と思われてきた田舎においても、【便利さ】を求めるために、インターネット環境を整備し、買い物の不便をなくす動きが広がる。

こうして、都会の田舎化、田舎の都会化が進み、両者の違いが少なくなり、両者の境界・仕切りがぼやけてくる。

そうなれば、都会と田舎との違いというよりも、人々の生き方・暮らし方の違いではないか、という指摘も出てこよう。たとえば、都会では、隣家とのつながりが薄く、孤立気味な人が多いといわれるが、田舎でもそうした類の暮らしをしている人もいる。田舎でも自然とのつきあいを「自然を眺める」程度にとどめる人がいれば、都会でも市民農園を活用する人がいる。

さらに、近隣とのつながりが薄い都会だけでなく、人口減のなか、近隣で共同作業をするような、かつての田舎のつながりが減ってくる。そんななか、新たな形でのつながり・協同を追求する動きが都会でも田舎でも見られるのではないか、という指摘もあろう。

そこで、都会でも田舎でも、【便利さ】【快適さ】【美しさ】を1960年代以前のイメージで考えるのではなくて、新しい形で構想することが求められてくる。

その新しい形は、「自然とのつながり」「人間とのつながり」を豊かにするなかで構想したいものだ。かつて田舎における人付き合いのわずらわしさを避けるために都会生活を好む人がいた。そこで、田舎でもわずらわしさを余り感じない付き合い方が求められてくる。たとえば、義務としてのつきあいではなく、選択できる任意のつきあいが好まれる。つまり、わずらわしくない「つながり」を求めるのだ。

そして、つながりの相手となる、自然や人間を活用利用するものとしてとらえるよりは、つながって「共にいる」「共につくる」ことを喜びつつ、共同で何かを生み出す過程で生まれてくる【便利さ】【快適さ】【美しさ】を求めるのだ。

3. 都会イメージ・田舎イメージの問い直しと再構築

これまでの都会イメージ、田舎イメージが、いま問い直され、再構築されはじめたようだ。【便利さ】【快適さ】【美しさ】の点で、都会はすごくて田舎は劣っているというイメージを、1970年代ごろまでの若者のほとんどがもっていた。今でも、そういうイメージを持つ若者は結構いる。たとえば大学進学するなら、東京・京都などの都会だというのだ。また、修学旅行は、東京・京都だし、東京ディズニーランドだという発想。

でも、細々ながら、逆の発想もあった。東京・大阪という都会から琉球大学へ、という個人の決断で進学する若者が1970年代からいたし、そういう若者は増えているようだ。首都圏などの都会からの修学旅行で、沖縄の我が家周辺の田舎に民泊する例が、21世紀に入るところから爆発的に増えてきた。

観光やリフレッシュのための旅として田舎を短期訪問するにとどまらず、いろいろと体験し、次の生き方へのチャレンジの足掛かりをえるための滞在をする例も増えている。子どもの教育を考えるとコンクリートジャングルに囲まれ、近隣とのつながりが薄い都会ではなく、豊かな自然と人々とのつながりのある田舎に住もうという人たちが、数少ないにしても増えている。

それらには、新たな生活原理の追求があり、新たな都会と田舎イメージの追求がある。たとえばキッチンやリビングを共用する都会のシェアハウスに住むのもそうだろうし、都市公園づくりにも、新たな動きを見る。それらには、経済成長を前提にした豊かな【便利さ】【快適さ】イメージとは異なるものがみられる。

雇用・仕事でいうと、田舎＝農という発想とは異なる手仕事に、大量生産大量消費ではない、新たな動きを求める人もいる。そういう仕事に、ITを組み合わせる試みも多い。

そうした動きは、これまでの都会と田舎の関係のイメージとは異なるものを含んでいる。

20世紀後半における一つの典型的イメージは、親世代は田舎で農業をし、子ども世代は都会の工場やオフィスで働き、盆と正月に子ども世代が孫を連れて田舎に里帰りするものだった。そこでの「故郷」は田舎だった。「兎追いしあの山」という「故郷」イメージなのだ。

だが、子ども世代が都会に定着し、マンションや郊外の新興住宅に住むことが長期化し、孫世代が成人になると、祖父母の住む田舎とは縁が薄くなり、自分が育った都会が「故郷」となる。だが、そこは盆正月に帰郷するところではない。そんななか、故郷感の希薄化が進む。

他方、交通便のよい田舎であれば、田舎の郊外化とでもいう現象がすすみ、田舎のセカンドハウス・別荘などに住む人が増える。畑づくりができる貸家であるクライネ・ガルテンなどもその例だろう。

体験滞在型の観光は、それらを促進し、新たなイメージの田舎づくりのきっかけを生み出している。

2. 都会から田舎へ

都会の異常さの広がりの中で、逆方向の都会から田舎への動きが目立ってくるようになった。ゆったりと自然のなかで、人々と触れ合う生活を田舎に求める人が現れてくるのは1980～90年代のことだ。

2000年代に入ると、田舎暮らしブームが広がり、Uターンだけでなく、Iターンも注目されはじめる。話題になり始める人口減少や集落消滅を食い止める絶好のチャンスとばかりに、田舎への移住定着を奨励する施策を打ち出す地方自治体が広がっていく。さらに、棚田を典型とする自然の美しさや温泉を楽しむ、さらに名所などをターゲットにした観光開発策も打ち出されていく。さらには、田舎おこしとしての産業上の取り組みで成功を収め始めるところも出始めてくる。

こうした動きはありながらも、人口減少を食い止める地域事例は、いまだわずかであるし、田舎から都会への人口移動は依然として続いている。

だから、都会から田舎へという動きは、量的面での実体が生まれてきたというよりは、意識のうえで、あるいは願望のうえで、田舎が注目されはじめたというレベルといえよう。

なかには、都会と田舎の双方を使い分けて、いわば二股生活をする人もいる。経済条件などもあって、旅の形での田舎滞在生活、あるいは貸別荘を活用する形もある。インターネット環境の広がりの中で、田舎にスモールオフィスないしは作業場を持つ人がいる。それらには、田舎生活を試してみるという形もある。数年間生活してみて、よければ田舎に定着するというのだ。そこで、しばらくは借家住まいをして、よければ持ち家を取得する例も出てくる。古民家のリフォームだったり、自治体が提供する土地を取得したりする。それらには、いろいろな形で自治体が補助金を出す例もある。

それらには、かつてのように、【便利さ】【快適さ】【美しさ】を求めて都会に移住するのは逆に、田舎に【便利さ】【快適さ】【美しさ】を見いだす例もある。その点では、【便利さ】【快適さ】【美しさ】の転換・再構築があるといえるのかもしれない。あるいは、都会と田舎とを、【便利さ】【快適さ】【美しさ】の点で、はかりにかけることもある。その際に、経済性も重要な焦点となる。

たとえば、【便利さ】という点でいうと、都会の方が、便利そうに見えて、遠距離通勤とか手作り不能とかで、【便利さ】に劣るといふ人も出てくる。また、田舎だと、収入面で低くて不利だが、支出面で、近隣の助け合いとか少しは自給自足ができて、収支差し引きを計算すると、田舎の方が有利という人もいよう。

そして、都会と田舎と二分して考えるよりは、ほとんどの土地が都会性と田舎性をあわせもつようになってきたので、いろいろな条件の活用次第だと考える人もいよう。

また、都会と田舎との線引きをどこでするのか、という問いも生まれよう。行政上は「市」だけど、景観や生活上は、「ムラ」だとか、その逆の例も目立つ。今や、住所表示を見ただけでは、都会なのか田舎なのか、よくわからないところが多い。日本語の混乱さえ招いているともいえる。とすれば、市・町・村という区分をやめたほうがいいではないか、という声も聞こえてきそう。

1. 田舎から都会への大移動

これからしばらく、田舎から都市へ、その逆の都市から田舎へという動きの検討を起点にして、「都会と田舎」について考えてみたい。学術的にいうと、「都市と農村」ということになろうが、生活感覚でいうと、「都会と田舎」といったほうが気分が出る。

1950年代後半から始まった田舎から都会への動きは、田舎に住む驚くほど多くの人々の「田舎脱出」となった。特に若い層は、就職にしる進学にしる、そうするのが多数派になり、ごくフツウのこととなった。

その結果、田舎に暮らす人は激減し、最近もてはやされる「消滅集落」という言葉を使うと、すでに1960年代には、そうした田舎が出始め、それ以降、増加する一方になってきた。

人口の大移動だけではない。農業の縮小、第二次産業の膨張、さらに第三次産業の拡大というように、産業構造・経済構造を変えた。コンビニ・スーパー・自動車に象徴される大量生産大量消費、金銭中心で回る生活が広がり、それがフツウのこととなった。自給自足の生活などは、田舎においてさえも見つけることが困難になってきた。そして、コンビニ・スーパー・自動車などの一般化は、都会に限らず田舎にも及んでいく。

こうした生活の変貌は、生活の近代化ととらえられ、【便利さ】【快適さ】のイメージで語られた。【美しさ】でさえ都会的美しさが、自然美と結びついた田舎的美しさを凌駕する。そうこうするうちに、【便利さ】【快適さ】のうえで弱点があるとみなされる木造家屋が都会から激減し、都会の建築はコンクリート型に変わる。その際、木造は災害に弱いという理由が加わる。コンクリートは、建物だけでなく、高速道路や鉄道網の形でも広がり、そのような都市景観が美的なのかどうかという疑問が広がる。東京日本橋の橋に手が届くほどの間隔で高速道路があるなどは【美しさ】の対極だろう。

そして、都市機能集中人口集中のなかで、都心の土地が高騰し、ウサギ小屋といわれるような狭い住居でさえも追い出され始める。余裕をもつ広さの住宅は、価格的にフツウの人が住めない所となり、人々は郊外へと移る。そのなかで、逆に都市中心部の空洞化がすすみ、インナーシティ問題が広がる。郊外に広がった新興住宅地から職場へは、長時間通勤となり、都市生活の【快適さ】への疑問が広がる。近年では、タワーマンションと呼ばれる高層マンションが都市中心部近くに広がる。そして、1960年代から90年代にかけて作られた新興住宅地は、今や高齢者中心の人口構成になりつつある。

「お金」さえあれば、便利な生活が確保されるのが都会だが、格差拡大の中で、「お金」不足の貧困状態に陥る人々を激増させ、都市問題を一層深刻にしている。

そして、災害の巨大化が増す中で、都会は安全なのかどうか、という心配がふくらむ。
こうしたことは、日本の大都会特有なのか、それとも世界の大都会に共通なのだろうか。

人生後半突入期の激動への対応 2019年01月28日～2019年02月25日

5. ゆっくりと自分の実情に気づき受け入れること

大きな難題にしる小さな難題にしる、それらへの対処の仕方について述べていこう。スタートは、難題と難題に対処しようとする自分自身の実情を認識し、受け入れることから始まる。

きちんと認識して受け入れることができない時は、よくわからないということで、ファジーにしておくこともありえよう。思考停止になることさえ多い。そうした自分自身を認めること許すことは大切なことだ。場合によっては、一時的に逃げ出すことがあってよい。自分を消してしまうよりはマシなのだ。

思考停止になりファジーにしたままでいる自分を許し、そこから抜け出す道を探るために、時間稼ぎをすることがあってよい。言い方を変えると、「間を取る」ということだ。

時間稼ぎしているうちに、心を落ち着け、打開策を探し出すための作戦が始まる。その際、一人で閉じこもらない方がよい。困っていることを叫び訴え、ともに受け止めてくれるもの・人を見つけ出すことだ。親しい人とは限らない。最近では、SNSを使う人もいよう。本やインターネット情報を探すのもあろう。

そういうなかで、話を聞いてくれる人、相談にのってくれる人、できれば援助サポートしてくれる人が現れるのを、粘り強く待とう。

そういうなかで、少しずつになるかもしれないが、自分にエネルギーが戻ってくるのを感じられるようになれば、少しずつ行動をはじめよう。焦ることはない。

その際、元のレベルまで戻ることを目指さないほうがいい。半分程度で十分だというぐらいの気持ちでいいだろう。人間だれしも衰えていくものであり、難題で疲れているからなおのことエネルギーもパワーも低下しているはずだ。

こうして難題に少しずつ対応できるようになったら、改めて、難題とそれに対応する自分について振り返ってみよう。

こんな風に「頑張る」というよりも、ゆっくりと回復してくるのを待つことがポイントになる。「急がば回れ」ともいえよう。自分と自分のペースを取り戻すというか、新たな自分ができあがってくるのを待つというわけだ。約50年という長い期間になりそうな人生後半期を生きていくには、そうしたゆったりさが大切だろう。

4. 難題体験の積み重ね

前回記事に書いた「頑張る」人が上手くいかない時、連載一回目に書いた事態が現れる。その際に、「頑張ろうとするけれど、頑張れない」という事実を受け入れられない人が結構いる。対応の間を取るために、当面

「適当にやる」ことが頭に浮かぶことがあっても、それはごまかすことであり、許せないことだとみなしてしまう。そして、上手くいかないことは、失敗、敗北だととらえる。もしエネルギーが残っていれば、なお「頑張ろうとする」。しかし、ますます敗北・挫折の度を強める。さらに行き詰まると、どうしようもなくなって自暴自棄に陥り、自分を消そうとさえする。

余談になるが、「仕事場で死ねば本望」という表現に出会うことがある。職場で死ぬことを仕事人間の理想として賛美することもみかける。「生涯現役」という考え方は、それを生みやすい。「燃え尽きるまで頑張る」と語り、ポックリ死を願望したりもする。

このように「頑張る人」は難題に直面した際、「適当にやる」、歩む道を変える、修正する、歩むのをやめる、しばし判断停止をする、休養するなどとは考えない。

その時点の自分では対処しきれない難題にぶつかることは、一生のうちに何度かあることが普通だろう。たとえば10年間のうち一度もないという人は少ないだろう。システムの流れとか権威とかに任せれば、そうした例はあろうが、システム不全・権威失墜もあるわけだから、長期にわたって難題にぶつかっていないというのは例外とさえ言えよう。

難題とまでいわなくても、「一呼吸おいて」「腰をすえて」対処しなくてはならないことなら、一年に何度もあるだろう。直面する仕事や活動から離れたと思うことも多いだろう。それらを直球勝負で突破しようとし、実際突破する人はそんなに多くないだろう。

だから、難題に直面した時、不合理・矛盾・揺れ・迷いを伴うのはごく普通のことである。ではそんな難題に直面した時に、どうすればよいのだろうか。

まず小さな難題体験を積み重ねることだ。難題のなかで小さめなものを経験するなかで、周りの助けも得つつ、対処を経験し、より大きな難題への対応力を準備しておくというのは、ごくありふれたアプローチだろう。いわば、予防注射のような体験だ。

人生後半突入期の難題には、難しさが凝縮して、体験のレベルを超えると感じるものもあろう。ある程度の自信をもっているために、周りに弱音をさらけ出して頼るのはみっともないと考えがちなので、ややこしくなる。

だけど、弱音を出して周りに助けを求める、しばし休憩するなどといったことが、難題対処への不可欠の第一歩なのだ。そうした行動への準備として、海や山を眺める、一人になるがあってもいいし、匿名の電話相談を活用するなどもいいだろう。

3. 「頑張る」人の人生観 克己

「頑張る」人の人生観はどのようなものだろうか。まず競争・勝負の世界に浸かっている人だろう。そして、そこでの勝利を願って追求する人だろう。近年の社会のありようが、競争・勝負の空気に染まっているので、子どもの時から、そのなかで育ってきた人が圧倒的に多い。そのため、濃淡の差があるにしても、今日ではそういう人生観をもつことがごく普通になっている。まじめに一生懸命にやる人は、自然にそうなりがちだ。「競争から降りる」「勝敗にこだわらない」行動は、白い目で見られてしまうのだ。

だが、ほとんどの人は、いずれ負ける。負けることを受け入れて、必要な妥協をして自分の人生を組み立てるのだ。そうなのに、勝ち続ける人をモデルにしてしまうことが正しいと思込まされる。

それは、人生一本筋の人を生み出してしまふ。そして、敗北・挫折を受け入れられず、いつまでも自分を叱

咤激励し、「克己（自分に克つ）」という言葉を標語にするのだ。

その発想は、人生にはいくつもあり、山あり谷あり、方向転換もあり、ということを受け入れられないことに通じやすく、弱者を否定し、差別排除する論にも通じてしまう。

そのため、他者と対等の関係を作るのが下手であり、対話することも下手になり、他者を説教すること、叱りつけることばかりになる。あるいは、どっちが正しいのかと勝負をつける発想を優先し、人の多様な良さを生かして、共同してやっていこうという道を閉ざしてしまう。虐待に陥る親にもそうした事例を見かけることがある。

こうした発想は、1950年代末からの高度経済成長期、あるいは大量生産大量消費時代、あるいは私が言ってきたストレーター時代にふさわしいものだった。終身雇用制とも結びついていた。

ところが、それらがうまくいっていないことが、1990年代から表面化してきた。そしてそれらに代わるありようの必要を感じる人が激増してきた。ところが、それだけにかえて、旧来の者にしがみついて「頑張る人」を生み出しもしてきた。そしていまなお経済成長にしがみつくと動きを温存している。

それはまた、社会においても個人においても、格差という形で矛盾を拡大してきている。旧来のありようにしがみついて「恩恵」を受けようとする人と、旧来のありようからはじかれる人との格差ともいえよう。

そのなかで、頑張る個人と社会という旧来のものを引き継ごうとする動きとそうはいかない現実との開きが年々大きくなってきている。そのなかにあって、方向転換を果たし、旧来のものとは異なるありようを求めることが、例外的なものではなく、大きな流れへと広がっている。

2. 「頑張る」人の身体観

難題に直面する人は、人生後半期に突入する40代後半から50代に多い。といっても、「生涯現役」といって、70代になっても奮闘する人にも、そういう例は多い。「年には負けられない」「若い者には負けられない」といって「頑張る」人である。同僚・友人・家族など周りが、「働き過ぎで、身体的にまずいのではないか」と感じ忠告しても、本人は「私は強いし、しっかり自己管理できているから大丈夫」という。そういった忠告を聞き入れることさえ「弱さを見せることになるし、敗北」だと感じる人でもある。

ここで、そういう人の身体観の特徴をみてみよう。

まず「自分の身体は強い」と自信を持っている人。「自分の体のことは、自分が一番よく知っている」と言うが、強い身体を前提にしている。体調不良の時でも無理をして頑張り通せる体験を前提にして、自分の身体をとらえる。いわば「絶好調」前提型だ。

絶好調の20歳ごろの食事量をそのまま30代40代も続け、体重増になっている人が象徴的存在だ。体重減をはかるための運動はするが、食事量は減らさないという人が結構いる。

いつも絶好調であるわけではなく不調のこともあるが、それを認めない型なので、自分の身体のことをわかっているかどうか微妙な人ともいえよう。そんな人が、50歳ぐらいになっても絶頂といえるほど調子よく働いているので、周りの人が爆発的危機になりそうに感じて心配する。

爆発の前に、健康診断などでの異常値や「軽い」病気が現れた時にどうするのだろうか。自分の身体観では理解できない、理解しようとはしないということで放置することが多く、それでやってこれたということで、より一層「強い自分」をアピールする人は多い。

それでも、微妙な体調になった時に、憤りを身体に向け、自分の身体を叱咤激励する。ガンバリズム的な「精神力」に過剰依存する。それでやっていくことは、身体酷使の蓄積に通じることになり、破局を近づくことすらある。その際、一生懸命にやっている・戦っているということで、身体を痛めつけることを許容免罪してはいないか、という疑いを当人自身はもてない。

ここまで、身体レベルに焦点をあてて書いているが、実は精神レベルでも同様のことがある。なかには、人前では強がりだが、心の中では悩みを抱えており、それを表に出せない人も結構いる。あるいは職場の事情などで、表に出しにくいことも多いだろう。おおまかに言うと、「弱さ」を認めない人、許せない人、受け入れられない人なのだ。「弱さ」を悪だと思っているからだろう。

1. 突然ふってきた難題にうろたえる

順調にやってきて50歳前後になり、責任の重い重要な業務を遂行し、頂点さえきわめられそうな感じになってきた時に、入院手術が必要な病気が発見され、これまでのように業務をすすめることは困難であるといわれ、パニックに陥る例が珍しくない。

過労死というわけではないが、病気休業はありふれたこととして、誰にも起こりうる話のようだ。「私は強いから大丈夫」という人ほど、突然襲う異変に困惑以上の事態になってしまう。「私は弱い」という人は、日常的に気遣っているのだから、パニックという反応は少ないかもしれない。

私自身も、53歳の時に、体調不良で大病院に行き、医師に開口一番に「浅野さん、仕事やめられませんか」といわれ、ショックを受けたことがある。混迷のなかで、そのアドバイスを受け止めて、必要な対応をするまでに5か月かかってしまった。さらに、体調不良の全貌が見えたのは、快調といえるほど回復した10年後のことである。

こうした事例は、50歳前後のかなりの方が経験しているようだ。そこで、問題発生→混迷→気づき→回復行動という過程を追いながら、この問題の性格について考え、どう対応したらよいのかについて、問題提起していきたい。

最初に、どんな形でこうした事態が生まれるかについて考えてみよう。

50歳ごろというのは、業務遂行経験が20年30年とあることもあって、その人なりの世界では重要な位置にある。家庭的にも、子どもが巣立ち始める時期になっている。そうしたなかで、責任感とか自負心とかが強くて、「自分がやらなければ」と考え、弱みを他人に見せず、難題があれば、それを自分なりに打開していかねば、と考えがちである。他者に対しても、責任ある振る舞いをして、模範となるようにしなくてはならない、というプレッシャーを感じることもさえる。

どんな人に多いのだろうか。

威勢よく働いている人。絶好調の人。それまでの頑張りが報われ、頂点に近づこうとしている人
仕事に自信を持つ人 周囲からは過信ではないかといわれるほどだ。

責任の重い要職についている人

他者から「まじめだ」といわれるほど一生懸命やっている人。 弱音を出せない人

自分の身体への強い自信を持つ人 「若さ」「健康」「強さ」を誇る人

自分の身体を鞭打つというほどやっている人

読者と創る人生後半期の人生創造物語

2018年12月15日～2019年02月17日

1. 事例1. 転職願望の男性Aさん（46歳）の今後の選択創造

これから「人生後半期の人生創造物語」連載を始めます。読者参加型ですので、よろしく。

2018年11月のNHKテレビで紹介された話。25年余り勤務した警察官を退職し、知人からの紹介で警備会社に勤務したが、充実感がえられない男性。偶然、黒塗りの高級車の車列に出会い、子どものころ、そんな車の運転手になりたいという夢を持っていたことを思い出す。その車列の会社に問い合わせると、VIPや外国客を乗せて走る仕事だという。すぐに応募したら採用された。今は夢の実現で充実した仕事をしているという。

このテレビでの事例を視聴したAさん（46歳）は、自分の場合の夢は何だろうか、と考える。はっきりしないが、少なくとも他人に使われるのではなく自分なりの考えで進める起業だろうな、と思う。

現在のAさんは、30人近くが勤務する観光系の会社。Aさんは部門責任者で部下5名がいる。高校卒業後、大都市の会社に勤める。ブラック企業というわけでもないかもしれないが、残業続きで体を壊しかけるほどだった。帰郷し地元企業で働き始める。しばらくして開業準備中であった現社長に、知人を介して声を掛けられ、現在の会社に転職する。

20年近く勤務した現在の会社に不満があるわけではない。あえていうと、給与は手取りで30万円足らずの現在より上がる見込みがそれほどない点がある。今の仕事はやりがいもあり、クライアントも含めてたくさんのつながりもできて、充実している。現在絶好調の業界だが、全体として見ると飽和状態が近づいてきそうで、10年足らずで大きな転換が迫られそうだ。

ということで、マンネリの気分になることがあり、何か変化を求めたい気持ちになる。変化を求めるとすると、人生後半期にさしかかった今が転職の機会だろうなと感じる。

これまで、結婚寸前までいった女性もいたが、ずっと独身生活だ。現在は、オフィス勤めで経理担当をしているしっかり者の女性（34歳）と交際している。今後どうするか、迫られているし、私自身も決断の時期が近付いていると感じる。

健康状態はメタボ気味で、いくつかの黄信号の検診数値はあるが、しっかりコントロールしていけば大きな問題はないと思っている。

こんな状況の中で、起業に関心が向いてきている。これから2～3年ではっきりさせ、3～4年後にはスタートさせたい。といっても、どんな業種で、どんな計画で進めるかということ、白紙に近い。可能性を狭めないで、いろいろな世界をみていきたいと思っている。現在はそのための調査学習期間だ。一年ぐらいかけて、具体的な業種を絞って、計画づくりに入ろうと思う。そのうえで、現在の会社を退職しようと思う。

最近、自分と同じように大都市勤めで、疲れ切って帰郷した38才の後輩と数年ぶりに会って、話し込んだ。かれは、帰郷後休養を兼ねて、個人として請け負った業務をしていたが、それをもとに8年前に起業し、3名の社員とともに、かなり積極的に業務展開をしており、近く業務拡大をはかるという。

彼の話に随分刺激され、起業の検討を加速させたというわけだ。

そんな折、もう一つ話が舞い込んできた。同じ観光業のB社からのヘッドハンティング。給与などの条件は現在の会社よりいい。といっても、現在の会社には義理を感じているので、Aさんの仕事ぶりを評価されて

の話とはいえ、簡単に乗るわけにはいかないと思う。

※ なお、Aさんは、多様な事例をもとに浅野が作り出した架空の人物です。

現在、Aさんの前には、四つの選択肢があります。

- 1) 現在の会社に勤め続ける
- 2) B社に移る
- 3) 起業する
- 4) その他

読者からの意見・アドバイスを募集します。この記事のコメント欄に書きこんで下さい。あるいはブログ「オーナーへのメッセージ」を使って、ご意見をお送りください。

1月上旬予定の次回には、集まった意見・アドバイスを紹介しつつ、私なりの意見・アドバイスを加えたいと思います。そのやりとりを経て、最後に私なりの解説をする予定です。

こうした事例を並べて、読者とのやり取りをしていこうと思います。Aさんの事例は40歳代男性ですが、50歳、60歳、70歳と年齢が高い例（男女）も考える素材例にしていく予定です。

2. 私が人生後半期の人生創造を考え始めたいきさつ

今回は、連載し始めた人生後半期の人生創造を考えてきた私の経緯について書いておこう。

1990年代中頃、当時愛知県に住んでいたが、沖縄で活躍する友人知人たちと、「人生の午後を語る会」という会をもった。50歳前後の出席者たちのまさにユンタクの花が開いた。「人生の午後」「人生の後半期」を積極的にとらえ、退職（途中退職を含む）を見据えてどうしていけばよいかを考える強い動機付けになった。就職以前・仕事・退職後という三つで人生を分けるのではなく、人生後半期をいかに創造するかという視点で、40代後半からの人生を構想し実践していくという発想が、私の中に強まっていく。

そして、90年代後半以降、「人生創造」ということをキーワードにして論文を書き、ワークショップを行うことが増えていった。

しばらく後の1999-2000年に、私はトロントで在外研究生活を送った。それまでに出会ったことのない面白くてたまらないものが続出という感じであった。そこにのめりこんだという感じでもあった。無論、そこの言語は英語が中心であり、英語に慣れていない私には難関でもあった。数時間連続して英語を使う場面になると、高熱を出すようなことをくりかえした。寝込んでも、数時間たつと熱はひくので、医師にはかからなかった。「英語病」と呼ばれていた。

ところが、日本に帰っても、神経を集中する会議に出ると、同様の症状をだした。そこで、大病院で診察を受けると、医師は開口一番「仕事やめられませんか」という。そういわれても、そんなにひどいとは思えなかった。数年後にやっとそのことを了解した。

「人生の午後を語る会」でのユンタクもあり、90年代終わりには、早期退職し沖縄暮らしをして、自分なりの人生後半期をするつもりでいたが、そのことを決断実行する後押しに、医師の言葉になった。海外研修後3年は勤務する義務が課せられていたので、3年後に退職するための行動を起こした。退職一年前には、「人生創造を計画するために」という理由を書いた退職届を提出し承認された。といっても、私の周辺では、どこか別の大学などに移るのだらうと思われていた。実際、誘いもあった。だが、「本当に」退職した。

そのころは、若者を中心に人生創造について書き、ワークショップをくりかえしていたが、並行して、自分

自身の人生創造を実践する位置に自分を置いたわけだ。

※ 『<生き方>を創る教育』大月書店 2005 年刊

3. 事例 2 大都市から沖縄移住した DEFG さん家族

この連載の転職願望 A さん物語へのご意見をいただきありがとうございます。もうしばらくご意見を募集していますので、よろしく願います。寄せられたご意見をもとにした意見・アドバイスは、1月中旬に掲載予定です。しばらくお待ちください。

今回は、事例 2 で、全く別の事例ですが、私近辺でよく出会う例で構成した家族移住物語です。

D (48 歳) E (51 歳) F (17 歳) G (14 歳) さん家族は大都市でマンション暮らしをしていた。技術専門職で勤続 25 年の D さんは、体調不良で鬱気味になった。E さんもデザイン系の仕事についていた。FG さんは高校生中学生だ。

エコ志向が強く、健康に深い関心をもつ E さんは、家族に大胆な提案をした。「家族で一週間滞在して、好印象をもっていた沖縄に移住しよう。D さんの健康にもいいだろう。FG さんは、沖縄での高校中学生生活を経て、その後の進路を考えるのもいいじゃないか。現在住んでいるマンションを売れば、10 年近くはたとえ無収入でも、なんとかやっていけるのではないか」

E さんの熱弁に、他のメンバーも促されて同意し、半年ほどの準備を経て、3 月末には沖縄移住となった。都市郊外の戸建てを借りて、沖縄生活が始まった。

E さんは、ネットを通してつながりができていた知人たちと、エコ生活について見聞を広めるだけでなく、実体験をいろいろと始めた。そのなかで、田舎で起業をすることを検討し始めた。大都市でしていたデザイン系の技術を生かして、観光客対象ないしは、ネット販売向けの商品開発が当面の作業だ。

FG さんは、新しい高校中学に転校した。高 2 になる F さんは、沖縄は自分に合っているところもあるが、違うところもあるという感じで、卒業後は、再び大都市に戻り大学か専門学校に進学したいと思うようになった。

中二の G さんは、それまでもしていたサッカー部活で活動し始め、すぐにレギュラーになり、学校生活を楽しみはじめる。将来のことを考えるよりは、当面の部活に集中している。多分の沖縄の高校に進学するだろうと感じている。

D さんは、しばらく何もせず、沖縄内をドライブしまくった。休養十分で元気になったが、仕事なしの生活に耐えきれず、それまでの仕事で得た専門技術を生かす仕事を見つけ、非正規職員として勤め始めた。給与は、それまでの半分ほどだが、不都合を感じるわけではなかった。

こうして、家族が各々選んだ道を歩み始める。だが、生活スタイルで、都市型の D さんとエコ型田舎型の E さんでは、合いそうもなかった。そこで、職場のある那覇新都心近くにマンションを借り、D さんはそこを中心に生活し始めた。時々、他の家族もそこを訪れる。現在の郊外の住居は 1~2 年後には引き払い、E さんの起業進行ともからむが、田舎の一軒家に住むことを E さんは検討し始めた。そうなると、D さんはどうするだろうか。FG さんも自分なりの進路についての選択判断が迫られてくる。

こうして、暫定的な沖縄生活が軌道に乗り始めた。それにしても、1~2 年たつと試行錯誤的なものから本格的なものに移り、どんな職業生活家族生活を築いていくのだろうか。一人ひとりの進路、家族としてのありようについて、模索ではあろうが、ある程度しっかりしたものを築く必要があろう。

読者の方々のご意見をお待ちしております

4. 個人レベルの人生創造 社会レベルの人生創造

連載2に書いた人生後半期の新たな人生創造の営みは、私だけではない。現在私が住んでいる沖縄の南城市周辺には、私のように50代半ばで早期退職したものだけでなく、40代30代で退職して、新たな人生創造の場として沖縄を選び模索している人がとても多い。

30年前には考えもつかなかった事例が多い。なかには、仕事のあてなしに沖縄生活を始め、半年ぐらい沖縄各地を転々としてエンジョイした後に、仕事探しをするという20～40代の人もある。それは沖縄だけに限らず、沖縄外の各地にもおられることだろう。

そして、こうした個人としての動きを作り出す社会構造が存在する。それを経済的に言うと、右上がりの停止、そして定常化・縮小の時代への移行がある。仕事の世界でいうと、終身雇用制の縮小・非正規の増大・転職が身近な話題になる、ということがある。付け加えると、終身雇用制の比率が低く、それだけに公務員志向の強い沖縄では、終身雇用でない人がごく普通の存在であり続けてきた。沖縄外でも、そういう経済的に厳しい地域が結構ある。また、女性ではそういう例が多い。

しかし、学校教育では、学卒後直ちに就職というシステムに向けた教育はあったが、自分なりに人生創造するための教育、たとえば、転職・起業などといったことに向けての教育はゼロとっていい状態が続いてきた。キャリア教育とよばれるものも、そうした性格を帯びたものが通常であった。

こうした社会動向のなかで90年代半ばから、終身雇用制で60～65歳まで継続して雇用される職場が激減していく。そういう職場に職を得るのが「狭き門」となり、非正規雇用者が激増していくが、それは終身雇用制を前提に生きるという「標準」が崩壊し始めることでもあった。

そして、リストラによる不本意退職、あるいはブラック職場で、途中退職を余儀なくされる例が激増していく。希望者殺到で「狭き門」であり続けてきた学校という職場も、安定した公務員とみなされてきたにもかかわらず、仕事がブラック化しているといわれ、教員不足が話題になり始めている。そして、「やりがい」や「ライフアンドバランス」を重視して職場選びをする人が増加していく。

それらのなかで、転職が日常的な話題になっていく。さらに、起業が人々の選択肢として視野に入り始める。そうした事例は、40歳代以下の話だけではなく、人生後半期の人々にも大きな関心呼び始める。定年退職後をどうするかなかでは、「悠々自適」で趣味に生きるということよりも、転職・起業といったことが話題として広がり始める。50歳ぐらいから、退職後を見通して、あるいは早期退職して、どういう生活・職業生活を送るかを考えることが、ごく普通になってきている。

そして、もう一つ高齢社会への対応が社会的に進行し、就職以前—職場—退職後という三分化発想の有効性が下がる中で、人生後半期にいかにか生きるかが、人々の強い関心を広げてきた。

高齢者の就業率の高さをみると、先進国の中で日本がかなり高い。そこには、経済上の不安があると同時に、高齢者としての生活・生き方への模索が広がっているともいえよう。私の周辺では、シルバー人材センターの方々の活躍ぶりが目に付く。

5. 事例2. 沖縄移住した家族へのアドバイス

事例2へのアドバイス・コメントは、実は寄せられなかった。何についてどのようなコメントをすればよいかが不鮮明だったためだろう。と同時に、こういう事例と出会う体験が少ないこともあろう。家族ぐるみの沖縄移住は結構あるが、60代ないしは20・30代が多く、この事例のような40代50代事例が少ないこともあろう。

また、この家族のメンバー自身が自分なりにしっかり考えるタイプであり、家族としては特別な相談事項があるというわけではなく、自分たちなりに切り開いていけそうな感じがするからでもあろう。私自身も、こうした事例を知っているが、家族からまとまって特定のことで相談を求められたというよりは、多様な会話の中で、いろいろと情報交換をしたというところが実際のところである。また、自分たちなりの考えをもって、調べ行動していく点で、大いに学ぶ所が多い家族だ。

この家族、ないしは家族メンバー個々人の大きな課題は、移住してきた沖縄で、どのようなつながりを作り、それをいかに蓄積し熟させていくかということにある。事例の家族の方々は、大都市型の人間関係、つまり職業・学校・趣味などで共通するものを持つ人々とのつながりを中心に暮らしてきており、いわば「気の合う人同士」のつながりという大都市型の関係がほとんどだ。だから、沖縄での人間関係が少なくても、大きな心配があるわけではない。

こう書いてきたが、沖縄でも、都市的などころでは人間関係が大きく変容してきている。Dさんが住もうとしている都市マンションでは、大都市とは変わらないつながりだろう。しかし、Eさんが住もうとする田舎の場合、地縁的なつながりの関係をどう作り保っていくのか、という問題が浮上してくる。

そうした地縁関係と、それまでの同好の士とのつながりとを、どう組み立て行くのか、ということがいずれ浮上してくるであろう。そのあたりがどうなるかは、田舎生活スタート後数年で浮上しそうだ。

このことは、沖縄でも広く見られる課題になってきている。沖縄移住者一時滞在者がしばしば語る沖縄の「人の温かさ」「親しみやすさ、つながりの築きやすさ」は、今後どうなっていくのだろうか。

6. 積極的な気持ちで 事例1. 転職願望の男性Aさん(連載1)へのアドバイス

転職願望の男性Aさんへの「アドバイス」を書こう。

この記事は、多くの人に読まれた。私のブログ記事のなかでは、とても多いことが目立つアクセス数だ。よくみかけるうえに、関心もたれやすい事例だからだろう。

そして、読者からのアドバイスもいくついただいた。ありがたい。読者からのアドバイスを参照しながら、私なりのアドバイスを書いていきたい。

「遅かれ早かれ定年します。人生1度、いろんなチャレンジしてみたいですね」とコメントされた方がおられた。安定志向が強力だったこれまでの生き方のありようを変えて、「チャレンジ」する願望が広がっているようだ。それは、「普通」の流れに沿って受身的に進む人生ではなく、積極的に自分なりの人生を作ることでもあろう。

そして、ここ20年余りの動向をみていると、安定志向が強い人でも、思うようにならず、流される生き方になってしまったと後悔してしまう例が多い。そして、終身雇用など安定雇用で「すぎる」生き方が難しくなっている。50代60代は、給与面だけでなく地位面でも、かつては上司になって部下をもち、それなりに「よかった」という人が結構いたし、そういう事例がモデルになっていたが、今ではそういうわけにはいなくなっている。リストラで転職を余儀なくされたり、無事定年まで勤めあげたが、定年後再雇用で冷や水を浴び

途中でやめたりする例もある。普通の流れに乗っているだけでなんとかなると思っていたが、現実には「捨てられた」感さえ伴う「仕打ち」に合う例もある。

どうせそうなるなら、自分なりの「チャレンジ」をした方がいいという積極的な気持ちを持つ人も多い。かりにうまくいなくても、自分なりに判断して選んだ道なら、納得できるというものだ。ということで、50代以降を見通して、バラ色の退職図を描けないのなら、自分なりのチャレンジを、定年を待たずに始めた方がいいと、早期退職する人が目立ってきた。

こうしてチャレンジを始める場合、対照的な形がある。1)ともかく退職して、しばし休養と準備を兼ねる期間を設定し、1年後ぐらいをめどに次の職を探す。2)在職中に2～3年間の準備期間をもち、次の職を確定させてから、現職を退く。

このうちの2番目を勧める方は、次のように書く。「これから人生100年時代に入っていく中で、引退後の数十年をどう生きるかが課題となってきます。仕事を続けるか起業するか、いずれにしても新しいスキルを身につけて、自分を高める努力は必要かと思います。ただ漠然とではなく明確なビジョンをもって努力した方が能率が上がるし、多くの人に共感してもらえるのではないのでしょうか。また、2～3年の猶予期間を意図的につくることで自分をじっくり見つめ直すために有意義な時間になるのではないかと思います。自分で出した結論に後悔だけはしたくないものです。」

こうしたゆとりをもって、次の仕事に移るのが穏当だろう。だが、リストラにあった人などは、1)に近い形になるし、しがらみを断ち切りたいということで、大胆に1)の道を歩む人もいそうだ。無論危なっかしいのだが、それだけの行動力がある人なら、自分なりの道を切り開く可能性もありそうだ。

いずれにしても、積極的に「攻めて」いく気持ちをもつことが肝心だろう。消極的に「いやいや」そうしたというのでは、「あとにひく」ことになってしまう。

7. 事例3 会社勤め→保育士→学童クラブ開設を検討し始めたHさん クラブ開設の仲間になりそうなI,Jさん

事例3だ。

Hさんの職業生活は会社勤めから始まったが、子ども好きなHさんは、会社を退職し、8年余りの会社勤めで貯めたお金で保育の専門学校を卒業する。そして、保育園勤めを12年して、現在42歳。迂回人生になったのは、高校時代に男性保育士のイメージがつかめなかったためだ。

保育士になってから、仕事も充実してきた。結婚して子どもは現在13歳、10歳、6歳だ。共稼ぎではあるが、経済的なゆとりはない。

保育士生活も充実しているが、自分なりに起業して活躍したいという欲が湧いてきた。そんな時、飲み仲間のIさんと、同じような希望を持っていることに気づきあう。38歳のIさんは、10年近く学童クラブ支援員をしてきた。Iさんは離別して現在独身である。

そして、Iさんの学童クラブの保護者であるJさん(45歳)も、二人の子どもが小学生になったので、新しい仕事を求めている。夫は仕事人間だし、夫や子どもに尽くすような人生はいやなので、自分も自分なりの生き方を探し始めたのだ。レジ打ち・経理事務・小売業といった仕事よりも、子どもや高齢者にかかわる仕事を中心に考えていた。

三人が語り合うことがあった。その際、学童クラブを立ち上げるのも、一つの方法だと考えるようになる。ただ、三人とも経済力があるわけではないし、学童開設と運営についての知恵や経験があるわけではない。

そこで、このことに詳しくそんな人に相談する。

8. 転職と起業を個人任せにしない支援を 事例Ⅰをめぐって

2019年01月27日

転職というと、否定的に語り、「せっかく得た職を捨てるとはこらえ性がない人」というように、当人を「責める」口ぶりが広く見られた。終身雇用制が相当に保障されていた1990年ごろまでのことだ。

しかし、今では、転職はごく当たり前に見られることだし、過労死を出すなどブラック企業といわれる事例が広く見られることを多くの人を知るようにになって、「転職叩き」は減ってきた。といっても、転職を支援する動きが広がってきたとはいえないようだ。

転職の一つに起業があるが、起業も「危なっかしい」と受け止められ、否定的にとらえることが広く見られる。起業支援の動きもあるが、支援するというよりも、「〇〇の準備はぬかりないか」と慎重さを求めて点検する消極的な声の方が大きい。それは、自営業の困難さ・リスクを恐れるからだ。

転職や起業を否定的にとらえ、消極的支援に力点をかけるよりも、人生創造に積極的に挑戦するものとして支援する動きが広がらないかと思う。そのためには起業を当事者個人の問題であるというとならえ方を超える必要がある。社会を維持発展するためには、起業を社会的な動きにしていく必要がある。大量生産大量消費の1980年代までは、大企業体制の確立のために、中小企業を圧縮する力学がすすんだ。だが、多品種少量生産の時代、あるいはサービス業務とか福祉業務の比率が高まる時代、むしろ手作り型の中小企業ないしは自営業の役割が高まっている。そうした業務を起業しようとする個人に過剰依存して、失敗のリスクを個人に負わせて、社会が責任をとらないですむ時代ではない。

こうして考えると、地域おこしという社会的課題と人生おこしという個人的課題とを結びつけて考えていくことが重要になる。そんなことを考えて『沖縄おこし 人生おこしの教育』（2011年アクアコーラル企画）を書いたのだ。これまでの学校教育は、こうした課題には冷淡であった。生徒にもっぱら大企業社員や公務員就職を目標にするストレーターコースを歩むことを求める詰込み型の教育を軸に追求し、転職や起業のための教育、そして開発創造型の教育などとは縁遠かったのだ。

その点では、幼稚園から起業家教育を始め、学力だけでなく経済競争力も、世界的にトップクラスを歩み続けるフィンランドに注目したい。転職起業のための休職退職長期休暇がとれて、その間の手当が国や保険などから支給され、さらに無料であることが多い社会人教育が盛んという体制が整う。起業支援は、日本でみるものと桁違いに整っているのだ。詳しくは、2010～11年に行ったフィンランドの教育省・経営者団体・労働組合・起業支援機関などへのインタビュー報告を参照してほしい。本HP所収浅野誠『フィンランドの教育と仕事2009～2012』

9. 事例3 学童クラブ開設を検討する三人へのアドバイス

1月20日掲載の事例3について、ご意見をいただき、ありがとうございました。

お一人のアドバイスは、起業に必要な「ビジョン・専門性・資金力・マネジメント」について述べつつ、それをめぐる三人の温度差に留意して、取り組みを段階的に展開していったらどうか、といったものです。貴重なアドバイスですね。「気持ち」が先行しがちな3人に、準備にあたって段取りを踏んで着実に進めていくことの重要性を説くものです。

学童クラブをめぐる状況は大きく変化してきています。また、地域による違いは大きいようです。とくに沖縄県内と県外の違いは大きいようです。個人のボランティア精神で作り上げてきた面が大きい沖縄の過去の経験は、巨大な宝物です。しかし、沖縄に限らず制度的整備が進んできた今日では、以前の経験だけでは通用しない面が増えてきています。

その点では、個々の事情に応じたアドバイスが重要になります。ですから、「直に会って相談する」というお一人のコメントは、その通りだと思います。しかし、事例のような三人が具体的にいるわけではなく、私の作文でできたものなので、「直接会う」ことはできません。でも、そうしたことを考えている人は結構潜在していると思いますので、その機会があれば是非お願いします。

「流れに沿っていけばなんとかなる」というありようがどんどん小さくなり、創造的な生き方が求められる時代です。学童クラブの創設運営における創造性の比重はかなり高く、「流れに沿っていけばなんとかなる」ものでもありません。近年、その学童クラブづくりの経験がどんどん蓄積しているようで、そうした経験をお持ちの方々の積極的応援が重要になります。特に学童クラブのような共同福祉施設づくりは、個人の尽力だけでなく、仲間を集め、行政のサポートを引き出しつつ進めることが必要です。そのうえで、沖縄県学童センターのような経験と知恵を集積している組織の応援がとても有効です。

10. 人生後半期創造に困難を抱える人へのサポートが期待される

ここまで書いてきた人生後半期の人生創造物語の三例は、人生後半期へと移行していく年代にあるが、それまでの生き方になんらかの変更が必要だと感じ、挑戦しはじめた点に共通点がある。その挑戦の背景には、それまでとは異なるより良き生き方への希望があるのだ。

だが、それが希望というよりは、それまでの生き方では生きていけなくなる事情の出現でやむを得ず挑戦し始める場合も多いのだ。病、介護、障害、リストラといった事例だ。「最低生活」を保障するための年収100万円前後の確保さえ難しいとか、子どもの教育費が捻出できないといった事情が伴うことも多い。そして、離別死別、災害などで、それまでのつながりが喪われて困惑する事例も多い。

また、三つの例は、仕事を軸にして書いたものだが、仕事だけでなく、衣食住・健康・教育といった多様な面での確保がまずもって求められることが多い。それらには個人の努力工夫だけではなんともし難い例が多い。そこで、多様なつながりを築きだし、そして制度的な保障を活用することが必要なこともある。だから、人生後半期の生き方創造は、個人の努力工夫だけでなく、つながりと制度的保障が前提条件として必要である。その際、そうした前提条件を築き出すための、当人ないしは周囲の、さらには制度の営みが築かれる必要がある。そうしたものの量と質がその社会の豊かさの指標ともなろう。

人生後半期の生き方は当人の問題と言い切ってしまうのではなく、当人の前向きな営みを築き出すような、周囲のつながりと制度的保障の構築がもとめられるのが現代社会といえよう。

こうした問題を、学校教育の場でも準備できるようなありようが求められる。これまでの学校の主流だった「ルールに乗りなさい」というだけでは済まない。ルールに乗れない、ルールから外れる、異なるルールを求める、ルールとは異なるものを当人が作り出すといった多様なアプローチを可能にするような学校教育の豊かなふくらみが必要なのではないだろうか。

ある知人は、40代から50代にかけて途中失明するなかで、それまでの仕事ができなくなり、盲学校の専攻科で理学療法を学び、マッサージを開業した。人生半ばごろ、ないしはそれ以降の人々にもそうしたサポー

トがより多様に用意されることが必要な時代だ。

高齢化社会には、そういうつながりを豊富にする多彩な動きに満ち、それをバックアップする強固な制度的保障が必要なのだ。だが、その動きが豊かになるのか乏しくなるのか、という綱引きがあちこちでみられるのが現状のようだ。

老年期に思うこと

2018年12月05日～2019年01月21日

7. つきあい

7) 「つきあい」についていうと、地域や社会でのつきあいと同時に、孫育てや介護など親族間での「つきあい」が多くなる。私の場合、孫が近くにはいないので、孫育ては少ないが、5) 家事が家族間の「つきあい」的性格を深めていく。それまで家事に携わることが少なかった男性の場合、家事が重要な位置を占めはじめる例が多い。

趣味サークルなども、60代70代の「つきあい」で重要な位置を占めているようだ。私の4) 卓球もそうした例だ。

「つきあい」については、男女差が著しいとよく指摘される。女性は50代までのつきあいを60代以降も継続させる例が多いのに対して、職業生活を中心に「つきあい」をもってきた男性には、退職後、その喪失ないしは変化が著しい例が多いからだろう。とはいえ、男女いずれにしても勤め人だった場合には、退職後生活で「つきあい」をどうしていくか、という課題が新たに登場する例が多いだろう。

そこで、「つきあい」を豊かにできるかどうか、その後の人生の豊かさに直結しがちだ。そこには、「つきあい」への意欲とともに力量が問題となる。そうした意欲と力量を高めるための「つきあい」に出会えるかどうか焦点となろう。高齢者施設での、「つきあい」をめぐる男女差がしばしば話題になるのは、そのことにかかわる。

8) 「楽しみ」についてほとんど触れなかったが、老いの生活の中では、大変重要な位置にある。暗いイメージになりがちな老いの生活を明るく楽しいものにしていきたいものだ。テレビに「子守り」ならぬ「老守り」をしてもらう事態から卒業するためには、これまで述べてきた「やりがい」「楽しみ」に満ちた「つきあい」が欠かせないだろう。

6. いきがい

4) 60歳以降には、50歳代までになかった「新しい」活動が登場することが多い。退職・転職・転居・時間的ゆとりなどに伴うものである。趣味活動などが典型的である。それを「第二の人生」と語る人が結構多い。私の場合には、表に掲げた五つの項目に代わる新しいものは、60代以降ない。50代の時に、3) 庭畑、4) 卓球が登場し、それが継続している。70代以降、何かが始まるかもしれないが。

これらを考える際に焦点を当てるのは、「いきがい」「つきあい」「楽しみ」だろう。「収入・実益」を追求しなくてはならない人も多いが、それにも「いきがい」「つきあい」「楽しみ」が強く付随していることが目立つ。

5) 80歳代以降について

80代以降になると、大きな変化がありそうであることを、耳にするようになってきた。60代までは、80代以降のことについて現実的関心になりにくいのが、70代に入ると視野に入り始める。

足腰・認知などの心配、不自由さが出てきた時の対処などの心配が始まる。と同時に、その時期はエリクソンたちが言う「9段階」に相当するが、そこでのキーワードは「絶望と嫌悪 対 統合：英知」ということだ（E.H.エリクソン,J.M.エリクソン『ライフサイクル、その完結』（2001年みすず書房）。前回触れたNHK本でも、その時期について、「超越」という言葉が登場してくる。

そこでの活動については、特に「いきがい」「つきあい」などに注目したい。しかし、このことは私には体験がないし、勉強不足でもある。そのうち書けるように準備したい。

6) 以上の年齢変化は、その人のもつアイデンティティ意識の変化としてもあらわれそうだ。50代まで仕事や人間関係のなかで築いてきたアイデンティティが、仕事や人間関係が変化する中で、これまた変化が求められ始める。とくにアイデンティティ意識に自己肯定感が伴わない場合、「いきがい」の弱さとして現れる。私の場合、仕事の性格をもつ1) 2) では、「いきがい」「つきあい」が大きな比重を占め、私の自己肯定感を強く支えている。

私の場合は3) 4) の趣味的生活では「いきがい」「つきあい」の比重は高くないが、趣味的生活でそれらが高い人が60代後半以降多くなる。「現役時代」には気晴らし的なものや「楽しみ」的なものに満ちていた趣味的生活に加えて、「いきがい」「つきあい」的な性格に溢れるものになってくるのだろう。

5. 仕事 収入・実益 健康

老年期の諸活動の意味の年齢とともにあらわれる変化にかかわって、前回の4に書いた私を例にした表についてコメントしよう。

1) まず、これは私についての表だから、大変特殊なものだ。実に多様な生き方・生活があるはずだから、表も実に多様なものになるだろう。

こんな表を各個人でつくってみてはどうだろうか

2) 勤め人だった人にとって大きな変化が表れるのは、「退職」の前後だ。私の場合、専任の仕事を退職したのは56歳だから、表にはしなかった50歳と60歳の間で、大きな違いがある。多くの人は、60歳と70歳の間で大きな違いがあるだろう。

その大きな違いは、何よりも「収入・実益」のところだろう。退職しても、再雇用・転職・起業・年金受給などいろいろとあるが、いずれにしても、大幅な収入減になるから、「収入・実益」の比率は大きく減少するだろう。私の場合も、1) 授業・ワークショップ・諸委員会活動での「収入・実益」では、退職した56歳の前後では、額面にして十分の一程度になり、比率も大きく下げた。そして年をとればとるほど減っていく。

私の場合、収入を得てきた主なものは1) と少しだけの2) だが、それらでの「収入・実益」が減少しても「いきがい」は減少せず、維持してきている。そして、その1) 2) を自営業的に進めている現実がある。自営業の人は、勤め人の人と、様子が大きく異なるようだ。最近読んだNHKスペシャル取材班『人生100年の習慣』講談社2018年によると、「取材したセンテナリアンの多くは、自営業など自分の裁量や判断で仕事をしてきたひとたち」p183だという。センテナリアンとは、百歳以上の人のことだ。

勤め人だった人にとっては、「収入・実益」を維持するのが難しくても、自営業的な「いきがい」の比率を

維持上昇させることが、退職後生活を長寿にするための鍵になりそうだ。

3) 2番目の「健康」についても個人差が大きいですが、ほとんどの人にとって、なにがしかの不安を抱えるようになるこの時期に大きな変化をもつだろう。

私の場合、53, 54歳の時にボトム状態になり、50代後半から60代半ばまで健康回復が最大の課題となったが、50代にそうした事態を迎える人は多い。60代以降の計画も、健康状況に左右されることが多い。更年期が女性だけでなく、男性でもいわれるようになったが、それだけでなく、40代以前の無理の蓄積が50代で爆発する人も目立つ。仕事の質・量における大きさに反比例するかのように健康不安が登場することが多い。とくに、そのことが、精神的ダメージを伴うと、事態は複雑になる。

だからこそ、健康への関心を急激に高める人が多いのも50代だ。そして、60代に入って、時間的精神的ゆとりができて、健康回復の取り組みをする人が激増する。私が通う卓球の練習や試合で、40代50代に比べて、60代の人数が多いのは、その例だろう。

こうした健康のありようを伴う生活変化が、表を大きく変える。私の場合、健康にかかわるのは3) 庭畑、4) 卓球だ。それらは、仕事というべき1) 2) とは対照的な比率構成になっている。

4. 老年期の諸活動（仕事・趣味・家事）の意味は、年齢とともに変化する

老年期に行う諸活動には、「現役」時代同様、仕事・趣味・家事など多様だが、各活動の意味における比重変化が注目される。意味における比重には、収入・実益、健康、いきがい、つきあい、楽しみなどがある。

これらを活動種類別に、そして年代別に考えてみよう。これは私の場合だが、仕事として1) 授業・ワークショップ・諸委員会活動、2) 原稿書きの二つ、趣味として3) 庭畑、4) 卓球の二つ、そして5) 家事の5例で考えてみよう。年齢は、60歳ごろ、70歳ごろ、80歳ごろだが、60歳70歳は経験したこと、80歳は先のことで、ないかもしれないが、推理してみた。表のタテの列を合計すると10になるようにしてある

1) 授業・ワークショップ・諸委員会活動

年齢	60歳ごろ	70歳ごろ	80歳ごろ
収入・実益	3	2	1
健康	0	0	0
いきがい	4	4	4
つきあい	2	2	2
楽しみ	1	2	3

2) 原稿書き

年齢	60歳ごろ	70歳ごろ	80歳ごろ
収入・実益	1	0	0
健康	0	0	0
いきがい	6	6	6
つきあい	2	2	2

楽しみ	1	2	2
-----	---	---	---

3) 庭畑

年齢	60歳ごろ	70歳ごろ	80歳ごろ
収入・実益	0	1	2
健康	6	5	4
いきがい	0	0	0
つきあい	1	1	1
楽しみ	3	3	3

4) 卓球（ウォーキングなどの運動）

年齢	60歳ごろ	70歳ごろ	80歳ごろ
収入・実益	0	0	0
健康	4	4	4
いきがい	0	0	0
つきあい	2	2	2
楽しみ	4	4	4

5) 家事

年齢	60歳ごろ	70歳ごろ	80歳ごろ
収入・実益	3	3	3
健康	1	1	1
いきがい	1	1	1
つきあい	2	2	2
楽しみ	3	3	3

これらの表から思うことについては次回書くことにしよう。

3. 自動車運転をやめる時

前回記事で述べたことを自動車運転を例にとりて考えてみよう。身体上の理由から物理的に自動車運転ができない例を除くと、たいていの場合、自らの判断で自動車運転を断念する時に至る。そこまでには過渡期がある。遠距離運転の場合は途中休憩をはさむ、遠距離・夜間・交通量が多い道での運転をやめるなどだ。

多くの場合、「まだ運転できる」という気持ちが強くて、やめる判断を妨げる。でも、免許更新・高齢者講習などの機会に、運転の可否判断のための情報を受け取り、「いずれ止めることになる」ことを受け入れていく。

もう一つの要因として、運転に代わるものがあるかどうかがある。公共交通機関の有無・便利さ、タクシー・

デマンドバスの有無・便利さ、送迎してくれる近親者の有無、配達サービス、往診の有無など。それらがあれば、運転をやめるハードルは高くない。

そうしたものを踏まえて、総合的に判断するのが現実だ。それにしても同じ条件であっても、できるだけ長く運転しようとするか、安全優先を考えて、早めに断念するかという違いがある。運転への好みの要素が含まれやすい。

そんな過渡期に入り始めた私は、いくつかのステップをおきながら、残り10年前後でやめようと考えている。

余談になるが、高齢者マークを車につけるかどうかで、判断に至る姿勢の違いが見えやすい。私などは喜んでつけている。ステップの一つとして、ゆっくり運転をしているので、周りの車が高齢者マークに気づいて、さっさと追い越したり、しばらく我慢したりしてくれることが多い。だから、私にとっては便利グッズなのだ。なかには、自分は若くてしっかりした運転ができるからということで、80歳代にはいっても、マークを付けない人もいます。義務ではないので、それでいいのだろう。

こういう話は自動車運転に限らない。旅をどうするか。外出をどうするか。卓球などのスポーツをどうするか。ウォーキングなら自宅周辺でできるが、卓球練習場へは、私の場合自動車で20分かかるし、試合となると、それ以上かかる。だから、どういうステップでやめていくかが問題になる。

さらに、歩行が難しくなると、杖・ノルディック・車いすの活用なども考えなくてはならない。似たこととして、目耳などの機能低下への対処がある。

このようにステップを踏んで、老化に伴う機能低下への対処を考える人はそれほど多くないかもしれない。むしろ、病気やケガなどのため選択の余地なく運転などができなくなってしまう人の方が多いかもしれない。

しかし、高齢化の進行のなかで「できなくなった時に、どう対処するか」を予め考えておくことが求められるようになってきている。アンチエイジングで「頑張る」よりも、機能低下を受け入れ対応策を考えるサクセスフルエイジングの方がベターではないだろうか。

2. アンチエイジングとサクセスフル・エイジング

前回、老年期に行くことをめぐって、現在と将来とにかかわらせて書いた。それは、たとえばこんな風になる。

仕事とはかかわりなしに出かける旅には、自分の将来のために役立つことを期待するという有用性はゼロに近いが、現在の生活の上では気分転換になるし、楽しみも多い。

研究していることを活字化することは、現在の私にとっては、自分の仕事のまとめであり、やりがいがあるので楽しみでもある。場合によっては、自分の研究人生の総括になることもある。将来的には、私個人よりも、関係する人々・組織にとって有用になる可能性がある。その評価は、私自身よりも、(後世の)関係者によってなされる。

これらの過程は、老年期になって新たに取り組むこともあるが、多くはそれまでの人生の延長線上での総括ないしは発展として営まれる。現在している南城市史の仕事などは、新たな仕事であるが、それまでの私の地域論・歴史論の延長線上でもある。

こうしたことは、エリクソン流にいうと、「英知(ウィズダム)」とかかわるが、私流にいうと、「熟」ということだ。エリクソンは、「英知」のほかに、老年期にかかわって「統合(インテグリティ)」という用語を使って次のように述べる。

老年期に生きる人々は、「統合、すなわち永続的な包括の感覚と、それに対して絶望、すなわち恐怖と望みがないという感覚との間の緊張のバランスをとろうとしている人たちだ。」 p 57

こう書くのは、世の中には、老年期にあっても「若さ」を誇り、「元気さ」を強調する人に出会い、私は思わずため息をついてしまうからだ。そういう人は、アンチエイジングが好きで、いろいろなトレーニングをし、化粧品や健康食品・サプリなどに夢中といった感じがする。そして、実年齢より若く見られることを自慢する。

そうした人たちは、もしかするとまだ「若い」ままで、「熟」していないのではないかと私は思ってしまう。心配なのは、「年相応」を拒否することに無理がありはしないか、ということだ。「年相応」を受け入れて、生きていくことは、サクセスフル・エイジングと呼ばれるようになってきている。

そのためには、英知を結集し、自分なりのものを統合し、自分なりに「熟」していくことだと、私は思う。

1. 限られた残りの時間 現在のため？ 将来のため？

70歳代に入った私は、何かをしている時、「これが残り少ない人生のなかで役立つのか」とふと思うことがある。「この本を読んでどうなるのか」「この器具を購入するとすれば、何回使うのか」「この衣服は死ぬまで着られるのか」などといった具合だ。私は、したいことがいろいろと多いから、そう思うのだろうか。

こんな風に思うこともある。出かけ先で「ここは、二度とくることがないだろうな」「パスポートを更新したけど、何回使うのかな」「またね、といったけど、この人に再会することがあるだろうか」「この論文は、もう一度書き直したいけど、その機会があるだろうか」

それらにかかわっては、残りの人生が5年か、10年か、20年か、それ以上のいずれか、ということが判断上重要になる。そしていろいろなことができるための健康状況はどうか。「寝たきりではないか。認知はないか」「自動車運転はいつまでできるか。」など不確定要素も多い。だが、それらの予測は困難だ。長年にわたって計画マニアだった私としては、大変困ることだ。

いずれにしても、今何かをしているわけだが、それらを無理に分けると、「将来のために、何かをする」「現在を充実させるために、何かをしている」ということになる。実際には、この二つが入り混じる。そしてまた、将来という時に、自分自身の将来なのか、自分以外のだれかの将来か、さらには地域・組織・社会・地球などの将来なのか、ということもある。現在のためにしている時でも、そういう違いがある。

こうした何かをしている自分への問いかけは、若いころからあったに違いない。しかし、老年期になると、「限られた残りの人生時間のなかで」という限定がつく。それは年を経るごとにリアリティを増してくる。さらに、限られた時間のなかで、現実でできるのか、という問いかけも年々増してくる。

さらにまた、周囲の関係者や組織とのかかわりでやっている場合は、私一人の判断では収まらない。

そうしたなかで「諦め」という言葉が現実性をますます帯びてくる。諦めるという言葉は、明らかにして判断するという意味だということ、よく聞く。だから、「したいこと」「できること」を明らかにして、選択することが求められる。エリクソン夫妻とキヴニッツが、共著書「老年期」(みすず書房1990年)で次のように書いている。

「過去六十年間守り続けてきた仕事のきっちりしたスケジュールから、これからは解放されたいと思っている人たちがいる。これらの人々は、少なくともある程度までは、未来を活動の時間として見ている。未来は、長い間楽しみの源だった活動をさらに楽しみ続ける時間になるかもしれない。」 p 68

このように思うのは、老年期に入ったばかりの主として60歳代の人だろう。それが一定期間たって70歳代に入るところから、上に述べてきたような気持ちが持ち上がってくる。そして「諦める」ということが現実的に求められるようになる。

そして、同じくエリクソンたちの共著が老年期の特質としてあげている「英知」について、「英知とは、おそらくかわりあいのからの撤退に本気でかかわること、であろう。」p50という記述が現実味を帯びてくる。

重要なことは、以上述べてきたことは、「元気」なうちの話だということだ。では「元気でなくなった」ときにどうするか、そのことへの準備も「元気」なうちにしておいたほうがいいに決まっている。

そういえば、「元気」の統計的な指標ともいえる健康寿命は、日本の男性の場合、70歳代はじめのころだ。私も、その年齢を超えた。老年期になると、こうしたことに日常的にぶつかり、いろいろと考える。それが老年期の特質なのだろう。それを首尾よく行うことが、エリクソンたちのいう「英知」ということだろう。

連載新々人生

2018年08月16日～10月21日

10. エリートの人生と大衆の人生の二分化状況の変化

連載最後に、歴史を振り返ると、エリートと大衆とでは、全く異なる人生構図であった時代が長い。近世における士農工商の身分差にもとづく人生構図の違いはよく知られている。身分差が建前としては消滅したはずの明治以降にあっても、大きな差異が見られた。戦前の旧制中学高校から大学・専門学校への道をたどる少数のエリートたちは、エリートに必要なものを獲得するような教育をうけてきた。エリートには創造人生が要求されるから、自由な気風をもつ教育が必要といわれたのがその一例だろう。そうでない大衆は、支配に従順になるような教育を受けてきた。

戦後は、そういうありよう、つまり二分化が一掃されるタテマエになった。誰でも希望するならエリートコースの教育を受け、エリートになることができるということになった。しかし、実質的に二分化状況が残っているし、近年では格差拡大のなかで、むしろ強化されているのではないか、との声さえ聞こえる。二分化の一つの目安とされている大学進学をみると、学費増大、それを緩和するものとしてある奨学金のほとんどが給与ではなく貸与となり、実質的な教育借金となり、成人してからの負担となっている。

そうした問題の他に、近年では、エリート中学高校が、受験専門校化し、創造的な学びや体験が減少し、受験に合わせた学習となり、生徒たちが「指示待ち人間」化しているのではないか、という疑いが広がっている。自由闊達で創造的な体験と姿勢は、受験校でないところで育まれる例が多くなっているかもしれない。受験校出身者は、就職してからもシステムに合わせる業務は得意でも創造的な業務を苦手とし、また困難にぶつかった時に「折れやすい」という指摘もでてこよう。

これまでの日本におけるエリート養成のありようの根幹が問われる事態が広がっているのだ。実際、産業界政界行政界社会諸分野において、旧来の学歴基準のエリートでは対応できない事態が広がっている。

OECDなどの先進国動向における変容に対応すべく行われている動向への対応における揺れの激しさは、そうしたことを示しているのではなかろうか。大学センターテストへの対応を巡る混迷とさえ言えそうな事態は、それを象徴しているといえるかもしれない。

そうしたなかで、大衆の中でエリートを育てる新たな模索が広がっているような気がしないでもない。

9. 感性を育む 現在も未来も 仕事と遊び

前回の続き

4) 感性へのアプローチ

感性は多様な感性との出会いと協同のなかで展開し成長していく。だから多様な感性に出会い協同する事が感性の成長に不可欠だ。

または、感性は自ら動き、多様な感性と出会い協同するという行動性と結合している。また、感性表現は行動的なものである。たとえば、自然・人間・課題との関係のなかで、「ドキドキ」「ワクワク」「ゾクゾク」「鳥肌が立つ」といったことが起きる。対照的に「静けさを味わう」「自然の音・空気の流れを感じる」ことも潜在化した形での行動性と結びついた感性表現である。

こうした感性行動性は、さらに知性をも動かし豊かにしていく。

5) 現在も未来も楽しみ、幸せになる生き方

こうしたとらえ方は、現在の生活においても未来の生活においても充実し、楽しみにあふれた生き方を求めるものだ。かつて、「欲しがりません。勝つまでは」といって、現在の生活を極度に制限する考え方が広く行われた。その考え方は、戦後においても、「未来の幸せのために、現在を犠牲にしてまでも頑張る」という形で根強く残っている。将来の幸せのために睡眠時間を削っても受験学習を頑張るなどもそうだろう。

逆に、現在を楽しめればいいといっ、未来つまりは次の世代に負担をかけることを気にしない発想も存在する。これと似た面を持っているが、格差の広がりの中で、「下」の層の貧困・犠牲のうえに、富裕層のむさぼり・贅沢・飽食が広がっている。

こうしたものには、身体性感性の偏りや貧弱さが見られるのではなかろうか。富裕層が贅沢な消費をすることがトリクルダウン（滴り落ちる）で貧困層も豊かになるという発言などは、身体性感性だけでなく知性が歪み貧困化しているというべきだろう。同じことは、途上地域に対する先進地域の人々についても言いうることだろう。貧しいのは、当人たちの責任だという発想は、事実を見る力を欠いた知性だといえるかもしれない。

6) 仕事と遊び

仕事は苦しみで遊びは楽しみという二分論が広く見られる。そうではなく、「やりがい」という視点を含めて、仕事と遊びをとらえ、仕事と遊び、さらには「必要」と「遊び」の二極論を超える必要があるのではなかろうか。「必要なことを遊びながらやる仕事」というように、両者を一体化してとらえるのだ。二分論というと、「既存の枠に沿って指示命令で行う仕事・遊び」と、「既存の枠を組み替える、または新たな枠をつくることを自主的に行う仕事・遊び」というとらえ方があってよいのではなかろうか。

8. 知性・身体性の新たなとらえ方

ここまで知識技術を中心に述べてきたが、今日では多様な人々や多様な世界とつながりあう行動性・感性が求められる。大量生産大量消費の産業主義的な世界では、効率性を追求して知識技術万能的なものになりがちで、人さえも物として扱い、人間関係を縮小して孤立するような傾向さえ高まる。それに対して多様な人となつながら行動性感性への渴望が広がる。物のようにマニュアル化され固定化された行動性感性ではなく、つながりを豊かにするものへと転換していこうとする。知性にしても、机上のものにとどめず、行動的知性と対人的感性とに豊かに結びついたものへと展開していく。

それらは、知性、行動性、感性の再編結合への新たな挑戦となり、たとえば次のようなことが課題として登場してくる。6点にわたって、次回も含めて書いていこう。

1) 行動的知性・身体知性への注目

知性については、科学に裏付けされた冷徹なもので、いわば固体金属に近いイメージを持つ人が多い。ここでは身体性・感性は邪魔物扱いされかねない。しかし、改めて問い直してみる必要はないだろうか。

たとえば、「冷静に対処する」ことは、知性ないしは理性によるコントロールのイメージがつきまといやすい。では、行動性・感性によるコントロールはないのだろうか。

2) 知性は、大脳にあるというイメージが強いが、全身の至る所に存在し、つながりあっているというとらえ方はいかがだろうか。また、バランス、つながり、関係として存在しているというとらえ方はいかがだろうか。知性は、机上で鍛えられるというよりも、討論・関係性のなかで鍛えられ育まれるととらえたらどうなるだろうか。それは多様な人・モノ・こととの出会い協同のなかで作られる知性ととらえることでもある。また、個人所有・個人創造物としての知性というよりも、共同所有・共同創造としての知性というとらえ方につながっていく。

3) 医療というと、体のなかの特定箇所に原因をつきとめ治療する、あるいは体力向上というと、筋力など身体の特長部分の強化がイメージされるように、身体を解剖によって得られる諸器官諸組織の集合としてとらえることが広く見られる。そうではなく、身体を多様な部分を超えてつながりあい統合されるものととらえることが必要なのではないだろうか。そして、さらには他者や自然との関係のなかで身体をとらえてみてはどうだろうか。

そういうとらえ方をすると、個々の部分を治療しトレーニングするというよりも、身体としてのつながりやバランスを重視する取り組みになる。さらに対自然関係、對他者関係でのつながりを広め深めるという視点で身体性をとらえることになっていく。そんな視点で、医療、健康、衣食住をとらえてみてはどうだろうか。

私がここで書くまでもなく、そうした角度からの取り組みが広く行われているのであるが、それらが広く受け入れられているとはいいがたい所があるから、改めて私がここに書く意味はあるだろう。

7. 激動の今日においては、創造の姿勢が不可欠となっている

現代社会は激動の時代であり、10年たてば習得した知識技術が陳腐になり、いやおうなしに開発創造的な生き方が求められてきている。

前回冒頭に書いた2「相手の自己創造への関与・サポート」の力量は、かつてはエリートに求められたものであったという事情に変動が起きている。戦前、大学では2が中心に、小学校では1「相手を枠に入れ込み、枠のなかを進ませる」が中心になり、中学はその中間といわれた。しかし、戦後の学校ではいずれの学校でも当初は2がかなり重視されたが、その後、「ツメコミ」教育といわれるような1が中心になり、1の「行き過ぎ」のなかで、2が強調されることはあったが、激動の今では、どんな人々にも2が求められることが増えてきている。

たとえば、一生に従事する職業は一つというのではなく、複数回であることが一般化しており、またたとえ同一の職業に長く従事したとしても、職業のありようは激変し、新しい知識技術の獲得が求められることが増えている。

だから、1にもとづいて習得した知識技能も早晩古くなり、新たな習得が求められるどころか、自分なりの創造的なものの獲得が必要となる。それは1の力量と2の力量の比重でいうと、2の力量へと移ってきているということだ。そしてそれはかつてのようにエリートだけに求められるのではなく、ごく普通の人にも求められる力量なのだ。

それは職業にかかわることだけでない。人間関係においても、血縁地縁にもとづくものの比重が低下し、血縁地縁がない多様な人々との出会いの中で築き上げていく比重が高まる。さらに人間関係形態も異なってくる。家族を例にあげていうと、三世代家族とか核家族はもはや一般的ではなく、多様な親密圏・家族の形を一人一人が追求創造していかななくてはならない。

1が設定する枠についてみても、固定的継続的なものというよりも、変更創造するものとしての枠となっている。

ところで、近年になって注目される研究視点として、「再帰」「自己遡及」といった学術用語がよく使われる。私が40年近く前に言い出した「自己展開サイクル」と共通するところがある。自分がしていることをたえずふりかえり分析し次の方針を作り実践していくというものだ。それは今述べてきたことでいうと、絶えず2の姿勢と能力が求められるということだ。

だがそれを孤立して行くと個人化が加速する。孤立的な個人化の中ですすめられる「再帰」は、結果的に古くなりつつある枠組み・システムに支配されることになりがちだ。それとは対照的に、こうしたことを人間関係を広め深めつつ、共同創造として展開することが重要だろう。

6. 既存の枠に従う生き方の有効性の低下

現代の子ども若者の人生には、学校教育が大きくかわる。その学校教育には、対照的な二つがある。

1. 相手を枠のなかに入れ込み、枠のなかを進ませる

軍隊や労働者養成としての訓練がわかりやすい例。既存の知識技能を伝達し訓練することもその類といえよう。

2. 相手の自己創造への関与・サポート

新しい世界を発見し、新しい技を獲得し、社会自然創造の中で自己を創造していくことへの関与・サポート。そのことで、新たな職業を得、市民としての力を発揮し、自分なりの人生創造へと進む。

1と2とは分かちがたく結びついていることが多いが、それでもどちらかに力点を置いたり、両者を統合する際に、どちらかを中心軸に据えたりすることが多い。

そうしてみると、日本の学校教育では、2よりも1が圧倒的に強力な状況が続いてきた。

このほかに、若者子どもの生き方や教育ともつながる「対」になった表現が次のようにいくつもあり、掘り下げて考えるうえでヒントになりそうだ。

上る	下る
進む	広がる 深まる 潜る
走る	歩く 止まる 留まる ふんばる
作る	なる できあがる 味わう
直線 まっすぐ	曲線 ふらふらと ぶらぶらと

一点集中	多様拡散
垂直	水平

今日に至るまでの百年以上の営みにおいての支配的な考え方は、対の中の左側の表現を軸にしてきた。右側のものは例外的なもので否定されるものとさえみなされてきた。

だが、左側のものに疑いを持ち、右側のありようを模索する動きも長く存在してきた。また、左側のものを、産業主義的とか大量生産大量消費とかもので20世紀末には役割を終えつつあるととらえ、右側からの左側への問いかけも広く行われるようになってきた。また、産業自体が右側に親和的な開発創造型へと移行してきており、左側への絶対的信仰をやめ、右側につながるものからの新たな創造が進められてきている。

ということで、既存の枠に従う生き方の有効性が低下してきているといえよう。

5. 発達に代わる用語があるだろうか

ここまで当人自身が中心になってすすめる人生創造について述べてきたが、その視点からすれば、子どもから若者・成人への時間経過のなかで表れる変化をどのように表現すればよいのだろうか。これまでのように「発達」という用語を使って述べるとなると、少々躊躇する。

というのは、発達には、既存の枠・ルールを登っていくイメージが付きまとっているからだ。〇〇歳では～～ができるかどうかが発達診断の重要な指標になる、というのもその例だろう。なお、発達には内在する可能性を開花させるというイメージが強い。英語のディベロップメントにはその意味が含まれている。そこで、その可能性が予め存在しているものなのか、それとも可能性そのものも新たにつくるものなのか、という問いが成立する。

と同時に、発達イメージには、時代特性社会特性が投影する。たとえば、義務教育制度の一般化は、該当年齢期の発達構図をそれ以前のものとは大きく異なるものにした。児童労働が広く存在した時代と、そうでない時代とでは大きな違いがある。

また、同じ時代でも、子ども若者が置かれた社会的位置によっても、発達構図に大きな差異がある。たとえば士族と百姓との違いは大きい。貧富による格差が広がりつつある今日では、進学就職をめぐる差異も目立ってきている。

このように考えると、発達とか発達構図とかは、私がこれまで述べてきた人生を自ら創造するというものとは距離を感じてしまうのだ。既存の枠の中を進むことと当人が創造することとの間には大きな開きがあり、対立的でさえある。無論、発達用語で語れる部分もある。それでも当人自身による、より充実した自分を創造することにふさわしい用語を求めたい。

ここでは創造と書いたが、時に「つくりかえ」とか「脱皮」とかがふさわしいこともある。既存の自分を新たに作る決意・決断から始まって、新しいステージを模索創造しながら、新しい営みを展開する。それには成否があり、成功すれば新たなステージで安定するし、失敗すれば、断念してさらに異なるステージへの再挑戦を行うだろうし、既存のものに戻ることもあろう。

創造といっても、自分自身の営みだけではどうにもならない周囲の諸事態の変化が深くかかわる。戦争などの社会情勢が典型的だ。また家業とか家族構成とかがかかわるし、またどのような出会いがあるかも、社会情勢に左右されやすい。

こう書いてきたが、発達に代わる用語をまだ見つけきれていないのが率直なところだ。

4. 子ども・若者の人生創造 人間関係形成 家族形成

人生創造というと、職業を中心に考えがちだが、実は多様な面がある。現代社会をになう市民形成、地域を担う住民形成、家族・親密圏をつくる人間形成、などといったことが不可欠だ。

子ども若者レベルでは、友達関係に代表される同世代関係を築くことは中心的課題の一つだ。そこで、遊びや学習などの諸活動を仲間・グループですすめ、共同で役割を担う体験は不可欠だ。しかも、それらの体験の多くは、大人から与えられたものをこなすよりも、子どもたち自身が相談し決断してすすめ、かつ創造的にやることの比重が高いのが特性だ。

それらは、ストレーターコースでの諸活動が、指示待ち人間的で競争的關係のなかで展開されるのとは対照的だ。

そうした体験の蓄積を踏まえて成人し、正式メンバーとして大人社会とのかかわりをもって、多様なつながりや組織を作っていくことになる。そうした体験をベースにして、社会的活動を進める一方で、身近で親密な関係を築くのだ。その中で、他者への信頼、自己への信頼を育てていく。

これらのことは、拙著『<生き方>を創る教育』(2005年大月書店刊)で、関係づくりや結社づくりとして述べたことだ。

家族形成について述べよう。家族は、かつては既存の三世代家族とか核家族とかいった標準形に沿う流れが主流だったが、その標準のタガが緩み、むしろ外れる方が多い時代だ。若者世代における単身世帯の多さが象徴的なものだ(高齢者世代もそうだ)。そこで、そのタガを復活させるのではなく、若者たち自身が、みずから家族の形をつくりだしていく条件と、若者たち自身の力量・意欲を高める必要がある。

家族の形に多様性があることを前提に、自分にふさわしい形を追求するようにしていく。その多様性にもいろいろな次元がある。その一つに、居住や生活にかかわるものがある。居住や生活を共にすることが家族の絶対的条件のように考えるかもしれないが、それにも流動変化が激しくみられる。たとえば、生産を家族や共同体単位でしていた時代では、家族成員はいつも一緒にいることが普通であった。ところが、外に勤めに出る人が現れ、学校に通う人が登場する中で、家族の形に大きな変化が生まれた。いまでは遠隔地への就学だけでなく、30代以上での単身赴任はよく見られる事態だ。

これまでの家族イメージは、衣食住・休養などの日常生活、愛・性・子育て、職業・学習などが混然一体として結合しているものだった。だがそこから、各々が分離していく。いきついたイメージとしては、ワンルームマンションの単身世帯である。そして、世帯当たり平均人数が2を割り込み、1にどんどん近づく状況がある。

若者の人生に焦点化すると、家族と学校との分離、就職と家族形成との分離、さらには、人間関係と家族との分離も進む。職場・学校・生活が家族と結合していたこれまでの状態が分解してきたのだ。

だが、分離分解の進行のなかで、反転が生じて、新たな結合の追求が始まる。

少子化のなかで、晩婚化非婚化が非難めいて語られるが、そこには旧来のタガに戻そうという発想に陥るものしばしば見かける。そうではなく、新たな結合の追求を促進するために、若者自身が創造的に家族作りを進める条件と意欲・力量形成が必要だ。

3. 子ども・若者の人生創造 職業

今回からは子ども・若者に焦点をあてよう。

基準や標準から距離をおいて、多様な協同のなかで、子ども・若者が自らの人生創造をどのようにすすめていくのか、まずは職業に焦点をあてて考える。いくつかのポイントを箇条書きで並べてみよう。

・大企業や公務員就職を当面の目標にして、就職以前の学校生活を設定していくのは、典型的なストレートコース(枠・レールを受動的に歩む)だ。それは、一流企業・一流大学高校といった基準・標準を設定している。

自営業は例外として扱われる。

・同世代との関係でいうと、序列競争によって限られた椅子を奪い合う関係であり、協同の関係は弱められる。テストの点数順にクラス編成がされ、教室の座席も点数順で決める例が象徴的な事態だ。

・高校選択・大学選択・就職先選択はテストの成績によって決まる。

「〇〇を学びたいから、それが学べる学部学科に入りたい」という生徒が、「あなたの成績だと、もっと偏差値上位の学部学科に行きなさい」と指示され、従う。「自宅に近くて通学に便利な〇〇高校に行きたい」というと、「校内の偏差値分布による配分の関係上、通学時間1時間だけど▽▽高校に行きなさい」と指示される。

こうしたことが、いまだに続く。点数・偏差値で、生徒本人ではなく学校側によって選択先が決められるのだ。こうした指示に従わなければ、必要な書類を用意してもらえないという学校さえあったが。今ではどうだろうか。

・こうしたありようのなかでは、子ども若者の進路は、マル秘事項にされ、もっぱら個人で考え決定することにされている。それに親や教師が関与するという形になる。子どもたちが相談し合い、協力して進路創造するという発想は乏しい。

・また、もっぱら自分自身のために進路選択をするということになりがちだ。そこに親の意向が入り込むこともある。親が、「公務員」のような硬い選択を勧めれば、子どもはそれに従うことはよく見られる。なかには、開業医のように家業を継ぐことを親が求め、それに数年間も挑戦する例を見かける。また、医師だけでなく他に資格取得に焦点化する例も多い。

その際に、景気動向・産業動向などの時代状況が投影してくることもある。なかには、仕事のやりがいとか社会貢献を考える例もあるが、それほど多くはない。

・起業を検討することが少ないのは、日本の特徴かもしれない。起業促進というと、実務型採算中心型になってしまう。また、共同で起業し、経営しつつ働く例も少ない。ストレートコースで生きてきたものにとっては、あまりにもハードルが高いのだろう。

・最初に就いた職業を一生継続することが暗黙の前提となり、転職することを視野に入れないことが多い。職業を中断して、生涯学習の機会を活用して転職するイメージを持っている例は稀だろう。

・この連載でも書いてきたように、いくつもの人生があるので、まずは第一回目の就職と考え、次の機会があることを前提に考える例も稀だろう。

・ストレートコースのように、学校卒業して直ちに就職するイメージが強く、卒業後しばらく海外体験など多様な模索をしてから、就職活動をするというイメージを持つ人も稀だ。

2. 上下支配秩序から対等平等秩序に対応する人生へ

前回述べたように、上下秩序のもとでは、上から下への支配・指示命令が基本になる。むきだしの支配・指示命令だけでは、うまくいかないで、上が推進する基準・標準が定められて、それに沿って下が動くあり方が日常的になる。受験やテストを軸に動く学校では、生徒が受験・テストに合わせて動く形になる。学校から職場へという就職の流れにおける就活もそうした標準的な流れのなかに置かれる。就職する側の個々人や採用する側が、自分達流のやり方をするというのは、日本では例外的なものになっている。

しかし、支配や指示命令だけ、そしてそれに対する「下」側の従順な対応だけでは、なかなかうまくいかない。そこで、「下」側が標準に従うことで恩恵を受けるありようが作られる。恩恵を受けるというと、対等な取引関係のようになるが、むしろ、進んで支配・指示命令を受容促進する考え方を持とうとする。近年しきりに言われる「自己責任」も、実は標準に従うことが前提になり、標準に従わなければ恩恵が与えられず、そこで生じる不利益には「自己責任で対応しなさい」ということになる。

こうしたところでは、人間関係が上下秩序的な性格を強く帯び、上下秩序を強調するイデオロギーが大いに活用される。封建秩序とか、戦前の修身とかはその典型だろう。そのなかで、平等対等をタテマエとする、たとえば夫婦関係においても夫と妻の間に上下秩序の要素がみられる事例がいまなお強いのが、日本での実情だろう。

民主主義は、上下秩序とは対照的な対等平等を原理として組み立てられているが、それが骨抜きにされたり、歪められたりする事例は、日常的にといいほど目にする。

序列が上でないものは、自分より下に位置するものを支配し指示命令する。戦前では、内地人—沖縄人—台湾人—朝鮮人という序列が作られるなかで、より下に位置する人を支配差別する例が続出する。戦前の沖縄では、「一生懸命日本人になろうとしている自分たちは、台湾人、朝鮮人とは違う」という発言が生まれてきた。今日におけるいじめの構造には、こうしたものが反映している例がかなり見られる

こうしたなかでは、上下関係において人間関係が支配差別関係にいろどられ、連携協力する関係が弱まる。こうした秩序のなかで生きていた人が、定年などで組織から離れて、上下関係が弱く対等関係が強い近隣の人間関係に入ることが多いが、そこでの関係づくりがうまくいかず、孤立孤独になる事例が多い。高齢者の集まりで、過去の栄光をひきずる付き合いをして、周りから見放されることも多い。

小さい時から、対等原理にもとづく人とのつながりを育んでいきたい。

競争原理が理解できない幼児が、「かけっこ」をするとき、先になった子どもが後からくる子どもを待つという例は、たんにほほえましいで終わらせる必要はない。むしろそうした姿勢こそ尊重したいものだ。

1. 支配・序列・競争・人間の所有物化のなかでの人生

12月から、そして4月末からと人生創造をめぐる2回の連載をしてきた。これから三度目の連載をスタートする。今回は、従来の人生構図、とくにその標準とみなされてきたものにある問題性に気づき、新たな構図をつくりあげていくうえで考えられるものについて書いていこう。アットランダムに項目をたてて書いていくので、項目間のつながりや系統性が薄いものになりそうだ。

最初は「支配・序列・競争・人間の所有物化のなかでの人生」についてだ。

要するに、上下秩序が強いところでの話だ。典型的には軍隊がそうだ。序列といってもよいが、それ以上のもの、つまり階級制度が徹底しており、「上官の命令には絶対服従」が原理となる。軍隊によるバリエーションはあるが、下のものが上に意見を言う・異議申し立てすることは厳しく制限される。

そこでの人生は、上の指示命令への従順を原理にするものとなり、階級を上昇することが人生の一つの目標となる。上昇をめぐる競争が強化される秩序になっているわけだ。そして下のものは上のものの所有物化しがちだ。

そうした秩序は、軍隊に限らない。会社や学校においてさえ、そうした原理が強力に存在する事例が多い。法律よりも上司の命令が優先され、犯罪さえ起こす例も頻繁に起こる。受験競争が激しい学校では、成績上位者が下位者に対して、支配的位置に立つ事例もある。

社会によっては、年齢秩序が過剰に強力である場合がある。

ルールの前では平等であるはずのスポーツにおいてさえ、そうした例が頻繁にみられる。ブラック部活につきまとう構造である。

社会全体がそうした雰囲気に含まれるとき、親しい関係においても、そうした事例が普通になる。夫婦・親子関係も上下関係にいろどられる。戦前の家父長制は、それを社会制度として推進してきたが、制度的になくなったはずの戦後においても、それを継承する流れはいまだに強い。「愛情」という形で、親が子どもも支配する例は、日常的に見られる。「愛をもってさえいけば許される」という感覚もみられる。教育熱心だと思われる人にも、そうした例が多い。

それらでは、上のものが下のものを自由に扱ってよい所有物、私物とさえみる感覚が存在している。児童虐待事例にはそうしたものがしばしば見られる。また、親の好みで子どもの衣服選択をすることにもその危険を含む。成人以後もそうだとしたら憂慮すべきことだ。子どもの結婚を親の指示命令で進めるのもそうだろう。

このような傾向が強いところでは、本人自身による人生創造というテーマが押さえつけられ、しぼんでしまう。当人にとっては、「指示待ち人間」化することが人生の知恵となり、人生を貫く姿勢となってしまうがちだ。時には、他人の存在自体に恐怖を感じ、「渡る世間は鬼ばかり」となってしまう、それが「人見知り」を促進する。

第二次人間関係

2018年07月07日～8月31日

11. 「自分に克つ・勝つ」といって頑張り、相手を見ない人

「自分に克つ・勝つ」と意気込む人に出会うことがある。うまくいかないのは、自分の弱い心に負けて、頑張りが足りないからだ、と考えるのはその例だ。

特に部活などのスポーツ、あるいは受験やテストなどにかかわる際、つまり、序列競争秩序の色濃いところで表れやすい。

その考えでは、おうおうにして他者との人間関係があることを軽視しがちだ。対戦する相手があるスポーツでいうと、相手との関係で上手くやれるかどうかで、勝負結果が決まるという点が見落とされる。

「自分流でいく」というのは、相手がどんなであろうとも、自分流を出せば勝てるという発想だ。相手が見

えないというか、厳密にいうと、相手との相互関係が見えないことが多い。

こうした発想は、若く未熟なころほど多いが、年を取っても結構見られる。

さらに勝負事には運不運が結構ある。私がやっている卓球を例にすると、ネットインとかエッジで得点して勝負が決まることは、かなりみられることだ。私などは、連続7つのエッジなどで勝ったことがあるし、ネットインで負けるなどは日常茶飯事だ。

そうした運不運を含めて、相手との関係を中心にした諸関係のなかで勝負を決することが普通だ。よほど実力差があるのに、想定外の敗北をした場合には、自分をうまくコントロールできないままでいて、「自分に負けた」といえなくもない時があるが、例外だ。

スポーツとは本来、相手と対等平等にプレーして勝負を競うことで楽しみを得ることにある。だから、「相手を打倒するとか、自分に克つというのは、スポーツ精神とは別次元だと思う。スポーツの醍醐味は、対戦相手との競技を通して人間関係を豊かにすることにあると思う。お互いに力を出し合って（時には、相手に実力を出させないで）、からみ合いつつ競技をすることにあると思う。

例えば、相手の弱みを見出して、そこを突くということ相互にし合うのも面白いことだ。そこには、身体的感性的なものだけでなく、知的なものがおおいに存在する。それらがからみあったところに「かけひき」が生まれる。

だから、自分との闘いに関心を集中させるのは、スポーツに未熟な人が口にするということといえよう。

残念ながら、マスコミを含めて多くの人が「自分に克つ・勝つ」と叫んでいることが、おおいに気になる。

10. 夫婦関係における対等平等の追求

前回述べた「お説教好き」の人との対し方のなかで、真正面から反論するのは力の対抗になり、意地の張り合いになってしまうことが多い。

夫婦関係でも、そうした構図が出ることもある。家父長が制度化されていた時代はともかく、今は夫婦対等の時代だが、片方が他方を抑え込み、お説教する構図がしばしば登場する。それに疲れて、表向きは屈服したことにして、内面では従わない、「馬鹿にする」関係というのもよく見かける。他の人にグチを言って気晴らしをする人もいる。

かつては、そんなことがあっても我慢する人が多く、「お説教」側が気づかないまま年を経ることが、結構あった。しかし、今では別居、離婚の選択をする例が増えている。相手がそうした行動に踏み切るきっかけに自分の振る舞いがあることに気づかない人は驚き、ショックを受けたり、怒りをなおも相手にぶつかけたりする。時には、「愛があるのなら、離婚などできないだろう」「世間体が悪い」といった問題にすり替える人もいる。あるいは、財産分割、養育者、養育費、慰謝料で事態を複雑にする例も多い。

また、「夫婦は一心一体でなくては」という考えにとらわれている人に、こうしたトラブルが起こりやすいかもしれない。その際、自分のやり方を相手に押しつけているのに気づかない人もいる。

こうした例が多いのは、対等平等に人間関係をつくったり、協働して仕事をすることに慣れず、タテ型で上意下達式関係しかイメージできなかつたりする人がまだまだ多いことであろう。

夫婦関係でいうと、対等平等に物事をすすめる経験がとても浅い状況にある。とくに婚姻以外で、異性との対等平等の人間関係をつくる経験の蓄積が浅い人が多すぎるといえよう。そのため、頭ではわかっている、体がそうは動かないというわけだ。さらにわかっているはずの頭もタテマエとしてわかっているだけで、気持

ちがそうはならないのだ。

対等平等の理念だけでなく、体験の蓄積が重要なのだ。その点では、地縁、血縁、そして学校での子どもの異性間での相互関係体験が重要な役割を果たす。生育した家族での家族内関係も大きな役割を果たす。

ふりかえると、対等平等の異性関係は、先進的な人でも戦後になってからが多く、核家族時代には広くみられると思われそうだが、性別役割分業で実際にはそうでもなかった。

夫婦共働きで、家事も平等分担する、ないしは協働するありようは、今日なおごく少数派なのだ。

それにしてもできる限り早く変わることを期待したい。無論、すっきりいかず、失敗を重ねつつ前進するしかないだろうが。

9. お説教好きな人との付き合い方

少々脱線して、付き合いにくい人との付き合い方について考える。その一つとして、お説教好きな人との付き合い方がある。その場にいると「嵐が過ぎ去るのを待つしかない」という雰囲気さえ出す人だ。やめさせようがないのだ。そういう人は権威主義的であることが多いので、その人より権威がある人がその場において「にらみ」をきかせるのは効果的だろう。だが、その人が同調許容してしまったら困ってしまう。

そういう人は、「こうすべきだ」と、自分の価値判断や結論を提示し、その通りにすることを相手に求める。「～べきだ」が口癖なのだ。その際、権威ある言葉やことわざを持ち出す人もいる。また、ちょっと異なるタイプとして世話好きな人がおり、世話される人を自分の枠内に囲い込もうとするタイプの人もある。

職業としては、教員・警察官・医師・政治家・地域職場の世話役などに多い。こうした人は、「皆のためにやっている」と思い込んでおり、説教していることで周りの人を困惑させていることに気づきにくい。

その説得の重大な問題点は、聞き手を自分の思うとおりにしようとして、聞き手の自主的な認識や判断の力量を高めないことにある。だから、説教者→聞き手の一方向的なものなのだ。聞き手は従うしかなくなる。そんな人は、聞き手の発言に耳を傾けるとか、聞き手から学ぶことができない。説教すればするほどやせ衰えていくのかもしれない。それを補うために、権威あるものからの情報をとることに集中し、聞き手から得ようとはしないのだ。

では、こうした人とどうつきあうか。

正論は、真正面から反論し異議を唱えることだろう。しかし、それはなかなか難しいから、「フツーの人」には勧められない。時には、食うか食われるかの妥協なき戦いになることさえある。そして、敗者は退場し、勝者は「お説教好き」を続けることになりがちだ。だから、「お説教好き」構図は変わらずに続いてしまう。

そこで、間接的に異議申し立てをするアプローチが登場する。その人が登場すると予想されるとき、「気分がすぐれないので」「別用ができたので」とかの口実をつけて、欠席・遅刻・早退するのがよく見られるものだ。その人を取り囲む人が少なくなれば「お説教」する余地が狭まる。「お説教好き」と「お説教され好き」とはペアなのだ。

もしできるなら、お説教の中にある盲点を見つけて、「それについてはどうなのですか」と尋ねてみる。多分、指摘することさえ「許さない」人なら、むきになって反論するだろう。その時は深追いしない方が得策かもしれない。その人が多少なりともまじめに対応しようとするなら、変わっていく「脈」があるかもしれない。

そんなことを繰り返しながら、多様な意見を尊重し合い、聞き合う構図を築いていき、相互に深め合い広め合う構図へと、時間をかけて持ち込んでいきたい。

8. 会での司会進行

会議における司会進行のありようも重要だ。会議には大きく分けて三つのタイプがある。一つは事務処理的あるいは確認的な会議。メールなどで処理できるものは、集まる必要がないので、減らす対象になりやすい。もう一つは、利害対立の調節機能を果たす会議。支配的攻撃的な発言におおわれるのを防ぐために果たすべき進行司会役の役割は大きい。そのために進行ルールを明確にすることは重要で、ルールをたてにして、そのような発言を慎ませたい。

もう一つは、参加者による共同創造を中心にするものだ。発言が積み重なっていき、討論内容に広がりや深み生まれ、生産的なものが生まれるように運ぶ。

最近の私は、3番目の会議で進行役をすることが多い。そこでは、どんどん発言が出てくるように、司会が前面に出ないようにして、発言の促進役をになうことを中心にする。そんな会議で、私は最初にこんな風に話すことが多い。

「挙手し指名されたら発言するという形はとりません。発言したいときは、司会に目配せして、すぐに発言してください。一つだけルールがあります。もし発言したい人が複数いたときには、遠慮がちな人を優先すること。」

ということで、司会が進行をいちいち取り仕切るようなことはしない。会議終盤に差し掛かっても未発言者がいるときには、「いろんな方のご意見を聞きたいのですが、今回、お声が聞こえないかたが三名ほどいらっしゃいますね」とつぶやく。すると、多くの場合、未発言者の発言が続く。

こんな感じだ。討論中味で、「こんな発言が欲しいな」という時には、私自ら発言することもある。こんな風にして、討論をスムーズに、かつ暖かい雰囲気に進むようにするのが、私流だ。

7. 会でのあいさつ

会議などで行われるあいさつは、会場の雰囲気大きく影響する。つまらない挨拶なら、聞いているふりをするだけで、実際は聞いていない参加者を増やす。会議の雰囲気を盛り上げるどころか、さめさせてしまう。雰囲気を盛り上げるよりは「盛り下げて」しまうのだ。それなら、ない方がましだということになる。時には、BGM効果?!があるからいいのだという説を聞くことさえある。

公的な会では、形式化している挨拶が続きやすい。卒業式や入学式では必需になっており、優れた挨拶にしても、子どもたちには理解できないものを結構見かける。子どもたちよりも来賓にむかって挨拶しているようなものもある。だれが話しても同じような内容であることが結構ある。さらにいうと、挨拶者自身の挨拶になっていない例が多すぎる。代読とか、文章を読む挨拶はその典型例だろう。文を読むだけではまずいと感じるのか、一部を自分自身の言葉で語る人もいるが。

なかには、自己に酔っているのか、訓示を垂れるといった調子の長話をする人も見かける。形式化した挨拶をする人には、「先輩がおられるので失礼になるかもしれませんが、私のようなものにあいさつせよとの主催者の命令なので」などと不要な前置きをし、さらに壇上では丁寧語を使うが、懇親会など一対一の場では、相手を見下した言い方をする人が結構いる。

これらには、その会を企画進行する人の力量や見識が問われる。しかし、長年にわたる慣行に従うのが無難だといって変えないままのことが多い。

そうしたところでは、一方向型コミュニケーションはあるが、双方向型コミュニケーションが不成立状態か、あるいは甚だしい非効率なものになっている。そこをなんとかしたい。私は、そうしたことに風穴をあけて変えていくことに楽しみにしていた時期が長く、40年以上になるだろうか。

私も年齢上の理由などで挨拶や乾杯の音頭をさせられることが増えたが、私流の挨拶の基本は短いことだ。普通の挨拶なら2～3分、乾杯の音頭なら30～40秒だ。私なりのものを一点だけに絞って、やわらかく語る。ほとんどがアドリブだ。メモはもたない。参加者の顔・眼をみながら、語り掛けるように話す。

6. 会議・集会・授業 会場配置

ここで、多人数が集まる会議・集会・授業などについて考えてみたい。

これらには大きく分けて二つのタイプがある。一つは、一人ないしは少数がいて、彼らが他の大多数に向けて情報を発するという、一方向的なコミュニケーションを主とするタイプだ。

もう一つは、参加者が、相互にないしは全体に向けて発する多方向コミュニケーションで動いていくものだ。それぞれにふさわしい会場配置がある。前者は、講演会場の多く、大規模教室などに見られる。前方中央に演壇・教壇があり、それに向かって一斉前向きに整然と机椅子が並べられる。この形式を「スクール形式」と呼ぶ人がいるが、おかしいと思う。「スクール」には多様な会場設定があるからだ。もっとも、日本には、こうした形式の教室が多いという体質が反映しているのかもしれない。

後者には、多様な配置がある。円形、四角形の机椅子配置が多いだろう。テレビなどで見る国際会議などでは円形をよく見る。全体をいくつかの小グループに分けて設定することも多い。多様な相互関係を作りやすいように配置するのだ。席を固定しないで、参加者が自由に移動できるような配置も多い。

後者は、参加者相互の多様な関係に開かれたものといえようが、前者は人数は多くても、中心の個人と参加者一人一人との一対一関係で、他の参加者との関わりが薄く、いわば閉じたものになっている。

こうした会場配置は、演劇・コンサートや、結婚披露宴などでもいえる。誰かのショーを見るという形と、参加者自身が表現し合う形との二つがあるのだ。

多方向型にしても、いろいろとある。円形配置にしてもそうだ。私は、30年ほど前に、全生研大会の文化活動ワークショップで、ひとつの試みをした。円形の会場配置をして、中央に演じる人たちがいて、見る人がそれを取り囲むというものは、よく出会う。それを逆にするとどうなるかという試みだ。中央に見る人がいて、それを丸く囲む形で演じるのだ。すると、内側にいる人も、演じたい気持ちを高め、内と外とが入り混じって、会場全体が演じる方向へと進むのだ。

結婚披露宴などはそうした会場配置の工夫がしやすい場だろう。とくに沖縄の披露宴はそういえよう。ということで、40年ほど前に、披露宴演出に燃えたことがあった。

一方向型授業・講演の問題性がいわれ、改善の掛け声を聞く。そのためには、このような工夫を伴う必要があるだろう。

5. 手書きからメールへ ボディランゲージ ワークショップ

文字を使ったコミュニケーションでも、手書きがすっかり消えかかっている。ほとんどがコンピュータやス

マホを介したメールに代わった。その一部をプリントアウトしたものを郵送などの形で渡すこともある。それらの変化は、言葉のありようをも変化させている。

書き言葉なので、論理的なものと思われがちだが、話し言葉調で、感性的色彩の強いものも多い。あるいは、対照的なビジネスライクな型通りの文になることも多い。

手紙の世界にダイレクトメール、通信販売が入りこんだのも同じような流れだろう。日々届く郵便物に占めるそうしたものの比率は年々高くなっている。手書きの手紙が届くなどは稀になっている。年賀状ぐらいという人もいよう。その年賀状も激減し、しかも手書きを含んだ手作りのものは減少してきている。

このように、話し言葉にしても書き言葉にしても、新たなツールの出現のなかで変容・分化・統合・再編が進んでいる。どういう場面でどういうツールを使って、どんな相手とコミュニケーションをとるかの組み合わせの差異が背景に存在している。たとえば、夫婦とか親子とかの親密な関係の中での感性豊かな言葉と、商品購入にかかわる言葉とでは大きな差異がある。

それは、言葉だけにかかわるものではない。言葉を交わす際の、位置関係、服装、匂い、身体接触、雰囲気などが深くかかわる。そして、言葉は、ボディランゲージを含むコミュニケーションという巨大な氷山の一角であるかもしれない。少々大げさかもしれないが。

たとえば、身体を開いているのか、閉じているのか、身体をどこに向けているのかによる大きな違いがある。言葉にしても、キーの高低、音量、語尾のありよう、言葉を投げかける方向などが大きく影響する。

私が対人関係を豊かにすることを目的にするワークショップをする際には、ボディランゲージを含む多様な活動を展開する。握手をした手を通して何かを伝える。ボディランゲージだけで、同じ表現をしている仲間を見つけ出す、などといった活動をする。多くの人は、そうしたものを実際には駆使してコミュニケーションをとっているが、それを意識することは稀だ。

こうしたワークショップは、40年前に出会った竹内敏晴レッスンが起点となり、私流に展開してきた。

そんなワークショップは参加者にたくさんの気づき・発見をかなり感動的に与える。そして参加者の相互関係を劇的に深める。だから、私はそんなワークショップが大好きだ。

4. SNS 書き言葉・話し言葉・画像

前回は触れたが、場をじかに共有するのではなく、手紙・メール・SNSなどで書き言葉や画像などを使うコミュニケーションについて考えよう。

まず不特定多数に向けて発信されるものと個人間のやりとりとの関係の問題がある。数十人を超す相手に同一情報を発信する際の SNS でよく使われる個人間会話調の発信について考えてみたい。一対一や数人の仲間うちでかわすようなカジュアルな会話調で行う SNS 書き込みには、時に過剰な表現で、読んでいていやな気持ちになることもある。と同時に、どなたかが、自分の言いたいことを代わりに言ってくれてありがたいときもある。

SNS は内々の世界でいるようで、意外に多くの人の眼に触れているものが多いことを考えると、内々とはいいきれない例が多い。広く外に向かって、内々感覚で発信しているのだ。広告宣伝を親近感をもって行うことも多い。商品宣伝の媒体として SNS が使われているのだ。以前はそうしたものとしてテレビがあった。今では SNS を含むインターネット経由のものが、テレビに肩を並べている。

それは元々書き言葉を手段としているものが、話し言葉調に変換しているともいえよう。この両者が、よそゆきの書き言葉、内々の親近感を示す話し言葉と分離しすぎていることを解消しようとしているともいえよう。

近年では、画像を多用するのが通常になっている事態が、書き言葉調を話し言葉調に変換させる一因になっているように思う。スマホによるものは、その傾向がきわだっているらしい。

こう書く私は、実はスマホを使っていない、というか持っていない。もっぱらパソコンを使っている。写真もデジカメでとったものをコンピューターに取り込んで、ブログに掲載している。スマホ使用者には、大変面倒なことしていると思われるかもしれない。そう考えると、私のように全くの書き言葉調の文章に写真を添えるようなやり方は骨とう品レベルかもしれない。

別の話題。電話にもインターネットにも、やりとりのなかで即断を求めることが多い。じっくり考えることなく、思わず会話の雰囲気や本音と異なる約束をしてしまうことさえある。勧誘電話や商品宣伝電話などは、そこを狙い目にして作戦をたてているようだ。「しばらく時間をください」という余地をあたえないのだ。「締め切り間近」「売り切れ間近」などという殺し文句を使う。

こうしたメディアの多彩化が、書き言葉・話し言葉・画像をめぐる境界線・各特性・関係構図を変形させてきている。そのなかで、私なりにどのようにメディアを使っていくのか試行錯誤だ。私だけでなく、多くの人々が試行錯誤しているようだ。

最近、私にとって無知に等しいAIの本を読んだ。AIはますます事態を多層化・複雑化させそうだ。私には理解できなさそうな世界だが、どうしたらいいだろうか。

3. 異次元世界としての電話

通話相手とかかわりのない人が周りにいても、周りの人にも聞き取れる声量で私的な電話会話をする人がいる。聞くに耐えないような会話であることもある。人が集まっている場で、電話会話をして、場をしらけさせる人もいる。

人々の中に、突然、異次元の個人的会話の世界がまさに傍若無人に侵入するからである。それは、集まりのなかでの私語とも事情が少し異なるから、周りへの迷惑の質も異なってくる。

ところで、相手の世界に突然入り込むのが電話の特性だ。電話のそうした特性を理解する必要がある。だから、「今よろしいでしょうか」というのは、当然のマナーだ。私は電話嫌いで、名刺にも電話番号を掲載しないが、電話ぎらいの理由の一つは、そうした突然の侵入があることによる。

そのマナーをわきまえない例がでてくるのは、相手の顔が見えないなど、身体上の直接関係がないので、無遠慮になりがちだからだろう。

また、電話には秘密性もある。第三者に邪魔されずに二人だけの世界に没入できる。恋人との会話がその例だろう。オレオレ詐欺は、その悪用例だ。「他の人には話すな」と釘を刺すのは秘密性を強調するものだ。

一対一会話では感性的傾向が強くなるにもかかわらず、電話の場合は音声中心の間接性をもつ会話であるということを改めて確認する必要がある。間接的会話で相手に理解してもらうために、論理性具体性を持つことが求められる。ということで、感性的なものや論理的なものが併存することが電話会話の特質だろう。

電話に代わって、携帯電話・スマホ・パソコンを使ったメールが新たなコミュニケーション手段として多用されるようになって、20年ほどになる。手紙と電話の双方の性格をもつものだが、なんといっても簡便なことが普及に拍車をかけた。だが、成立定着して間もないため、マナーがまだ熟していないようだ。

その一つとして、当事者以外の人とのかかわりの問題、つまり当事者同士の問題としてはすまないことも多い。その一つとして、当事者以外の第三者の存在を無視する傾向をも生み出す。電車のなかで、スマホをしている人ばかりの様子は、沢山の人がいながら、第三者の存在が無視されている典型といえるかもしれない。

そんな時、私は自分にはわからない言語を使う世界に入った時と同じような感覚を抱いてしまう。あるいは群衆の中に居てかえって孤独を感じるのと同じだろう。周りにたくさんの方がいながらも、孤独であるがために余計にメール相手の世界に閉じこもり、ますます閉鎖的になるのだろう。コミュニケーションによってつながりが拡大するのではなく、狭まるという皮肉な現象といえよう。

電話にしてもメールにしても、当事者間の問題に限定することで、当事者のなかでよりパワーを持つ側による相手への不当な統制が生まれることも多い。メールによるストーカー、いじめ、いやがらせなどが続出している。簡便なだけに、直接会話ではなく間接会話による権力的統制を生みやすいのだ。時にそれが匿名でおこなわれることさえあるので、厄介だ。

2. 電話での会話

人対人の直接的なものではなく、間接的なコミュニケーションの一例として電話について考えてみたい。それは、生身の相手との会話・コミュニケーションでないところに大きな特性がある。一対一の話し言葉中心の会話だが、その場に相手がいないのだ。それでも、間接的な手段の中では、かなり生身の会話に近い性格をもっている。

相手が未知の人か既知の人かを問わず、業務上の会話をする電話と、相互に知り合っている人同士の個人的な会話の場合では、様相が大きく異なる。前者は、話し言葉ではあるが、書き言葉調だ。商品勧誘電話のようにマニュアルにそった丁寧な表現が使われる。時には慇懃無礼を感じることもさへある。

そうしたものが行きつくところは、ロボットでの対応だ。郵便局の不在通知への対応はその例だ。〇〇なら一番を、▽▽なら二番を、その他なら三番を、という具合だ。私が初めてそうした電話に出会ったのは、1999年のトロント生活の時だ。英会話のできない私は、まずは相手が言っている意味をとらえかねた。ホテルの客室に電話するのもそうした対応なので、来客との通話を断念したこともあった。そんなドギマギ体験が尾を引いたのか、日本語の世界の今でも、うろたえることがしばしばだ。

こちらにとって必要のない営業電話がかかってくるのは、迷惑である。畑に居る時など、走って電話口に出て、そうした電話だと腹が立つ。だから、NTT発行の分厚い電話帳に電話番号の掲載をしていない。それでもかかってくることもある。その際は「どうして、この電話番号をお知りになったのですか」と対応する。最近では、相手もそうした対応に慣れているのか「機械的に電話番号をセットしています」と返答する。

そうした業務調の電話とは異なって、個人的な会話の電話だと様相が変わる。個人的な会話であっても、相手が確認できるまでは、丁寧語で話すのが普通だ。相手を確認した後、親しげな会話へと移る。だから、その切り替えがポイントになる。子どもは、その切り替えの習熟に苦労する。20代になっても、慣れない人もいる。なかには、中高年齢になっても慣れない人がいて、面食らうこともある。

また、通常は話し言葉なのに、相手を書き言葉調になって驚くこともある。その時は「改まって、どうした

のですか」と返してしまう。

さらにまた、電話での口調と直接対面する時の口調とをうまく区別できない人がある。あるいは豹変とばかりに変える人もいる。

こんな人もいる。受話器をとると、名前を名乗らずに「私だけ」という。こちらとしては、思い当たる人が複数いて、相手を確定させたいために「どちら様ですか」と尋ねると、再び「私だよ」という。こちらが、つかめずに困っていると、「私がわからんのか」と叱る人までいる。なかには、間違い電話で、そうした言い方をする人に出会うことがあり、間違いだと気づくと、すぐに電話を切るという不愉快な経験がある。

同じように、「おれおれ」という言う人がいて、「オレオレ詐欺」に便乗されることもある。

電話は直接の会話ではないので、相互に相手を確認できるまでは、誰にでも通用するように、丁寧な言葉で対応し、相手が確認できた後から、相互に慣れ親しんだ口調に移るのが肝心だ。

1. 多様なコミュニケーション手段と人間関係

今回から人間関係の第二次シリーズに入る。第一次シリーズでは、初対面の出会いを中心に書いてきたが、それは人間関係のごく一部だ。これからは、初対面ではないつきあひも視野に入れて書いていこう。

人間関係のなかで繰り広げられるコミュニケーション手段は実に多様だ。コミュニケーション手段は、人類史上でいうと、直接出会うなかでの話し言葉を中心にするものだった。だが、この100年間で、次々と新たなコミュニケーション手段が登場し、それまで限られた人だけが使用していたものが、広く使用されるようになる。たとえば、書き言葉を使用することがごく普通になる。さらに、ラジオ・テレビ・電話が登場し広がる。さらにインターネットが広がり、スマホがごく普通になる。

それらは、人々のコミュニケーションのありようを大きく変える。人類史上、人と人が直接向かい合ってコミュニケーションすること以外は稀なことだったが、近年に生じた激変のなかで、間接的なコミュニケーションが登場するだけでなく、その比率が高まる。数日間、人と直接には会わないで、多様なコミュニケーションをとる人さえ登場する。

そこで、それらの手段を使えるようにするだけでなく、場面に応じたコミュニケーション手段の使い分けが求められる。

さて、それらの多様に登場してきたコミュニケーション手段は、人間関係を広げ深めてきたのだろうか、それとも狭め浅くしてきたのだろうか。どちらにしても、人間関係を大きく変化させてきた。そのことを、意識的に考える人は多くはない。積極的にそれらを使用する人がいる一方で、「皆が使っているから」「使わないとやっていけないから」というように、「やむを得ず」使っている人も多い。

そして、使う人と使わない人との間に断層を生むことさえある。スマホを持つ人とそうでない人との断層が典型例だろう。それは世代間断層や文化断層などを生みやすい。新たなコミュニケーション手段は多様なつながり・人間関係を生み出す可能性を広げるが、逆にコミュニケーションをとる相手を限定する人、さらには、ヒトとはとらないで、コト・モノに絞ってコミュニケーションをとる人さえ生まれている。

ということで、人間関係を避けるために、あるいは省くために、コミュニケーション手段を活用することもある。レジ係とは決まりきったやり取りしかしない人が多いし、レジ係を廃して機械に置き換える店も登場する。早くから導入された銀行などのATMはその典型だろう。

そんななか、改めて人間関係をつくり、深め広げるようなコミュニケーションのありようを意識的に追求す

る必要が広がっている。

平松類『老人の取扱説明書』SB クリエイティブ 2017 年など関連書を読む

2018 年 06 月 11 日

このところ、老人・高齢者、あるいはそこに向かう 50 代からの人たち、あるいは身体・健康・病・死にかかわる書籍を立て続けに読んでいる。このブログで私なりの考えをたくさん書いていることもあって、強い関心をもっているからだ。いつか私なりのものをまとめあげたいという思いもある。

いろんな考えがある。なかには対照的なものさえある。多くは、当事者自身がどうふるまえばよいか手ほどきを与えるようなものもある。あるいは著者自身の経験を語るものもある。

そんななかで、本書は、老人と付き合う人向けに書かれている。無論、老人自身が読んでよいように書かれている。私は、老人自身として、老人である自分との付き合い方に焦点化して読んだ。

かなりの部分に「なるほどな」と思う。ちょっと異なるなという箇所もあるが、新しい発見とを感じる箇所もある。

「都合の悪いことは聞こえないふりをする」

「突然、うるさい!」と怒鳴る。でも本人たちは大声で話す」

「同じ話を何度もする。過去を美化して話すことも多い」

といった 16 か条の「困った行動」について、その原因・対処法が書いてある。

耳が遠くなってきた私には、「聞こえ」にかかわっては、なるほどと思うことがある。そうした対処策について、参考になるところがあると同時に、老人にかかわっている人に知っておいてもらえると助かる点も多い。

年齢上、対比的な子どもへの対応については、広く知られている。それとは対照的に、老人はそうした対応が知られず、「認知」「身体の衰え」とみなし過ぎている点が多い。もっと、老人について知ることがこれからの時代にはますます必要になるだろう。

他にも有益な本が多いが、一つだけ紹介しよう。五木寛之『健康という病』幻冬舎 2017 年だ。かれの文学書は全く読んでいないが、高齢者や身体にかかわる本を何冊か読んでみた。共感できる点が多い。本書でいうと、「健康を過度に気遣うということは、深刻な病気である」（表紙カバー）「治療よりは養生」p 158、「養生の第一歩は、体が発する信号（「身体語」）を的確に受け取ることである。」p 159 などだ。同感である。彼自身の「偏頭痛を治めようとした話」p 160、などは、私の呼吸器系との付き合いの話と共通するものがある。

自分の「身体語」を聞きながら生活することは楽しいことだなあ、と思いつけてきたが、なおのこと思うようになったこのごろだ。

人生構図

2018 年 03 月 21 日～2018 年 07 月 03 日

15. 社会転換に結び合った人生転換を追求する人、そうでない人

このような社会転換のなか、旧来の枠組みに固執する人は、悩みが激しい。旧来の枠組みは、戦前期につくられたものだけでなく高度経済成長期につくられたものであり、それが1990年代以降激しく揺さぶられ、転換と模索が進んできた。

1950年代半ば以前に生まれた人は、この転換に気づきにくい。旧来の枠組みにもとづいてつくられたタテマエとか標準のなかで生きてきて自信にあふれ、そのことで他者を説得しようとする。あるいは、対照的に、そのタテマエや標準のなかでこうむった失敗挫折のなかで、否定的自己認識をもつ人も、多くないにしても存在する。そうであつても、別のタテマエや標準の追求に向かう人は限られている。

ところが、1950年代後半以降に生まれた人の多く、つまりは現在の50代以下の人たちは、1990年代以降にあらわになってきた社会転換を目撃・体験し、それへの対応のなかで生き始めている。その時代以前の「一億総中流」的なものと代わった、勝ち組負け組の二分・格差の広がりを見ている。それだけになお、勝ち組に入るために奮闘しようとする人、そうしたありようとは距離をおいて、新たな生き方追求へとシフトする人、そういう新たな二分構図も生まれ広がってきている。

現在の50代以下の人々の多くにとつて、社会転換と結び合った個人レベルでの人生転換、人生創造が、人生テーマとなっているともいえよう。

こうして人生創造をめぐるの、新たな選択模索が広汎なものになっており、タテマエ・標準が一筋縄ではいなくなり、多様なタテマエ・標準が生成されている。あるいは、タテマエ・標準を作ること自体から距離をとり、一人一人の自分なりのものを構築するというありように移ってきている。

こうした中で、50代以下の人々のなかに、人生創造的な模索が広がる。模索しないで、挫折・危機のなかで、旧来の枠組みにとらわれ、そこから抜けきれないでいると、人生上の危機が広がる。50代男性の自殺の多さや体調不良には、そうしたことが投影している例が多いだろう。

そして、50代前後におけるそうした事態を「無事くぐりぬける」ことができた人とそうでない人との二分化が進んでいるように思われる。その結果、70代以上の人にある事態、つまり日常生活で見かけるのは元気な人ばかりで、元気でない人を見かけなくなる(早世または病床または人々と出会う場に出てこない)事態が広がっているようにも思われる。

モーレツにやってきて、ストレスをため込んで息切れし、遅くとも60代に不調に陥ってしまうことがそれと結びついているともいえよう。70代以上で元気な人は、50代ぐらいからマイペースにすすむことを生活習慣化し、70代以降もマイペースな健康生活を進めて、長寿に至るといえるかもしれない。それにしても、50代における違いは、その後に響いてくるように、私には思える。むろん、体の「しん」が強い人弱い人というような差異はあるだろうが。

14. 社会転換と個人の年齢転換とがハモル時代

前回の「転機としての50代」の続き。

次に社会レベルについて書こう。1970年代もしくは80年代まで、社会は高度成長にせよ低成長にせよ、経済成長にいろどられていた。社会のありようは経済(成長)が取り仕切っているという感覚が広く持たれていた。

その時代を生きていた人には、生活向上ということを経済成長と重ねて受け止めがちで、経済発展と人生とを重ねてとらえがちだった。現在の80歳代以上には、そうしたとらえ方はごく当たり前と受け止めがちだっ

た。また、戦争と戦後の困難を体験すると、その後出会った多少の困難さえ、それほど深刻に受け止めないのかもしれない。現在の70歳代、60歳代になると、経済の右上がり成長にブレーキがかかる1990年代以降の社会状況が陰を落としていく。50歳代以下になると、「高度経済成長というのは何なのだ」という感じさえ持ち始める。

要するに、経済の転換、社会の転換が始まっていたのだ。その象徴的なこととして、リストラや就職氷河時代という社会状況が、個人の人生に強い陰影を落とし始めた。それが始まってしばらくは、「いずれ成長時代にもどる」という期待感が残っていた。だが、成長にブレーキがかかるだけでなく、仕事をめぐる困難が一般化し始める。非正規雇用、過労死、ブラック企業の表面化がその象徴だろう。

そんな体験を持つ人々のなかでの年長者は、すでに今50歳代に入りかかっている。

社会の転換と、年齢の転換とはホモリやすい。1980年代までは、社会は右上がり成長の時期であり、個人レベルでも40歳代までは、イケイケドンドンで頑張る時期と受け止められがちだった。

1990年代にあっては、そのころ40代から50代にかけての人たちが、個人レベルでも社会レベルでも、社会の転換に気づきはじめ、個人としても模索する人が出始める。

2000年代に入ってから、30歳代においても、さらに20歳代においても、社会の転換に気づき模索することが広がった。2010年代に入ると、若者世代においても、この転換を意識するにしろしないにしろ、社会だけでなく個人としての対応の必要が感じられるようになった。

もう一つ、家族をめぐる転換の進行がある。三世代家族とか核家族とかいう「一般的なもの」と考えられた「家族の形」が、90年代ごろからそうとはいえなくなってきた。単身家族、一人親家族、LGBT家族、シェアハウスなど多様なありようが広がる。そういうなかで、「普通」とみなされたありようが少数化し、多様な家族の形があることを前提にして、自らの人生を形成していくことが広がっていく。そのなかで、格差貧困問題、介護問題が大規模に、人々の人生のありように深刻な問題を突きつけ始め、個人レベルでも社会レベルでも、対応が迫られている。

現在の50代は、そうした社会・家族の転換のなかで、自らの個人としての転換のなかを生きている。

13. 転機としての50代 身体上の転機 医療処置だけですまさない

よく言われることにしては、そう受け止められることが少ない「転機としての50代」がある。定年などのリタイアの60代は、いやおうなしに迫ってくる転機だろう。といっても、定年延長や定年後再雇用などもあって、それが60代後半から70代へと移されつつある。

でも、その多くのケースは、否応なしに迫ってくるものに対して、受身的な対応になっている。もしいくつもの人生があると考えて、自分から人生を作っていこうという積極的な挑戦としての人生を考えるなら、50代を転機と考え、新たな人生を追求するのが50代と考えたほうがよい。遅すぎるのかもしれない。私の20年来の主張は、「人生後半期」に入る40代半ばからというものだ。20年前には「人生百年」という近年はやりの言葉は登場していなかったから、90歳の半分の40代半ばと考えたのだ。「人生百年」とみなされ始めた今では「人生後半期」に入るのは50代からと考えてよいかもしれない。

それにしても、今では前半と後半に分けて、二つの人生というのでは不十分になりつつありそうだ。今では三つ以上に分けて、三つ以上の人生という時代になっていると思う。

ところで、それは個人レベルの年齢上の話である。社会レベルや家族を含む人間関係レベルでの転機ということも視野に入れる必要がある。そして、身体というレベルもある。

そういったものなから、まずは身体レベルについてみてみよう。人生が複数になってきた一因は、寿命が長くなってきたことにある。かつて平均寿命が50歳だったころ、あるいは60歳を越せば引退・隠居が当たり前だったころとは、事態が大きく変化している。そのなかで50代で人生の終わりになるような身体不調が、潜在ないしは顕在する人が多い。その背景に、繁忙による過労とか過重ストレスなどがある。そして、体力が年相応に低下しているにもかかわらず、以前通りに活動することでバランスを崩す例も多い。身体不調は黄信号だといえよう。

そうした黄信号を持つ人は、同世代の何割かにのぼる近年だ。そこで、必要な医療措置とか生活管理とかに向かう人がいる一方で、黄信号を無視して赤信号＝危機的事態に陥る人もいる。

実際のところ、何らかの適切な対処をした人とそうでない人との、その後の差異は大きそうだ。対処をした人に、80—90歳以上まで充実した生活を送れる人が多いのと対照的な事態が、対処をしなかった人にあらわれそうだ。

このように、その後のありようを左右する身体上の事態があらわれやすいのが50代だともいえよう。身体不調を医療処置で解消しようとする人にも、医療処置だけで済ませる人と、それだけでなく、生活のありよう、さらにいうと、人生のありように踏み込んで、検討し新たな人生創造に向かう人とがいる。

12. 一生にいくつもの人生があり、その各々の人生のなかにサイクルがある

この連載の7回目に紹介した『ライフ・シフト』は職業を中心に論じているが、その主張の一つは、教育期間・職業期間・退職後期間という3ステージ型からマルチステージ型へと移ってきているということにある。

そのマルチステージの働き方として、エクスプローラー、インディペンデント・プロデューサー、ポートフォリオ・ワーカーが紹介されている。2つ以上の人生ステージをもつというマルチステージ型の主張は、一人の人が一生の間にくつもの人生をもつという、私が描いてきた人生構図と重なる部分がある。その一つのステージの長さは、30年、15年、8年というようにまちまちだろう。

いくつもの人生があるということは、あるステージから別のステージへと移っていくことに人生サイクルを見出すというよりは、一つのステージのなかにサイクルがあることに注目することである。だから、一生の間にくつものサイクルがあるということになる。たとえば、準備→試行→定型確立→調整・展開・習熟→転換・終了といったサイクルである。そのサイクルには、休養・充電期間もあろう。そして、職業だけでなく、通学・育児介護などがサイクルを構成することもあろう。

職業生活を軸にして一つの例を考えてみよう。10年間務めた職場を退職し、異なる分野の専門職大学院で学び（準備・エクスプローラー）つつ、その分野を扱う職場に3年間勤務した（試行）後に、その分野の職場で本格的に働く（定型確立）。そこで5年間働いた後に、その分野で起業し（調整・展開・習熟 インディペンデント・プロデューサー）、10年間継続する。その後、後進にその経営を譲り、一年間の休養と見聞を兼ねた海外生活を送る（エクスプローラー）。戻った後、ポートフォリオ・ワーカーとして、次のステージを展開する。これらの18～19年間は一つのステージとなり、エクスプローラーを経て、ポートフォリオ・ワーカーとして、次のステージに移る。

こうしたいくつものサイクルを、一人の人がもつことは、今日の現実にあって珍しいことではない。ただ3

ステージ型を標準視する思考が強いところでは、例外扱いされるかもしれないが、むしろ多くの人がそれ以上のステージをもっているのだ。

学卒後、数年間の多様な職業などを転々とし、30歳ごろに正規職に就くということも、すでに二つの人生を経験するということだ。また、50歳ごろに、それまでの職場を早期退職し、次のプロジェクトに就き、インディペンデント・プロデューサー、ないしはポートフォリオ・ワーカー的なものに移るのも、新たな二つの人生をもつことだ。そう考えると、身近にそのようなケースがあふれていることに気づき、決して例外的な存在ではないのだ。むしろ、一つだけの人生、3ステージ型の人生のほうが少数派であろう。

そして、重要なことは、ステージ転換・移動は個人レベルで生まれるだけではなく、社会的にも生まれるということだ。たとえば、戦争・災害・産業構造の変化などといった社会的事件が、人々に新たなステージへの移行を強制することがある。

戦争がもたらした徴兵徴用動員・負傷病氣・家族喪失・職業喪失などは、いやおうなしに人生ステージを変える。戦前・戦中・戦後という三つのステージを職業変更しつつ経験した人が広く存在する。今日の増大する非正規雇用も、想定外のステージ移行を作り出している。社会と個人の双方の要素をもつ結婚・出産・育児も複数のステージを生み出している。

11. 私の事例の特性 身体 自然との付き合い 知性・感性・身体性

私の事例については、今回いくらか書いて、終わろう。

☆身体（健康と病）

別の連載で書いたように、私の身体は病弱であり、いくつもの病気を抱えながらの生活が長かった。しかも、繁忙な生活を続けて、改善はなかなか難しかった。そのため、50代に入ってドクターストップがかかるに至った。

そして、50代後半の第二次沖縄生活になって、徐々に上向いてきた。それまでの人生のなかでは最高の状態となり、寝込むことは稀になった。

☆自然との付き合い

もともと田舎生まれ育ちということもあるにしても、病弱だったので、自然とできるだけ接する生活を送るようにしてきた。また、自然を愛してきた。それは、外側の自然だけでなく、自分の身体という内の自然を愛することにもつながってきた。

ということで、都市的生活よりも田舎の生活を志向してきた。第一次沖縄生活の当初は、それまでの愛知・東京生活同様、賃貸住宅に住んだ。しかも7階だった。そのなかで、地上生活への渴望が湧いてきて、1974年南風原の牛小屋を改良した平屋に住むことになったが、それがその後の田舎暮らしの最初だった。それ以降の45年間、2～3年を除いて、そんな暮らしが続いてきた。

☆知性中心型から、身体性・感性・知性を意識的にからませあう生き方

私の場合、高度経済成長に象徴される1950年代後半から1970年代前半の時代状況、そして大学・研究生活ということもあって、知性中心の生活をとってきた。知性によって、身体性・感性をコントロールする、つまり知性によって得られた判断をもとに、身体性・感性を従わせるのだ。

それは、ガンバリズムを生み、休むことは「まずい」こと、「やむを得ずする」ことで、できるだけ縮小するという考えになる。たとえば、長く8時間睡眠だったが、「長すぎる」から「縮小すべき」と判断し、そしてくりかえし短縮を試みたが、身体が従ってこなかった。感情を表に出すことはまずいので、できるだけ冷静にし、必要とあれば、ポーカークフェイスでいるべきだと考えることさえあった。

感性身体性を自然の流れのなかで表明する雰囲気強い沖縄生活のなかで、それ以前のありようは変わり、感性・身体性が出てくるものを受け入れようとし始めた。そして、知性と感性・身体性を共存させようとする。さらに両者を豊かに絡ませることが大切だという考え方、そして生活の仕方を身に着けていく。

10. 私の事例の特性 家族 お金のやりくり

☆出会いと家族

これまでの出会いのなかで、最大の出会いは恵美子との出会いだ。長期にわたって、刺激を与え合い続けてきた。無論、単純なものではなく、沢山のドラマを含んでいる。若いころは、喧嘩が絶えなかったといえるほどだ。それでも、結婚46年を超えた。想定外の世界を見せてくれることが今でもある。

東京生活の終わりごろにした結婚以後、家族生活は夫婦と子どもとの合計3～4人のことが多かったが、第二次愛知生活の後半から2人だけの生活に戻った。今後、どうなるかは予測しがたい。

第一次沖縄生活がそうだったが、来客が多かった。大人だけでなく子どもの来客も多かった。我が家は、近所の子どもたちの遊び場ともなっていたからだ。

第二次沖縄生活では、大人のユンタク場の様相を少しだが呈している。

私たちの結婚式では、三つの「誓いの言葉」を述べたが、その一つは、「多くの人が出入りする『開かれた家庭』を作る」であり、その通りになったわけだ。

以上のなかに挟まれて、例外的な暮らしがある。一つは、第一子の入院生活の時だ。小さい第二子もいたときなので、夫婦交代で、病院泊りと自宅泊りをした。共稼ぎのときだから、昼は双方の勤務先で仕事。だから、夫婦が会うのは週に1時間ほどだった。そんな生活を数か月した。

もう一つは、私がトロント生活をした時だ。半年、一人でトロント生活をし、残りの半年は恵美子もトロントに合流した。もう一つは、第二次愛知生活の最後で、第二次沖縄生活を準備する時。恵美子が先行して、沖縄に滞在し、建物建築への対応をした。私は、愛知での仕事を残していたので、時々沖縄に出向いたが、基本は愛知生活だった。

☆お金のやりくり

経済的にはラッキーだったといえよう。でも、類似の人たちと比べると、随分「お金を使わない」生活であり、消費生活における金銭依存度は低いだろう。都市生活者から見ると、現在の私たちの生活費は5割程度かもしれない。でも、近隣の方々の金銭生活は、もっとお金を使わない感じだ。2006年だったか、全国放送のテレビ番組「月10万円で暮らせる町・村」に出た。その時の番組基準で計算すると、基本的生活費は二人合わせて7万5000円だった。

そんな生活だから、二人共、50代半ばに専任職をやめてもやっていけた。たとえば、「飲み代」は、都市生活者と比べると、限りなくゼロに近い。飲み会出席は、年0～3回ぐらいのものだ。喫茶店・カフェに入るのも年に1～3回ぐらいだろう。野菜類は、多少自給している。

それでも、20歳代までは、ぎりぎり生活だった。奨学金返済が免除されたこともラッキーだった。最初

の就職後、半月で持ち金がなくなり、管理職に給与の前借をした。また、与儀の農連市場にリュックを背負って、野菜などの買い出しにいったこともあった。トロントでは、同じように、中華街のスーパーにリュックを背負って買い出しに出かけたことも多かった。

20代末に、恵美子が定職を得て、やっと一息つく。ちょうどその時に、第一子の入院生活となる。

実は、その時に、自宅購入をする。自宅での長期療養生活が予想されたので、建売住宅を購入したのだ。頭金なしの1071万円だった。ほとんど借金でまかなった。だが、第一子の自宅での療養生活は一か月で終わり、再入院、そして別世界と旅立った。

振り返ると、よくぞやってきたものだ。

9. 出会いと知人友人づくり 私の事例の特性

☆出会いと知人友人づくり

「人好き？」のためか、知人・友人をあちこちに作ってきた。多すぎて、かえって問題なのかもしれない。出かけたところで、新しい出会いが多いこともある。今している学童保育指導員の研修では、ほとんどの参加者が初対面だが、くりかえしていくうちに、「知人」といえる人が急に増えていきそうだ。

また、現在の生活の場では、多様な人々をつきあっている。近所関係、会議関係、趣味関係……。そして、旅が多かったこともあり、全国どの県にも知人がいる。全国に会員がいる研究会・学会に長く所属していたおかげでもある。また、かつての受講生が全国に散らばっていることもある。

海外にも結構いる。トロントでの研究生活での出会いが大きい。トロントは多文化国家カナダのなかでも多文化性が強く、世界各地から研究者や学生が集まり、そして散らばっていたことも大きい。

知人のなかでの最大数は、私の授業の受講生たちで、累計一万人になるだろう。「40年前に授業をとっていましたが、覚えていますか」などと聞かれることはしばしばだ。そのなかでもより深いつながりになりやすい卒論指導・ゼミの受講生になると数百人ぐらいになるだろう。かれらとは、今でも顔と名前を思い出せることが多い。そして卒論・ゼミ合宿というまでもなく、講義でも合宿をしたし、学科合宿・新入生合宿などかなり参加したので、出会いの印象はかなりのものだったのだろう。

沖縄でも愛知でも、受講生が我が家を訪問することが多かった。学生を自宅に招く大学教員が多くない中で、学生に特別な印象をあたえたのだろう。

自宅訪問は、学生に限らず、多様な方々がなされる。加えて、私の関係者だけでなく、恵美子の関係者も同様に多いが、お互いの知人友人は、私たち共同の知人友人になってしまうこともしばしばだ。

そんな知人友人たちが、今でも我が家を訪問してくれることも多い。それが、10年ぶりどころか、20年ぶり30年ぶり40年ぶりの再会になる。だから、年間訪問者数は、数十人になってしまう。一週間に何人も訪問されることもある。海外からの訪問者も、年に一組以上いる。

大変ありがたい話だ。

最近、近隣つながりでの知人友人づくりが多い。それにはまず、徒歩2～3分の距離に生活しており、日常的に出会う人がまずいる。食事をともにするつきあいもよくやる。字行事などでの出会いも大きい。字の共同作業もそうした絶好の機会だった。

近隣の方たちともったユンタク会つきあいもある。さらに、市役所の委員などを経験し、そのつながりも大きい。現在している市史調査でのインタビューもつながりを生み出す。

趣味の卓球の練習仲間も大きいですが、それに限らず、試合などでのつながりが広がる。いまでは、総計200人近くになるかもしれない。恵美子は、週一回スポーツクラブに行くが、そこで出会った人を我が家にも連れてくる。

こうして、地域の多様なつながりが錯綜してくる。私の知人の配偶者は恵美子の知人だった、などという類は多い。恵美子がまとめ役をする我が家での研究会に、40年前に私の研究会仲間だった人が訪れるといったつながりはザラだ。

10年ぶりの出会いから始まって近隣に住むことになった夫妻は、再会して以降、次々と旧友、そして新しい出会いの方を我が家に連れてこられる。そういうコーディネーターのような人が何人かいるので、知人友人の輪がさらに広がる。

8. サバティカル（在内在外研究） 同一職場継続でないとな不利になる制度の問題 私の事例

ところで、私は、30歳代で一回の在在研究期間、50歳代で一回の在外研究期間を職場から与えられる幸運を持った。いわゆるサバティカルである。その間、研究に専念したが、かなりエキスポラ的な様相を帯び、実りある一年間を各々送った。日本でそうした機会を得られるのは、大学教員であっても多くないし、大学教員以外では稀だ。それは、休養充電期間にもなる。職業生活を長期に継続するうえでは大変有効な制度だろう。私を知る外国の大学教員は、日本よりはるかに活用しているし、大学教員以外でも活用している事例を聞く。だから、サバティカルは人生ドラマに重要な役割を果たす。それは、現在の日本の小規模組織では制度化しにくいことだ。それだからこそ、行政制度として作り出すことを考えたいものだ。フィンランドでインタビューした際に、そうした例に一度ならず出会い、その間の生活費保障が制度的になされていることを聞いて、驚いたものだ。

ところで、日本での終身雇用制は、同一勤務先が前提になっている。そうではなく、多様な勤務先（一時中断も含んで）を重ね、全体として長年職業生活を送れるありかた、転職が経済的不利にならないようなありかたが制度化されることを期待したい。

私の場合、正規雇用としては、国立大学に17年、私立大学（2大学）に14.5年と分かれているので、退職金・年金総額は、同一職場通算31.5年の場合と比べると、倍近くの開きがある。終身雇用を前提とする日本のシステムの問題の一つであろう。同一職場20年以上でないとな、年金も退職金も極端に低額になるのだ。そのことが、同一職場に長期にくくりつけられる構造を生み出す。そして、転職を否定的にとらえたり、思いとどまらせたりして、人生創造の硬直化を生む一因にもなっているだろう。

そしてそれは正規雇用と非正規雇用の二分・矛盾を作り出している。そうではなく、転職・サバティカル・途中休養を含む多様な働き方を認める正規雇用が一般化することを望みたい。

7. 職業生活 私の事例

私の事例を職業生活に焦点をあててみていこう。大学教員という職業を中心的なものとしながらも、就職以前、専任時代、非専任時代とで大きな違いがある。ここで、このブログで先にも紹介したリンダ・グラットン/アンドリュー・スコット『ライフ・シフト』東洋経済新報社2016年のなかのエクスペローラー、インディペンデント・プロデューサー、ポートフォリオ・ワーカーという働き方例をも含めて考えてみよう。

第一次沖縄と第二次愛知は、大学専任教員であった。

第二次沖縄では大学非常勤講師もかなりしたが、ポートフォリオ・ワーカーというべきだろう。そして時とともに、大学授業の比率は下がっていき、まさにポートフォリオ・ワーカーというものになっていく。と同時に、エクスプローラー、インディペンデント・プロデューサー的な要素をもはらんでいた。どんなことをしていくかをエクスプロア（探求）していたからエクスプローラー（探求者）であった。そのなかで、もしかすると起業してもいいかなとさえ思っていた。そして、その当初は、税務署に「教育研究業」として届け出て青色申告もしていたから、インディペンデント・プロデューサーといえなくもないだろう。もっとも、完全な赤字経営だが。そして、収入が減少し、収入の中での年金の比率が高まっていく中で、青色申告は打ち止めにした。第一次愛知と東京は、被教育期間であり、職業生活といえるものではなく、まさにエクスプローラーだった。そのなかで、東京生活の途中の大学院時代以降は、研究者としてのアイデンティティをもってきた。

専任としての大学教員時代の仕事内容は、教育・研究・行政業務や社会貢献などが並行していた。いずれも結構やったが、相互関連も強かった。教育を実践するだけでなく、教育活動の研究も展開したし、行政業務は一時期、授業時間の倍ぐらいの会議回数があるほどだった。実践的教育改革を推進する業務が多く占めていたから、「いやいや」ではなく、やりがいを感じつつかなり積極的にやっていた。職業人としてのアイデンティティが研究者教育者としてのアイデンティティと重なっていた。

それでも、徐々に行政業務を軽減する方向にしていく。それは教育、研究を優先させていたからだった。といっても、平均的大学教員よりはずっとやっていた方だったろう。ただ管理職につくことは意図的に避けてきた。管理職として大学・学部を担おうという気持ちにはなれなかったのだ。同世代の数多くの友人知人が学長学部長などの職務について奮闘しているのを見ると、私とは異なるものを感じてしまう。

社会貢献はまさに研究活動と直結しており、全国各地を飛び回ってきた。それが仕事の中心を占める時期も長かった。

研究生生活の大半は、生活指導を中心とする教育研究であった。しかし、第一次沖縄生活ならびに第二次愛知生活の中でエクスプロアし、研究対象を拡大させていき、沖縄論、大学教育論、そしてさらに、グローバル教育論、人生論、地域論などが加わってくる。このあたりの変化は、私の人生ドラマにおいて何度もあったマイナーチェンジとしてあらわれてきた。

6. 私の事例を材料にして考える 地縁・結社縁・血縁

これからしばらく、前回書いた私の事例を材料にして考えていこう。

☆地縁 居住地移動と居住地域とのつながり

岐阜（12年間ないしは15年間）→第一次愛知（3年間ないしは6年間）→東京周辺（7年間）→第一次沖縄（18年間、うち一年間は東京・埼玉）→第二次愛知（14年間、うち一年間はカナダ）→第二次沖縄（14年間以上）

これらの地域でできた、地域とのつながりの濃淡には大きな違いがある。生育地の岐阜と二度の沖縄では、地域の中に深く入っていた。対照的に、東京・愛知生活では、地域とは疎遠であった。ここで地域というのは、居住する集落・町内といったものを指して書いている。

その違いは、私の生活のありようの違いから生まれたというよりも、居住地の地域のありようの違いによって生まれたというべきだろう。より正確に言うと、生活し始めた私たちへの地域の側の構えが前提にあって、

それへの私たちの対応を生み出したという面が強いのだ。

沖縄では、アパート・マンション生活でなければ、概して、そこに住んでいる人たちは、地域の近隣の人とつきあい協同の活動を展開することが当然のこととなる。だが、沖縄でもアパート・マンションであれば、そうとは限らない。私たちも那覇のアパートに住んでいた時は、近隣とそれほどのつながりを持っていたわけではなかった。

☆「結社縁」 この言葉は、ここで初めて使うものだが、職場・研究会・サークルなど任意参加の組織でのつながりを指している。そのなかの会社での縁を「社縁」ということもある。

地域以外のつながりには、職場・研究会・サークルなどの任意加入の組織を介してのつながりがある。それらでは職業上・研究上のことだけでない。公私ともに多様な付き合いを展開することが多かった。何度もした、同僚や研究会仲間の婚活支援、結婚式演出などは、その象徴的なものだろう。

研究会のつながりには、地域単位のものもあれば、全国規模のものもある。また、サークルについては、成人以降は、スポーツとくに卓球つながりがほとんどである。

☆血縁 ウチナー婿の私の沖縄生活では姻戚関係がほとんどである。

沖縄に生活しはじめてから、恵美子を通しての姻戚関係は、信じられないほど莫大なものになっていく。他のつながりは、時とともに変化があり、なかには縮小消滅するものがあるのは対照的なほど、姻戚関係は現在まで続いている。数人とのつながりではなく、数十人とのつながりという量だ。

そして、当初のつながりを第一世代間と呼べば、今では、二世代目・三世代目とのつながりともなっている。義理の姪甥やそのパートナーと子どもたちという具合である。ついさきごろも、40年以上ぶりの再会もあった。

愛知生活や東京生活では、ほとんどが結社縁のつながりでその数は膨大なもので、全国どこにも研究会つながりの人や私の授業をとった卒業生がいる。対照的に地縁つながりは、限りなくゼロだったし、血縁も少なかった。

沖縄では、地縁も結社縁も血縁もたくさん生まれてきた。それらのつながりは、沖縄全体に広がっている。こうしたつながりは年ごとに強くなり、初対面の人でも、話していけば、知人の知人、卒業生の子ども、卒業生の教え子、知人の親戚といったつながりを見出すことがかなり多い。

こうしたつながりのありようは、その時点での人生ドラマに強い刻印を残していく。

5. サイクルをめぐる諸特性 私の事例

前回まで述べてきたように、人生には複数のサイクルがあるのが普通になってきている。そして、サイクルはドラマ性を帯びやすい。平坦なままであることは少ない。

付け加えると、個人をとりまく自然環境も外的内的のもの双方に大きな影響を与える。寒暖など季節変化、昼夜などの一日の変化、災害、また個人が生活する場をとりまく自然環境も大きい。砂漠、森、海岸、人工物の多寡などの自然環境の変化も決定的に重要であり、それがまたサイクルにドラマを生む。地震・津波などの災害が典型的なものだ。くわえて、原発・軍事基地・海水面埋め立て・人間活動の排出物に起因する地球温暖化などの人工物が自然環境を大きく変え、それにかかわる人々の人生サイクルに大きな影響を及ぼす。その究極のものとして戦争がある。人口の三分の一の命が奪われた沖縄戦は、そのことを鋭く問いかける。

したがって、外的な面で共通するものが多い人々においては、共通特性が生まれやすく、そのなかでの個人特性が出てくる。それだけに、外的なものを共有する人々の平均像が話題になる一方で、きわめて個別的である個人におけるサイクルの違いが生まれてくる。

したがって、平均像を描くだけでなく、多様な個人像、つまりは個人ドラマとしての人生を考える必要がある。

ここで、私の事例を見てみよう。左側に外的サイクル、右側に内的サイクルを書いてみた。

第一期(0～20代前半)

- | | | |
|----------|---|------------|
| 1)0～12歳 | 家族・地域 家業（婦人服仕立て業と農業） | 将来の夢 |
| 2)12～18歳 | 中学進学 受験学習 都市生活
※転機ドラマ 高校2年の生徒会体験・出会い | 生き方・進路の模索 |
| 3)18～24歳 | 大学・大学院 東京生活
※転機ドラマ 研究団体との出会い 結婚 | 職業選択。研究者志向 |

第二期(20代後半～50代前半)

- | | | |
|----------|--|------------------|
| 4)25～43歳 | 就職 沖縄生活 研究団体 家族の形成
※転機ドラマ 子どもの喪失 時代変化 既存研究構図への疑問と挑戦 | 教育実践の創造 研究テーマの展開 |
| 5)43～55歳 | 転職 全国組織での活動 海外との交流と海外生活
※転機ドラマ 集団づくりの新しい展開 大学授業論 グローバル教育 子どもの巣立ち ドクターストップ | 研究の展開拡大 |

第二期(50代後半～)

- | | | |
|----------|--|-----------|
| 6)55～70歳 | 第二次沖縄生活 フリー研究生活 地域とのつながり
※転機ドラマ 沖縄との再会 高齢期と向き合う | 沖縄研究 体調回復 |
| 7)70～?歳 | | |

4. 外的サイクルと内的サイクルのからみを管理創造する個人

前回書いた戦争などの重大事態にあっては、本人自身が作り上げるサイクルは、制約縮小される。時には、促進拡大されるように見えることもある。たとえば進んで「滅私奉公」のために奮闘するというものである。それは外的なものを内から湧き出る自発的なものにしてしまうためである。ファシズム下ではよく見られたことだ。

そうではなく、内的と外的とが豊かにかからみあう関係をつくりたい。たとえば学校でいうと、外的なものから出されるものと内的な自発的な学習関心とが絡み合うようにしたい。

この両者は、すっきりと分けられるものではない。たとえば、不本意妊娠→出産の流れのなかでは、相手や家族という身近ではあるが外的なもの、本人自身の意思判断との複雑かつ微妙なからみあいがつきまとう。

このように、このサイクルには、外的なものが本人にかかわって作り出すものと本人自身が作り出すものとのからみあいがみられる。

外的なものとして、所属組織の場合を考えよう。その時、組織の判断決定に本人がどの程度参加するかが重

要な意味をもつ。

中学を例にとろう。入学時点では、私立中学に入るのであれば、当人の内的なものはほとんどない。入学後の中学生活で、当人の参加の程度が強いものとして、部活の選択、選択科目の選択、夏休みの自由研究、友達形成、などときわめて限られている。このように日本の学校においては、生徒自身の内的なものの比重が低いため、学校という外的なものに、内的なものをいかに合わせるかが中心になってしまう。外的なものに合わせることを主眼にして、内的なものを統制するのである。教師のレクチャ中心の授業、テストを軸に回る学習、細部にわたる校則、ブラック部活などが日本の中学を象徴しているかもしれない。このように生徒の内的な湧きあがりを抑え込んで受身的にさせている点を改めないで、生徒の積極的参加を求めるアクティブラーニングが強調される、大いなる矛盾が生まれている。

そうしたなかで、「指示待ち人間」が大量生産され、内的な動きを育むものがしぼみ、進学就職といったその後の人生上の選択創造さえも、偏差値という外的なものに依存する事態が長い間広範に存在し続けている。

これらの各サイクルには、たとえば、探求→試行→追求するものの確定→実行→習熟・蓄積→発信・表出→賞味期限切れ→探求などといった過程が見られる。

そして、そのサイクルには、課題・テーマがある。外的サイクルには、制度・組織・慣習などの維持拡大、目的追求、危機解決といったものがある。個人のサイクルは、自己遡及サイクルといってもよいだろうが、その課題・テーマには、衣食住・収入、学習、やりがい、好み、愛などがあるだろう。

外的サイクルには、サイクルをコントロールする位置にある人たちの意思がかかわるが、それに属する人自身がかわる場合もある。外的サイクルの要請にもとづいて、個人がそれに合わせるという流れだけでなく、個人の側が外的サイクルを自分に合うように変えていくという面があるのだ。

こうして、個人におけるサイクルは、自己遡及サイクルと外的支配ないしは外的依存によるサイクルとのからみで進行する。

3. 複数サイクルとしての人生 サイクルの管理統制

人生構図をサイクルでとらえるアプローチはよく行われる。出生→幼→少→青→壮→老→死といった一生を一つのサイクルでとらえることが代表的なものだ。「一生」つまり、一つの生なのだ。それをライフサイクルといつたりもする。

そのサイクルを一つではなく、いくつかのサイクルで考えることもよく見かける。「第二の人生のスタート」などの表現も、二つ以上の人生があるわけだから、そうした例である。あらためて見ると、一人の人には実際いくつもの人生があることに気づかされる。

そのいくつもあるサイクルのスタートとして出てくるものとしては、思春期、定年退職などが目につくが、それ以外にも、20歳前後の就職、結婚出産、転職、起業、子どもの巣立ち、大病・大事故災害などが登場する。幼児期に、「こうしなければ、いやだ」「自分が」などと、「我を張る」のもの一つの事例かもしれない。LGBTの人のカミングアウトもその事例かもしれない。

複数のサイクルが並行することもある。職をめぐるサイクルと家族などの人間関係のサイクルの並行は、ごく普通に見られる。こうした複数のサイクルがからみあって実際のサイクルが存在する。

といつても、サイクルを意識しない人がいるかもしれない。無我夢中とか、繁忙とか、「走りっぱなし」で意識する「ゆとり」などないというかもしれない。なかには、指示待ち人生とか、流されっぱなしとかで、サイ

クルなしということだろうが、それ以前に、自分自身の人生というものが薄くなっている人がいるかもしれない。20年ぐらい前に、「俺の人生は、俺のもの」というタイトルの中学生を扱った実践記録が注目されたことがあるが、それには、自分の人生だから、自分で創造しようというメッセージが込められていた。

また、夫や子に尽くすというありようが、自分の人生だという人がいるかもしれない。そして、たとえば、子どもが巣立って、「空の巣症候群」に陥るなかで、改めて自分の人生を考え始め、新しい人生のスタートになる人がいるかもしれない。配偶者に先立たれ、失意状態で元気をなくす人がいる一方で、改めて自分なりの人生をスタートさせる人もいよう。

サイクルを管理規制するものには、外的なモノと自分自身から出てくるものがある。現代社会は、後者の「自分の人生は自分のもの」と考え、自分で創造し管理していこうとすることが基本であると考えられている。しかし、実際には、両者がからみあっている。

外的なものには、入学卒業なども含めて学校によるもの、就職退職も含めて職場によるもの、さらに社会に存在する諸制度で個人の人生にかかわりが深いもの(国家・組織・地域・家族)などがある。

さらに、社会的常識とか通念といったものも含まれよう。たとえば、幼少青壮老という年齢区分をつくり、それに個人を当てはめて、個人の人生をとらえる発達診断とか発達論とかもその一つではなかろうか。身体の生育・成熟にもそうした性格がはらまれる。かつては病気とは認識されないものが病気と診断され、治療対象となるなどは、まさに外的色彩を持っている。

また、結婚適齢期なども典型的にそうしたものだろう。

その外的なものが肥大化して、個人のサイクルを阻害し断絶させることさえある。そのため人生は、いわば「乗っ取られ」状態に至る。沖縄戦下の人々が、生死レベルまで外的なものに支配されたのは、その究極のものである。そうした事態にあっては、個人の人生は、外的なものに捧げるものとさせられる。「滅私奉公」はそのスローガンといえよう。

2. 個人ドラマからのアプローチと平均値からのアプローチ

前回述べたようなありようはここ100年前後、とくに近年では広くみられることだ。それは、身分制社会とは大きく異なる。身分制から離れた近代にあっても広く残っていたことだが、仕事をはじめとする共同体や家族の営みのありようを子どもなど次世代が引き継ぐことが一般化している社会とも大きく異なる。まさに、個人ドラマなのだ。そこで、そうしたありようにあっても、個人を超えた共通性・法則性・規範性・社会的構構性などといったものを語るができるのだろうか、という問いが生まれる。

そこに、発達構図といった類の研究に関心が集まり、ピアジェやエリクソンなどの研究が注目され、一定の権威をもつようになってきた。

また、個人ドラマであることを前提にしつつも、個人が合わせるべき標準性を押し出すシステムのようなものが広がっている。私が長年やってきたストレーター・コースなどはその典型だろう。そのため、個人ドラマが承認され、それを遂行する個人責任がいわれながらも、標準に沿うことを求めるという矛盾が広くみられる。共同体や家族が営む生産・生活を軸に成立する社会とは異なる原理に立つ雇用システムが一般化した今日の時代は、個人の自由。多様性の原理を追求しつつも、標準像に沿うことを求める原理をも持ち、両者の対立を含んだものが、個人に強制されるという矛盾に満ちたありようをしているのだ。

以上述べてきたことを踏まえつつ、人生構図について考えていくと、相矛盾する二つのアプローチがあるこ

とに気づく。片や個人ドラマとして人生を描くものがある。個人の人生を素材にする小説などもその一つだろう。研究方法としても、個人への聞き取りなどナラティブ(物語)的なものを重視する流れに、それを見ることができよう。もう一つは、標準的なものを重視する。その手掛かりとして、平均的なものを統計的に明らかにする方法が広くみられる。平均的なものといいながら、アプローチする人の立場が反映し、規範的なものが忍び込みやすい。そして、その社会・時代に「あるべきもの」を設定しがちである。

※なお、単純平均ではなく中央値などで示すアプローチもある。

前者は、多様な人生を反映し、多様なものが生まれてくるが、それにもまた、その社会・時代のありようが反映してくる。

ピアジェやエリクソンが描いたものに代表される発達構図は、後者の流れの一つといえよう。かれらのものは、20世紀半ばから後半にかけての、経済成長期の欧米の生活や文化を基準にしているのではないだろうか。

また、人生構図を前提にして業務を進めることが多い医学は、身体という絶対的で自然的なものを背景にしているようでいながら、実は、文化的に近代欧米基準が投影しているのではないだろうか。

そうしたことを意識し、これまで作られてきたものを相対化するような、異なる人生構図を描いていけるだろうか。難しい課題であるが、時代。社会の変化のなかで、その課題を追求することが求められている。それは、時代・社会の課題でありつつ、そこに生きる個々人の課題でもある。

自然的なものと社会。文化的なものと個人的なものの三つがからみながら、宿命論的決定論的なものから自由な創造論として、人生構図を描くということになるだろうが、それはどうすれば現実的なものになるのだろうか。

1. 人生構図が焦点を当てる多様な面

第二次の人生構図シリーズだ。第一次では老を中心に考えてきたが、ここからは、人生構図全体について考えていこう。

人生構図の描き方には、人生の中にあるいくつかの面のどこに焦点をあてるかで、大いに異なる。その面には、次のようなものがある。

身体 働 学 収入と支出(または生産と消費) 人間関係 再生産(生殖) やりがい・いきがい
自己認識・価値選択

これらの面の各々のなかにも多様ないくつかの面がある。働を例にとれば、収入 労働内容 貢献(人間関係 社会 人類 自己)といった具合に、である。

これらのどれに比重をかけて人生構図を描くかで、様相が大きく異なっていく。人生の過程のなかで、どれが重要になるかにも大きな変化がある。

再生産(生殖)のように、10代半ばに登場し、50代ぐらいには比重をぐんぐん下げていき、消滅に至るものもある。

例を収入にとつて考えてみよう。月額で考える。

ゼロ → 学生アルバイト 4万円 → 就職 15万円 → 以後定期昇給を重ね、60歳で 50万 → 退職金 1800万円 → 再雇用などで 15万円 → 65歳ごろ以降 年金 15万円

これは、終身雇用制ルールに乗った人の場合だが、少数派だろう。

ゼロ → アルバイト 6万円 → 派遣社員 16万円 → 失業 ゼロ → 21万円 → 19万円 → 失業保険 12万円 → 保険切れ 0円 → 17万円 ～～～(61歳)16万円 → 年金 6万円

といった類の人も多そうだ。

ゼロ → 正規雇用 18 万円 → 結婚出産退職・被扶養家族 → パート 8 万円 → 共同で起業 12 万円～～
～18 万円 → 年金 6 万円
といった例もありそうだ。

こんな風に多様だから、老になってからだけでなく、かなり早い時期から個人ドラマとして人生構図が展開していく。

また、これらの面相互のつながり・連動、そしてズレ・対立が問題になることもある。働と学などは、学校卒業後直ちに就職し働の世界に移行を遂げ、その後 40 年前後、働の世界にいる人もあるが、働から学へと進む人、なかには、学→働→学→働とくりかえす人もいよう。

また、働・学と自己認識・価値選択との間で、葛藤を持ち、時にはさまよう人も多い。「今の仕事は、自分に合っていない」「自分探しをするなかで、進路を決めたい」といった具合に、である。こうしたさまよいがある年齢時期を青年期やモラトリアムなどといつて、限られた期間に特有のものにとらえることが、1960～80 年代には多かったが、近年ではそれには収まりきれないものが広く存在する。たとえば、長期の引きこもりの時期をどう位置付けたらよいのだろうか。

人間関係

2018 年 3 月 21 日～04 月 18 日

7. 初対面での自己紹介 話し役・聞き役

初対面同士は、自己紹介の言葉を添えて挨拶をするのが普通だ。その際に、名前・所属だけでなく、自己のウリを加えるなど、いかにアレンジするかが一つのポイントだ。

その際に、広く行われている形に沿った、いわばマニュアル型なのか、自分特有の創造型なのか、という違いは大きい。それは、出会いをその後どうしようとするかにかかわる。

業務上のつきあいになるのか、場合によっては、知人関係から友達関係につながるのか、ということも大きい。業務上の関係であっても、一過性のつき合いにとどめたいのか、その後も継続する可能性をはらんだものにしたいのか、では違いがある。

そこで、まずは必要最小限の自己紹介から始める。それは、マニュアル型であることが普通だ。そのマニュアル型もおざなりなものにするわけにはいかない。必要最小限のことを適切なマナーに沿って交わすことになる。また、マニュアル型でそつなくやることは、初対面の緊張を収めるうえで有効だろう。場合によっては、自己を隠す機能をもつだろう。

そうしたマニュアル型にもとづいた挨拶による一過性の関係にとどめないで、今後のつながりの展開を予想・期待する場合には、相手に自分を印象づけるものをしたい。自己のウリを付け加えて、いわば「売り込む」のだが、ウリといってもまずは一般的なことにとどめる。「～～を中心にやってきました。」「専門分野という、～～です」といったように、不自然な印象を与えない必要がある。もし、相手に関心をもって、質問したら、より詳しい話をするが、くどくならないようにする。自己紹介の場面では、その程度で、きちんとした話は、場を改めるものだ。

当然のことだが、自分の話だけでなく、相手に質問をして、相手を引き出すような会話も大切だ。それがあ

って、自分を売り込むこともできるというものだ。

こうしたやりとりをきっかけに、ある程度の相互関係ができれば、場を改めた会話が進む。立食パーティーなどの懇親会は、絶好の場だ。その際も、相互関係によるが、聞き役・話し役に分かれすぎないように留意したい。その際に、よき聞き役に、つまりは引き出し役になることを心掛けたい。

自己紹介場面にしても、懇談場面にしても、ただ言葉による会話だけでなく、しぐさ（ボディランゲージ）や握手などの触れ合い、また飲食物のサービスのやりとりなども、人間関係にとって重要だ。当然、笑顔などの表情も大切だ。さらに、一対一関係だけでなく、他のメンバーを加えるような誘いかけも大切だろう。

その場で交わす言葉にも、感性的なものや論理的なものを織り交ぜることが一つのポイントだ。両者ともうまく表現できることが人間関係での重要な要件なのだ。

また、だれかが声をかけてくるのを待つだけでなく、自分から積極的に声をかけることも重要だ。といっても、いつも誰かと会話している状態にあるというよりも、時々休憩したり、他者の会話を聞いたりして、多様なつながり（不つながり）をもつのもよいだろう。懇談会などで、誰かを独占するような状態は避けたい。

6. 初対面の際の距離・目線・姿勢・表情

人間関係をつくるということは、当事者同士がつながりあうことだ。人間関係づくりを狙いに含むワークショップでは、それをサポート・演出し、当人どうしの関係づくりへと展開することを促進する。

無論、当人同士がどういう関係をつくりたいか、ということがスタート時点にある。初対面同士であれば、その判断を保留し、「相手によりけり」となる。そして、もしつながりを作って関係をすすめたければ、「ゆっくり」とか「即座に」とかスピードはまちまちだが、関係をすすめる方向に行く。そうでなければ、「当たらず触らず」「避ける、逃げる」。

その「相手次第」で自己表示をどうするかも変化する。「閉じる」と「開く」の間には、多様なグラデーションがある。また、一対一と同時に、同じ場にいる他の人々との関係も視野に入る。

こんなことは当たり前だが、一応、確認しておいた方がいいだろう。これらを、それまでの体験にもとづいて判断する。人間関係がうまくなるというのは、こうした体験の蓄積が多く、初対面の場合でいうと、いくつもの選択肢をもちつつ、対応していくことができ、自分自身でゴーサインを出せば、関係を深める方向で動いていけるということだろう。人見知りや、そのプロセスにブレーキがかかるということだろう。ブレーキ機能をうまく働かせると同時に、アクセル機能をもうまく働かせようになっていきたい。

こうしたことは、初対面であれば、挨拶から始まって、どういう雰囲気をかもしだし、相互にどういう第一印象をもつかという形で始まる。

また、その出会いの際には、多様な面でのやりとりがあることも確認しておきたい。そのいくつかについて、並べていこう。

「距離（間隔）」 当人たちは意識していないことが多いが、相互間の距離は重要だ。30センチ、50センチ、1メートルでは、かなり異なる。

向き合って正対することが多いが、横向きで出会うこともある。横向きで出会って、向きを変えて正対することもある。

その際、同じ平面上であることがだが普通だが、片方が椅子に座って、片方が立っていると、雰囲気がずい

ぶん異なる。このように、高さも意味を持つ。身長の違いが大きい時には、それも一定の影響がある。

「目線」 それは、見下ろす・見上げるという目線のありようにつながっていく。お互いに相手の眼を見ることが多いが、それにも、1分間も視線を合わせ続けるのか、数秒なのか、チラッとみるのか、の違いも大きい。正対してきちんと相手を見よと、親や教師は躰けがちだが、そうでないありようも、人付き合いのバラエティとして持っているかどうかは、有用だろう。

「姿勢」 その際の姿勢にも注意を向けよう。やや前傾なのか、直立なのか、やや後傾なのかでは、印象や意味合いが異なってくる。手をどこに置くかも大きい。握手ができるように、手を相手側に向けるのか、手で何かの仕草をしながら話すのか、はたまた腕組み、後手にしているのか、あるいは、「気を付け」に近い形であるのか、それらは相手に与える印象を変えていく。そして、自分自身の気持ちにもかかわる。それらはクセともいえる要素が高いが、時には、それを意識し、適宜変えるのも、有用になることがある。

「表情」 微笑か真顔か無反応（むっつり）かは大きな違いを生む。その際の自分の表情がどうなっているかを意識していない人が結構いる。必要に応じた使い分けは人間関係上、有用だ。

5. 人間関係を育むワークショップでの会場配置

近年、「やさしさ」を渴望する人が多くなっているといわれる。そして、人間関係に波風が立つのを避けようとする傾向もある。そこで、人間関係の「空気を読んで」行動することが大切にされる。そのため、他人に対して、怒る・叱ることを含む強い要求を出すことにハードルを感じてしまいがちだ。できる限り「自分を出そう」としない人も多い。

そんな雰囲気のある所で上手くやっけていけずに、心のうちに閉じこもり、自分の感情を抑え込もうとする人も多い。また、誰かに頼まれたとき、「いやだ」「ノー」「お断りする」ことが下手な人も多い。

人間関係に生じる摩擦・すれちがいなどが人間関係を積極的に解決しようとはせずに、避けることが中心になって、人間関係を一層ややこしくする。「あたりさわりなく」になってしまい、人間関係の体験を縮小させていく。そこに生まれるのが「人見知り」だ。「人見知り」については、本冊子の中の「私流人間関係スタイルの12、人間関係経験が少ないだけなのに、『人見知り』性格だと決め込んで、人前で積極的にならない人」に書いた。なぜか、その記事はたくさんのアクセスをいただいた。それだけ関心事になっているということだろう。

こんなことを、ごく普通に見かけるようになる。講師の話をはたすら聞くレクチャ形式が多くなって、自分の感じたこと考えたことを行動しつつ出していくワークショップを嫌がる人が結構いる。

私のワークショップの参加者も、開始当時、緊張で固まっている例が結構ある。ワークショップの世界では、緊張をほぐすのをアイスブレイキングというのだが、私は、アイスブレイキングと参加者相互の人間関係づくりを兼ねた活動を、どんなワークショップでも、冒頭に行つてから、本題に入る。

※こうした活動を編集したものとして、「浅野誠ワークショップシリーズ2 人間関係」があるが、もう絶版状態だ。

では、人間関係を育むことを主眼とする場合の私のワークショップでの多様なアプローチというか、目のつ

けどころというか、そういうものについて書いていこう。

まず、人間関係を育みやすい会場配置。

いわゆるスクール形式、つまり一斉の前向きで、講師の顔は見えるが、参加者相互の顔は見えないし、参加者相互に話し合う位置関係、共同作業をする関係が作りにくいものだが、それを改めることから始めなくてはならない。

椅子・机を使うなら、参加者相互が向き合う位置、たとえば、全体を一つの円形にする。グループ単位の活動を多くするなら、グループ単位に、円形または向かい合う形にする。

私の場合の多くは、会場の周囲には、円形に椅子を並べるが、中央にできた広場を活用することが圧倒的に多い。円形であれば、全体でも、グループ単位で丸くなっても、多様な活動がしやすい。

プレゼンする場合でも、中央ステージに出ることはしない。円形のままで、プレゼン者がいる場でやってもらう。円形なら、どこからも見える。

参加者の高さも重要だ。床面に座ったまま、椅子に座る、立ったまま、というように高さを多様に混ぜるのだ。

その時、進行役の高さも重要だ。できるだけ、参加者と同じ高さで進めたい。

4. 人間関係の苦楽 タテ関係とヨコ関係

人間関係づくりには、楽しい面とつらい面とがある。同じ一つの人間関係でも、この両方を伴うことも多い。たとえば子育ては人間関係づくりの要素があるが、これには喜びと苦勞が相伴う。

また、人間関係作りには、自分一人で対処しなくてはならないこともあるが、多くは、いっしょにかかわりあう人、いいかえると共有する人がいることが多い。そこで共有する人同士の間関係がポイントになる。

それには、大まかに言って二通りある。一つは、タテ関係の色彩が濃いもので、一方が指示命令し、他方が従うというものだ。上下秩序が強い組織の場合、家父長的色彩の強い夫婦・親子の場合、権威主義的色彩の濃い教師・生徒関係の場合、いじめを発生させやすい仲間関係の場合などいろいろとある。力が異なる者同士がつくる人間関係はそうなりやすい。そこでは、強者がもつ喜怒哀楽を弱者にもあわせもたせようとする。と同時に、そのタテ関係自体が両者のおのおのに喜びや苦勞をもたらす。

対照的なのは、ワークショップの参加者相互の関係のように、対等平等のヨコ関係をつくるものだ。そこでは、苦樂を共にするという面が強くなる。民主主義感覚の強い人は、ヨコ関係を求める傾向があるだろう。そこでは、人間関係づくりをすべて自分でやるというのは大変なので、他の人に頼りつつ広げ深めていくと、そのうちに自分らしいものができあがると考える人もいよう。なかには、人間関係そのものが薄くて孤立しがちな人もいる。また人間関係でつまづいて、引きこもりがちな人もいる。

といっても、タテは苦で、ヨコは楽というものでもない。孤立・ひきこもりが楽だというわけではない。ヨコ関係は、自分なりに責任をもつて行動する必要があるので辛いと感じることが多く、強いものに従いさえすればよいタテ関係の方が楽だという人もいよう。

民主主義的なものを願って追求する傾向が強い社会——現代はその傾向が強い——では、予め決まっている人間関係というわけではなく、自分で人間関係を作るという要素が高いが、そのなかではヨコ関係を望み、タテ関係を減らしたいという傾向が強くなる。

といっても、タテマエとして対等平等なのだが、実質的には、力の差で上下のタテ関係を作ってしまうことは多い。強力な支配やシステムがあるところだけでなく、競争的關係が高い比重を占めるところでは、そうしたものができやすい。会社などの業績競争だけでなく、スポーツや学業成績の世界でも、おうおうにしてそうした事例を見ることが多い。そうしたところで弱い位置に置かれた場合、苦勞が絶えない。

そうした傾向が強いところでは、自己の安全安心が保てないと感じる人がいる。そして、違和感をもち、距離を置く人、逃げ出す人が生まれてくる。そこで、こわい人がいて、安全安心がおびやかされるなら、避ける・逃げるのも一つの在り方となる。

3. 物語回し 苦手な人との付き合い方

もう一回、私のワークショップでのことを紹介しよう。

定番の一つに、物語づくりがある。数人グループで輪になって行う。誰かが作り話を右(左)隣の人にまわす。受けた人が、その話につながる話を作って、隣につなげていく。こうしてグループ内で2～3周以上回っていくと、大変面白い話がでてくる。

どんな話でもかまわないが、ワークショップ参加者の特徴がにじんでくることが多くなる。たとえば、今朝6時に起きました →朝食をとつていると、突然電話がかかってきました →なんと、会社の警備員の方で、荒らされた形跡があるので、急いで出勤してください、というのです →朝食をやめて急いで出勤する →荒らされた後を見ると、人間の仕業とは考えられません。動物? →

最初は、話をつくるのに戸惑っている人も、だれかが話を面白くしはじめる頃、笑いが広がり、悪乗りして、とんでもない話を作る人もでてくる。パスする人も当然いる。そして3～4週目ぐらいになると、大河ドラマの感じがでてくる。

決まったパターンでの生活に慣れている人には、物語づくりは大変かもしれないが、発想の転換、気分の転換で、大受けになることがしばしばだ。この活動をとおして、頭を柔らかくして、次の活動の準備体操的效果を生み出す。

これらの活動で出会った人との間で自己紹介を含めることもする。その自己紹介に、自分のウリを一言添えるとおもしろくなるし、相手を覚えやすくなる。

サッカーの得意な○○です。緊張するのが得意な○○です 真面目人間だと思っている○○です
といった具合だ。

この活動を通して、自己肯定感を高めたい。

人間関係がテーマのワークショップでよくやるのが、「苦手な人との付き合い方」を発見する活動だ。

参加者一人ひとりに「苦手のタイプの人」を大判ポストイットにマジックペンで書いてもらう。それを床に並べる。人気投票をして、カード数を絞る。絞ったカードのなかで、一番関心があるカードに集り、グループをつくる。「苦手のタイプとつきあうアイデア」を、自分のグループだけでなく、他グループについても、いくつか書いて、該当グループに渡す。グループごとに、集まったアイデアのなかでもっとも役立ちそうなカードに絞る。そのカードを書いた人が他グループにいれば、アドバイザーとして招く。そこで、「苦手な人との付き合い方」の作戦を1～3に絞り模造紙に書き、それを参考にして演技を作る。

それらをもとに、プレゼンする。

いろいろなアイデアが集まり、人付き合いの知恵が広がる。そのなかで自分にもできそうなアイデアをパクって使う。

人間関係について、一人の講師の話聞いて考えることもいいが、多様な人から多様なアイデアをもらい、自分に合うものをパクる方が、ずっと役立つものだ。

2. 身体をとおして伝えていく

前回書いた「挨拶言葉尽くし」には、続きがある。

「言葉での挨拶をしましたが、今度はからだを使って挨拶をしていきます。ボディランゲージとっていいかもしれません。先ほどと逆回りでいきましょう」

ということでスタートする。

おじぎ 握手 肩たたき 頭なで 手をあわせる ハグ などといろいろと出てきて、楽しい雰囲気が広がっていく。

こんな活動をすることもある。一つの大きな輪をつくって、私から握った手を通して信号を送る。その信号が左から左手を通して伝わってくれば、右手で右隣の人に同じ信号を送る。私からは、右側にだけでなく、左側にも信号を送る。ときには、波状的に送る。信号は、「一回ぎゅっと握る」「握った手を引き下げる」「手のひらを指で3回くすぐる」といった類だ。

送った信号が、一周して私まで戻ってくれば、すごいことだ。たいていは途中で消えたり、大変化を遂げて戻ってくる。正確に戻ってくることは少ないが、それで結構だし、それが大きな笑いを引き起こし、楽しい雰囲気を高める。

これらは、身体接触を通したコミュニケーションだ。こんなことは、幼児期には日常的にやったし、10歳ごろまではごくありふれている。大人も時に活用する。それらが人間相互の大きなコミュニケーション手段になるのだが、それらが過剰に少なくなっている現代人も多い。なかには、他人と身体が触れること自体に恐怖を感じる人もいる。そんな恐怖めいたものがあるなら、これらの活動は、それを徐々に溶かしていく。

こんな基礎的なコミュニケーションとか人間関係とかいったものを回復させ、伸ばしていくことが、これらの活動で出来る。

私のワークショップでの定番のスタート活動は、「ジャンケン列車」だ。これは、出会った二人でじゃんけんをして、負けた人が勝った人の後ろにつき、さらにジャンケンを重ねて列車をつくっていき、やがて一つの大きな輪になるものだ。輪を楽しく作るのに最適な活動だが、これまた身体を通してのコミュニケーションの一種だろう。

もう一つ紹介しよう。一列に並ぶ活動だ。

「自分が好きな動物の大きさ順に一列にならんでください」と声をかける。すると、出会ったもの同士で、動物の名前を言い合って、一列にならんでいく。犬同士になったら、種類を言い合って大きさ順に並ぶ。その会話が、話すきっかけとなっていく。

一列ができたら、半分で列を切って、片方を移動させて2列を向き合わせ、向かい合ったもの同士でペアを作る。ペアで、「その動物が好きな理由」をお互いに聞きだす。

「相手の話が面白くて、自分だけに取っておくのがもったいない人」の話を、全体に向かってしてもらおう。自分のことを話すには抵抗があっても、人の話を紹介するのはやりやすい。並ぶ順には、こんなものもある。

好きな果物の大きさ。今着ている上着の濃淡順。性格の派手ー地味順。

こんな楽しい活動を通して、知らない間にいろいろな会話が成立し、体験を積み重ね、人間関係が広がっていく。初対面でも、再会したような印象をもつこともある。

1. ワークショップの初めにする人間関係づくり

21回にわたって連載してきた「私流・人間関係スタイル」の第二次版だ。

はじめに、私がしているワークショップでのことを書こう。どんなテーマのワークショップにせよ、参加者相互の人間関係をつくり、ワークショップを盛り上げるための雰囲気づくりのための活動を、最初の10～20分ぐらいする。そして、その活動の中に当日のテーマの中味を織り込んでいく。テーマを口頭で説明することをできるだけ短く、できれば2～3分にとどめ、最初の活動で、そのワークショップのテーマを体感してもらおうのだ。

大学の授業でもそうだし、最近連続して担当している学童保育指導員の研修ワークショップでもそうだ。

その際、参加者には、こんな雰囲気のワークショップなら楽しくやっていけそうだなと感じていただくのが普通だが、自分の「素(す)」や考えを出さなくてはならないのかと構えてしまう人もいる。「人見知り」だと自認する人には、他の参加者と話すことに大きな緊張を感じることも多い。そんな人には、「そのままかまわない」というメッセージを送りながら、自然に参加者相互のやりとりを馴染んでもらうようにしている。

その一つは、「パスあり」「パス歓迎」だ。

たとえば、ワークショップのはじめのころにやる「あいさつ」の活動。全体で大きな一つの輪を作る。「私から始めて、右(または左)隣の人にあいさつを送っていきます。順々にいきますが、前に出たものでない挨拶を送ってください。順番が後ろの方の人は、いくつか挨拶言葉を用意しておいてください」といって始める。

こんにちは はじめまして よろしく やあ はいたい ハロー 緊張しますね 元気そうですね
といった具合だ。

しばらく進んでいくと、新しい挨拶言葉を思いつかなくて、止まってしまう人が出てくることが多い。その時、こんなことを言う。「パスあり、ですよ。もし3人連続してパスが出たら、この活動は終了です。他の活動でもそうです。」

そして、「パス」という人が出たら、「パスをいえるなんてすてきですね。なかなかパスといえないものですかね。」という。

こんな風にしてパスを促進し、うまくできないことを表明することをほめる。

この活動を「挨拶言葉尽くし」と名付けているが、3人連続パスでなくても、1～2周したら終わる。そして、「いろいろなあいさつがありますね。他の人がいった挨拶の中で気に入ったものがあったら、パクって、次から使ってみてください。」と話す。

私のワークショップは、こんな風にして始まることが多い。スタートして10～20分もすれば、緊張も解け楽しい雰囲気ができ、参加者相互の関係ができ、親しささえ感じる人も出始める。

個人ドラマとしての人生構図と老

2018年03月14日～2018年01月27日

7. 老についてのいくつかのこと

老をめぐって思いついたことをいくつか並べよう。

「あるがまま」を受け入れる 若いということは、システムに従属馴化して生きるという面があるとともに、そうした自己を破壊し、脱皮して新たな自己を創造するという面をもっている。

老になっては、システムの一員という面が薄れていき、「自立度」を増すという面がある。と同時に、その過程で生まれる成功と苦境のはざまのなかで、いやおうなしに生まれる「あるがままの自己を受け入れる」などの面が強くなる。無論、自己破壊、自己脱皮、自己創造がないわけではないが、なんといつでもあるがままの自己を受け入れることが求められる。「どうあがいてもなんともならない」ということが増えてくるのだ。

生と死 老が進むと、生も死と隣り合う存在になっていく。だが、生も死も絶対的固定的な実体があるわけではなく、流れであり過程なのだろう。しかも、自分自身が関与するというか当事者なのだ。だから、それらをいかに受け入れつつ、それらに対応していくかが問われていく。

断捨離 老前整理 断捨離が流行語になって久しいが、それは、大量生産大量消費社会という20世紀後半の社会状況の中で生まれたことに対する個人としての対処である。大量消費→大量保存を、「思い切って捨てる」イメージなのだ。買ってしまった不要物を処理するのだ。ある種の不道徳を伴う。20世紀中ごろまでの物不足時代の人にとっては、受け入れにくい行為だろう。

これに対して、老前整理とか生前整理とかいうものは、自己の人生をまとめあげ、残された次の世代に有益なものを残す営みといえよう。だが、それは、次世代との感覚のすれ違いを生むこともあろう。その際、受け取るかどうかは、次の世代の意思と判断による。押しつけにならないようにする必要がある。

だから、ゆっくりと年数をかけてやるものだろう。やりながら、自己の人生を振り返り総括するものにしていきたい。

スピリチュアリティ 死をはじめとする不明のことへの不安・怖れ(畏れ)から、老になってきて、絶対的なもの、権威に依存する。すぎる人も多い。その一つとして宗教がある。私は、そうしたタイプではなさそうだ。スピリチュアリティ=あの世・靈魂の問題というわけではなく、自然(宇宙)。社会。他者。自己の存在の意味・価値を感じ考え行動する事だと私は思う。これらについて知ることも必要だが、知ることに過度の比重をかけるものではなかろう。感じるという事を大切にしたいと思う。そうしたことを感じやすい時期として老があるのかもしれない。

6. 私の老のスタートと老のとらえ方

ここで老のスタートについて、私の例を書こう。

まずエピソード的なものを並べよう。

50歳 子どもの巣立ち

51, 2歳 「人生午後の会」に参加 「人生後半期の人生創造」を語り始める

53歳 大病

- 54歳 初孫
- 56歳 退職
- 57歳 転地 沖縄生活
- 61歳 年金受給開始
- 65歳 前期高齢者
- 67歳 回復した体力のピーク
眼・耳など加齢に伴う身体変化を意識

前回述べた創造型への挑戦は、50代に入るところからしているが、それは「人生後半期の人生創造」として始めたものだ。53歳ごろの大病からの回復過程は10年余りかかり、回復した体力は67歳ごろピークに達した。そのころから、「老」と一緒に暮らしていこうという気持ちになった。それ以前は、「老」というよりは「人生後半期」を考えるとというものだった。

前回述べた喪失型の意識は50代半ばにピークがあり、徐々に下がっていく。下がっていった、それを意識しなくなったところに、「老」の意識へと取り代わっていったという感じだ。

そのころから、「老」を「熟」という視点から考えようとし始めた。詳しくは年末年始に書いたブログ記事を参照されたい。そこで書いたことを再掲再論すると、

- ・老いは熟することであり、「老いてかつ若い」ということの新たな見方としたい。
- ・私の場合、それは垂直思考（論理型）よりも水平思考（発散型）の比重が年々高まっている形で表れている。
- ・人生の経験・見聞が広がり深まり熟し老いてくると、頑固になり固定した見方になるというステロタイプの老人観があるが、そうだろうか。少なくとも私については、かなり異なる。

いろいろと見てくると、多様な目で見られるようになってくる。それだけに、標準とか基準で括るのに対する嫌悪感が深まる。若いころからそうだったが、学生時代や研究初心者のころは、標準に囚われがちだった。老いてくると、束縛するものが減り、ますます自由になってくる。

・幼少イメージは、当事者よりも過去の当事者が語ることが多い。老イメージを未体験者が語るには困難がある。老イメージは、当事者と未体験者（若い層）とは異なる。老を避けて語らないことをどうするか。若さを前面に出して、老と向き合うのを避けるのもその例だ。

・70代前半になった現在、人生後半期の生きかたについて、50代への呼びかけ、60代への呼びかけを発していこうと考えている。人生前半期の延長として後半期のありようを考えるのではもたないからだ。人生の再構成が迫られるのが通常だ。それは、前半期に過ごしてきたシステムから卒業する、ないしは距離を置くということであり、惰性で過ぎていくことを止めるということである。

5. 死と健康寿命 老のドラマ 喪失型と創造型

連載3の初めに書いた「終わりの方」について考えよう。「終わり」も簡単なようで簡単ではない。まず寿命には、死と健康寿命の二つが語られることが近年の特徴になっている。

健康寿命の終わりは、平均して男性71歳、女性70代後半とニュースでは書かれる。死と健康寿命との間には、平均して10年前後の期間があるが、人によっては0年から20年以上という大きな幅があり、まさに平均で捉えられるよりはるかに個人ドラマだ。

その期間のありようには、大きく分けて2種類ある。身体運動上介助なしには生活できないものと、認知症など、当人の認知能力がそれまでのような形とは大幅に異なるレベルにあるものがある。

そして、その期間にも、大きなドラマが、まさに個人ドラマとして進行する。ドラマは、仮に10年が一サイクルとすると、平均0～2ドラマが展開することになる。3ドラマもなる人もいよう。

しかも、この個人ドラマは、当人だけでなく、取り囲む人々とのドラマと同時進行する。ドラマには、脚本演出と役者の二つの要素があるが、それらが複雑にからみあう。当人が役者で介護者が脚本演出担当だとは限らないのだ。

この期間を含めて、老の時期をめぐる個人ドラマのテーマ・内容といったことを考えていこう。

まずスタート時点においては、退職に伴う勤務先、巣立ちに伴う子どもからの分離、熟年離婚に伴う配偶者からの分離、大病などがある。それらには、束縛から自由になる、「過去」から自由になるという場合がある一方で、「捨てられる」(放り出される 強いられる)面が強い場合もある。

この新たなドラマの開始には、演ずる役割だけでなく、脚本演出も本人という役割が求められることが多い。もし脚本演出ができないとなると、何か他律的なものに依存するしかない。社会的慣習に従う、平均的動向に従う、流れのままに進む、といったことになりがちだ。それらを拒否して、老年期に入ること自体を拒否し、「生涯現役」でいようとする人、「現役時代」の職場、ないしは類似の職場とのつながりでやっていこうとする人も多い。

そうしたドラマのテーマには二つのタイプがありそうだ。一つは、喪失型ないしは収縮型である。過去の栄光を継続させようとする(しがみつく)場合には、そうならざるを得ないことが多い。タテ型の権威支配を継続して保持しようとして、現役から嫌な顔をされる例も多い。そのことで、ますます喪失による落胆が生じてしまうことさえある。

もう一つは、創造型であり、新たなドラマを作ろうとするものだ。それまでの蓄積を生かしつつ展開することもあれば、心機一転で、マイナス面を放棄して、新たな舞台に入ろうとする人も多い。

4. 会社人間を終えて、個人・市民、自営業者として生きる

定年退職を事例として、老のスタートについて考えたい。それは、会社人間・組織人間を終えて、個人・市民として生き始めるということでもあり、自営業としてのスタートでもある。かなりオーバーな表現と思われるかもしれない。でも、所得税について考えてみると、会社時代には源泉徴収だけですんでいた人が、退職後、確定申告をすることになって、そのことに気付かされる人もいだろう。その際、職業欄にどう書くのだろうか。「無職」「年金生活者」「パート」「非常勤職」などと書くのだろうか。健康保険が、自営業者が加入する国民健康保険に変わる人も多いだろう。

このように、自営業者の「仲間入り」をしたにもかかわらず、それを意識しない人が多い。会社人間・組織人間であった時期を引きずって、退職後も「過去の習慣や実績」を継続させようとする人が多い。切り替えができないまま長く生きる人もいそうだ。

その背景には、終身雇用制の職場で勤めてきた人が日本には多いことがある。7, 8年前にフィンランドでインタビューをした際に、5年単位で職場が変わったり、学校通学にしたりすることがごく普通にあるという話を聞いた時は驚いた。フィンランドでは、幼稚園から起業家教育をすることも語られた。そして、退職後だけでなく、休職期間中の生活保障もきちんとしているだけあって、会社人間的ありようの人が多く日本とは大きく事情が異なる。

日本にあっても、終身雇用制でない職場をいくつも経験してきた人の受け止め方は随分異なる。私の近辺で

は、一生一つの職場で終えた人は珍しい。そうした人は、「定年退職」前と後との断絶は少ないが、終身雇用制がモデルにされることで、転職してきた人のありようが陰に隠れているといえるかもしれない。

こんななかで、終身雇用制の会社にぶらさがった生き方を、退職後も続ける人が多く、個人・市民として自営業者として人生後半期を生きるありようへの構えが弱い事態がつくられたといえるかもしれない。

無論、退職後も多様な組織とつながって生きることはごく普通だ。だが、「会社人間」的な人が、「会社」に包まれて、ぶらさがって生きるありようができるほどに新たな組織につながるわけにはいかない。どんな組織とどのようにつきあうかは、当の個人・市民・自営業者としての判断によって大きく左右される。「会社人間」的習性が強い人は、何かの組織に依存できてホッとすることもかもしれないが、その依存期待に相手の組織が応えきれないので、空白感をもつかもかもしれない。転職経験者は、組織を絶対的なものとイメージせず、距離を保ちつつ適度につき合うことを体験的に知っている点で、事情が異なる。

3. 老はいつ始まるか 「区切られる」から「区切る」へ

「老はいつ始まり終わるか」への答えは、終わりの方は死だとすれば簡単かもしれない。でも考えてみると、それほど簡単ではなさそうだが、ここではまず始まりの方について考えよう。

まず身体的衰えに気付いた時というのが、わかりやすく見える。たとえば、男性女性ホルモン減少に伴う更年期症状が出てくる頃というのが考えられるが、平均寿命が70歳に満たない戦後まもなくまでならともかく、いまどきでは、更年期以後30年ほどと長くなる人が多く、現実的ではないだろう。

足腰の弱りに気付いた時というのもあろう。階段をさっさと上れない時、走らなくなる時、立ち上がる時に「よっこいしょ」とつぶやいた時、・・・

他人からの声掛けで気づかされる時も多い。たとえば、電車で席を譲られた時。病院で、「加齢によるもの」といわれた時。身体測定で、「〇〇歳相当」といわれるが、その際「60歳」「70歳」といわれた時もその一つだろう。骨密度、脳年齢、などいろいろとある。私が毎日のっている体組成計によると、私は46歳と出る。以前、脳年齢が50歳、骨密度20歳と出たときがある。ほとんどが実年齢より低く出るので、「おだて」の数字のような気がする。

子どもから「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれた時もそう。孫ができた時もそうだが、最近では、50代の時にできた孫にそう言われても、老を実感しない人が多いだろう。

これらにいつ出会うかという、まさに個人ドラマで、大変多様だ。早い人は40代で出会うが、遅い人は60代になってもまだの人も多い。

対照的に、社会制度による区切りは、個人ドラマを認めない。勝手に「有無を言わず」やってくる。たとえば定年。定年後再雇用期間の終了。年金支給開始。前期高齢者。後期高齢者。それらに伴って配布される健康保険証。

これらは、年齢できちんと区切られている。飛行機のシニア割引とか、映画館の割引などは、いろいろな年齢区切がある。ある植物園で98歳から割引というのがあって、驚いたことがある。それらの割引で喜ぶ人だけとは限らない。むしろ不満を感じて拒否＝辞退する人もいる。

それらは、一律に区切られると感じるものだ。それとは異なるものとして、当人が自ら区切るものがある。「区切られる」から「区切る」へと転換するのだ。「老」がかかわるドラマのスタート時点を自分で判断して区切るのだ。主体的な区切りであるが、たとえば、希望退職、子どもの巣立ち（子育ての完了）、配偶者との

離別などのきっかけがあろう。

私の例でいうと、定年70歳の職場を56歳で希望退職した。しかし、その時は老への区切りというよりは、新たな人生への区切りのつもりだった。「区切られる」前に、積極的な区切りを自らして、次の人生ステージを創造していこうという気概だった。そうした事例は、たとえ定年退職であっても、「第二の人生のスタート」と語る人にも相通じるものがある。なかには、死ぬまで区切らないで、「万年青年」を自称する人、あるいは「生涯現役」を自称する人もいる。「生涯現役」は、最近では、政策的に誘導されている感じさえあるが。

2. 個人ドラマとしての人生構図

前回述べた他者や平均・標準との比較が余りにもあふれているので、それにうんざりして、「余計なお節介だから、ほっておいてほしい」と思う人は多い。自分なりに思う道を歩みたいと考える。「そんな画一的なものにあてはめてどうなるの」と反論する人もいよう。

そこで、個人差が大きいものを考える際に登場するのが、連載タイトルのもう一つの言葉の「**個人ドラマとしての人生構図**」だ。出生から人生構図を始める場合には、共通なものの平均的標準的なものが通用する割合が大きいとしても、老の時期については、通用する面がとても狭いのだ。まさに人それぞれなのだ。

たとえば75歳では、こんな風になるのが普通ですといわれても、個人個人で全く異なり、普通にあてはまる人の方が少ないだろう。寝たきりの人もいれば、仕事で繁忙な人もいる。男女の違いも巨大だ。

だから、平均や標準を考えるよりも、個人ドラマを考える方が、はるかに適切だし有用だろう。どうしても平均・標準を考えたいというなら、出生以来の年齢を基準にするよりは、寿命からの逆算の方が、まだ通用しやすいだろう。たとえば85歳寿命の人が75歳の時は、10歳になるのだ。それを♣10歳と呼ぶことにしよう。

難点は、寿命を個人レベルで明らかにすることできないことにある。正確には寿命が尽きてからしかいえないのだ。日本人の平均寿命の84歳をもとにして、75歳の人は、♣9歳ですといっても実感がわきにくい。でも医師から「あと何年です」という余命宣告を伝えられ、その期間を有効に過ごそうとする人が結構いる。その際は切羽詰まった実感がある。でも実際には、余命期間の幅は大きく、長くなってしまう人も多そうだ。

その余命宣告を医師によってなされるのではなく、病がなくても、自分で自分にするのもいいと思うが、いかがだろう。私自身の例をとろう。現在の健康状況と両親の寿命（母は存命中）から探ると、20年前後になりそうだ。つまり♣20歳だ。それに、プラスマイナス15年という幅を加えれば、当たる確率は90%だろう。プラスマイナス10年とすると、確率は70%ぐらいかな。そんなの、根拠に乏しいといわれるかもしれない。だけど、現在の医療で使われる余命宣告も、統計的なものであって、根拠はそれほど強力なものではない。確定的なことがいわれるよりも、そうしたファジーなところが面白いのではないか。

こうしたことを、老人自らやって、「残り」の人生の充実をはかるのは前向きで有益ではなかろうか。だが、「残り」の人生という表現、あるいは「余命」という表現はまずい。「残り物」「余りもの」「つけたり」という不要物に近い表現だからだ。その時期も本格的人生の一環でありたいものだ。

このようにして、老人自ら♣年を設定して、その期間に充実した個人ドラマをつくるような人生構図にしたいと考えるのがいかなものだろうか。

1. 人生構図を老から語る

「個人ドラマとしての人生構図と老」という連載タイトルで、人生構図について考えるわけだが、このタイトルには、人生構図が二つの言葉を伴っている。その説明から始めよう。

まず、「人生構図と老」について。

人生構図についての論は無数にあるが、そのほとんどが出生から始める。乳幼児期→少年期→思春期→青年期・成人→壮年期・中年期→老年期という流れをたどり、最後は死である。この構図の前半に焦点を当てる時、人生構図ではなく発達構図とか成長構図とかいうことも多い。いずれにしても、時間順で語る。そして積み上げ方式で、階段を上っていくイメージである。

だが、老年期になれば、そのイメージだけだと上手くいかない。なにせ上っていくというよりも下っていくわけで、衰えもする。それだけに老・下・衰などへの拒否反応も根強い。そこで出てくるのは、「若さ」信仰に伴う営みだ。衰えないように努力し、実年齢より若く見えることで喜ぶのだ。そんな努力を応援する商品が巨大市場をつくっている。ブームになっているのは、売りやすく利益を出しやすいからだろう。そのため、悪徳商品にだまされる人も多い。

ここで私は老ないしは死からさかのぼって考えることをしてみたい。そのやり方を、どこかで見たことがあるが、思い起こせない。その一つのやり方として、老から振り返るものがある。振り返ることで見えてくるものは大きい。そのことで、当人自身が豊かな捉え直しができるだけでなく、周りの人々にも豊かなものをもたらすともいえよう。それだからこそ、自叙伝・半生記の類を残す人も多いのだろう。

しかし、そのやり方には一つの弱点がある。まず誰にもあてはめられるような共通の構図が作りにくいことである。〇〇才で第二次性特徴が出てくるというようにわかりやすいものが多い出生から始めるものとは対照的だろう。死には突然死もあれば、長い療養生活を経るものもある。老の年齢時期にしても多様で、個人差が大きい。個人差の大きさは、老だけにとどまらず人生後半期全体にわたってもいえそうなことだ。たとえばいつから中年になったかは、人によって大きな違いがある。30代半ばからの人もいれば、50歳ごろからという人もいよう。中年とは何だ、ということさえある。

それでも、〇〇才では更年期症状が出やすいといったように、平均的なもの標準的なものを示す動きは大きいし、それと自分とを比べて一喜一憂することが広く見られる。健康関連市場の宣伝では、個人差が大きい商品効能を、「〇〇才の人が〇〇才に見えます」と大量発信し、販売意欲をそそる。それだけだと間違った情報を流したとあって、関係当局からお叱りを受けるというので、広告を見る人が気づかないほど小さな字の断り書きで、「個人例です」と書き添えてある。

出生からの構図にも、そうした事例をよく見る。他者や平均的なもの標準的なものと比較することが日常化している人が多いのだろう。隣の子どもがこうしているから、私の子どももこうでなくっちゃと考えてしまうのだ。

乾他編『危機のなかの若者たち 教育とキャリアに関する5年間の追跡調査』東京大学出版会 2017年を読む

2018年01月11～13日

その1

本格的専門調査に基づく大部の書籍だ。5年間にわたって全国各地の千人近くの同一の若者を追跡調査した

ものだ。近年この種の調査が試みられはじめたが、これだけの質と量をもつものは初めての印象だ。しかも、労働、家族、地域、学校、意識と人間関係と多面にわたっており、若者が何を感じ考え生きているかをつかみ考える上で、重要な踏み台を作ってくれる。

これまで想定されていたものと同じ結果になるもの、異なるもの、分け入って分析すると新たな発見があるものなどと興味深いものが続出だ。

ここでは、注目したり気づいたりした2、3だけ紹介しよう。

「処遇やキャリア形成にかかわる格差が拡大し、雇用の不安定さが広がれば、不利な条件に置かれた女性や非正規の若者を中心に、仕事への不満やモチベーションの低下をもたらし、仕事へのコミットメントや生産性の基盤を掘り崩す怖れがある。しかしながら、(中略)女性や非正規の若者を含め、彼らを労働市場につなぎとめ、「やりがい」や「手抜きをしない」働き方を調達し、実際にハードな労働や重い責任を受容させ、それを年々昂進させる強力な「包摂・統合」のメカニズムが機能している」p 74
 「「やりがいの搾取」というような状況が、「強制」か「自発」かの区別がつかないような形で、若者をからめとって仕事への拘束性を強めていることが重要であり、それゆえに多くの若者の側では、報われない労働にも、「強いられた」ことを意識せず、「自発的」にのめり込んでしまう。」p 76

注目すべき調査結果である。やりがい論と自己責任論の隆盛のなかで、こうした捉え方が若者に広がっているようだ。

本調査とは直接にはつながらないことだが、私の一言。

どういう職業・仕事をどのように行っていくかより、どういう就職をするかに焦点化してしまい、もっぱら就職に関心を向ける風潮が強い。就職活動をする学生や求職者たち、さらには保護者や学校、さらには諸統計もそうした構図に強く縛られている。しかも、新規卒者の就職に焦点化される。転職がごく通常であるという感覚を欠いているために、転職を低く評価する傾向があるし、さらに起業を含めて自営業を無視する傾向は根強い。

就職に焦点をあてるため、就職先の会社に焦点化し、まさに就社となり、仕事内容が会社内部に閉じられてしまい、ブラックなありようをはびこらせているといえないだろうか。

私が住む地域で、まわりの60代にいたるまでの成人たちを見渡すと、ここ数十年の間、いくつもの雇用先を経験する人が多い。そこでは、人は会社にとりこまれてはいない。会社への就職から、仕事を分離してとらえるありようの追求を期待したい。

次は、就職と地域移動についてである。

「「地元」を離れることに対してネガティブな予測をもち、移動という選択肢を放棄することで就業機会の限定という結果を招いている状況」p 201

「高学歴者のように「遠く」に移動することで安定したキャリアを獲得するのではなく、高卒層は「身近な」地域のなかで移動することで安定した初期キャリアを築く可能性を高めているのかもしれない。」p 210

ここ数十年は大きな移動の時代であった。近年では海外まで選択肢を持つ人も増えている。他方で、大卒も含めて地元志向が強まっているようにも感じる。今後どうなっていくのだろうか。



その2

ここで沖縄に焦点をあててみよう。沖縄でも、1990年代から新規学卒者のストレートな就職を「標準化」する発想が強まり、就職に焦点があてられてきているが、今日なお、というか益々県内就職希望が圧倒的に多い。

「沖縄の若者は全国と比べ相対的に低学歴者が多く、就労状況を見ても不安定で、高い非正規雇用比率や失業率、低収入等の厳しい状況の中におり、結果、不安定な移行をたどる若者が多い。これらは沖縄に経済的に困難を抱える若者が多く存在することを意味するが、それは将来の収人不安を抱える者の比率の高さとして現れていた。にもかかわらず沖縄では将来の生活全般の見通し、結婚などの見通しに不安を抱える若者が全国より少なく、とくに男性は、全国と比べ明確に高い結婚見通し意識を示していた。ここでは、そのような見通しを支えるのが、おそらくその豊富な表出的関係であることも見えてきた。また、全国ではとくに不安定就労を続ける早期・非正規男性が人間関係を縮小させ、結婚の見通しを持たずにいたが、逆に沖縄の同層は表出的な人間関係が豊かになり、結婚を見通す者を増加させていた。以上から沖縄の若者、とくに男性が、不安定さ、経済的困難の中であってなお、不安定就労継続層も含め結婚など将来を見通そうとしている姿が浮かび上がり、またそれを支える人間関係がある可能性を見ることができた。」 p 225

これらは、沖縄に生活している人々にとっては、日常感覚で受け入れられる調査結果だろう。しかし、他府県の人たちにとっては、これらは注目すべきことであるし、逆に、他府県のありようを問い直すきっかけを与えそうだ。

その人間関係にかかわる章も興味深い。男女差について次のように指摘する。

「総じて女性の方が、人間関係が豊かで安定的であり、男性の関係性は、学歴や就業形態といった状況による影響を受けやすく、また関係性から疎外されやすい。属性や境遇の不利と関係性の弱さが連動する可能性が高いと考えられる。もう1つの男女による顕著な違いは、親との関係である。女性の場合、頼りにする人間関係に一貫して「親・保護者」を挙げる場合が多く、20代前半でも親との関係が重要な意味を有していると考えられる。」 p 356

「現在の生活や将来に対する肯定的積極的な意識の背景には、概して関係性の豊かさがある」 p 358
当然視されそうな指摘だが、改めてその意味についてのとらえ直しが必要なように感じる。

以上膨大な指摘のなかのほんの少しだけ紹介してきたが、これらの指摘は、沖縄のユニークさを浮かび上がらせてもいる。現在私は、南城市における集落史を調べている最中だが、1960～2010年代の沖縄における概況が、本書の調査とどのようにかわるか、という角度から考えてみたくなった。高卒のみならず大卒が増えてくる近年であるが、これまで同様、県内就職を希望するものが圧倒的に多いし、実際そうしている例が多そうだ。そのことが、人間関係ともかわるし、地元つながりという集落を含めた多様な人間関係・地域関係が背景にあるし、若者自身もそれを強く意識している。

稲垣えみ子「寂しい生活」東洋経済新報社2017年を読む 私との共通点と差異

2017年11月18日



店頭で見つけた本だ。大変愉快で魅力的な内容だ。40代後半から、掃除機とか冷蔵庫とかいった家電製品をはじめとして現代生活に不可欠と思われているものを捨て、さらには職場まで捨てる生活をすすめてきた著者。最近、マスメディアで話題になることが多いそうだが、私は初見の方だ。

断捨離といった、物を減らすことを進めることは広がっているが、これほど徹底して進める話は少ない。エリートコースを歩んできたが、原発事故をきっかけに電気使用量を千円以下まで減らしていくありようは、発想がすごく新鮮で、とても愉快だ。タイトルとは正反対の楽しい本だ。

右上がり経済の時代が終わり、定常縮小の時代にあって、どのような生き方をするかが、テーマとして膨らんできている。それを「やむをえず」するのではなく、自分の生き方として選択し創造していくありようは、大きくは私と共通するものを持っている。

一つ大きな違いはというと、著者は大胆に捨てている。そこには「惜しい」とか「無駄にしている」といった感覚は薄い。私は、捨てることをこれほどまで大胆にはできない。著者は衣類を10着になるまで捨てたようだが、私は、そんなに捨てることはできない。すり減って着られなくなった衣類を捨てるというやり方なので、ここ10年余りで、やっと以前持っていたものの6～7割にまで減った。このペースでいくと、次の10年で30着ぐらいに減ることになるだろう。「自然」の流れに沿っていくのだ。古本も基本的に、捨てるよりも、どなたかに譲ることを基本にしているので、この十年で3～4割減らした。そしてこれから10年で、さらに3～4割減らしていきたいと思う。それでも2000～3000冊は残りそうだ。

私は、多分同世代の人には考えを共有する人がいると思うが、著者のように大胆には捨てられない。多分、モノ不足の時代を経験しているので、所有物をできるだけ長く使おうとするからだろう。使い捨て感覚が浸透していないのだ。

著者の世代は、すでにモノがあった時代、ないしは溢れていた時代からスタートしている。だから「捨てる」ことへのハードルは、私などよりは比べようもなく低いようだ。その感覚の違いが目につく。

それにしても、私より若い世代がこのような生活、生き方に挑むことは大変素晴らしいことだと思う。

スピリチュアリティという言葉

2017年11月08日

長江弘子「生きる」を考える」日本看護協会出版会2017年を読んだ。生と死の問題をめぐって、多様な分野からアプローチしたものだが、医療関係が軸になっている。こんなテーマのものが、身近なこととして読めるような年頃になってきた。

そのなかで、ホスピスケアに取り組んでいる医師の山崎章郎「エンドオブライフケアを考える スピリチュアリティとは」のなかに、スピリチュアリティの定義に関する個所があった。

スピリチュアリティという言葉については、20年ほど前から、いろいろと出会ってきた。その人なりに言葉のイメージは多様だというのが、率直な印象だ。WHOが健康の定義にスピリチュアリティを加えたことが、議論を呼び、多くの人の関心と呼んだ一つのきっかけだろう。それを日本語にする時に、多様な語がつかわれる。宗教性、霊性、精神性…といった具合だが、私は精神性を使ってきた。といってもわかりにくい。ということで、最近では、日本語にしないで、スピリチュアリティをそのまま使う例が普通になってきたようだ。

そこで、定義が問題になってくる。執筆者の山崎さんは、窪寺俊之さんの著書によりながら、スピリチュアリティの定義を執筆者なりに次のようにまとめている。

「スピリチュアリティとは、人生の危機的状況の中でも、人間らしく、自分らしく生きるために、自分の外の大きなものに拠り所を求めたり、内省を深めることで、その状況における自己の在り様を肯定しようとする力のことである」 p 62

宗教、哲学思想、ジャーナリズム、医療など、分野によって定義の仕方は変わってくる。私に出会う人の中で、関心と呼んだ一つは、魂とか霊などの存在をめぐるものである。テレビ番組で、そうしたことにかかわる「専門家」が登場して、結構な視聴者を得ていたこともある。あるいは、それらを含んで、超常現象の「解明」に熱心な人もいる。それらは、科学との関係でどう理解するか、という事が関心の焦点の一つだった。

科学では理解不能なことを、スピリチュアリティととらえる人もいれば、科学で理解することが重要だといふので、実験などをする人もいる。科学で理解不能と置いていそうな人が、「科学でもこうしたことが言われているし、こうしたことが証明されている」と科学に依存した説明をするを見かける。

だが、スピリチュアリティは、科学とは次元が異なるものを指しているのではないだろうか。だから、科学に立脚して説明しようとする、無理がある。反科学ではないが、非科学なのだ。人間存在は、科学ですべてをとらえることは難しいし、科学的取り組みには解消できないから、スピリチュアリティが登場するのだ。芸術や哲学といったものもそうだし、人間関係とか生き方といったものもそうなのだ。無論、それらを社会科学とか人文科学という表現でくくることはできよう。それらは、2～3世紀前に華々しく登場した自然科学との関係で、それになぞらえて作りだされた用語のように思われる。

さて、山崎さんの定義に戻るが、「自己の在り様」に焦点化して定義をしている。参考になるアプローチだと感じる。

こうしたアプローチを参照しながら、私なりの定義を少しずつ考えていきたいと思う。

加齢対応への意欲と力量

2017年10月27日

加齢の現象は、50代ごろから誰でも気づくことだし、70代ともなれば日常生活のほとんどの局面でつきあいを意識しないわけにはいなくなる。

だが、加齢への対応を積極的に進める人は、そうは多くはない。アンチエイジングとかいって、加齢を止めようとすることに積極的になる話で溢れている。それどころか、加齢を認めることは、敗北を認めることだし、弱音を吐くことだという捉え方ばかりに出会う。

加齢は例外なく、だれもがつき合わなくてはならないことだ。それだからこそ、その付き合い方に積極的になりたい。それから逃げることで、逆に失敗、時には破局的な事態を招く例も多いように思う。

対応といっても、難しい課題に取り組むわけではない。たとえば、重いものを持つ時には、腰をしっかりと下ろして、持ち上げるといったことは、30代ぐらいからやっている人は多い。

その付き合い方について、私なりの体験を並べてみよう。

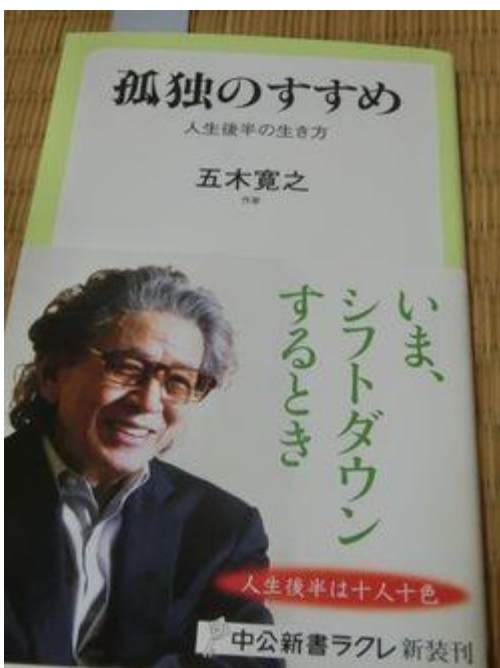
- 1) 段差の前でいったん立ち止まり、段差に合わせて、足をきちんと上げる（下げる）
- 2) 畑仕事などで、はしご・脚立を使う時は、留め具でしっかり固定し、地面にしっかりと安定しているかどうかを確かめる
- 3) 自動車運転では、交差点などでの左右確認をしっかりとし、速度は制限時速から0～5キロ以下（高速道路では0～10キロ以下）を平均にする。
- 4) 病院などでは、「加齢ですね」と言われる前に、「これは加齢の影響ですか」と尋ねる。
- 5) 講演・ワークショップ・授業などでは、その最中に、過剰集中になっていないか、振り返る機会をつくる。
- 6) 卓球などの運動をする時は、準備と整理のストレッチを3～5分必ず行う。忘れた時は、1時間遅れでもやる。
- 7) 若い人と張り合うことはしない。若い人が「頑張っている」、自分は引いたり休んだりすることを意識的に申し出ること。

こうして並べると、すべて、失敗ないしはドッキリ体験があって、それに基づいて考えた対応策だ。そして、対応することに慣れてくると、対応を楽しむようになってくる。

ところで、今読んでいる菅谷潤壺「汗はすごい」（筑摩書房2017年）は、65歳を過ぎたところから劇的に減った汗について知りたいと思い、読んでいます。これまた加齢によるものだが、体温維持機能の加齢による低下であり、熱中症などによる危険度が増すとのこと。大変な汗っかきの私が、汗が減ってよかったと喜ぶのは、早とちりのようだ。

高齢者が作り出す産業 五木寛之「孤独のすすめ 人生後半の生き方」中央公論新社2017年を読む

2017年09月07日



本書の内容を示すタイトルとしては、サブタイトルの方が適確だろう。「孤独」はぴんどこない。

著者の書籍に初めて触れたのはつい最近で、本書同様人生後半期にかかわる新書版だった。小説の類は全く読んでいない。

本書では、私のこれまでの主張と響きあう点共通する点がいくつか見られる。人生を前半期と後半期に分けて考えてみる事。私は45歳を提案したのに、著者は50歳だが、趣旨からして大きな違いはない。自然と闘うというよりも、自然の流れのなかに合わせて生きることが提起するのも共通する。右上がりの経済成長ではなく、社会とくに経済の縮小・定常化のなかでの生き方については、「下山」という言葉を使って著者は論じるが、私の主張と共通する点が多い。それらについては、ここでは深入りせずに、私がはっとさせられた点について書こう。

本書は、2015年に発刊された「嫌老社会を超えて」の新装版なのだが、この「嫌老社会」とは、大量人口となる高齢者を嫌う心情が広がり、ヘイトスピーチのようなものが、老人を対象にしても展開しつつあることを危惧して、それへの対応について語るものだ。この捉え方を、私はそれほど実感してこなかったが、ありうる話だということに気付かされた。

そして、それへの対処として、高齢者が作りだす産業についての提案は斬新なものだ。少しだけ紹介しよう。

「この産業のメインユーザーは、今後ますます増えていく高齢者です。具体的にどんなニーズがあるのか、既存製品のどこに不満を感じているのか。あるいは、改善を施した製品は、どう市場展開すれば売れるのか。研究開発やマーケティングには、自分たちのことが一番分かっている高齢者自身が取り組みます。もちろん、その技術や経験を生かして、ものづくりの現場でも活躍してもらいます。(中略)

私は、むしろ意識的に、高齢社会に文化の中心をシフトさせていくべきだ、と考えるのです。社会全体が“老人カルチャー”を理解し認識すれば、そこからまた新たな産業や市場が生まれる可能性もあるでしょう。

(中略) 超高齢化が進むこの国にあって、このように産業も文化も、国のあり方そのものも、老人たちを中心に考えてみようじゃないか、というのが私の提案なのです。シンプルな表現を使えば、「もっともっと、老人に注目してほしい」ということです。」 p166-7

こういう発想は、私にはなかった。私なりに考えていきたいものだと刺激を受けた次第だ。

これまでの人生後半期については、前半期の延長線上での思考が中心だった。たとえば、定年後どうするか、というのもそうだ。定年後の再雇用というのは、その典型だ。どうやら社会の仕組み自体が、継続することが素晴らしいという価値観のとりこになっているようだ。終身雇用制とは、ずっと同一職場で働き続けることを賞賛する仕組みだ。定年まで同一職場で働き続けると、退職金も年金も大変優遇される。私のように、転職して同一職場での勤続が20年以下だと、20年以上の勤続者と比べて、退職金も年金も半分ぐらいになるほどの違いがあるのも、その例だろう。多様な職場を経験しながら、新たな生き方を創造していくという転職礼賛の発想は、とても希薄なのだ。

転職を嫌う傾向は、経済成長してきた流れをいつまでも継続したいという発想とつながる。現実には、縮小定常化になっているし、個人も転職が多数派である現実があるが、それに対応した仕組みや発想がとても希薄なのだ。だから、人生を定年で区切る発想が根強く存在するのだ。人生後半期になったら、あるいは少なくとも定年を迎えたら、転職を含んだ新たな人生創造に積極的に向かう仕組み・発想が希薄なのだ。

卓球試合での人間関係の広がり 70代80代の方との出会い・語らい

2017年07月20日

16日、卓球浦添オープンの試合に出場。3部で準優勝。決勝は、同じクラブでいつもの練習相手。合計17セットして疲れた。特に準々決勝では、中学生相手にフルセットの大激戦だった。

試合は、中学生と50代60代80代70代80代といろいろな世代。試合の合間にはユンタク。卓球の話だけでなく、いろいろと。このところ、80代の方によく当たる。とても元気で強く明るい方々だ。

私が80代まで卓球ができるとは思っていない。70代の途中でおしまいだろう。自動車運転ができるまでだ。高速道路や夜間での高齢者の運転を制限する案が浮上していることを、80代の方から聞いた。そうなればますます卓球継続は難しい。個人差があるものを、一律に年齢で制限するのはまずいと思う。

男性の平均健康寿命は70歳だそうだが、そこまでできた私は幸せだと思う。病気などで、途中でやめた人も沢山いる。私は、「〇〇歳まで頑張る」という目標は立てないことにしている。結果的に〇〇歳までしているということになるだろう。

若いうちは別にして、50代以上ともなれば、年齢目標をたてて頑張るといのは、かっこいいかもしれないが、好きではない。自然の流れを受け入れることの方が大切だろう。自然の流れに合わせて無理をしないで、体力に見合った動きができればいいと思う。

私の場合、脳力の右下がりの速度はゆったりしているが、体力は、年齢なりの右下がりになっている。体力に応じた卓球・ウォーキングにしているこのごろだ。

先日の試合で、負けてラケットを投げ捨てる中学生に出会った。卓球仲間も、何人か見たそう。テニスの錦織選手がラケットを折った例が伝染しているそう。でも、若い時は、そんなことがよくある時期だと思う。悔しさを内に込めるよりも、外に出す方がすっきりしていいかもしれない。私は内に込めて、うじうじする期間が長い方だった。歳を取ったこのごろは、悔しさそのものが薄れてきた。

試合を通して、たくさんの人間模様を見る。私は、相手の動き（精神も含めて）を見ながら作戦を変化させて試合する方だが、自分が疲れてくると、作戦を立てる元気が萎えてきて、勝とうとしなくなる。年相応だと思う。

私流・人間関係スタイル

2017年07月06日～2018年01月30日

2.1. 挨拶状や挨拶を形式化させないで、意味や気持ちをこめる

1～4月は、いろいろなあいさつ状が届く。年賀状から始まって、退職退任・就任就職・転勤転居・新規開店などいろいろだ。めっきり減った葉書が、この時期には多くなる。

ほとんどが印刷だ。手書きにお目にかかるのは珍しい。かなりの人数に配っているからそうなるだろう。なかには、何百枚何千枚も配っているものもありそう。通信販売のカタログに近いものもある。

新職場新居の住所などは、必要に応じてメモるが、すでに知っている情報ばかりで、どうして送ってくる必要があるのかな、と思ってしまうものもある。手紙などを保存する癖のある私でも、仕方なしに処分するものも多い。

個人からのものでも、市販の「ハンコ」類を押しただけの年賀状をいただくことがある。大きな変化なしの一年なのだろうという情報を得るにとどまってしまう。折角の郵便物なのだから、少しは有益な情報を含ませたいものだ。

そういうありようを形式化した付き合いというのだろう。そういうものをいただくと、なぜか、人との関係ではなく、モノ・コトとの付き合いだと感じてしまう。あまりにも付き合いが多くなると、そうしなければ、コトが運ばない場合もあるのだろう。

同じことは、郵便物ではなく、直接の出会いの場合にもある。たくさんの人が集まる会で、出会った人と交わす挨拶などもそう。出会った人ごとに、挨拶の中味をアレンジするのは大変だから、同じことを繰り返す人も多い。だが、相手との関係は、人によるので、人に合わせた挨拶をしたいものだ。少なくとも、挨拶の言

葉のなかの一部でも、相手に固有なものをふくませたい。そうでなければ、マニュアルにもとづいて接客をするファーストフードの店員と変わりが無い。

同じことは、会議の冒頭で行う挨拶にもいえる。会議の代表役を務める人が、毎回同じ挨拶をするとしたら、その方の挨拶が終わってから、会議は本格的に始まると思ってしまう。式典などでのあいさつもそうだ。私は、あいさつ文を読む形も好きではない。挨拶者ではなく、秘書や担当職員が書いたものを読み上げる人もいる。代読という場合もある。子どもの集まりなのに、大人対象の挨拶をする人さえいる。小学生だったころ、意味がほとんどわからない来賓挨拶をじっと聞いているふりをしなくてはならない苦痛を経験した人は多いだろう。意味不明の挨拶に限って長いのだ。

「乾杯の音頭」を頼まれた時、私は30秒足らずで、挨拶を終え、すぐに「乾杯！」という。すると、周りの人から「短くてよかった」とお褒めの言葉をいただくことが多い。

他にも、挨拶を頼まれた時、私は、事前には2～3の項目ぐらいをイメージしておくだけで、文章はつくらない。その場で、参加者の顔と雰囲気を見ながら、アドリブで短めに話すのが通例だ。

20. 競争・序列から距離を置く

競争ではないつきあいを増やしたい。たとえ競争であっても、勝負で人格序列ができるような関係に陥らないようにしたい。とはいっても、学校や企業でそうした関係に深くしみこませられると、競争から距離を置くことはなかなか難しい。

中学高校時代に受験校にいた私自身も、それらから卒業するのに数十年かかっている。企業管理職を定年退職した人が、企業とは関係のない近隣の人とのつきあいで、管理職時代の関係を表に出して、「自分はこんなに立派だ」というので、周りから避けられる話はよく聞く。

六〇代七〇代になると、そうした環境が薄くなっていく。早い人は、四〇代から、そうしたありように気付いて、競争や序列から距離をおいた生き方をし始めている。なかには、10代後半から、そういう人がいる。というより、10代後半から増えてきている印象さえある。

競争や序列が「花盛り」であった1980年代までに青年期を送った人々と、競争や序列から距離をおく人が増え始めたそれ以降の人とでは、違いが、ないしは距離が徐々に大きくなりつつあるように感じられる。

競争や序列から距離を置く生き方が、かかわりをもとうとする一つは「自然」ないしは「自然の流れ」だ。それらは、競争や序列とは縁遠い。競争や序列に「はまっている」人なら、「日本一高い山」といった表現が好きかもしれないが、当の自然は、序列など関係なく「自然の流れ」のなかで生きている。だから、競争や序列に疲れた人々は、「自然の流れ」に「癒し」を見いだすのだろう。

競争と人間関係を分けることも大切だ。序列の上下は、競争の内側では有効だが、外側では関係ないのだ。学校・企業の内での序列は、外側では関係ないのだ。スポーツもそうで、選手は対等平等を前提に勝負するのであり、勝負の外では対等平等なのである。ところが、スポーツ外まで勝負序列を持ち出すことが、あまりにはびこっている。

学業成績でも同様である。また、競争や序列がはびこるのは、共同で知を継承創造するという構図が未熟で、個人の所持品として知が扱われていることを反映している。

ゲーム類も同様だ。ゲーム類は人生のなかでは一時的なものであり、さらに競争はゲームのなかの一種に過ぎない。ゲームには、偶然性に任せるものもあれば、物語をつくっていくようなものもある。競争や序列が好きなのは、そうしたものにさえ、チャンピオンとか3等とかいって、序列をつくりたがる。コンクールとか大会というものは、ここ百年余り盛んになっているに過ぎない。近代オリンピックも100年余りの歴史しかない。

だが、ゲームのなかで序列がつくものは多くはない。たとえゲームをするとしても、競争や序列がなく、穏やかでゆったりしたありようへの願いが静かに広がっているように思う。自然景観を眺めたり、自然の中を歩いたりする人が増えている。

19. 競争・序列に囚われ過ぎる人

競争社会化がすすむなかで、こんなタイプが増えている。

- ・ライバル関係・競争関係を重視し、ねたむ・うらやむ・けなす・勝ち誇る・自慢するといったことで、周りの人にいやな思いをさせることが多い人。
- ・競争で勝たないと気が済まず、負けると、後々まで引きずる人。自己を過剰に否定する人
- ・勝つ人、序列が高い人を価値がある人と見なし、そうでない人を価値が低い人、ない人と見なす人。実際は「価値がない人」とつながり支え合って生活しているのが日常であることに気付かない。

確かに、10歳前後は、競争や勝負の面白さにはまり、それらに夢中になりやすい。そして、そのことで、特定の競争的事項における向上心が強められ、成長することも多い。その体験が、他の事項に応用されることもある。と同時に、成果を得た経験に「味をしめて」20歳代30歳代まで、勝負や序列にこだわる「子どもっぽさ」から卒業できない人が結構いる。

落ち着いて振り返ると、人間関係は競争ばかりではない。むしろ、競争場面は限られている。たとえば、家族など身近な関係では、競争の余地はとても狭い。美味しいものを兄弟で奪い合う競争などは、今や昔話だ。夫婦で競争するなどは、幼稚な関係の典型だろう。

実際の人間関係は、現代では対等平等がほとんどであり、競争序列関係は例外的なものだろう。競争序列感覚で、人とつきあえば、相手に逃げられてしまうだろう。勝ったから強いというわけではなく、むしろ幼稚でつきあいにくいとみられてしまうのだ。

そうしたゲームでの勝負・競争の次元と人間関係の次元との使い分けができないともいえよう。ゲームに夢中になっても、ゲームが終われば、対等平等の日常関係に戻るのが通常だ。それが下手な人だとも言えよう。そんな幼稚さが離婚につながることもある。

ところが、属している組織が競争的雰囲気を前面に出しているところでは、どうしても競争につきあわないといけなくなる。現代でいうと、企業や学校で、そういう場面を見ることは多い。

しかし、日常の身近な親しい人との生活では、勝負や序列は可能な限り排除することが、友好的関係の維持深化には不可欠だ。そういう「やさしい」関係がますます大切になる時代なのだろう。

18. ぶっきらぼうな言い方で人間関係がうまくいかない人

会話などで、自分ではそのつもりはなくても、相手からみれば、ぶっきらぼうな言い方で、関係をつくりたくないのかと思わせるような言い方付き合い方をしている人がいる。そのためか、友達ができないどころか人間関係そのものが薄くなる。本人は、「わかってはいるが、優しい言い方ができない」と感じていることがある。なかには、自分側の問題だと気づかずに、相手側の問題だと思っていることもある。

直接の出会いだと、そうしたトラブルが多くて面倒だと思い、SNSを介して「友達」を広げる人もいる。しかし、それはバーチャルな関係で、生の関係ではない。

そうした人は、生の関係を作る場をいろいろとをもって、人間関係実習を積み重ねるのが重要だ。ソーシャル・スキル・トレーニングといって、そうしたことを訓練する取り組みがあるが、海外で作られたものが多く、日本や沖縄の現実に合わない面が多い。そこで、浅野誠流のものを作って、色々な場でやってきて15年を超すようになった。いまでも、大学授業の最初などではやっている。そのなかで、「人見知り」だと思っていた人が、友達を何人も作るようになる。そして、ぶっきらぼうないいかたではなく、場にふさわしい言い方を身に付けていく。

その流れは、私が付き合い方話し方を教えるというものではない。安心の雰囲気なかで、人間関係をつくるいろいろな活動をとおして、多様な話し方付き合い方がある事に気付く。そして、自分の特性を他者を通して気づいていく。そのなかで、付き合い方を変えるというよりも、多様な付き合い方話し方を見つけ、レパトリーを増やし、自分なりの付き合い方話し方をつくっていくというものだ。

最近の子ども若者を見ると、2～3人との付き合いは多いが、それに閉じこもりがちで、5～6人のつながりをもつとか、いくつものつながりをもつとかが少ない状況がある。そうしたつながりの量と質を増やし、蓄積していくなかで、実際の友達を増やしていく。そのなかで、相手によって、付き合い方話し方を変化させ、ぶっきらぼうに話してもいい人、丁寧さが必要な人、以心伝心に近い形でやっていける人、感性重視型の人、リクツ中心型の人といった使い分けを増やしていく。そのなかで、巨大システムに合わせることにとどまらず、多様な個人にあった自分なりの付き合い方を作り出していきたい。

30年以上も前に、私は人数論ということを書いていた。たとえば、人付き合いの際に、5～6人は得意だが、3人以下となると苦手だという人がいる。その逆もある。そのあたりを自覚して、不得意な人数での関係を克服し、得意な人数での関係での力も高める、といったことである。

おおよその傾向としては、幼児期から少年期にかけて、得意な人数を、2～3人から5～6人までへと幅を広げていく。だが、近年では、いつまでも3～4人ぐらいの関係づくりに留まる例が増えている。ぶっきらぼうな言い方をしている人は、それでも3～4人であればやっていけるが、5人以上となると、難しくなる。ぶっきらぼうさに対応してくれない人が増えてくるからだ。だから、5人以上での人間関係での経験を積んでいく必要がある。しかも、マニュアルに沿った定型的対応ではなく、相手に応じた対応を習得するために、多様な5人以上での体験を積むことが必要になってくる。

そうしたことを意識的に工夫することが求められる状況が広がっている。

17. 「引っ張り型リーダー」から「つながりを支え広げるリーダー」へ

組織のリーダーの場合は、50歳代になると、組織の仕組みがリーダー性を支えることが多くなる。役職がそうだ。役職名があるから部下が従うということがその例だ。システムがリーダーを支えるのだが、退職後はそれがなくなって、一人の個人として生きる。自分ではリーダー性があると思っても、以前の組織とかかわり

のない周りの人たちはそうとは思わない。それを「支えのポールを失ったテント」にたとえて語られたこともある。

現役のところは〇〇だったと履歴をいくら話しても、かえってそれが嫌がられる原因になり、人間関係を狭めてしまうことに通じる。退職後は、会社人間の頭と体を早く切り替えるのが得策なのだ。

これらの問題を、年齢変化よりも、世代変化ないしは時代変化とからんで考えてみよう。

戦前戦中戦後、そして、高度成長期においては、右上がり思考が広く見られ、ガンバリズムが普通の形だった。だから、引っ張り型リーダーが前面に立つ時代だったといえよう。無論、その時代にもそうではないリーダーが存在するだけでなく、重要な役目を果たしていたのだが、引っ張り型リーダーが標準的な形になっていた。だから、リーダー自身も、それに従う人たちも、そうしたありようを前提にする思考をしがちであった。

引っ張り型リーダーが、部下に「かつ」を入れ、「げき」とばすといったことが広く見られた時代だ。現在の50代以上の多くは、そうした時代を生きてきたので、そうしたありようは自然な形だと思っている。そしてそうした引っ張りができない人は、リーダーとしてダメだと思われ、「疲れた人」「弱い人」と思われてきた。その延長線上に、「若く見えますね」という言葉があり、「若返らなくてはならない」と自分に気合を入れることが出てくる。言葉をかける方もかけられる方も、それが当たり前だと思うから、ごく日常的な会話になる。

その前提に、自分なりに「やるべきこと」がはっきりしており、それに向かって「頑張る」ということがある。

ところが、高度経済成長期を終わった1970年代から1980年代以降、巨大なシステムのなかで生きてきた現在の40代前半以下では、事情が変わってくる。40代後半は過渡期といえるかもしれない。その巨大システムは、学校・会社に代表されるが、家族もそれらに従属しがちであった。というか、学校・会社を、夫・子どもなどを通して支えるのが家族の役目だという観念が広まった。

その巨大システムは、「自分がわからなくて自分探し」を求める人や「指示待ち人間」を大量に作りだしてきた。システム依存症とっていいかもしれない。現在の60代以上は、自分なりの決断をもって、システムの中に飛び込んだが、若い世代は、生まれた時から空気のようにシステムが存在しているのだ。

だが、その巨大システムは、いつまでも個人を守り支えてくれるわけではない。非正規雇用や転職の日常化が示すように、近年では個人個人が自分の人生を作ることが求められる。そこで、「この人ならついていけば大丈夫」という引っ張り型リーダーが通用する余地がどんどん狭くなっていく。

そこで、個人は孤立していくか、多様なつながりを作って自分なりに生きていくしかない。SNSが築くバーチャルなつながりが広がっているが、実際のつながりにならなければ、中途半端なものになってしまう。そこで必要なリーダーは引っ張りがたではなく、個人が築くつながりを支え広げていくことに重点をかけていくことになる。

16. プラヴィーダ（素朴な人生を！）というコスタリカの挨拶 気に入った

先日、NHKの世界の街歩きの類の番組で偶然出会った言葉。番組は、コスタリカの首都サンホセを映していた。すると、出会う人の多くが、にこやかな顔で「プラヴィーダ」と挨拶している。番組では、「素朴な人生を！」と訳していた。

この番組は好きだが、いろいろな地域の風情や人々の姿が登場してくる。カメラを持った人が街をめぐるの

だが、どこでも、「ハロー」の類を交わしている。サンホセでは、他の地域と比べると、挨拶をかえす人の割合が高い感じがする。しかも、ゆったりとした笑顔で。人々の歩き方は早くない。

どこか沖縄と似ている。同じ熱帯・亜熱帯地域の風土が共通性を生み出しているのかな。でも、沖縄以上に応答する人が多い。もっともテレビカメラを持った人が街を歩いているという事情を勘案する必要があるので、詳しいところはわからない。

ハローとかハイとかよりやや長めで、「素朴な人生を！」という意味合いが気に入った。インターネット検索したら、日本語ではヒットしない。英語で一つヒットしたが、それを自動翻訳させて読んでみた。そこでは、「シンプルライフ」「純粋な人生」という説明が出てきた。

いずれにしても、なかなかいい。飾り気とかいやみとかは感じない。日本語だと、「好い天気ですね」といった感じだろうか。ウチナーグチだと、「ハイサイ、イイテンチデービル」といった感じか。英語だと「ハヴァ ナイス デイ」かな。それにしても、ここに「人生」の言葉が出てくるのが、「人生」好きの私に刺激的だ。しかも「素朴」「シンプル」なのだ。

こんな挨拶をしたいし、創りたいものだ。

15. 「若」と「老=熟」のバランス 引っ張り型リーダーからの転換

前回の「若」と「老」について少し補足しよう。人は、誰もが両面を持っているという捉え方もあるだろうと思う。両者を、一人ひとりがバランスを取りながら生きていくといっているかもしれない。この両者のバランスが崩れる時、問題が生じる。身体的には「若い」が、精神的に必要な「老=熟」が弱くて、「若い」ままの人。精神的には「若」くやる気にあふれているが、身体的には「老」であるために、身体上の無理が生じて、身体的破綻に陥ってしまう人。身体的な「老」に対応する身体ケアを怠り、過剰な身体的「老」に陥る人。いろいろとあげれば、キリがない。

実年齢に応じた「若」と「老=熟」をあわせもち、バランスを取るのがいいというのが、私の主張点の一つだ。当然、そのバランスは、加齢とともに変化する。

そのバランスを崩すことに気づきやすい年代として、40代50代がある。「老=熟」が蓄積し始めるが、それを生かそうとせず、30代の「若」で生きようとして、身体的「若→老」に対応した振る舞い方ができない人が、近年目立っている。

例をあげると、リーダーシップを取る人で、40代50代になってうまくいかなる人がある。連載8にも書いた、押、発、働きかけが強いタイプだが、中年期になってそれをやりきるエネルギーが伴わないのに、若いころのままの気分にいる人で、周りからうさがられ、事実上孤立している人だ。

その原因について考えてみよう。

自分が先頭にたつリーダーは、エネルギーに満ちている40代前半までいいが、エネルギーを減ってくるころになると、息切れし、ついてくる人が減っていく。「若さ」を売り物にするリーダーもその一つだろう。

そうしたタイプは、年を重ねるとともに、うまくいかなるが多くなる。エネルギーが低下してくるからだ。スポーツの世界がわかりやすい。スポーツ指導者には、若い力で引っ張り、自らがモデルとしてやって見せることもある。体力がある20代まではなんとかできるが、体力低下が目立ち始める30代に入ると、苦勞し始める。ワザを中心に、円熟さを見せることはできるが、体力が必要な場面でモデルになることは難しい

からだ。そこで、リーダー性発揮のスタイルが転換せざるをえない。自らモデルになるよりは、必要なワザを相手が自ら獲得できるように仕向けていくことが必要だ。

それは、爆発型リーダーから、経験を蓄積し、リーダーの仕事に広がりや深みを持ち、持続型リーダーへ転換することだ。著名なスポーツ指導者が、40歳前後に見事にその転換を果たして、指導者としての成功を得たという話はよく聞く。

会社などの組織においてもそうだ。指導における「勢い」のようなものではなく、指導内容に深みがあって、相手を納得させられるようなものへと変化していく。

それは、自ら先頭に立つリーダーというよりは、周りの人を支えていく・盛り立ていくリーダーへと転換することだ。聴く、受け入れる、サジェストする、自主的に動くように仕向ける、人と人とをうまくつなぐといったことが中心になる。そして、時には部下に甘える事、助けを求めることがあっていいし、それも重要なことだ。部下は、リーダーに頼りにされていると感じ、自信を強め、リーダーとの関係も発展していく。

14. 「〇〇才にはとても見えない」というほめ言葉と熟すこと

私より年齢が低い方に会った時、よく耳にする言葉が、「とても70歳にはみえませんよ。〇〇才な感じですよ」という言葉。私だけではない。他の中高年齢者も、よく耳にするようだ。こう書く私も、他の人に、実年齢より数才ないしは10才ぐらい低い年齢に見えるという言葉が発することがある。

そうした言葉が、言われた人をいい気持ちにさせて、人間関係をよくしていく一つの作戦のような感じだ。その際、実年齢よりも飛び離れて言うと、「ウソ」「おだて」っぽく聞こえて、効果が薄い。5～15歳ぐらい若く言うのがコツのようだ。

こうしたことは、人付き合いのコツのように思われていることがある。だが、若い世代にこうした作戦をとると、「子どもっぽく」「ガキっぽく」見られるのかな、という印象を与えることがある。要するに、未熟なんだと思わせてしまうのだ。だけど、それでも若く見られて喜ぶ人の方が多そうだ。

こうした背景には、「若さ」重視が、「熟すこと」重視を上回っている時代状況がありはしないだろうか。50代以上になると、アンチエイジングが大流行なのがそれを示している。年をとること（加齢）をまずいことのように受け取るのだ。

それは、「見た目」「容姿」重視の社会風潮と結びついているように思う。商品の宣伝にはそうしたものがいやになるほど多い。そして、それらの背景には、「若」は良い事、「老」は良くない事、という考え方が広く見られる。

私個人は、若いころから、実年齢よりずっと高い年齢に思われてきたし、そうした役割を取ることが多かったので、「熟」重視派だ。たとえば、私が25歳で沖縄生活を始めたころ、ある学校教員とお会いした。私は、その方を30歳過ぎと思ったが、彼は、私を40歳過ぎと思ったそうだ。実は、私が25歳、彼は40歳過ぎだったのだ。

私の20代半ばごろまでは、そんなことばかりだった。私自身、実年齢よりも高く見られることを嫌がるどころか、それを喜んでいたし、そのように振る舞っていた。そして、若く見せようとする人に、拒否反応をもち、「幼稚だ」「未熟だ」といったりしていた。

ということで、50代ごろまでは、実年齢より上の役割をとり、そのように見えるように振る舞っていた。60歳を過ぎたころから、実年齢に似た役割をとり、そのように振る舞うようになった。髭を蓄えていたのは、

50代後半だった。そして、70歳ごろから、時々実年齢より下にみられることが始まった。

こうした問題は、多様であったほうがいいと思う。「若」をいいものと思う人がいていいと同時に、「老」「熟」をいいものと思う人がいてもいいと思う。「若」がいいという、ただ一つの基準でふるまうことから卒業したいものだ。

写真は、伊良部島の下地スーパー前で人気のジェラートを食べる私。何歳に見えますか



13. 「人見知り」卒業へ

前回書いた「人見知り」から卒業するにはどうしたらいいだろうか。答えは簡単。小さい時から、人間関係を「多様に」「たくさん」づくり、経験をふくらませていくことだ。

「たくさん」というのは、量だ。くだけて書こう。20歳以上の大人を例にしてみよう。顔を名前が一致し、出会えば、声を掛け合う人を100人以上もとう。一週間に会い会話する人を20～30人は持ちたい。「友達」とお互いに言える人を十人以上持ちたい。グループとか仲間とかいえるものを3～4個はもちたい。

「多様に」というのは、質の問題だ。共通点の多い同質の人だけでなく、異なる点が多い異質な人との出会い・つながりをたくさん作ることだ。同性異性、同年齢異年齢、同趣味異趣味、近隣居住者遠方居住者といった具合だ。そのために、日常出会う人だけでなく、旅とか、交流会企画などで出会える人など、多様なつながりを作る機会を持とう。

そうした人間関係を作れる機会・場を活かすこと、できればそれも2つ以上もとう。小さい子どもでいうと、保育園幼稚園、公園広場、そして、学校などを生かしたい。もしそうした場を選べるなら、相互のつながりが多そうなところを選ぼう。今、そうした場は、モノ・コトを基準に選ぶことが多いが、人間関係をもとに選ぼう。選ぶ際には、直接の聞き込みや見学が重要だ。広告宣伝やインターネットなどの間接情報だけではわからないことを、直接見聞するのだ。

そうした場を選ぶ際の注目点は、大人が仕切ることが最大化して、子どもたち相互が相談協力して進めることを最小化していないかどうかである。そういうタイプの方があまりにも多いのが、近年の特徴なのだ。それは、子どもたちの人間関係づくりにかかわる力を伸ばすどころか、逆に抑え込みやすい。

そうした近年の状況において注目されるのは、学童クラブである。子ども相互の関係を育てることを主眼にして豊かな活動を展開する事例が多いからだ。かつて地域にあったが、今ではほとんど見られなくなった子ども仲間を再現し、子どもの成長に決定的な役割を果たしている学童クラブは多い。

若者が大人へと移っていく際には、職場・専門学校・大学が人間関係を作る重要な場となる。それも、「多様」で「たくさん」の人間関係をつくる機会が多いかどうか重要になる。たとえば、同年齢同性同専門のものばかりが集まる場だけでなく、社会人入学生が多いとか、異年齢間の付き合いが多い職場、多様な専攻学生が一緒になって学ぶ授業が多いか、クラブ・サークル活動が盛んかなど、いろいろな面に注目したい。

要するに、過剰なシステム依存、モノ・コト依存に陥りがちな状態を卒業して、手作りの人間関係を多様にたくさん作れるようにしていきたいのだ。そうしていくと、「人見知り」は知らぬ間に卒業してしまう。

12. 人間関係経験が少ないだけなのに、「人見知り」性格だと決め込んで、人前で積極的にならない人

大学授業でここ数年、目に付くことは、「私は人見知りです」と語る学生が多いことだ。教職科目受講生に多いのだが、教職は子ども相手の職業希望者が受講するものだから、「人見知り」性格だとするなら、受講希望しないだろうという見方は、もはや通用しない。

いろいろと聞いていくと、要するに人間関係経験が少ないだけのことだ。というのは、私のワークショップ型授業に数回参加するころには、「人見知り」を卒業し、クラスメイトと楽しく活動する姿を目にするからだ。

こういう学生は、高校時代までに受験学習に打ち込んできた人に多い。どうやら、受験学習は、受験システムに乗って、教師の指示通りに学習することが求められ、人間関係は不要だからということで、人間関係を作る機会が狭められてきたようだ。

だが、こうした受験学習のようなシステムに乗って、いかに効率よくスピーディに進むかが問われるものが、あちらこちらに広がっているし、その方が日常的には当たり前の状態が広がっている。だから、子どもだけでなく、大人にも指示待ち人間が広がっている。対照的に、わずらわしい人間関係をできるだけ避けるシステム化が蔓延している。

スーパーのレジも、従来から、できるだけ人間関係を簡略化したものだったが、最近では、自分でレジを打つタイプのもので広がり、最初から最後まで、人間関係ゼロで買い物ができるシステムが広がっている。ダイレクトメールによる通販、あるいはインターネット購入もそうだ。

忙しい日々なのに、人との会話は最小化されて、システムに合わせたことが最大化する事態が広がっているのだ。これでは、「人見知り」の大量生産をしているようなものだ。子どもだけでなく大人までそうなのだ。宅配配達の人とも、会話をできるだけ減らすのが、最近のありようのようだ。

この連載6と7で書いたように、レジであろうが、いろいろと話しかける私は時代遅れなのだろうか。

といっても、人々の願いには、人々とつながって、豊かな関係を持ちたいというものが、潜在しているように思う。だけどそれには、つながるための経験の積み重ねが必要だ。

小さい時、若い時には、その練習が欠かせない。そうしたことをしないで、人間関係から逃げ込む人が増えているし、人間関係から逃げ込むことを促進する動きが広がっていることが、どうしても気になる。人間関係を結ぶ体験を蓄積して、人間関係の力を高めることは、人間を続ける以上、どうしても必要なことだ。

なかには、人間関係をもたないことで、束縛がなく自由だと思える人がいる。しかし、大きなシステムのとりこになっているのだ。いってみればシステム依存症なのだ。

個性を求めて、自分探しをする人がいるが、それは多様な人間関係の中で行うことが不可欠で、システムに依存してするとすれば、システムとの関係で個性が作られてしまう。とすると、カップル関係を含めて身近な人間関係もシステム依存になってしまう。システム依存になると、システムが作ったイメージで現実の生身の人間関係を作ることになってしまう。テレビや雑誌での性格診断なども、それを促進しかねない。そうすると、現実の人間関係をつくることから引きこもることに通じる。

ではどうするか。次回に続く。

11. 属する集団をいつも取り仕切っていないとおさまらないリーダー（ボス）

ニホンザルの群れや暴力組織などでは、一人のトップ、つまりボスがいて、集団成員を統制服従させることが普通である。それを、通常の間人組織でも見かけることは少なくない。家族成員を統制管理下におく父親または母親。少年期のガキ軍団を取り仕切るガキ大将（こういうタイプではないガキ大将もある）。零細企業のなかで見かけるワンマン社長。

集団のメンバーが、そのボスに不服従とか異議申し立てをした際には、ボスは力を行使して制圧しようとする。それにとどまらず、粉碎・追放することさえ見られる。自分の統制の網から出る行動を許さないのである。

だが、直接的な力だけで、集団を維持するのは得策ではない。そこで、いろいろな物を与えるとか、世話するとか、恩情を前面に出すことも多い。さらには、「哲学」「信条」めいたものを出して、メンバーに共有させることも多い。さらに、自分自身の経験と知恵をもとに、自分を信服させるようにしむける。

長期に集団を仕切っていくためには、こうした色々な物を取り混ぜていくことが必要だ。そうしたことができない人は、リーダー（ボス）の座を降りるか、集団そのものが解散に至る。

こうしたリーダー（ボス）は、集団の外に対しての競争関係が好きであることが多い。その競争関係では、競争・ライバル関係を支配服従関係にしてしまうことが多い。

競争・ライバル関係というのは、勝敗が変化しうるし、変化しても敗者が消失することはない。再び立ち上がって、再挑戦できることが大前提となる。スポーツにおける勝敗とはそのようなものだ。スポーツにおける競争には、勝敗が入れ替わることが認められるし、勝敗には、客観的な基準・ルールが存在する。もし、予めどちらかが有利で、勝敗予測がはっきりしていれば、勝敗・競争としては、興味深くはない。だから、スポーツやゲームの世界の勝敗には、ハンディをつけるのである。重量別に行うとか、である。また、ルールの前では、競争参加者は平等であることが前提となる。

しかし、支配服従関係が好きなボスは、なかなかその世界に馴染めない。他の集団との関係は食うか食われるかになってしまう。集団のなかにおいても、ボス交代を認めがたい。その結果、自分が消えるか、集団が消えるかになりがちだ。平和的交代がしにくいのだ。だから、無理がある場合が多い。

小規模集団なら、こうした無理があっても、持続することがある。とくにその集団が閉鎖的なら、なおのことそうだ。そうした集団では、ボス交代が難しい。同じような関係を、新たなボスと集団成員との間に引き継ぐことが難しいからだ。

こうした事例の極小規模は、家族にみられ、家父長制的関係もその一つであることが多い。家父長制には、結構な歴史があり、それからの卒業に手間取ることがよくある。自分の父親のそうした体質を受けついで、配偶者や子どもに対応する若い男親をよく見かける。しかし、戦前のような家父長制への制度的保障が消えた今日では、そうしたボス的な家父長から集団メンバーが脱け出してしまう例をよく見る。離婚には、その類が多いようだ。

こうしたボス支配への対抗手段として、避ける・逃げる・よりつかない、ということが広く見られるようになってきた。そして、旧来型ボスにしても、そこから逃げる側にしても、対等な人間関係を前提にした、関係づくりへの模索と練習が、とても重要なことになる。

しかし、その練習が面倒だといって、人間関係を減らそうとする傾向が膨れ上がってきている。

10. (続) 我が子を所有物とみなして、幼児期の親子関係のままにしようとする親

前回の続き、というか、そこで書いたことへの対応の仕方について書こう。

親子やカップル関係で支配従属関係(本人は愛情関係だと思っている)を作ろうとする人は、身近な人と距離を保つことが苦手だ。くっつき過ぎが多い。そして「身近であれば」、愛情という形をとって、相手を支配従属関係においても不思議とは思わない。

身近でも、自分とは異なる人間として尊重し、対等な関係であることを前提にして、愛情関係を築くことが求められる。それが下手なのだ。だから、うまくいかない時、つまり実際は溺愛である「愛情」が上手くいかず、相手が拒否する時、従属からの脱出だとは見ずに、「愛情」の拒否だと勘違いして、対照的な形である虐待に陥ることがしばしばだ。

そして重要な問題は、相手と自分という一対一関係のなかに閉じていることだ。二人以外の関係を見ていないとか、見えないとか、そういう状況に陥っている。虐待は、そうした状況で発生しやすい。

そこで、こうした状況への対応策の基本は、閉じた関係を開いていくことから始まる。それにはまず一対一以外の第三者が入ることである。それには一人とは限らず、できるだけ多様な人が出たり入ったりするのがいい。

保育園・幼稚園・学童クラブ・学校に通っているなら、他の子どもや保護者が築いている親子関係をいろいろと見ることが役立つ。自分たちの親子関係と比べて見て、違いに気づき、新しい芽を見つけられるからだ。でも、「あの親子より自分たちの方がマシだ」なんて見方は避けたい。親子関係が競争みたいになるからだ。

そして、園や学校などに通うことで、我が家へ、他の家へと出入りし合うことが、すごく役立つ。それをきっかけにして、つながりが多様になる。そして、他の家の子どもの面倒を見るとか、自分の子どもの面倒を他の親が見るという体験が、新しいストーリーを作り始めていく。

それをきっかけにして、家族間がいっしょになって、合同ピクニック、合同キャンプ、合同宿泊などをするのもいい。お泊り保育とか、学童の保護者会主催のキャンプなどがあれば、どんどん参加したいものだ。

こうしたことは目新しいことではない。30～40年前までは、地域で親戚で、そんなことをするのがごく普通だったからだ。

そういう取り組みをすると、最初は、家族間にあった競争感覚も薄れていくだろう。

こうした取り組みがなかなかできない時、特定の誰かが応援に入る必要があるかもしれない。親戚のおじさんおばさん、クラスメイト、知り合いの世話好き・相談好きの人、時にはカウンセラー、などが登場することもあろう。

9. 我が子を所有物とみなして、幼児期の親子関係のままにしようとする親

当人は、当たり前であり、子どもの面倒をよく見ていて立派だと思っているかもしれないが、周りから見ると、子どもは自分の所有物で、子どもをどうしようが親の勝手だと思っているように見られる例に時々出会う。

「親子は他人の始まり」という感覚を全く持ち合わせていない。子どもを他者として尊重するというのではなく、子どもは親が思う通りに育てるのが、親の義務?権利?と見ているような例である。

親の好む服装で、子どもを着せ替え人形のように扱う。親の好みの習い事を、子どもの意思・好みにかかわ

らず、させる親。もし子どもが嫌な顔をするなら、「あなたの将来を思ってやっているのだから、従いなさい。いずれわかるのだから」などと対応する。

また子どもがほしいと言ったものを与えることに迷いはないという例が多い。子どもに我慢させるあきらめさせることが下手なのだ。親自身もそんな感じなのだ。何でも、与えることが子どもへの愛だと思いこんでいる。

こんな例は、珍しくなくて、溢れるほどと言っていいほどあるかもしれない。子どもに拒まれて、うまくいかなくなる時、「親のいうことを聴かない悪い子ども」だといって、悩み始める。

こうした例では、子どもとの間に距離を取ることをしない。いつも親の目の届くところに子どもを置いておかないと、不安でたまらない。親の不安・寂しさを、子どもとの関係によって解消している例もある。そこではもう一人の親が入る余地は少ない。両親そろって、子どもにそのように対すれば、なおのこと難しい。

子どもは、親のいうことは聞くものだと思いがちで、親もそれが当然だと思いがちなので、こうした関係の問題性を、親自身が気づくことは少ない。その際に、配偶者がどう対するかは重要だ。親子関係のなかで、その配偶者の存在が希薄であれば、問題が難しくなる。結びつきが強い片親と子どもとの関係だけになりがちだからだ。そして、二人以上の子どもではなくて、一人っ子であれば、なおのこと、そうした関係ができやすい。

子どもが親に口答えするといった反抗的な行動を親は許せない。3歳前後には、そうしたことはごく当たり前だし、それが成長への重要なステップなのに、そうした反抗的行動は、「悪」への一歩だと思ってしまう。

反抗的行動は、たいていの場合、親からの自立へのステップなのだ。それは、思春期さらに成人への移行期に表れやすい。そうした反抗を許せない親は、子どもが距離を取ること自体が許せず、管理監視の目を強めてしまう。そして、上から命令指示するような言葉がけをするかと思えば、下からさがるように頼むこともある。子どもが少年期思春期になっていても、幼児言葉を使って話しかける親の例もある。子どもを「〇〇ちゃん」と呼ぶのもそうした類だろう。

こうした関係が、子どもが10代後半まで続く例が増えているようだ。かつては第二次反抗期といわれることが広く見られ、こうした関係は壊れていくことが多かった。だが、近年では、第二次反抗期が明瞭にわかる形であられることが激減してきた。

そのなかで、「仲良し親子」が、10代後半、ときには20代に至るまで登場してくる。親子間葛藤は表面化しない。「私たち親子は、とても仲がいいんです」と積極的に語る例も見かける。そのなかで、親子分離が進まず、子どもが就職結婚などに至る機会に出会ったとしても、親を気づかって、親が困らないように、親子関係を優先させて就職結婚などを検討する。その結果、家を出るという事さえなくなる。

「親子がとても仲が良い」ことを自慢して、親子ともに相手から自立しないことが続くのだ。そうした事例で、問題事態が表面化するものを指して、「共依存」と呼ぶこともある。

次回、こうした関係を超えていく（卒業していく）ために、どうすればいいかについて考えよう。

8. 押一引、発一受、働きかけ一対応

対他者関係においては、押一引、発一受、働きかけ（支援指示命令指導など）一対応（応・従・反論・拒否・無視・逃など）といった二つの言葉の組み合わせがつかまとう。そして、この二つのもののバランスのなかで、人間関係はすすむ。

このバランスには、個人差が激しい。押、発、働きかけの比重が高い人もいれば、引・受・対応の比重が高

い人もいる。同じ人であっても、対する相手・場面によって変化するし、さらには年月の経過のなかで変化する。外では押、発、働きかけが強い人が、家の中ではそうでない人を、内弁慶といたりもする。

リーダー的な人であっても、押、発、働きかけが強いとは限らない。周りの人を動かす・生かす・成長させるのが上手く、自分ではあまり話さない人もいる。若い時は、押、発、働きかけが強いタイプだったが、徐々に、周りの人を動かす・生かす・成長させるのが上手くなる人もいる。

当人が属する集団によっても異なってくる。タテ型性格が強いところでは、「上」になる人による、押、発、働きかけが強くなり、「下」になる人は、引・受・対応がほとんどになったりする。集団の枠組みとかシステム性とかいったものが強力な際にも、そうした傾向が出てくる。

ヨコ型では、大きく様相が異なる。ヨコ型は、対等平等の関係とも民主的な人間関係ともいえるだろう。

これらのありようは、集団の展開、そして個人の生育の過程蓄積の中で変化してくる。家族という集団を例にとると、一人の強い人が、家族全体を仕切り、他の人はそれに従うという構図は単純なだけに、昔だけでなく今でも時々見かける。そんな経験ばかり持っている、対等平等の関係を築くのに苦労することが増える。

学校でも、教師がすべてを仕切り、生徒はそれに従うだけという単純な関係が根強く、今でも残っている。教師によっては、民主主義的な人間関係を築くことに全く不慣れという人が結構いる。授業で50分とか100分とかしゃべりっぱなしで、生徒は聞くだけという形になっている時は、そうした傾向が疑われる。

乳幼児のころの対他者関係でも、同じことがいえる。自分を出すことが上手いタイプ、相手に合わせてばかりいるタイプ、あるいは、相手との関係を作ること自体が下手なタイプがいる。赤ちゃんに笑いかけると、笑い返す赤ちゃんもいれば、視線を避ける赤ちゃん、泣きだす赤ちゃんもいる。これは、相互関係なので、赤ちゃんの側だけでなく、笑いかける人の側、そして両者の関係による違いが大きい。

先日も初対面の1歳過ぎの赤ちゃんに、私が話しかけると、その赤ちゃんは、私にとっても関心を示し、その後も、私との関係が発展することがあった。この赤ちゃんの対他者関係での関心の高さ・反応のすごさには驚かせられた。

こうした対他者関係での構えや能力といったものは、どんどん変化発展していく。そして、それは周りの人の働きかけのありようととも、当人のそれへの対応のありようにつれて変化発展するものだ。

そして、人生のなかで、それらが変化発展する節目のようなものが存在する。それは、集団においてもいえるだろう。そこで、次回から、個人の成長変化を中心にいくつかの例について考えていくことにする。

予定の項目を並べておこう。

- 1) 我が子を所有物とみなして、幼児期の親子関係のままでいようとする親
- 2) 属する集団をいつも取り仕切っていないとおさまらないリーダー（ボス）
- 3) 人間関係を結ぶ経験が少ないのに、「人見知り」だと決め込んで、人前で積極的にならない人

7. (続) 初対面の知らない人との会話

こんな風に、私はいろいろな場面で、初対面の知らない人にも声をかけることがよくある。その際の私のコツはこんなものだ。

場の特性・出会う人の特性を話題にする。「ここ▽▽という地域には、人なつっこい人が多いですね」「このあたりは、結構、広葉樹が多いですね。秋になれば、きれいでしょうね」

直接、どなたかと会話を始める時、服装のことで褒めたり質問したりするのも、一つのアプローチだ。「あ

あなたのジャケットは魅力的ですね。私がそんなのを着けたくても、この年齢では無理ですね」「紫色は着こなすのが難しいと思っていたのですが、近頃は、うまい人が増えていますね」

自分が知らないことを尋ねるのもいい。「この水が行きつくのは、太平洋ですかね。日本海ですかね」「この地域の名物の食べ物は何ですか」「この時間に混むのは、何かあるんですか」

ところで、「だれかれとおかまいなしに話しかけるのか」と尋ねられたら、「話しかけやすい人はいる」と応える。単純化していうと、明るく楽しくて応答してくれそうな人だ。授業などでは、そういうタイプではない人に意図的に話しかけることが多いが、旅先、お店などでは、通常そんな感じの人に話しかける。

逆に、相手の方から見ず知らずの私に話しかける人もいる。同じように、明るく楽しそうな人で、女性に多い。私が、じいさんで安心できるのかもしれない。子どもからも話しかけられることがあるが、多くはない。

こうして、相手との会話を楽しむと気分的にいい。それだけでなく、相手のサポートや応援などをえられることもある。

ここまで、挨拶・話しかけることからこの連載を書き始めたが、人間関係スタイルが凝縮してみられるからだ。それにも、挨拶の項で書いたが、地域差が大きい。

対比的に書こう。

人が多い所	人がまばらな所
寒い所	暖かい所
忙しそうに動きまわる所	ゆったり動く所
人工物が多い所	自然のままが多い所
満員電車や駅の人混み	農道・海岸・森

左側は、都会に多いし、右側は田舎に多い。私は、小学生時代まで田舎に暮らしていたが、中学生から都会生活に移る。都会生活に圧倒され、そこで必死に生きてきて、左側のなかで人間関係を結んできた。しかし、そこに「疲れ」、右側が多い沖縄生活に移った。といっても、最初は那覇生活だった。そして、南風原・西原に移り、右側が中心の生活に移った。

この変化は、私の人間関係の持ち方にも大きな変化をもたらし、挨拶や話しかけることにも変化をもたらした。左側の時は、歩くスピードも速かったし、早口だった。左側生活の時と、右側生活の時とでは、話すスピードは数倍の違いがあった。今は、100%どころか150%右側だ。行動も言葉も、私の人生上、最高にスローだ。

沖縄もそうだが、同じ地域のなかでも、左と右の地域差があるが、地域全体としてみると、左が優勢な所、右が優勢な所がある。

6. 初対面の知らない人との会話

私は、初対面の知らない人にも声をかけることが多い。いくつかの例を書こう。

外国で、英語など私には難しい言語で話しかけられた時、応答に困った経験が多い。お店に行った時、Can I help you? などと店員が話しかけてくるのは、ごくありふれている。その時、Just looking といえぱいと教えられたが、それではつまらない。

そんな時は、こちらから話しかけるのがいいことが経験からわかってきた。私の会話力量にあわせて、店員が合わせてくれるのだ。これは、店に限らない。英語で話す機会がある時は、できるだけそうしてきた。黙っ

ているのが、一番駄目だ。

日本のスーパーなどのレジでのこと。通常は、「マイバッグ」「支払い方法」についてなど、必要最小限の会話に抑えるのが通常だ。でも、それだと自動応対機械と付き合っているようなものだ。実際、客が自分で、機械のボタンを押して、レジをするところが出てきている。

店員と客が、お互いに顔を突き合わせているのに、「知らんぷり」をするのは、店員と客が、金銭商品関係に還元されてしまっていて、寂しさを感じる。一言ぐらい、付け加えた会話をしてもいいのではないだろうか。「今日は、天気のためか、すいていますね」「私たちのように、もたもたしている人相手は、大変ですね」「この商品は、とても気に入っています」「この商品の使い方は?」「〇〇は、どこの棚にありますか」

こうした声をかけた時、人付き合いが下手な店員は、ぶすっとした顔になる。上手い店員とは会話がはずむ。同じ消費者としての会話になることもある。そして、また来たくなる。無論、相手が会話を望まなければ、話しかけるのをやめればいい。

役所のカウンターでも、会話が弾むことがある。「年を取ると、こういう書類のやりとりがおっくうになりますね。新しいやり方がでてくると、間違えたり、困ったりすることが増えますね」などと会話する。すると、同情心が増すのか、いろいろと助けてくれる職員が多い。

私が授業・講演・ワークショップに出かけて、出会う受講生・聴衆・参加者との関係は、これまで書いた客と店員の関係が逆になり、私の方が店員の立場だ。私は、開始前、5分10分前に会場に行き、すでに集まっている参加者と話す。

「どちらから来られたんですか」「学科は何ですか」「今日は、どんな風になりそうですか。」・・・

講師とか教員が、開始前にこんな風に話しかけるのは少ないようだから、驚かれるが、親しみを感じられるのか、結構会話になる。そこで、私のパーソナリティ丸出しの冗談などいうと、微笑、爆笑が生まれたりする。時間があれば、会場の中の一カ所だけでなく、別の個所について、また会話をする。

こんなことをすると、私のパーソナリティを感じて、距離を縮めて気分を和ませて、雰囲気作りができる、受講生・参加者の特性・雰囲気がつかめる、ワークショップ進行に向けてのつながりができ始める、という得をする。

5. 初対面の知らない人にあいさつする、会話する

小中学校などで、子どもたちに「あいさつ」を奨励することをよく見かける。それには、初対面の知らない人を対象にすることもある。そんなことで、道を歩いていて、下校中の小中学生に、「こんにちは」などと声を掛けられて、びっくりしつつも、嬉しい気分になって、こちらからも「こんにちは」というだけでなく、時には、「上等なあいさつだね」といったり、「何年生?」と聞いたりもする。

学校教師も含めて沖縄の大人たちのなかには、「沖縄の子どもはあいさつもできない人見知りが多すぎる」という注文の声を聞くことがある。時には「他府県の子どもたちはきちんと挨拶ができるのに」という言葉まで加わる。

私の経験でいうと、沖縄の子どもたちはよく挨拶する方だと思う。20年ほど前愛知で生活していた時に、見知らぬ小中学生に挨拶される経験はほぼなかったし、大人からもあいさつされることもなかった。私の方から、挨拶をしたことは少なくないが、たいていは、軽い会釈を返すか、無反応だった。げげんそうな表情が返ってくることもあった。ここでは、挨拶を交わす習慣はないのだな、と了解した。

近年では、「不審者」対応もあって、「見知らぬ人から声をかけられたら、用心しよう」という指導が行き

届いてきているようだ。そのためか、沖縄の小中学生でも、挨拶をするのが減ってきそうな気配を感じる。

見知らぬ人でも挨拶する習慣が強く見られるのは、ハイキング・山歩きの時だ。こんな習慣は広げたいと思う。見知らぬ人を警戒する気持ちはわからないでもないが、挨拶までしなくても、会釈を交わすのでもいい。それだけで、気分が明るくなる。こちらが挨拶や会釈をしたのに無反応では寂しくなる。

そして、挨拶でとどめないで、何かの会話が生まれてくると、なお嬉しい。通路上でのすれ違いではなく、ある程度の時間を共有したり、行動を共有する場合にはなおさらである。

先日、恵美子とともに映画館に出かけた。恵美子の隣に座った方が会話が好きなようで、恵美子と会話が弾んだ。初対面の方だ。同じ映画を見ているということが、親近感をつくりだしたようだ。

長時間乗る列車のなかで向かい合えないしは並んで座った人とは、無言のままにいるよりも、少しは会話をしたくなる。「どこまで行かれるのですか」「仕事ですか、観光ですか」ぐらいの会話は難しくない。その会話だけで終了することもあれば、話が弾むこともある。時には、食べ物を交換したり、行く先情報を交換することもある。新幹線では滅多にないが、ローカル列車では多い。

団体の観光旅行であればなおさら、会話する人が多ければ多いほど楽しい。なかには、孤独な旅が好きで、そっとしてほしい人もいるだろうから、そんな人には、あいさつぐらいで止めればいい。団体旅行なら、結構な時間を共同行動するわけだから、いろいろと話などができればうれしい。たまには、バスの座席を交換したりするのもいい。

お店でもそうだ。かつては店員との会話がい物にとって欠かせないものだった。店員との会話を簡略化するために、店員がマニュアルに沿った対応になってきた。品選びについて店員と会話するのを省き、レジの時だけの対応になってきたのが、スーパーやコンビニだ。そのレジでさえ、客が自分でやるレジまで登場してきた。

今や、買い物での会話は不要物・邪魔者扱いになっている店が多い。

4. 「あなた」などの二人称の使い方 配偶者の呼び方

私たち周辺では、二人称の使い方に苦手な人が多い。そのため、「おい」「ねえ」「あの～」「すみませんが」といった調子で、話しかけの糸口に使う言葉で代用していることが多い。どうしても使わなければという時でも、きちんとした二人称を使うと、照れてしまうことが多く、「そちらさま」「今来られた方」といった、第三者的な言葉で代用しているようだ。

タテ関係が強い人は、目上などの人に対しては、「先生」「お客様」といった言葉で代用させることもある。目下だと見なす人には、「おい」「お前」「貴様」「君」といった見下した言葉が、いくつもある。

比較的若い人に多いのは、「比嘉」「太郎」「えみ」などと相手の名前で代用することである。

一人称の使い方もそれほど豊かではない。「私」「僕」などでは照れてしまい、「俺」「あたい」なども使われる。「わん」などのシマクトゥバは、なかなかよさそうだ。でも、「こうた」「ゆり」などと自分の名前を使う人が、これまた若い人に多いのではなかろうか。

単純明快に、「私」「あなた」という使い方に熟していきたいものだ。名前で代用するのも良策だとは思う。私の場合、「私」「あなた」をよく使うほうだが、少々緊張するときもある。

もっとも、電話のやりとりで、自分の名前を名乗らずに、「俺」「私」などを連発されることがよくある。そこに付け込んで「おれおれ詐欺」が生まれる。「私」を連発されても、相手が誰なのかがわからなくて苦労

することもある。親しい間だけに、名前を名乗るのに照れてしまうことがあるのだろう。

同じことは、第三者との会話などで、配偶者をどう呼ぶか、という場合にもある。

「主人」「旦那」「妻」「奥様」「女房」などだと、タテ関係の色彩が残っているから使いにくい。「彼氏」「彼女は」、長年連れ添っている人には使いにくい。ヨコ関係的な表現としては、「つれあい」「パートナー」などがあるが、まだなじみが薄いようだ。なかには、「ダーリン」などとしゃれた言い方をする人もいる。そこで、私達のように、「恵美子」「誠」と配偶者名で呼ぶこともある。

最近、男性の側から、「嫁」と表現する例によくであう。当初、私は、息子の「嫁」のことと勘違いをしたことがしばしばだった。

こうした使い方に熟して、馴染んだ使い方ができあがることを望みたい。それまでは、ファーストネームで行くしかないかな、と思う。

3. 呼び方 教員相互間 組織のなかで

教員相互間の呼び方はどうであろうか。日本では、姓で呼ぶことが一般的だ。名で呼ぶのは、よほど親しい関係をもっている間で、私的な場面に限られる。

そして、姓の後ろには、「先生」か「さん」をつける。場面がオフィシャルであれば、「先生」をつけるのが一般的だ。オフィシャル性が弱ければ、「さん」をつける。といっても、どんな時でも、「先生」で通す人も多い。なかには、「さん」で通す人もいるが、対等な人間関係を求める姿勢が強い人に多い。

なかには、学長、学部長、委員長などと職名での呼び方が使われることもある。ただし職名に姓をつけて呼ぶことは少ない。敬語的な意味合いを含むこともあるが、多くはオフィシャルな印象が強い使い方だ。行政的関係の印象を帯びることもある。敬語的ニュアンスを強めるために、「学部長先生」と呼ぶこともある。「校長先生」という呼び方と同じだ。

肩書で呼ぶと、生身の人間関係が弱くなり、個人を消す効果を持つことがある。「〇〇先生」という呼び方の持つ権威性を避けたくて使う人もいる。学会で、「〇〇会員」と呼ぶ場合にも、その傾向がある。行政の会議で使われる「〇〇委員」という呼び方もその類だろう。

ファーストネームではなく姓で呼び合うことにも、オフィシャルな雰囲気を持たせることが多い。

私の場合は、できる限り、〇〇さんを使う。〇〇先生という使い方は、つきあいがまだ浅い人との関係が多い。こうした用語使用は、複雑すぎるとかえってまずくなることが多い。シンプルがベターだということがあるし、大学教員間では、対等な関係がごく自然だから、そうになってしまう。

ところで、「先生」というのは、教える立場の人向けに使われる用語であったはずだが、教えることとの関係が薄い世界の人でも、「先生」という呼び方を好む人たちが見られる。代議士、弁護士、司法書士、建築士、保育士などである。よりの確な用語を探すか、〇〇さんで通したらどうだろうか。

タテ型組織傾向の強い職場では、こうした呼び方の使い分けが、新入メンバーを悩ませているようだ。たとえば、ビジネスの世界で、外部の人との会話の際に、所属する会社の上司は呼び捨てで話すのが、広く行われている。社内では敬語に属する呼び方をするが、社外に対して呼び捨てという使い分けだ。私は違和感をもったし、いまでも馴染めない。

国会でもそうだが、会社組織でも、上司が部下を呼ぶときは肩書ではなく、女性部下を含めて、「～～君」

という呼び方を耳にすることがある。私は違和感をもつし、何か特別の世界なのだな、とってしまう。

役所や病院で、呼び出す時に「〇〇さん」と姓を使って呼ぶ使い方がごく自然な感じでいいのではないか、と思う。混乱や間違いを防ぐためにフルネームで呼ぶのもいいと思う。そういう普通感覚というか自然感覚の呼び方がいいと感じる。大学でもそうだと思うのだ。

自然感覚の呼び方が私にとって心地よいのは、卓球練習の時である。10代から70代の私まで、ほぼ〇〇さんだ。まれに、私の以前の職業を知っている人が浅野先生と呼ぶこともある。

〇〇さんの呼び方は、仕事でのつきあいとか、上下関係とかを忘れさせてくれる。なかには、学生時代の年齢順のタテ関係の慣習を残していて、呼び方が〇〇さんでない例もあるが、多くはない。そんな呼び方をする人も、40代にもなれば、〇〇さんという呼び方にしてはどうかと思う。

同じことは、近隣での付き合いでもいえそうだ。

2. 呼び方 学生相互間 学生と教員間

私が長く務めてきた大学で、お互いにどう呼び合っているのかふりかえてみよう。これには、大学による違いがある。とくに沖縄の大学と、沖縄以外の日本の大学とでは大きく異なる。

まず学生相互間だが、沖縄の大学では、ファーストネーム、ないしはそれをくだいたニックネームで呼び合うことが一般的だ。姓で呼び合うことは滅多に見かけない。それは、小中高校時代からの習慣といえるかもしれない。同性間だけでなく、異性間にあっても、その傾向が強い。ファーストネームで呼び合うにしても、最初のうちは〇〇さん、〇〇君と呼び合うだろうが、それではよそよそしさを感じるのか、いずれ呼び捨てになる。

他府県の大学では、姓で呼び合うのが一般的だ。親しくなれば、ファーストネームないしはニックネームで呼び合う。それは、相互関係にウチ意識が芽生えたときであろう。

両者の違いは、他府県から沖縄の大学に入学してきた学生が、沖縄出身学生相互のこのような呼び方に会う時によくあらわれる。他府県出身者は、違和感を持つどころか、驚くものさえいる。それでも、沖縄的な人間関係に馴染んでくると、沖縄風の呼び方をするものが出てくるし、他府県風の呼び方のままのものもいる。同性間では、沖縄風に行くが、異性間となると、他府県風のまま、使い分けるものもいる。

教員と学生との関係では、上下関係の色彩が強く非対照的になる。学生は、姓を使って、〇〇先生と呼ぶことが100%近くなる。ファーストネームで呼ぶことは、ほぼない。まれに、姓で〇〇さんと呼ぶことがある。それは、当の教員がそれを容認し、さらに奨励するときに見られる。そうでない教員に〇〇さんと呼んで叱られることもある。

また、学科とか研究室とかの世界に限定的だ。私自身が東京で学生だったころ、そうした呼び方を比較的使った。もっとも〇〇さんという呼び方を嫌う権威的な教員には、〇〇先生と呼んだ。そこには、教員対学生間の上下関係的なものを避け、対等な関係であることを大切にしたいという雰囲気が存在した。

それでも、学生にとっては、〇〇先生ではなくて、〇〇さんと呼ぶには、「意識」の高さ、というか度胸、自信とか誇りの高さが必要だったから、〇〇先生で通す学生もいた。

私に対しての場合、学生には、浅野先生でもいいし、浅野さんでもいいという姿勢でのぞんでいたから、両者が入り混じっていた。私との親しさの度合い、学生自身のなかにある権威的なもの規範的なものの濃度が反映していたように思う。

教員から学生を呼ぶ場合はどうか。沖縄の大学でも他府県の大学でも、ファーストネームで呼ぶことは少なく、姓で呼ぶことが多いだろう。呼び捨てでもあるが、男子学生には、〇〇君、女子学生には〇〇さんと呼ぶのが多かった。だが、ジェンダーやセクシュアリティについての意識が高まってくる中で、両者を区別しないで、〇〇さんと呼ぶのが広がってきた。

呼び捨てで呼ぶ場合は、教員と学生間の距離がない場合か、両者の間に上下関係が強い時だろう。出欠をとるような形式的な場面で呼び捨てを使うこともある。

このあたりは、大学のタイプや教員の個人タイプによる違いが大きい。私の場合、男女区別なく、ほとんどを〇〇さんと呼ぶ。学生相互の討論のなかに分け入る時には、学生相互間で呼び合うスタイルに準じる時もある。

私は学生との距離がとて近しい教員の部類に入るので、学生と私の会話を聴いていて、学生が「ため口」を使っているといって驚かれることもある。

1. 家族をファーストネームで呼び合う

実に様々な人と出会ってきた。そんな私の70年にわたる体験をもとに、私流につくってきた人間関係スタイルについて、しばし連載でつづっていきこう。

夫婦、親子など家族間をどう呼び合うかは、なかなか興味深いことだ。私達の特徴を一言で言うと、「ファーストネームで呼び合う」である。夫婦間でも、親子でも、孫との間でも、である。

無論、最初からそうであったわけではない。多くの事例がそうであるように、家族生活のステージに連れて変化してきた。多くの事例では、結婚生活スタートし始めのころは、ファーストネーム、または「おい—ねえ」「あなた」「あんた—お前」といった呼び方をしてきたものが、子どもができて以降、大きく変化する。「パパ」「ママ」「お父さん」「お母さん」「おとう」「おかあ」と呼び合うようになり、孫ができて以降は、「おじいさん おばあさん」「おじい おばあ」などと変わる例をよく見る。

親子間などで、こういう言い方を使うだけでなく、夫婦間でも、こういう言い方が増えるのだ。子どもや孫を軸に呼び方も変わるのだろう。ファーストネームで呼び合うことは消えることが多い。それでも、「おい—ねえ」「あなた あんた—お前」の類が続くことは多そうだ。

私たちの夫婦では、交際開始のころは、姓で呼び合うことから始まったが、すぐにファーストネームで「誠 恵美子」と呼び合うようになった。私の岐阜県の実家に行くと、そうした例が珍しいどころか、妻が夫を呼び捨てにしてると、いちゃもんがついたことがある。沖縄では、私たちだけでなく、ごく日常的に見られるスタイルだった。とくに宮古の家族・親族では、夫婦間だけでなく親族間でも、ファーストネームが通常だった。

私たちに子どもができた時、子どもたちは、「パパ」「ママ」と呼んでいた。そのこともあって、子どもたちの前で、夫婦相互間でも「パパ」「ママ」とよぶことはあったが、二人だけの時は、「誠 恵美子」と呼び合うのが続いた。子ども達を呼ぶときは、ファーストネームが通常だった。

子どもたちが大きくなって、私達を「パパ」「ママ」と呼ぶことから、「おとうさん おかあさん」を併用するようになる。私達相互は、「誠 恵美子」をますます中心にするようになっていった。

孫ができた時に、夫婦で相談した。孫にも、「誠 恵美子」で呼ばせようと決めた。当然、私達たちが孫たち

を呼ぶときは、ファーストネームだ。息子夫婦と孫との間では、「パパ ママ」のようだが。

一つのエピソード。最初の孫が5歳ぐらいになった時、「誠はあなたのおじいさんだよ」ということが理解できなかったのだ。おじいさんは、母方の祖父のことで、「誠は誠だ」と言い張るのだ。「誠はパパのパパだから、あなたのおじいさん」というのは、難しかったようだ。

高校生になったその孫とは、今もファーストネームで呼び合う。

「おじい おばあ」と呼ばれるのを避けたかったこともあるが、ファーストネームで呼び合うことが、私たちに馴染みの言い方であったことが最大の理由だ。

孫が生まれる1年余り前まで、私たちはカナダ生活をしてしたが、ファーストネームで呼び合うのが、ごく普通だった。大学の教員相互の日常会話でもそうだし、学生が教員を呼ぶときでさえ、その例が多かった。そんな生活習慣を心地よく感じていたこともある。欧米人では、ごく普通のことだが、日本人のなかでは、めったに出会わない。しかし、沖縄では、特に宮古では、ファーストネームで呼び合うのが普通のことなのだ。

追悼 根間武雄（義兄） 多くの事があった一週間 2017年07月09日

授業も終わり、今週からは執筆研究活動などに集中できるはずだった。でも、たくさんの事があった。

週の初めは、南城市史の聴き取り。三人のベテランから話を聞く。充実の聴き取りだった。その内容の文章化は、充実した内容だけに、結構な時間をかける。

その後は、沖縄についての単行本執筆に集中できるはずだった。ところが、いろいろとあった。石油ボイラーの運転中止サインが続発していたが、その都度、スイッチ入れ直しで対応してきた。しかし、ついに動かなくなった。こういう時は、福原の三線プロの加藤さんの出番だ。加藤さんは丁寧にみてくださる。ついにはメーカーの所長さんまで登場。結論として、14年間の使用で取り換えるしかないという事になる。いつも、加藤さんにはお世話になる。

そんな時、太陽光発電の点検がある。実は、我が家を設置した会社は、もういまやないということだ。多くの太陽光発電設置会社が同じ運命をたどっているようだ。いまはない会社からリストを引き取った、初めての出会いの会社が、点検してくれる。問題なしとのことで一安心。メーカー10年保証なのだが、長くつきあうなかで、どうなっていくのだろうか。

加えて、この一週間は、他にも営業訪問が多かった。

それらへの対応に一区切りがつきかけてきたころ、訃報が舞い込んだ。

6日、義兄の根間武雄さんが亡くなった。義兄にいろいろとしてもらったことを思い出す。私には、恵美子の兄弟つながりで5人の義兄がいる。だが、皆さん、お亡くなりになった。恵美子の親族関係のなかの男性では、ついに私が最年長になった。

私が、沖縄生活を始めた1970年代、そして1980年代と、義兄たちには本当にお世話になった。このあたりのことは、連載している「私の人生シリーズ」の臨時版で改めて書くことにしよう。

葬儀の一連の儀式につき合う。そのなかで、いろいろな出会い、語り合いがあった。忘れていたことが、義兄のことで思い出されてくる。義兄の結婚証人になったことも思い出した。たくさんいる義理の甥姪、そしてその子どもたちとの語り合いが、夜遅くまで続く。私は、恵美子との結婚をきっかけに大家族のつながりのなかに入り込んだのだ。

いくつも人生物語が入り混じり、豊饒さを感じる。たくましく、かつやさしく生きる人々。10年単位の新

たなドラマが、並行交差して続いているといった感じだ。

夜、義兄を追悼するかのよう、月下美人・ドラゴンフルーツ、サガリバナの花が咲き乱れる。

中座する・途中でやめることも大切なことだ

2017年06月18日

ところで、卓球の練習を週2回水木にしている。フルに参加すれば、4時間近くすることになるが、私の体力が対応できない。そこで、遅れ気味に参加することは普通で、中座する時もある。週末に試合がある時などは、木曜日の練習を休むことが普通になってきた。そんなことで、加齢による体力低下に対処している。

そんな時、練習を「中座します」といいにくい私を発見する。「最後までしなくては」とか、「途中でやめるなんて」とかの声が聞こえてくるからだ。誰かがそういうのではなくて、私自身の中から聞こえてくる。

飲み会などの会合でも、「中座します」といえなくて、最後まで、夜遅くまで、付き合ってきた歴史が長い。

こんな考えに囚われる私には、長い歴史がある。と同時に、社会的に深くしみわたった考え方がある。「何事も最後までやり通せ」「途中で投げ出すなんて、とんでもない」「途中でやめるなどとは、敗北だ」というメッセージだ。

だが、そんなメッセージが多くの人を苦しめてきた。そして、「最後までやり抜こうとして、撃沈する」多くの人がある。「生涯現役」などと言う言葉は、その延長線上にあるのかもしれない。当人にとってはかっこいいかもしれないが、突然先立たれた周りの人の困惑は大変だ。後のことを考えずに、自分だけ現役で終了すればいいという発想はいいのだろうか、とさえ思う。

それにしても、若いころにしみついた「最後まで頑張る」というガンバリズムは、多くの高齢者を取り込み、そこから自由にさせていない。たとえば、何かしていないと「悪い」という気持ちにさせ、これまでやってきたことで十分なのだ、という発想を悪いものだと思わせてしまう。

そんなことを背景にして、中座とか途中でやめることへの躊躇をつくりだしてしまう。「持続神話」だ。

ガンバリズムからの卒業はとても難しい。でも、同じことをずっとするというのではなく、やることを組み替える、広げる、転換するなどをして、「持続神話」を卒業して、人生をいくつも体験したい。持続神話は人生は一つだという神話をも作りだす。社会変化が激しくなっている20世紀以降、一つの人生のなかで、いくつもの「社会」を渡り歩くことが、ごく普通になっている。社会がいくつもあれば、人生がいくつもあるのは当然だ。

軍国少年がいつまでも軍国少年では困る。偏差値依存でストレター型は、20代30代で卒業する必要がある。いつまでも家父長的な父親では、周りが困るし、本人自身も困ったことになる可能性が高くなる。

そんなことを考えると、「中座する」「途中でやめる」ことが大切で、人生上重要な役割をはたすことができることに早く気付きたい。

日野原重明「今日すべきことを精一杯」を読む

2017年06月15日

相変わらず読書生活は続くが、ブログにコメントするのは減っている。読書が沖縄関連が多く、執筆中の単行本に反映させるものが多いからだ。

そんななか、中高年齢時代の生き方の本も時々読む。その一冊として日野原重明「今日すべきことを精一杯」（ポプラ社2017年）を読む。20年近く前の著者78歳のときのもので、医療・医師のありようにかかわるものの比重が高い。

「新書版へのあとがき」には次のように書かれている。

「当時、日本の医療の場に身を置いていた七十八歳の私が、「患者中心の医療とはどうあるべきか」について、現場で体験し考えたその当時の思いを、渾身の力を込めて読者のみなさんに訴えかけたものでした。

私の生き方は、父から教えられた「三つのV (Vision, Venture, Victory) - ビジョンを描き、果敢に挑戦することによって、勝利への道が開かれる」のもとに進んでいくことでした。」 p168

「患者中心の医療」については、共鳴できるところ大だ。上から目線で、患者を従わせる医師というありように、鋭い問題提起をしている。少しずつ医療界も変化しはじめているのかな、と感じることもあるこのごろだ。

本書の随所に医療のありようへの提起があり、関係者が参照されることを期待する。

引用の後段の三つのVについて。

日野原さんの生き方は、すごいし、素晴らしいと思うが、「勝利」までいきつくということは、果たして絶対的な価値なのだろうか、とってしまう。また、「ビジョン」を描くこともできずに、いろいろと試行錯誤的に「挑戦」している中で、知らぬ間に、「ビジョン」ができていて、ということもあるのではないかと、とってしまう。

確かに、20世紀半ばから後半にかけては、こうした「三つのV」を追求することが可能であり、そうした追求をした人々は多いだろう。私自身も40才代までは、そんな生き方をしたように思う。しかし、20世紀末から、そうしたありように変化が、私だけでなく多くの人々に、さらには社会全体に広がっているように思う。試行錯誤させられる時代にあって、より豊かに生きるとは何かという事を考えていきたいものだ。

人生の仕上げ作業

2017年05月20日

70代に入って、残された期間で、人生の仕上げをどうするか、を考えること、そして考えたことを実行に移すことが増えてきた。

一つは、すでにやっていることだが、老前整理。10年近くしているが、書籍・研究資料をはじめとして、まだ三分の一も終わっていない。少しずつ積み重ねるしかないが、今のペースでいくと、あと15～20年必要だ。保管すると決めたものも、次の世代にどう引き継ぐかが未定のものばかりだ。自分の都合では決められず、引き継ぐものの意向が重要だからだ。

もう一つは、自分がやってきたことを、どうまとめあげるか、仕上げるかだ。主として研究だが、意外にここ15年間で手を付け始めたものが多い。研究というのは面白いものだから、見通しなしにどんどん手を広げてしまった。なぜか、ずっとやっていけるという幻想をもとにすすめてしまってきたのだ。

そのため、仕上げが結構な作業になる。やるべきことの一割もできるだろうか、という感じだ。まちががなく、ほとんどが未完成のまま放置することになってしまいそうだ。

庭畑にしてもそうだ。作り始めのころは、どんどん植えて大きくして、という感じだったが、今、維持に比重を少しずつかけ始めた。後を誰がどう引き継ぐか、などということは、全く視野になかったが、そろそろ考えに入れた作業に移る必要がある。

たとえば、ガジマルをどうするかは、放置すれば深刻な問題になるだけに重要だ。

私は、物事を始めた以上は、物事を終えることもきちんと考える必要があると考えるタイプだ。それにしては、物事を終える作業は、取り組み始めたばかりという感じだ。終了を見通した作業をまじめに考えなくてはならない時期に入ってきたといえよう。しかも、相手がある作業の場合には、相談もしなくてはならない。

多くの人は、終了作業の準備もしないまま、人生を終了させてしまう、あるいはさせられてしまい、あるいは作業を進めることができない状況になってしまい、残った人を困らせることが多いように思う。よく聞かれるポックリ死＝突然死願望は、実は無責任な発想かもしれない。

終了作業は先延ばしにしてはならない、と思う。「生涯現役だ」と格好をつけて、終了作業をしないままで終わることはまずいということに気付かない人も多いように思う。

この作業の難しさは、人生の終了時点を予測して計画をたてて実践することの難しさと結びついている。また、周りの人も、「まだまだ元気なんだから」と、おだてて、作業着手の引き延ばしに加担することも多いと思う。

こんなことを考えながら、私もこころして、準備作業をすすめなくてはと思っている。

平井威ほか「ブーケを手わたす—知的障害者の恋愛・結婚・子育て」を読む

2017年04月09日

著者からいただいた本だ。書名を正確に書いておこう。平井威・「ぶーけ」共同研究プロジェクト『ブーケを手わたす—知的障害者の恋愛・結婚・子育て』学術研究出版／ブックウェイ2016年

感動的な本だ。学術的な性格をもった本だが、とても読みやすく、専門書というよりドキュメンタリーという感じだ。長崎県にある南高愛隣会が立ち上げた結婚相談室「ぶーけ」を中心に展開した実践を多角的に調査研究したものだ。

「知的障害者に結婚・子育てなんて」と思っている人は、是非お読みいただきたい。

第一章は、本書のメッセージを簡潔に述べているので、小見出しを紹介しておこう。

第一章 知的障害者の恋愛・結婚・子育て

性をエンジョイすることは人間らしく生きること

知的障害者の性は未だに統制されているのではないか

支援スタッフの価値観や知識・経験・福祉制度に左右されている

親や支援者を介さずに、当事者が直接つながるネ



ネットワークは作れるか

人生領域の意思決定支援に「結婚」が含まれる時代へ

第二章以降のタイトルも短縮して紹介しておこう

第二章 結婚相談室「ぶーけ」の事業

第三章 「ぶーけ」の実際—6年越しの恋から結婚生活を手にした高城麻央さん

第四章 田島顧問に聞く ※創設者

第五章 「ぶーけ」のしてきたこと、「ぶーけ」で変わったこと

第六章 「ぶーけ」を利用している人たち

第七章 交際相手を探している人への支援

第八章 交際している人への支援

第九章 パートナー生活者への支援

第十章 山岡家、家族再統合の物語—児童虐待からの回復

以下略

私自身も、本書を読んで初めて知ったことばかりだ。

本文のある一節には、「交際・恋愛、結婚、子育て支援が必要なのは障害者だけではない」とあるが、現代はそういう時代であり、そのなかで、本書にある取り組みは先駆的な意味さえ持っている。

おすすめの本だ。

上間陽子「裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち」太田出版 2017年を読む

2017年02月18日

著者から送っていただいた最新本。衝撃度の強い本で、発売そうそう話題になっている。

帯にある岸政彦さんの文が、本書の特徴を簡潔に提起しているので、まずそれを紹介しよう。



——それは、「かわいそう」でも、「たくましい」でもない。この本に登場する女性たちは、それぞれの人生のなかの、わずかな、どうしようもない選択肢のなかから、必死で最善を選んでいる。それは私たち他人にとっては、不利な道を自分で選んでいるようにしか見えないかもしれない。上間陽子は診断しない。ただ話を聞く。今度は、私たちが上間陽子の話を聞く番だ。この街の、この国の夜は、こんなに暗い。——

著者が沖縄のある街に繰り返し通い、キャバクラで働く少女たちの物語を聴き記録したものを編集した本だ。彼女たちの余りにもリアルな話に読者は驚くかもしれない。こうした記録を、上間さんの研究仲間は、全国の各所で作りだしており、私のこのブログでも繰り返し紹介してきた。

上間さんは、「聴く」こと以外に、彼女たちに「診断」を与え、

何らかの意図的働きかけをしているわけではない。しかし、聴くこと自体が、彼女たちに与えるものは大きいと思う。聞いてもらえる機会があまりにも少ないこともあろう。また、余りにも重すぎて、「聴く」こと以上になにかができるということには、なかなかならない。にもかかわらず、この話す―聴くという関係のなかで、なにかが芽生えてきたことだろう。

と同時に、本書を読むことをとおして、読者が何かを感じ取り、何かにつながっていくことが多だろう。それは、これまでこうした類は、外側からの大まかな情報として手に入れることはできても、当人たち自身の気持ちと論理のなかで、文字化されることがあまりにも少なかったからだ。

とくに、社会的に標準的なものとして承認される業務、たとえば教育に携わる人にとって、本書に登場してくる多くの事は、「聴けば、直ちに否定され、そこからの脱出を求める」世界だからだ。標準的なものに縛ることが、実は彼女たちの苦難を作り上げている仕組みになっていることに無意識である人が多い。無意識でなければ、そうした地位を得ることが出来ないのだろうか。

こうした虚構的な標準ではないありようが、追求されなくてはならない。そして、多くの人は、実はこうした世界が自らの日常生活のすぐ傍らにあることを避けている。あるいは鈍感でいようとする。

こんな状態にある人々に対して、本書は非常に刺激的である。その刺激をきっかけにして、自らの周辺のなかで、自らの眼をどのように見開いていくか、あるいはどういう関わり合いをつくっていくか、人々に寄せられる要請は大きい。

ところで、私自身も、30年ほど前、全く異なる苦難ではあるが、難題にかかわる多様な若い人々とつきあったことがあるが、私自身の存在に耐えられないほどのものを感じて、距離を置いたことさえある。

こうした苦難と伴走しながら、研究的実践、実践的研究をすすめている上間さんに敬意を表したい。本書が、研究の世界に与える重要な問題提起が、広く深く受け止められることを期待したい。

状況を感じ読み取る力と目標設定 集中のため噛みしめすぎる 2017年01月31日

前回の「目標を下げるが必要な時」の続きだ。

年齢と経験を重ねてくると、普通、自分を取り巻く状況を感じ読み取る力が高まってくる。その状況に応じて行動するのだ。目標が状況より高いと無理が生じるし、低いと張り合いがなくなる。

その状況に、実は目標設定が重なるようになってくる。状況の指標として目標ができるような感じだ。歩いている時に、4キぐらいになると、身体にはちょうどいい距離だから、ここで終わりにするという感じであり、それが歩く距離の指標になり、それを目標に設定するのがいい、という感じだ。目標というよりも指標という感じなのだ。無理な状態になる前に、張り合いが出てしばらくするころに終わるというものだ。

だが、ガンバリズムで、高い目標を立てることが習慣づいている人は、状況を感じ読み取る力が低いままであることが多い。無理をしていることがいいことだと習慣づけられて、結果的に、どこかで「切れて」しまうのだ。

言い方を変えると、「あるべきだ」という角度から目標をたてるのではなく、「なるがまま」という自然体に合わせて目標が「できてくる」といってもよいだろう。

社会にしても人生にしても、右下がりになって以降の時期には、こうした感じ取り方読み取り方が大切だろう。普通に生活を積み重ねていくと、そうした力が経験蓄積によって高まってくるのだろう。

そこでは、数値目標は、状況を示す指標となってくる。その人の持つ状況を感じ取る感性身体性が重要になってくる。そこでは当然、数値を高くすればよいというものではなく、むしろ状況とズレていない数値を出せるような感じ取る力読み取る力が必要だろう。それには知性や理性だけでなく、感性身体性が重要というか、より重要になってくる。

それは、自分を含めた自然の大きな流れをつかみ取る力、ないしは自然とともに生きる力、流れを感じ、共に歩む力といったものであろう。

こう書いている時、私の口まわりの筋肉がひどく疲労したことに気付く。食事の時に噛めなくなるほどだ。それで、柔らかいものを少量食べることになる。この一週間食べ過ぎ、体重増傾向なので、ちょうどいい、とは思いますが。

私は以前から集中して取り組む時、噛みしめすぎになる。最近1～2か月、とくにこの数日、原稿書きにのめり込んでいる。面白いから、ついそうになってしまう。のめり込み過ぎの黄信号が口のまわりに出ているのだ。

そうした状況になる前に感じ取る必要があるのだが、未熟なのだ。この失敗は繰り返している。なんとかしたい。

目標を下げるが必要な時

2017年01月22日

ふと思ったこと。

目標をたてる時、できるだけ高い目標がいいとして、低い目標を避けることがよくある。いったん決めた目標を引き下げるのは、初志貫徹ではなく、現実妥協で好ましくないとして受け入れない。上に向かう目標は受け入れられるが、下に向かう目標は避けられる。

右上がりでやってきた社会・個人では、こうしたことが習慣化して、下げる目標設定は嫌われてきた。だから、経済成長率をマイナスにするなどは許されないことと考える。だけど人口減少になれば、より限定的にいうと、労働力人口が減少になれば、マイナス成長になるのはごく自然のことだ。無論、生産性はそのマイナスを補うどころか、それを越えてプラス成長になればいいというのだろうか。ところが、生産性が先進国の中でも低く、長時間労働でそれを補っているのが、日本、そして沖縄の特徴だ。脱線になるので、機会を改めて論じよう。

そこで、一人当たりにみれば、さらに裕福になる必要があるのだろうか、という問いが生まれる。しかし、近年は、格差が拡大し、ごく少数の人々に富が集中し、大半の人は現状維持か悪くなっている。だから、貧困問題が前面に出てくる。だとすれば、経済成長ではなくて、格差是正こそがテーマになる。

人間の一生でみると、平均的にいうと、40代あたりにピークを迎え、それ以後下がっていく現実がある。体力では、ごく当たり前のことだ。知力・精神力・経験などでは、それ以降も上昇することが多いが、それにしても、上昇スピードは鈍り、いつか下降に転じる。

ところが、ピークを過ぎても、なお右上がりを求めると、実際の体力や精神力との間にギャップが生じる。そして、ギャップを補うために、さらに頑張ろうとして無理が生まれる。若い時には、負荷をかけることが成長につながることもあるかもしれないが、ピークを過ぎると負荷が過重となり、断裂が生じる。上昇負荷に耐えられないと、「みっともない」「弱音を吐く」ということで、現実を「受け入れられず」、無理が重なる。

数日前、日本の自殺者が近年では最低を記録したというニュースがあったが、それでもなお、男性、とくに

40代→50代→60代に順に多いという。過重負荷がかかる世代だ。

とすれば、自分の体力・知力・精神力に合わせた目標修正が必要だ。それをしないで、体力・知力・精神力を上げようとする。知力の方はあがるかもしれないが、とくに体力はあがらない。ということで、精神力でなんとかしようとして頑張るが、うまくいかずプツンする。病気になる。

実際、40代50代男性に、働きすぎで精神力と体力に過重負荷がかかり危ないなと一目でわかる人をあちこちで見かける。とくに繊細な人、逆に堂々たる体格の人に、それを感じる。

そうした人は、ピークを過ぎたことを受け入れて、実際の自分の状況に合わせて、目標を下げることをしなくてはならない。あるいは、下げていく目標を掲げる必要がある。しかし残念ながら、それを周囲が受け入れる体制が整っている例は少ないので、余計に無理がかかる。周囲も当人も、下げるという習慣がないのだ。

日本政府の財政が、雪だるま式に借金を増やして、いずれ危機が爆発するといわれながら、「まだ大丈夫」という論と、とても似ている。

国家財政にしても、社会にしても、企業や社会組織にしても、なによりも個人にしても、危機が爆発してしまうと、どうしようもない。流行言葉でいうと、レジリエンスがとても弱いのだ。数十年間の右上がり習慣が、生活習慣病化しているといってもよいだろう。

こうやって書き始めると、止まらなくなる生活習慣病が私にあるようだ。ちょっと休憩して、次回にまわそう。

愉快的な70歳の日々

2016年12月29日～2017年02月15日

6. 知のインプットとアウトプット 健康寿命

12) 知のインプットとアウトプット

ここ10年余り、実にたくさんの本を読んだ。長年の数十冊ものツンドク状態を10年近く前に解消し、60代に入ってから、二か月に一回は書店に出かけて仕入れてきた本を読む生活を続けてきた。贈呈本も結構あるが、月に10冊余り読む生活を続けてきた。以前と異なるのは、慌ただしく読むのではなく、じっくり読むことが増えた。

結果として、知のインプットがかなり蓄積した。インプットすると、アウトプットしたくなる。ブログで書評やコメントを書くのもその一つだが、それも結構大変なので、扱う本を絞っている。

書いたものを、原稿化したくなる欲求が高まってくるこのごろだ。

ということで、70歳に近づくころ、インプット時間とアウトプット時間の比率を変えた。すると、頭を使い過ぎて、しばし前に書いた「歯の噛みしめ」過ぎ状態がでてくるほどになった。この比率の微調整をしながら進めるのが70代かなと思う。こんな調整をしながら、日々の知的活動をしているこのごろだ。

13) 健康寿命

最近、沖縄の男性の健康寿命が結構長いというニュースをどこかで見た。沖縄男性の平均寿命の上昇がストップし、日本の中での順位を下げていることが話題になるが、健康寿命ではトップクラスなのだ。

どうしてかは、よくわからないが、平均して74歳ほどのようだ。私の周辺を見回しても、そんな感じかな

と思う。この年齢あたりになると、足腰がしっかりして、自分の足で歩けることが重要なようだ。そのことが難しくなって、高齢者施設での生活になることをめぐって、先日、医療福祉に携わる70代半ばの方と、話した。

こう書く私も、気をつけてはいるが、転ぶなどして、足腰が心配になることが多くなった。先日も、階段の踊り場で、下がり始める際、滑って尻もちをついてしまい、階段を数段滑った。古い靴下で滑りやすくなっていたのがきっかけだ。こんなことで尻もちをつくなどは、以前では考えられなかった。

その時は、一瞬ヒヤッとして、骨は大丈夫かと気になったが。なんということはない。数日間だけ、尻もちで打った箇所が痛かっただけで済んだ。

こんなことがありながら、「人生は長いのか短いのか」と考えるようにもなるのが、この年の特徴だろう。最近の私は、「結構長いな」と感じる。いろいろとやりたいことは多いが、「頑張って、自分がしなくてはならない」という程の事でもないな、誰かがやるだろうし、だれかがそれをしなくてはならないと思ひこむのは、私の思い込みだろう、とも思う。「人生の長さに合わせて、自分がしたいことをすればいいではないか」とも思うようになり始めている。

5. 流動食予行演習 体力回復・強化から体力維持・低下への対応へ

10) 流動食予行演習

先の記事で書いたが、歯の噛みしめすぎで、3～4日間固形食を食べるのに苦労した。そこで、恵美子は、ご飯と副食をミキサーにかけて、液状のスープにしてくれた。

何年かたっていつか流動食になるかもしれないが、その時の予行演習だと考えた。どんなものが食べにくくて、どんな風にすれば食べられるか、ということ、この間いろいろと試みた。

こういう予行演習のようなことはよくある。60代から、けつまづきがふえた。段差とかハードルめいたものとかを越える時、以前なら、ちょっと足を上げるだけで通った所で、失敗することが増えた。そこで、そうしたところで、いったん立ち止まって、脚を大きく上げて通るようにしてきた。それが自然にできるようになり、けつまづきはなくなった。

こんな予行練習も、そう思うと、結構楽しいものだ。

11) 体力回復・強化から体力維持・低下への対応へ

体力低下は、疲れからの回復日数にも表れる。卓球練習の後の疲れを例にとる。定例卓球練習は水曜日と木曜日の、各々100分程度だ。水木連続練習した後、何日で回復するか、ということ考えてみよう。60代に入るころは、翌金曜日だけでなく土曜日にも疲れが残る。場合によっては、日曜日の3日後まで、疲れが残る。

とはいうものの、60代前半のころは体力回復時期だったので、練習時間を増やしていった。60代に入るころは、週一回しか練習できなかったが、60代半ば近くからは週2回できるようになった。そして、金土日休めば、日曜日にある試合に出られるようにもなった。67～68歳には体力回復期が終わり、体力ピークになった。そのころから、徐々に練習時間を減らし始めた。翌金曜日の午前中には体力回復できる程度の練習時間にし始めた。

集落共同作業でも、1時間すると、体力限度を超えると、早引きするようになった。(数え70歳で出席義務は免除)。

ウォーキングでも、60歳ころは3000歩で息切れ状態だが、その後5000歩でも大丈夫になり、ピー

クを迎え、今は徐々に減らし始めた。

ほかに、疲れが激しいのは大学授業だ。60名以上対象の2コマ連続授業では、翌日まで疲れが残った。

ということで、現在では、いかに疲れを回復させるかというより、翌日に疲れが残らない範囲で体を使うやりかたに変えてきている。また、風邪気味など体調を狂わせると、回復に数日かかることにならないようにしている。体調が狂いそうな予感がする時には、体力保存にギアチェンジするのだ。

年に2～3回、そんなことがあるが、発熱など大事に至らないように、いまのところ出来ている。

こんな体験は、退職後にスポーツなどを再開した人に多いのではないだろうか。再開後しばらくは、体力回復どころか体力強化の効果がぐんとあがり、うれしくてたまらなくなる。しかし、いずれやってくる体力維持・低下への対応を考えたほうがいいのは、60歳代後半のようだ。このギアチェンジをうまくやると、70代でも結構やっていけそうな感じがする。

4. 30年着続けている冬服の老前整理 スロー運転

8) 老前整理の一つは衣服整理だ。

15～30年着続けている冬服が10着以上ある。同じように、15～25年着続けている春秋服が10着ほどある。

13年前に、愛知県から沖縄に引っ越したから、冬服を着るのが四分の一程度に、春秋服が二分の一程度になったのが原因だ。このところの暖かさも一因だ。13年前以降、購入した冬服、春秋服は合わせて10着ぐらいか。その半分はスポーツ用だ。

悩み事というか、楽しみ事というか、どちらだか、私にもよくわからない。

私の処分基準は、2カ所以上傷がついたら、捨てるというものだ。残っているのは、しっかりした繊維で、しっかりした仕立てであるものがほとんどなので、なかなか捨てるに至らない。外出着だったものの大半は、普段着にしているが、着る機会が少ないから、残ってしまう。人にあげられるものはもうあげてしまった。

でも、思い出がたまっているものが多い。これらを着古し尽くすのに、春秋服は10年かかりそうだし、冬服は20年かかりそう。そんな風にゆっくりと処理していくのが、楽しい年頃になった。元気で着ることができれば、80～90歳までのつきあいだ。流行遅れなど気にしない私だから、していることかな。

夏服は、このようなことなく、需給バランスがとれているが、一つだけに30年の付き合いのものがある。かりゆしウェアのその前のバージョンの省エネ服で、かなりの値段のしっかりしたものだ。沖縄で買ったものだが、途中でお腹が出て、着られない時があったし、夏が短い愛知では着る機会が少なかった。最近、うんと着ているから、あと数年だろう。

9) スロー運転の楽しさ

免許を取って、44年余りになるが、なぜだか、違反でつかまったことはない。一因はスピードをださないからだろう。1970年代の58号線の恩納あたりを制限時速で走ると、2車線時代だったので、後ろに車が数珠つなぎになった。「大名行列」と称していた。

そんな運転を愛知でしたら、すぐに後ろの車にクラクションを鳴らされてしまう。だいたい15㎞以上オーバーで走らせるのが「常識」のようだった。やむなく、クラクションを鳴らされない程度で走った。その感覚で、戻った沖縄で走らせたなら、「早いね」といわれた。

その後、だんだん遅くなり、いまでは、制限時速内で走るのが普通だ。5～10㎞ほど遅い時も多い。高速道路では、70㎞平均で走る。だから、時速60㎞ぐらいの車を除けば、滅多に追い抜かなくなった。許田か

ら南風原南まで、何台に追い抜かれるか大まかに数えたら、100～200台だった。私が追い抜いた車は1～2台だった。

ゆっくり走っている時、高齢者マークがあると、後ろから来た車が了解してくれるので助かる。高速では、すぐに追い抜いてくれる。

それにしても、年々少しずつ遅くなっていることは確かだ。

おかげで、リッターあたりの走行距離が、クーラーを使う時期で29キロぐらい、使わない時期は31キロぐらいだ。驚かれる。

3. 体力低下への対応 器具活用修理は人に頼む

こんなことを書き始めると、思い当たることが次々と出てくる。だから、ちょっとした連載になりそうな気配だ。

6) 体力のゆっくりとした低下に気付いて、対応していく。

50代半ばの体調不良時の体力は、「最低」だった。好きな散歩もゆっくりと休み休み1～2キロ程度だった。それ以降、いろいろとやってきて、体調回復だけでなく体力も右肩上がりでも上昇してきた。そのピークは、3年ほど前のようだ。かなりの速度で歩き、4キロぐらいはなんともない状態になった。

卓球の練習も、週一回する程度だったが、今では週2回になり、試合で一日25セットもすることもあるほどに至った。

坂をのぼりつめた3年ぐらい前から、老化を実感するようになり、右肩下がりへとギアを入れ替えた。そこで無理をすると、事故につながりやすいし、老化をなんとか克服しようと思えばするほど、「できなくなった」時のダメージは大きく、かえってマイナスだろうと思うからだ。

ということで、少しずつ、一年つき、6～7%ぐらいの比率で運動量や仕事量を減らしていくようになった。ここ10年余り、運動時間管理を、歩数と卓球練習分数(1分あたり100歩に換算)の記録をとっているが、それに反映させている。たとえば、去年は、週当たり5200歩(520分)だったが、今年は4900歩(49分)にすると行った具合だ。

余談だが、練習時間は短くしたが、ワザの工夫に力を入れているので、卓球そのものは、まだ上達中だ。

7) 機械・器具への興味が薄れ、活用・修理は人頼み

10年ぐらい前までは、家電製品の活用修理は自信がある方だったと思う。だが、急速に関心が薄れ、必要な活用修理は人頼みにしている。対照的に、恵美子が頑張っている。私が動かないものだから、自分でやっている。DVDが上手くいかないのが、電気店で器具を買ってきて、活用している。

今の私は「うまくいかない時、わからない時は、教えてもらう」でやっている。電気店でも顔なじみの店員をつくって、任せて購入している。

だから、いつのまにか、器具のマニュアルを読まなくなった。

12月にも、家廻りの器具の取り換え修理をしてもらった。ボイラー修理専門で大活躍で、ティーダブログでも活躍している加藤さんが、我が家の専門家だ。屋外灯の光センサーを代えてもらった。ついでに、蛍光灯ランプのとりかえで、特殊なために難渋していたものも、見事に解決してもらった。

ついでに記すと、先日も、眠っていた通帳などを解約処理をしていたのだが、書類をどさっと持参して、必要なものをみてもらって、手続した。そうすると、とても親切に対応してくださる。もしかすると、「老人の

特権」かもしれない。

2. 「ハンカチ・はなかみ」をズボンにいられたまま洗濯 「若く見える」がよいかどうか

4) 様々な人生を発見・再確認する正月

出会いが多いのが正月だ。来客、年賀状、会話から得る他の人の話題……。結婚・出産・長寿・大仕事といった話から、事故・逝去・離別といった話まで、いろいろな幸せの形、不運の形が煮詰まって出会う日々だ。

そんな話を、若い時と比べると落ち着いて受け止められる年頃になっている。びっくりするような話もあるが、うろたえるわけではない。これまでの実に多様な人生との出会い体験がもとになっているためだろうか。

5) ズボンのハンカチとポケットティッシュを取り忘れて、洗濯に出すことが常習化

クリーニングに出す時に、チェックしないで出すものだから、クリーニング店に迷惑をかけた回数は、数回以上だ。今度は自宅での洗濯機でもやってしまった。

私が小学生のころ、今週の目標として教室の黒板によく書かれていたものの一つに、「ハンカチ・はなかみをもってくる」があった。今の時代はどうなったのだろうか。その時にしつけられたものだから、いまでも、外出着にしる普段着にしる、ズボンの後ろポケットに、「ハンカチ・はなかみ」をいれることが癖になっている。もっとも、それを使うのは、月に1～2回である。

当時は、「鼻たれ小僧」といって、鼻からみずばなを出すのは、田舎では、ごく当たり前のことだった。出たら、はなかみでかむように指導されるのだが、実際は、鼻をすするか、袖口で拭くのが、これまたごく普通だった。「ハンカチ・はなかみをもってくる」は、そんな時代の名残の習慣といえるかもしれない。いまの小学生はどうしているのだろうか。

こんな失敗を繰り返すのが、70歳の私の生活にふさわしいかもしれない。

6) 外出先で初対面の人との会話で多いパターン

「70歳ですからね」というと、「元気がいいですね。顔も体も70歳には見えない。もっと若く見えますね。」こんな対応がごく普通にある。「若く見える」というと、喜んでもらえると思っている人が普通だからだろう。

これに対して、私は時々、「幼く見えるんですね。もっと年長に見られる方が、熟して見られて、いいなあと思うんです。若く見られるという事は、未熟で落ち着きがないように見えると思ってしまうのです」と話す。すると、相手は対応に困ってしまう。

先日、体育館でのある人との会話。「元気ですね。私の周りでは、70歳になると、家から出たがらない人が多いんですよ」とのこと。

でも、私の近所には、男女合わせて7、8名の70代がいるが、畑・ゴルフ・仕事・散策・ゆんたくにと、出かける人ばかりだ。

1. 忘れ事 「おじいちゃん」とよばれても自分の事と気づかない

このところ、愉快的物語が続出。私個人のことだが、これから70歳を迎える人には参考になるかもしれない。

1) 連続忘れもの

プリンターのインクの購入。インク番号を忘れたので、店員に調べてもらうが、結果、前の機種のものであった。

家に帰って気が付く。店に出直す。今度は、カードを忘れる。カードで購入したので、カードなしでは交換手続きができない。同じ日に3度も出かける気力を喪失。

日を改めて出かけ、無事交換できた。

2) 「おじいちゃん」とよばれても自分の事と気づかない

食堂で、隣の席に、親子孫三代家族が着席。孫が、子ども用の椅子を希望。祖母が、「おじいちゃんが通れないでしょう」と。恵美子が「大丈夫ですよ」と返す。なぜ、恵美子がそれをいうのか不思議に思う。

私は、「隣におじいちゃんもこられるのか、賑わっていいなあ」と思う。

食事がすすんでも、隣のおじいちゃんは現れない。そこで、さきほどの会話のおじいちゃんは、私のことだと気づく。

我が家では、孫は「おじいちゃん」ではなく「誠」と呼んでいるので、私には「おじいちゃん」のリアルな感覚が育っていないのだろう。

3) 外出先で、出会った初対面の人にも声をかける。

店員にも話しかけることが多い。

郵便局で、応対した女性局員の制服、とくにベストがかっこいいと思う。そこで、「男女兼用で、いいですね」と話すと、「男性はベストではなくてスーツです」と。「最近ですか」「もう7年ぐらいになります」

私の的外れぶりが目立つ。

スーパーのレジでも、無言でやりとりするのは、寂しい感じがするので、よく話しかける私。

近年の若者の人間関係と「希望」 土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」に触れつつ

2016年12月19日

秋田喜代美編『変容する子どもの関係』岩波書店2016年には、興味深い論文が収められている。その一つに土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」がある。

著者は、次のように述べる、

「社会的排除を認識する営みからも排除された少年たちは、たとえ劣悪な社会環境に置かれていても、その状況に対してフラストレーションを抱くことがあまりない。希望そのものが格差配分されていることに気づいていないため、その状況に対して反発や絶望を抱くことがない。「周りを見渡してもみんなそうだから」と納得しつつその状況を淡々と迎え入れていく。自分の置かれた現状をごく自然なことと思っていれば、そこにフラストレーションが生じないのは当然のことだろう。

ネット・メディアの発達によって関心対象や生活圏が拡大し、その結果、人間関係も広がっている若者の一群が存在するのはたしかな事実である。しかし他方では、ネット・メディアの発達によって関心対象も生活圏も狭窄化し、その結果、人間関係も逆に挟まっている若者の一群が存在するのもまた事実である。そして、両者の落差が激しくなり、人間関係の分断化も進んでいるのが、今日の人間関係をめぐる現実なのである。

同じ空間で生活を送りながら、しかし互いにまったく異なった世界を生きる若者が増え、両者の分断線は深

まっている。それは、ネット・メディア自体がもっている問題ではなく、それを利用する私たち人間のメンタリティの問題である。以上の考察からすれば、いま若者にとって必要なのは、仲間内での絆の強化を煽り立てられることではないことがわかる。逆に、若者たち自身のその傾向にブレーキをかけ、閉じた関係を外部へ開いていかせることこそ重要な課題のはずである。」 p 127-8

こうした分断状況にあるのは、格差による二分化という性格もあるにしても、二分された双方ともに、「人間関係も」「挟まっている」と、授業などで接する学生たちの出会いのなかで、私は感じている。「閉じた関係を外部へ開いて」行く作業は、仲間内に閉じた若者たちのほとんどに必要なことだろう。だからこそ、ワークショップ型で授業を展開し、異質協同の方向を原理として、受講生とともに追求しているのが、私の実践の特質だろう。

その点で、土井論に共感を覚える。と同時に、若者たちがどんな位置にいるにせよ、「希望」を持たないで生きて、「自分の置かれた現状をごく自然なことと思ってい」という現状をどうとらえたらよいだろうか。

この問題は、経済上でいうと、「縮小・定常化している現代を生きている若者たちの反応である」と捉えたらどうなるだろうか、という問いが、私の中に浮かんできた。この「希望」は、成長の時代を生きてきた現在50歳代以上の感覚からでてきたことかもしれない、と疑ったらどうなるであろうか。言い換えると、現代の若者なりの「希望」の持ち方は、異なるのではないだろうか、と問いかけてみたいのだ。

同じことを、沖縄の若者に即して考えてみることも、私には必要だ。沖縄で歴史的に形成継承されてきた「希望」と、近年、とくに「復帰」後、経済成長とメディア、そして学校教育によって誘導されてきた「希望」と、若者の現代生活感覚のなかで形作られている「希望」とは、どうからみあって存在しているのだろうか。考えてみたくなった。

点数序列からの卒業を 2016年2016年10月13日～12月07日

9. 卒業しなくてはならないと思うようになってはいるが

こうして、客観的状況は、点数秩序依存からの卒業へと歩み始め、「垂直的多様性」ではなく、「水平的多様性」とVET（職業教育訓練）への期待は高まっている。沖縄での専門学校の隆盛は、そうした事態を反映しているように思う。

政策面での変化について、本田さんは次のように述べる。

「一九九〇年代末以降、「キャリア教育」のように「垂直的多様性」を揺るがさない方向で教育と職業との接続を試み、状況を改善するどころか悪化させてきた経緯に対して、あたかも政権が業を煮やしたかのようさらなる改革に足を踏み入れていることは確実である。その背景には、経済的低迷の長期化、少子高齢化の進行と人口および労働力の減少予測、地方の衰退といった、かつての「戦後日本型循環モデル」崩壊後の日本が立ち至っている危機的状況の深化がある（中略）。

これまで「水平的多様性」が過少であった日本において、このような政策的変革が着手されるのは、ある種の必然であったともいえる。しかし問題は、それらが性急であり、職業の現状と教育内容とを慎重にすり合わせる「水平的多様性」の設計が十分になされずに進められているように見えることである。特に、①想定されていた職業分野に就かない場合にも有効性を発揮するような柔軟性と応用可能性（「柔軟な専門性」）ならび

に社会の現実に対する知識・認識およびその問題性を政治運動・労働運動を通じて変革してゆく〈抵抗〉の契機が教育内容に組み込まれているか否か、②職業の側において、これまで正社員については「メンバーシップ型」の雇用・採用が主体であり、「ジョブ」に即した配置と処遇が普及していなかった現状に対する政策的介入が明確になされるか否か、また③教育から職業への移行をスムーズに果たすことができない場合を想定したセーフティネットの整備が並行して進められているか否か、という、教育と職業との関係を再構築する上で不可欠な諸条件に関して、危惧される点が多い。これまで専ら「垂直的多様性」に貫かれた関係に長く慣らされてきた教育と職業、それらを研究する立場、さらには社会全般が、にわかに進む諸変革に対して、政策動向を点検・吟味するための立脚点や、要望を反映させるルートとアクターを備えていない。そのような状況で、上位下達的に性急な改革が進められても、その結果がうまく機能しないおそれがある。」 p 192-193

このように、政策面においても、点数依存秩序、垂直的多様性依存秩序から卒業することが課題として意識され始めている。しかし、実際には、社会的経済的格差の拡大が進行しているなか、その格差が、点数依存秩序、垂直的多様性依存秩序と深く結びついており、それらを政策的に推進する動きは、基本構造として残っている。

そして、社会的にも、点数依存秩序、垂直的多様性依存秩序への批判がますます高まってはいるが、そこから意識的に卒業しようとする動きは、強くはない。

この矛盾のなかでさまよっているのが、日本の現状だともいえよう。沖縄では、むしろ点数依存秩序、垂直的多様性依存秩序を強めようという政策動向社会動向さえ感じさせる状況にある。

そのため、事態の打開へとは向かわず、ジリジリと矛盾を蓄積させ、破局による打開を待っているかのようには見えぬ。

これらの結果、点数依存、垂直的多様性の問題性に立ち向かい、そこから卒業していく課題が、政策や社会の取り組みではなく、個人の取り組みとなっている現状がある。そうではなく、個人だけの問題にせず、社会的なうねりにし、政策変更に至るような動きにしていかななくてはならない。

その個人的取り組みは、社会的政策的支援がないなかで、大変な労苦を伴うが、実際は、ほとんどの個人がそれを上手くか下手かは別にして、やり通している。

その実際を検討しつつ、次への見通しを開いていくしかないのが現状だろう。

それだけに、その個人として取り組みは、試行錯誤的であり、また多様である。これについて書くのは、また長い連載が必要だろう。改めて書くことにしたい。今回の連載は、これにて閉じることにする。

8. 普通高校・実業高校

前回まで紹介してきた日本の状況を作り出した歴史構図について、本田さんは次のように提起する。

「日本では自由民主党という保守政党が長期にわたって政権の座に就いてきたことが、スキル形成を市場メカニズムと個人の責任に委ね、VETの弱さのみならず教育財政の家計依存、そして経済的不平等の大きさをもたらす基底的要因であったという理解が得られる。これを逆に見れば、VETすなわち「水平的多様性」の充実は、公的な教育支出への支持や実際の増加、経済的不平等の緩和、再分配の強化ともなじみの良い（中略）方向性であるということになる。」 p 182-3

「①高度経済成長期から安定成長期にかけて産業界の労働力需要は総じて堅調であり、組織内に労働力を保

持するための内部労働市場と企業内教育訓練が発達していた。②高度経済成長期の高校進学率の急激な上昇により、新規労働力の学歴構成は大幅に変化した（中卒者の減少、高卒者の増加）。③高校進学率の上昇後に第二次ベビーブーマーの高校進学期を迎えたことにより、特に人口増が著しかった大都市圏において高校の増設が必要となっていた。④石油危機後の税収減と社会保障支出の増加により国家財政収支は慢性的に赤字化していた。⑤社会民主主義政党としての社会党、その支持母体の一つである日本教職員組合がVETに対して否定的であった。

このうち①は産業界側から、⑤は教育界側から、VETに対する要請が、少なくとも一九七〇年代以降は低下していたことを意味しており、また②③④は高校段階のVETを計画的・体系的に整備する余裕が財政的にも失われていたことを意味している。その結果、膨張した後期中等教育の内部で在学者間に潜在していた多様性——それは制度構造によって垂直的・水平的のいずれの形にも変換されうるものであった——は、主に、安価に設置可能であった普通科高校間における「垂直的多様性」の形で処理・吸収されることになった。一定層の保護者や生徒の中に潜在していたVETへの需要は、明確な代弁者が政治的アクターとして存在しない状況のもとで、発現する経路を失っていた。むしろ、保護者や生徒の間に「普通科志向」が強いという言説が、政府や教員組合によって多数生み出されており、「垂直的多様性」への政策的傾斜を正当化するために活用されていた。

ここで付言しておきたいのは、前記⑤、特に教育界がVETに対して否定的であったことのさらなる背景として、敗戦に至るまでのVETの戦時活用への反省から、敗戦後の日本の教育には、新たな民主主義的国家を次世代において作り出すという、独特な理念的負荷がかかっていた可能性があるということである。経済成長が軌道に乗り始めてからも、現に存在する産業や職業に対して順機能的であるような教育は、理想社会を目指す教育の「本来的」な使命に悖るものという意味づけを、多くの教員や教育学者らによって与えられてきたのではないか。」 p 183 - 184

普通科志向を強め、実業高校志向を弱め、両者を点数序列秩序の中で上下に置く「垂直的多様性」は、沖縄ではどうだろうか。1980年代前半までも、その傾向がないではなかったが、それほど強くなく、各々の高校の卒業生たちが誇りをもって卒業するということが広く見られた。しかし、1985年頃から、高校を偏差値秩序に追い込み、公立私立の受験専門高校が登場する中で、沖縄でも「点数序列秩序」「垂直的多様性」が強まり、現在はその頂点にあるといえるほどだ。だから、自らの出身高校を誇りを持って語る卒業生が激減している。

また、本田さんのような主張は、教育関係者のなかで圧倒的に多くの支持を受けるほどの段階に至っていないようだ。また、「沖縄おこし人生おこし」の主張をはじめとする私の主張も、関係者の理解をそれほど得てはいないことには、同様の背景がありそうだ。とはいえ、現実の事態とからみあわせながら話していくと、共感が広がることは、最近の私が実感していることだ。

「点数序列依存」「垂直的多様性」が、現在の日本そして沖縄であまりに強く支配しているために、教育関係者・親・子どもたちはその「大勢に従う」ことにしているのだ、ともいえよう。

しかし、客観的状况は否応なく大きく変化してきている。その点は次回にしよう。

7. 「垂直的多様性」と「水平的多様性」

この連載で書いてきた「点数序列」と意味が近い「垂直的多様性」についての本田論を前回紹介したが、それに続けて、次のように書かれている。

「職業というものが質的に多様であるからには、知識やスキルも（中略）領域や分野という形で相互に質的に一定程度区別される「水平的多様性」をもつはずである。そして、多様な領域や分野、それらに即した別々の尺度が並立しているならば、個人はそれらのいずれかに包摂されさえしていれば、社会からの苛烈な排除を免れうる。ある領域に適合しなくとも、他の可能性を選択しうる。

しかし日本では、いわゆる「普通教育」の達成度に基づく一元的な「垂直的多様性」が後期中等教育・高等教育の構造を強く規定している。それは具体的には「高校ランク」「大学ランク」といった偏差値序列的な入試難易度の形をとる。（中略）大半の児童・生徒・学生を巻き込んでいる、この「普通教育」の達成度という垂直的な序列は、その共通性・一般性の外観により「形式的平等性」を担保しているように見えるが、実際には個人間に差異を生み出す、社会的に構築された尺度として機能している。すなわち、個々人の絶対的水準とは別に、個人間の相対的上下関係をあえて作り出し可視化する——多くの場合数値的に——ことによって、「垂直的多様性」は其中で下位に位置づけられた者を厳しく排除するように作用する。一元的尺度において個人が低位であることは、その個人から他の可能性を剥奪する。しかもこの「垂直的多様性」内での位置づけは、個人に内在する「能力」——素質、才能、努力などを含む広義の「能力」——を反映したものと解釈されるという点で「個人化」されており、社会の体制や制度の側には帰責されにくい（個人化された能力主義）。」
p 176-7

こうした構図は、沖縄では1980年代以降強化され、いまでは一般化されたように見える。続けて、本田さんは、近年の日本の教育施策の中で打ち出されてきた「人間力」「生きる力」「人間関係形成能力」「キャリアプランニング能力」「課題達成能力」などについて、次のように指摘する。

「これらは、個別の職業に即した「水平的多様性」を欠いた、文字通り「基礎的・汎用的」な「能力」として、その多寡によって児童・生徒・学生を垂直的に差異化する新たな尺度となっている。しかも、こうした非認知的スキルは学校教育における体系的な形成が認知的スキルよりもさらに困難であることから、いっそう「個人化」されている。こうした非認知的スキルが教育や職業においてますます賞揚されている事態を、筆者は「ハイパー・メリトクラシー」という概念で表し、批判的検討を加えてきた（中略）。」p 177と述べる。そしてさらに、

「こうした認知的・非認知的スキルの両面での「垂直的多様性」の支配と「水平的多様性」の過少さという状況が、日本の労働市場の特性と深く関係しているということである。（中略）

教育や労働市場のあり方がもともと日本とは異なる他の先進諸国において、労働市場をより柔軟化させることを目的として、一般的な認知的・非認知的スキルの重要性が強調されるようになっており、日本もその動向に追従しようとしているために、日本の偏りが助長されているということである。（中略）このような趨勢は、もともと「ジョブ型」である労働市場を前提として、相対的に融通性を高めることを狙いとしている。しかも同時に、国際的な職業資格（中略）の共通化など、「水平的多様性」の拡充と並行して進められている（中略）。しかし日本では、「メンバーシップ型」の正規雇用と強すぎる「垂直的多様性」、弱すぎる「水平的多様性」という、他国とは異なる状況があるにもかかわらず、表面的な世界的趨勢を取り込むことで、いっそう「垂直的多様性」が強化されるという皮肉な状況が生じているのである。」p 177-178

文章を難解と感ずるかたがおられるかもしれないが、主張は、図を見るように分かりやすく、見事な表現だ。

ところで、成人も30代以降になると、多様な職業に就き、多様な社会生活を送っているなら、「点数序列」から卒業していく。「点数序列」にこだわることは、過去の遺物にこだわることであり、それでは、現実の仕事と社会生活を送っていけないのだ。

ところが、30代以降になっても、「点数序列」にこだわり、同じような「点数序列」にあった人と、職場も社会生活も共にする人もいる。狭い世界に閉じこもって広い世界の楽しさを知らず、「自己満足」状態にいとでも言うてよいだろうか。

6. 日本の労働生産性の低さ 教育と労働とが無関係になっている

前回紹介した本田論文は、職業教育訓練（VET）に焦点の一つをあてているが、その話の前に、いくつか注目したい論を紹介しておこう。

まず、日本の成人は一般的スキル、いいかえると「学力」は高いが、職業にかかわるスキルは不足している、という重大な事実についてである。本田さんは、OECDのPIAAC調査（国際成人力調査）2011～2013年にもとづいて、次のように指摘する。

「日本では、読解力、数的思考力、ITを用いた問題解決能力といった、特定の職業に限定されない一般的スキルは極めて高く、かつ就いている職業が必要とする以上の学歴を獲得している人々が多いにもかかわらず、現職やさらなるキャリアアップのために必要なスキルは不足しているという、一見矛盾するような事態が生じているのである。

しかし、実はこれらの間には何ら矛盾は存在しない。一般的なスキルや学歴と、個々の職業を遂行する上で必要な具体的なスキルとが異なるものであるという補助線を差し込めば、前者が高くとも後者は不足しているという事態は矛盾なく併存しうる。そしてこのことこそが、日本の教育と職業との関係が内包している重要な問題である可能性がある。

その問題性の傍証となるのは、日本の労働生産性や時間あたり労働生産性が、先に見たPIAACのスキル測定結果の高さとは対照的なまでに、国際的に見て非常に低いということである。

二〇一三年時点における日本の労働生産性はOECD加盟三四力国中二二位の七三・二七〇USドルであり、OECD平均の八四・八〇九USドルを下回る。この順位は、一九七〇年一八位→一九八〇年一九位→一九九〇年一三位→二〇〇〇年二一位と、一九九〇年頃の上昇を除けば過去数十年にわたり大きく変化していない。時間あたり労働生産性についても、二〇一三年時点において四一・三USドルで二〇位であり、上位国のノルウェー八七・〇、ルクセンブルク八三・〇、アイルランド六八・八、アメリカ六五・七などはもちろん、OECD平均の四七・四にも及ばない（中略）。（中略）日本の一般的スキルの高さはそれに匹敵するほどの経済的な効率性を生み出していないことは確実である。」p173～175

実に重大な指摘だ。日本では、多くの人が過重な労働に苦勞していることがよく話題になるが、その労働生産性はすごく低いのだ。この連載のなかで述べたことかというと、長時間学習・長時間労働などに象徴される量に対して、質つまり労働生産性では、日本はかなり低いと見なされているのだ。そして、次のように、論は進む。

「このような日本の状況を、濱口桂一郎（中略）は、「教育と労働の密接な無関係」と表現している。「受けた学校教育が卒業後の職業キャリアに大きな影響を与えるという意味では、両者は密接である。しかしながら、学校で受けた教育の中身と卒業後に実際に従事する労働の中身とは、多くの場合あまり関係がない。（中略）もちろん、教育内容ではなく学校の偏差値という面においては、学校教育は職業キャリアに大きな影響を与えている。その学校で何をどれだけ学んだかではなく、その学校に入る段階の学業成績が重要なのである」（中略）筆者も同様の事柄を、日本の教育（特に後期中等教育および高等教育）の「職業的意義」の希薄さ（中略）

略)、さらには教育の「形式的平等性のもとでの垂直的多様性の支配」および「水平的多様性の過少さ」がもたらす「個人化された能力主義」(中略)といった概念を用いて記述してきた。「垂直的多様性」とは一元的で共通の尺度に基づいて人々が上下に序列づけられる状態を意味しており、「水平的多様性」とは、相互に異なる複数の選択肢が並列している状態を表している。」 p 175-6

濱口さんも本田さんも、日本では、学校→職業の移行に際して、職業教育訓練が欠落することが多いことを示唆している。濱口論での「偏差値」、本田論での「垂直的多様性」は、本連載で述べてきた「点数序列」秩序のことだが、日本では、それらにすさまじく力をいれているが、それが職業や労働とは「無関係」「希薄」な関係にあるというのだ。

5. 学習と職業の並行 生涯学習・職業教育訓練

前回述べた、個人が「点数序列」から卒業するうえで必要なことの基本とは、生涯学習のテーマでもある。とくに、職業教育訓練の分野は特に重要になる。それは、実業高校や実学領域の大学での在学経験がある人にはイメージできやすいだろうが、ない人にはイメージしにくいだろう。

また、職業教育訓練を経験した人でも、いざ転職し、異なった分野での職業教育訓練を受けようとする、時間的・金銭的に容易ではないのが、日本の特徴でもある。それは、それにかかる経費を個人が支払わなくてはならないし、それに必要な時間についての金銭的補償もほとんどないからだ。失業保険受給やハローワークとつながった一部の職業訓練機関で手当が支給される例があるが、限られている。

そうすると、金や時間に余裕がある人とない人との格差が生じる。10代以前からひきづってきた格差をそのまま引き継ぐ、というか拡大する可能性が高い。

それが、残念ながら日本の生涯学習の特徴といえるかもしれない。小中学校のように、国や自治体が財政措置をするわけではなく、生涯学習は自己費用で、自分で時間を作って行うのが日本の特徴だろう。その点では、北欧諸国をはじめとする先進国の多くとは、大きく事情が異なっている。

職業教育訓練を、10代から展開するのは、先進国ではごくありふれたことである。フィンランドでは幼稚園から起業家教育を強調する。また15歳以降、職業教育訓練機関で学びつつ、実際に職業に就く例は、少なくないどころか、通常の高校進学に匹敵するぐらい多い。そして、それ以後、通常の高校や大学に進学する例はかなり多い。だから、学校→職場(終身雇用を理想として)という日本のような形は、先進国では一般的だとはいえないのだ。学校→職場→学校→職場→学校という例や、職場もいくつも変わっていくことは珍しくもない。そうしたありようは、不利なことでもなく、むしろプラスのキャリアの蓄積になりさえもする。加えて、学習のための休業中の金銭補償がしっかりしている国が多い。

だから、生涯学習は、職業ともからんで、ごく普通に経験することだといえよう。多くの人が、10代の時から、職業と直接かかわりつつ、同時進行で学習も継続するのだ。

そして、実業高校と普通高校との間に点数序列がある日本とは事情がかなり異なる。高校までの点数序列が成人しても尾をひくという日本の状況は、異常でさえあろう。

このミニ連載を書いている時に、本田由紀「教育と職業との関係をどうつなぐか——垂直的/水平的多様性の観点から」志水宏吉編「社会のなかの教育」岩波書店2016年を読んだ。本連載の内容に示唆するところが多いので、次回からは、本田論を紹介しつつ、論を続けたい。

4. 卒業のために必要なことの基本

では、個人が「点数序列依存」から卒業するには、どんなことが必要なのだろうか。基本としては、次のものがあげられよう。

- 1) 与えられたものをこなす受身的な姿勢ではなく、自分で考え創造すること。
自分の意見・考えをもつこと。多様な活動経験のなかで、それを洗練拡大深化していくこと
- 2) 対人関係を豊かにしつつ、多様な知恵とサポートを得、また共同で取り組む姿勢と力を高めること
- 3) 業務や学習を、量に焦点化して測る発想を卒業し、質を高めることに、より一層焦点化すること。
少し補足しよう。日本では、どれだけの時間、学習・業務を遂行したかに焦点化し、労働でいうと、長時間労働・過労死を招いてきた。学習でも、かつて「4当5落」という言葉があった。4時間睡眠で学習すると合格するが、5時間睡眠だと落ちるといふものだが、いまでは死語だろう。しかし、そうした長時間学習信仰はいまだに根強い。その発想だから、ゼロ時間目、7, 8時間目授業がはびこる。そんな長時間授業ができるのは、質や集中度を犠牲にしているからかもしれない。質や集中度が高い授業なら、一日3, 4時間もやれば、教師も生徒も疲れ切ってしまうはずだ。こうしたありようから早く卒業してほしいものだ。
- 4) 中学段階を含め、早くから多様な活動経験を蓄積していくこと。働くことでいうと、学校が用意する職場体験だけでなく、家事家業経験、アルバイト体験など多様なものがある。あるいは、多様な趣味・スポーツを体験すること。交流・旅などで内外の多様な人々と出会い協同する体験をもつこと。
- 5) 在学中も学校卒業後の社会生活のなかでも、実は誰もが、現実の必要に迫られて「点数序列依存」では解決できないことに出会い、「点数序列依存」から否応なしに少しずつ離れていく。そうした「否応なし」ではなく、職業生活を含む社会生活で有効な事をより積極的に身に付けていくことが重要だ。職業資格を取得するのはその一つだろう。
- 6) 起業家への姿勢と能力を育むこと。雇われることだけでなく、起業することを視野に入れておいたほうが良いだろう。無論、たとえ小さくても農業など自営業をすることも含めて良いだろう。無論、一人で開業するのではなく、共同ですることもあるだろう。起業家への姿勢と能力は、「点数序列依存」に陥りやすいエリートよりも、それから距離がある一般大衆にこそ求められるものだ。
- 7) 2) で述べたことだが、以上のことをサポートする個人、機関、組織などについて知り、つながること。

1) から7) のこと全体が必要だし、それは学校から職業へと移行する10代後半から20代に重要になるが、ほとんどの人が転職経験をもつ時代にあっては、30代以降も必要なことだ。

3. 私の経験など

前回までの記事で述べてきたように、転換への対応が求められる事態なのに、教育界は対応に困惑している実情だ。たとえば、今時、アクティブ・ラーニングという用語が氾濫するほどなのだ。アクティブ・ラーニングという言葉は最近広がったものだが、私自身は、44年前から、そうした授業を追求してきた。また、テストでいうと、知識量を測るテストは、大学教師なりたてのころ一回だけしたが、すぐやめ、開発創造を中心に

した評価ばかりやってきた。

開発創造型の学習では、学校・教師から与えられた課題を反復練習するような家庭学習ではどうにもならない。自分で課題・問題を考えて、それを授業時間に提出して、級友・教師と討論し、共同創造することが中心になる。

私のことで話そう。いわゆる受験6年制学校に在学していた最初の2年余りは、指示された課題をこなす学習が中心だった。しかし、それに飽きてきた私は、授業で使われるテキストに問題を見つけ、それを教師に質問することを中心にした予習を中心とする自宅学習を始めた。それで、授業で、クラスメイトと担当教師と議論を交わすのだった。

そんなことを始めて2年ぐらいたつと、物理と国語の教師に、大学院で最先端の研究をしてきた人があらわれ、ショックを受けるほどの知的刺激と充実感を味わった。このように、授業でそうした議論を交わすのが、私の知的学習の中心で、自宅学習というと、予習三分の二、復習三分の一だった。それらが、事実上の受験学習にもつながった。

そして、一人でもっての学習ではなく、仲間とともに共同ですすめる学習が増えていった。夏休みには、30日以上、数人の仲間とともに、南信州山中の新野集落に設けられた学生村にこもって、互いに励まし、知恵を出し合いながら、学習した。受験直前期になると、愛知県立図書館に朝から夕方まで、集まって学習しあっていた。

やや脱線したが、「点数序列依存」型の受身的学習から卒業しないと、遅かれ早かれやっていけなくなる。その意味では、早めに、「点数序列依存」型から「外れる」「卒業する」することが大切になる。

それは、個人についていえるだけでなく、大学や職場についてもいえることだ。点数序列に依存して新入社員を選考しては、必要な人材を確保できないことは、多くの企業が知っていることだ。大学についてもいえよう。

ここ10～20年の大学では、教育をきちんとしていなくてはならないとか、行政業務をきちんとかこなすということで、教員は繁忙の極にある。私が専任大学教員だったころと比べると倍以上の繁忙ぶりだ。だが、その一方で、教員の研究論文数が激減し、世界に伍する大学になるということでは、どんどん遅れを取ってきている。そんな近年の大学のありように疑問符をつける大学人は増えているようだ。

2. 賞味期限切れが近づく点数序列依存

高校ぐらいまでは、点数序列依存で「よかった」人も「苦しんだ」人も、大学や実社会では、点数序列依存ではどうにもならない事態に日常的に遭遇する。点数序列依存型秩序が強力な大学や職場ならなんとかなるかもしれないが、そんなところは少ないし、減ってきている。「あの人は○○高校▽▽大学だって、すごいね」などという言葉が出てくる職場は少ない。表でそう言っても、「すごいはずだけど、実際はどうだろう」と裏で思われていることが多い。

成人してから必要とされる実力のうち、「点数序列依存」のなかで身に付けたものは、どれほどあるのだろうか。20%や30%もあるのだろうか。

とくに「指示待ち人間」「人見知り」ではどうにもならないのである。また、点数序列が高くて、実際の実力が伴わなければ、他者からの評価は余計に下がるだろう。そして自己評価も下がり自信喪失に陥り、人によっては、逆に他者批判にすり替えてしまう。

大学生を例にあげると、受験までのテストとは様変わりする学びに直面してとまどう学生が多い。「あなたの考えをいいなさい」といわれると、凍り付いてしまう。高校までの受験学習では、自分の意見の有無は問われないからだ。

また、職場を早期退職し、転職する例がごく普通にある今では、そうなった時、それまで以上に「点数序列依存」「指示待ち人間」「人見知り」はプラスにならず、実際の実力が問われる。

点数序列依存が高じて「依存症」レベルまでに至ると、点数序列に頼れない時に、別の権威や序列的なものに依存しようとする。そうではなく、「素」の自分を出し、実際の実力を育てて発揮し、他者とも適切につきあい、関係をつくり協同していく姿勢が必要なのだ。

こうしたことを20代30代になると、たとえ少しずつだとしても、多くの人が気づいていく。にもかかわらず「点数序列依存」からなかなか抜けきれないのは、それは「皆が」「社会全体が」そうしているからだろう。その「流れ」についていくのが無難だという発想に縛られているからだと言えよう。

しかし、その流れが賞味期限切れになりつつある。

ところで、これまでの日本の点数序列依存に向いている仕事は、定型化された作業を効率よくスピード早く処理するルーティーンなものだ。それは、1980年代の発展途上国に、日本をモデルにして教育改革をする動きを生み出した。今では、その動きは、欧米諸国や欧米諸国に追い付こうとする点で成果をあげているシンガポール・上海・香港などにシフトしている。

それは、1990年代から始まる世界的な技術革新、産業構造の転換と結びついている。そのなかで浮上してきたのが、開発創造型の学力であり、それに対応したテストだ。その象徴的存在がPISAテストだ。

日本では、2000年代に入ってようやく転換への模索をはじめた。しかし、本格的な開発創造型のテストの実施などは「今後の課題」となっている。大学センターテストの廃止はその流れの一つだが、現実的な形ははっきりしない段階にある。

そうした世界的動向だけではない。これまでの学校と距離を置き、新たな模索を始める人も少しずつだが、増えている。不登校にもそうしたものが含まれている事例が多い。

1. 点数序列で人間を見てしまうことが浸透している！

世の中、人間をとらえる際に点数序列に依存する人があまりにも増えている。沖縄でもそうだ。私が沖縄に来た1970年代とはまったく様子が変わってきた。

身近に聞く話を紹介しよう。

「あの人は、〇〇高校出身だよ。」「あら、すごい！」

「自分の出身高校は、恥ずかしくて言えないよ」

「〇〇さんは学年席次3番だ。私の孫は8番なので、カツを入れなくては」

「転校生の〇〇さんは変な人だと思ってシカトしていたけど、テストで満点とった。これからは付き合うことにしよう」

「成績がいい〇〇さんと友達になるのはいいけど、成績がよくない▽▽さんと付き合うのは、やめときなさい」

耳にした例を挙げたらキリがない。それほど日常化し、いってみれば空気のようになってきた。代わって、かつてよく聞いた次のような声は聞かれなくなった。

「勉強できないけど、体育スポーツで活躍しているから、それでいいんだ」

「手に技をつけて、それが生かせる職に就くから、勉強はそこそこでいい」

そして、点数序列下位の子どもには、つぎのような「慰め」「お世辞」「ほめ言葉」が使われる。「一生懸命な子ども」「真面目」「迷惑をかけないで、マイペースでやれる」「地味だがコツコツやる」

このように、他者、とくに子どもを見る時、点数序列で、その人の人格まで判断する傾向が強まってきた。だが、点数序列は、現在の日本の場合、正解が一つしかない知識をどれだけ大量につめこんでいるかを測るテストで決まることがほとんどだ。そして、そのなかでは「指示待ち人間」が大量に生まれてくる。状況をつかみ自分なりに創造判断する姿勢や力は、むしろ邪魔になる。「個性」は押し隠す。あるいは、序列のなかの位置で個性を示す。

受験校など、序列意識が濃いところでは、人とのつきあいは、傷つけあう結果を伴うことが多いと考え、できるだけ付き合う人を減らし、つきあっても深入りしないように配慮しようとする人が多い。その結果、人付き合い経験が浅くなり、「自分は人見知り」だと思ひこんでしまう。私が担当する教員免許取得の必修科目の大学授業で、クラスの三分の二ぐらいの受講生が「私は人見知りです」と自己紹介するのに驚いた。しかし、人との交流・共同活動ばかりの私の授業を終わるころには、「人見知り」は卒業している。

そうしたタイプは、大学や高校を選ぶ時でさえ、その学校の偏差値を指標にする。その学校の偏差値は、もっぱら受験合格ラインの点数で決められていく。自分で、その学校を調べ、自分に合っているかどうかは考えないで、自分の偏差値に合った大学・高校を選ぶのだ。なお、悪いことに、教師や親もそうした判断をしがちだ。

各地の大学をまわり、その大学の教育、とくに授業についてアドバイスしてきた私から見ると、偏差値による判断は、大学選択の十分の一ぐらいの信頼性しかない。大学教育の力量は偏差値に表れていないことが普通だ。

そして、その大学が、これまでのテストのありようを大幅に変えるために、センターテストを廃止し、開発創造型を軸にした方向へと舵を切った。多分、欧米先進国がその方向で、すでに歩み始めており、日本がかなり遅れをとっていると判断したからだろう。

従来日本の学校ですすめてきた学力では、職業も含めて社会で求められる力量とは大きな開きがあることは、多くの人が薄々気づいていることだ。最近読んだある論文でも、欧米と比べて、日本の学校学力のその点での問題性が著しいことが指摘されていた。



夫婦ケンカをどうする 沖縄保育合同研究集会第2セミナー「家族の幸せ&夫婦の幸せ」

2016年09月23日

22日、沖縄キリスト教短期大学で開かれた集会には約200名が集まって、研究討論をした。私がかかわったのは、第2セミナー「家族の幸せ&夫婦の幸せ」。企画進行は、おひさま保育園の仲村夫妻と浅野恵美子。

私は、ワークショップのコーディネイターを務める。

多様な方々が集まって、皆で知恵を出し合っていけば、創造的なものが多様に生まれてくる。そのなかで、参加者が自分なりに創り

発見していくという趣旨だ。素材は、夫婦ケンカ。一つのロールプレイの夫婦ケンカから始まって、それをどうしていくのかを、四つのグループが即興劇風に示していく。それを作る際に、他グループから寄せられた知恵も参照していくので、まさに共同創造であり全体創造になった。

ワークショップの流れを紹介しておこう。

輪づくり⇒挨拶つくし⇒変わり自己紹介⇒ケンカを取る言葉発見⇒ゲームを通してのグループづくり
グループごとのロールプレイ 「また部屋を汚したね」「うるさい!」「・・・」「・・・」

ケンカ対応ロールプレイ

第一場 夫婦ケンカ（スタート）

第二場 そのフォロー・シーン

第三場 対処策を示す。

振りかえり 漢字一文字で表す、感想・意見・発見など

参加者は15名。年代様々。家族を持ってそうな人、これから持ちそうな人、持ちたい人、お一人様だが、家族に関心を持つ人、実に多様だ。

ケンカ対処策には、子どもや祖父母を登場させたり、保育園で保護者相談をするなどと、夫婦間に閉じ込めないで、第三者を入れて展開する点で共通しているが、そのありようは多様だ。なかなかリアリティに富んでいる。

最後の漢字一文字で登場したのは、戯・絆・笑・他・・・などだが、書かれた漢字がすべて異なるのは、私の多くの経験の中では初めてだ。

それをもとにした語り合いは尽きない。充実した2時間余りだった。

養老孟司・南伸坊「老人の壁」（2016年毎日新聞出版）に刺激される

2016年09月08日

私は、かねてから、「老いる」ことを否定せず、「若さ」を追求するよりは、むしろ「熟」することが良いことだと語ってきた。先日、ある方にそのことを話したら、「今や<老人>は禁句ですよ」と返されたが。

そういう私にも刺激的な対談なのが本書だ。刺激的な箇所を、最後の「五章 明るい老人」に焦点を絞って、いくつか紹介コメントしよう。

「養老（中略）「遺言はしない」って言っています。死んだ人が、生きている人にあれこれ指図するなんて、「生きているうちにちゃんとしてない証拠じゃんか」って思う。僕は生きてるうちに、やることをやってるんだから、死んだ後まで面倒をみさせられたら、たまったものじゃないです。」p145

私は遺言については未定だが、このような発想はもっていなかった。参考になるかもしれない。

次も同感だが、私にはこれほど刺激的に言えな



い。

「南 確かに何でもかんでも、生きてるほうがいい、とにかく息をしているだけでも生きてるほうがいいっていう考え方、どうしてできちゃったんですかね。「どうせこのぐらいの年になったら死ぬんだ」っていうのが普通だったときは、諦めていられたものがね、「何とかすれば、息だけしてることはできますよどうします?」ってなると、それ、「やんなくていい」つて言えないんですよね。きっと。」 p 157

「南 漢方では、よく効く薬は、下品って言うそうです。上品、下品とあって、下品って書くんですけども、ものすごくよく効く薬っていうのは「下品」(げほん)って言われてる。薬が効いたら、さらに多くするっていうのは、西洋医学的な僕らの最近の人の考え方で、漢方では逆に、効いたら減らす。漢方には長い間の蓄積があって、それは西洋医学的な考え方の、ぜんぜん逆だったっていうことらしいです。」 p 161

これは知らなかった。とても興味深いことだ。身体の自己回復力を助けるものとして薬をとらえるなら、この考えは当然だろう。

次は、私が長年いつてきた異質協同としての夫婦という発想に相通じる。

「養老 座標軸が一本だと、同じ一本の軸の上に夫婦が乗ってることになる。プラスとマイナスで、ゼロになってしまうんですよ。だから、意見が一八〇度違うことになってね。真正面からぶつかってしまって、外から見たらゼロになります。そうでしょう。でもX軸、Y軸と、別々の軸に分かれて、直角に交わるような関係になれば、二人で共同して作業した場合、値が一番大きくなるんです。

(中略)

何も同じ軸に二人でいて、一致させようとする必要はないんですね。一致したら、大げんかになりますよ。直交している軸に、それぞれがいればいい。(中略) 年齢によって、夫婦って、いろんなふうに変わるでしょう。

(中略) 複数の軸で社会が動いているっていうのが、当たり前になってるからね。」 p 169-171

このX軸、Y軸という説明は、とてもわかりやすいので、私も使わせていただくかな。

次は、これまた私が言い続けてきた「ストレター型人生」の問題性につながるものだ。

「南 (中略) とんとん拍子になんでもできてきた人は、ひと筋に行くのが当たり前になってるわけですよ。だけど、失敗した人は、ほかの道が探せばあるのに気がつく。

だから、「なんでそんなにその一つのことによって一生懸命にそればかりに生きるのかな」って、思うんですよ。やっぱりうまくいっちゃった人っていうのは、あとで最後のところで、それを自分でわからない限り、何でもかんでも突き進めばいいというふうになっちゃうかもしれませんね。もう、学校をものすごくよい成績で出て、会社に入ってから、なんかにつまずいて自殺しちゃうとかね。「何のために」つていうか、その間もね、楽しいほうがいいのにつて思うんだけど(笑)。

(中略)

そういう人は、「楽しいものはあと」にしてるんでしょうね。最初にそういうふうには教えられちゃったからだと思うんだけど。だから、どんどん上がっていく、上に昇っていかなくちゃいけないつて。

養老 これは論語の言う通りですよ。「之を知る者は、之を好む者に如かず」つて言うけど、好きな人には敵わないつていうのあるでしょう。でも、最後は「之を好む者は、之を楽しむ者に如かず」だからね。やってることを楽しんでいる人が、一番いいんだよつて。年を取ったら、そうならなきゃつて思います。」 p 179-180

同感だが、「好む」「楽しむ」という発想は、私は弱かった。実際はそうしているのに、そういうふうにはとらえていなかった。この点は、さらに深めたい。

加藤・浅井対談 『セクシュアリティ』75号 2016年08月28日～2016年09月01日

1. すれ違い

季刊『セクシュアリティ』75号(2016年4月エイデル研究所刊)は、「沖縄から学ぼう―「平和と性の権利」の実践をつくる」という特集であり、関連テーマについて沖縄の様々な動向をつかむ上で、大変有益な書だ。

そのなかで、対談「沖縄の子どもの貧困とセクシュアリティの未来」(浅井春夫 加藤彰彦)は、興味深い課題を突き付けている。

それは、「沖縄における両性の平等～「ゆいまーる」とは～」をめぐって、お二人の次のようなやりとりで表れている。

「浅井 (中略) 沖縄社会における両性の平等についてお聞きしたいのですが、加藤先生はいつも「ゆいまーる」(助け合い、協働)を高く評価されていますよね。戦前にも貧困はありましたし男性にとっての「ゆいまーる」が成り立っていたかもしれません。しかし女性たちにとって「ゆいまーる」は男性たちのものであって、男の下で嫌な仕事をさせられ、男性に支配される関係の中で生きている側面がかなり強くあったのではないかと思います。その典型は戦後にもあった「洗骨」(中略)ですよね。女性たちの手記を読むと嫌なことであるのに、それでもお祝いの席で男性たちは飲んでたというので仕方がなかったというのです。「ゆいまーる」という地域の人間関係は女性にとってどこまで機能していたのでしょうか。

加藤「ゆいまーる」は相互扶助とも訳されますが、労働なのです。「ゆいまーる」に入るということは、お金を出して助け合うことが一定の決まりになっているのです。そこに付随することは労働の協同体なのです。これは男性が中心です。だから家事労働は女性がやるべきことになってしまった。でも沖縄や南方では男性よりも、女性の方が圧倒的に強いです。仕事が出来なくなった時の男性は日本でもどうにもなりません。でも女性にとっての労働は外で働くことだけではなく、生きていく力そのものです。だから炊事洗濯もする、子育てもする、畑作業もするという、オールラウンドなのです。

浅井 そうした女性像もまた男性たちにとって都合のいい沖縄女性像とはいえないでしょうか。女性の自立



といっても、子ども連れで家族から押し出されているというのが実際ではないでしょうか。沖縄社会もまた男性社会としての都合のいいイメージを作り上げてきたのです。その点では女性の視点から生活史を辿ってみることが大切であると思っています。

加藤 沖縄は離婚が多いでしょう。男性は仕事がないと何の貢献も出来ないから、追い出されてしまうのです。女性と同じように仕事が出来ないものですから。女性が一人で子どもを育てていけますし、男性は離婚して家を出ても子どもに会いに来ればご飯を食べさせてもらえるのです。お風呂にも入れてもらえるし、着替えも貸してくれる。別れたからと言って無下に扱われません。そういうことであると、女性の生命力の方が圧倒的に強いですし、それは沖縄では誰もが知っていることです。今まで「ゆいまーる」というのは理想的だと考えてきましたが、これはやはり強制力が後ろにあるからなのです。自分達で自然に助け合おうとして生まれる協同性ですよ。

協同性ということに引きつけて理想的に解釈をしていましたから、浅井先生の言われる通り実際の「ゆいまーる」には相当強制力があると思います。」 p 42

お二人のアプローチというか、強調点というか、それには違いがあり、一読してズレ、すれ違いのようなものを感じる。相手の論を否定しているわけではないが。

こうしたズレ、すれ違いは、この討論だけでなく、沖縄をめぐる論議でしばしば出会うものだ。

「ユイマール」という言葉を、沖縄の良さを強調して使われることには頻繁に出会う。と同時に、沖縄においても、両性不平等をめぐる問題が多々存在しており、ユイマールにもその問題をはらむことがあることは事実である。それは、いまもなお、日常生活において出てくることだ。

2 ゆいまーる

異なるものをもつ二人が対談すれば、意見が一致して発展するだけでなく、異なるものや、ずれ、すれちがいが出てきて、それに対談者が応答する、さらに読者が応答する。こうしたことは、対談にとって大いに有意義なことだ。対談者がお互いに意見をなぞり合うようなものは、対談者個々の著書で読めばいい。だから、対談で意見の違いが出てきたら、それを議論を発展させるきっかけをつくる有益なことと考えたい。

さて、対談では、両性平等とゆいまーるという二つの問題が、結びつけられて、あるいは入り混じって、あるいは錯綜して語られている。この両者を適切に結び付けつつ、かつ適切に切り離しつつ論じていくことが期待される。と同時に、それは、ここで論じられている以外のことをも、議論に呼び込む。そうしたことについて、私なりに気づいたこと、そして、それらが引き起している課題に前向きに取り組むにはどうすればよいか、いくつかのことを書いていこう。

まずユイマールについてだ。ユイマールは、共通する、ないしは共同であたったらよい課題（仕事・労働）を、それにかかわる成員が、輪番で受益・分担しながら、共同ですすめるものであり、全員参加と平等性を確保しようという意味がベースにあるようだ。と同時に、そうした意味に十分に対応するユイマールは、今では滅多にお目にかからない。

都市では珍しいことになるだろうし、田舎でも少なくなっているだろう。地域の清掃・冠婚葬祭・行事などに登場しやすいが、ユイマールとはっきり言えるものは滅多にない。とくに「まーる」にからむものがそうだ。それだけに、その「精神」を大切に、多様な形で行う共同のことを「ユイマール」とよんで行っている例が広く見られる。数十年前にあった原型的なユイマールとは随分異なったものも、「ユイマールだ」「ユイマール精神でいこう」といって行っている例に、日常的にと言っていいほど、出会う。

それらは、ユイマールを肯定的な意味合いで使用する例だ。

それに対して、対談での浅井発言に見られるように、ユイマールには、男性による女性への差別支配という文脈のものが見られるという指摘が存在する。

それは、同誌のなかの次のような山城紀子発言にも見られる。

「山城 ですから今、ゆいまーるが復活したら山城さんあなた喜んで歓迎しますかって、私はもうノーなんですよね。そのゆいまーるというものの中には秩序があって、その秩序の中には主としての男性と、台所の役割としての女っていうそういう秩序でバランスが保たれている。だからもしそういうゆいまーるの復活で老人問題や障害者問題を解決しようっていうんだったら、それはお断りです。新しいもっと柔軟なネットワークで

あれば喜んではいっていきますけれど。」 p 1 2 5

ここでいわれる「新しいもっと柔軟なネットワーク」といった形で、ユイマールという用語を使うかどうかは別にして、共同を発展させることが、今は求められていると言えよう。

ユイマールについて、両性の不平等ということ以外のもう一つの問題点が存在している。それは、集団成員全員が、当人の意思にかかわりなく、伝統・慣習として参加が決まっていることにある。いいかえると、自発的参加よりも、強制としての全員参加という形を取りやすいという問題である。山城さんがいう、「新しいもっと柔軟なネットワーク」は、この問題性の組み替えを示唆しているのであろう。

それは、村ぐるみ、シマぐるみ、島ぐるみ、家族ぐるみ、さらにいうと沖縄ぐるみ、という表現にも表れている。それが自発的参加に基づいて、結果的に全員参加が実現しているならば喜ぶべきことだろうが、不本意のまま強制されて参加するとなれば、問題は大きい。そうした問題については、私は「ぐるみ主義」批判として、1980年代から多様な形で主張してきた。

各地の字単位の世界では、この問題をめぐることが多様に渦巻いている。清掃共同作業への参加と欠席料をめぐる問題、字の自治組織への加入者の減少などがその例である。

3 両性平等

次は、「両性平等」問題である。ここでは、浅井さんが男性による女性差別支配の視点から発言しているのに対して、加藤さんは、主として、離婚問題を事例に女性・男性の強さ・弱さをめぐって発言している。

その際、男性・女性をおのおの一括りにして二分論で語っていいのだろうか、という問題がある。LGBTと言ったセクシュアリティの多様性の問題だけでなく、日常生活での生産労働・家事労働の分担をめぐる、実に多様なかたちが存在しているからだ。典型的に家父長制的だという事例ばかりではない。それとは対照的な事例さえ存在している。だが、この問題はここでの中心的論点ではないので、それについて論じることは別の機会に譲りたい。

それにしても、加藤さんが出会った事例については、私などもよく耳にすることだ。加藤さんは女性の強さと男性の弱さを、とくに生活力と人間関係力について発言している。

離婚した男性をめぐる問題では、養育費を払わない、払えない例とか、親の保護になる例をよく耳にする。そして、そうした時に出てくる女性の強さと苦しみのお話も耳にする。そこには人間関係、つながりの問題がからむだけに、ユイマールの関係・ユイ的關係も関連して話題になりやすい。

その点で、若い人々、とくに男性のなかに、生活力と人間関係力を育てること、加えて結婚・子育てをめぐる責任感と責任能力を育てることが、現実の沖縄社会では、日常的に重要な問題になっている。

脱線するが、そのあたりにかかわって、同誌の南定四郎が「沖縄で生まれ育った同性愛者でカミングアウトをしている人は非常に少数です。そうなる背景には親がかり、親族扶助の恩恵に浴して「黙っていれば、なんとかなる」という経験知が、自己主張を妨げているようです。闘争的な解決法ではなく、親子・親族を他者として分離するのでもなく、そうかと言って異性愛社会に同化することもなく柔軟に生きてゆく人々がいます。」 p 1 4 5 と書いていることが、大変気になる。これも改めて論じたい問題である。

本題に戻すと、加藤さんの離婚をめぐる話は、浅井さんの発言をずらすようにして始まり、最後に応答する。加藤さんの指摘についての浅井さんの応答は読み取れない。関心をもたれることだけに、今後に期待したい。さて、両性の不平等をめぐる浅井さんの指摘は正しいこととはいえ、加藤さんの提起への応答が読み取れないこともあって、外からの啓蒙的な指摘という印象をぬぐいきれない。加藤さんが指摘するようなことに当

事者としてかかわっている人々が、浅井さんが提起する課題に自発的に取り組むありようについての提案と応援メッセージを浅井さんに期待したい。

私自身に即して言うと、私が沖縄生活を始めた1970年代前半は、啓蒙的な色彩を多分に帯びた発言をしてきたが、そのことが、「進んだ本土—遅れた沖縄」という認識枠組を増幅させているのではないか、などの問題性に気づき始め、当事者自身が事態を前向きに取り組む文脈の中で発言するように、大きな軌道修正を行った。これは、別の所で繰り返し述べてきたことなので、繰り返さない。

篠田桃紅「一〇三歳になってわかったこと」幻冬舎2015年を読んで、私と比べて考える

2016年06月27日～8月8日

1. 自由・自由人

店頭で興味深い本を見つける。読んでみると、「私の場合は?」「私だったら?」などと、思い・考えが触発される。そこで、何回か連載して書こうと思う。

発行後一年で45万部突破というベストセラーなんだけれど、私は知らなかった。墨をもちいて抽象表現をする美術家だそうで、かなり以前から著名の方のようだけど、私は全く知らなかった。本書で初めて出会う人だ。

「自由」な生き方をされてきたと語られる方だが、私も「自由人」と他者から言われるような生き方をしてきたが、私の場合、そうなるのに、かなり時間がかかった。

このあたりから書き始めよう。

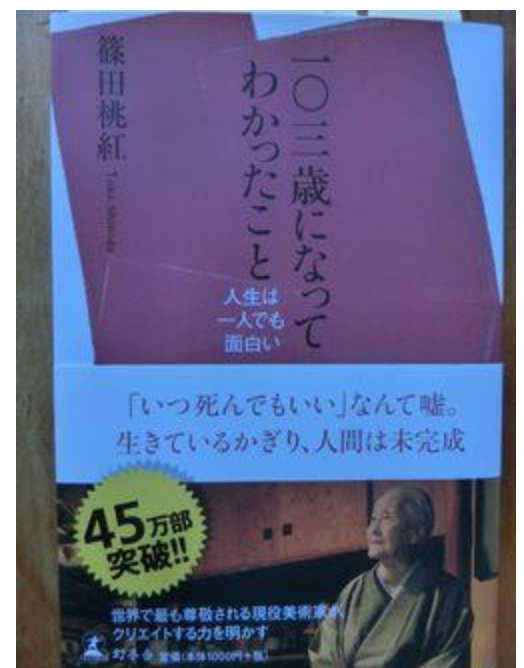
「今の私は、自分の意に染まないことはしないようにしています。無理はしません。今日、明日のことでしたら、まだ生きていだろうと思うので、お約束しますが、あまり先のお日にちでの約束事はしません。

自由という熟語は、自らに由ると書きますが、私は自らに由って生きていますと実感しています。自らに由っていますから、孤独で寂しいという思いはありません。むしろ、気楽で平和です。」 p14-15

「文字の決まりごとから離れて自由になりたい、新しいかたちを生み出したい、と私は希うようになり、墨による抽象表現という、自分の心のままを表現する、新しい分野を拓きました。幸いにも、私の作品は、ニューヨークで評価されて、世界にも少々広がりました。

ですから、私の場合は、こうなりたい、と目標を掲げて、それに向かって精進する、という生き方ではありませんでした。自由を求める私の心が、私の道をつくりました。すべては私の心が求めて、今の私かいます。」 p98

「いいなあ」と共感をもつのだが、篠田さんは、早くからこんなありようをはじめ、人生の大半をそうなさってこられたから、自然



体でこのように書いておられるなあ、と思う。

これに対して、私の場合、かなりの「格闘」が長く続き、「自由人」的な生き方に近づいてきたな、と思う。「自由人」的色彩を帯びているな、と気づいた時からでさえ、まだ10年もたっていないだろう。無論、「自由に生きたい」という願いを強く持ち始めてからは、かなりの期間がある。

だから、私の場合は、「こうなりたい、と目標を掲げて、それに向かって精進する、という生き方」を、60歳ごろまではしており、「自由人である」よりは、「自由人でありたい」と願って格闘している期間が数倍の長さになろう。その「格闘」が終わりつつある近年になって、「自由人」と他者に言われるのを、素直に受け入れ、自己像としても、説明しはじめたというのが実際のところだ。

2 自由とつながり・組織

本書のサブタイトルは「人生は一人でも面白い」であり、「私は生涯、一人身で家庭を持ちませんでした。どこの美術家団体にも所属しませんでした」p14と書かれている。私は、これとは大きく異なる。

そして、「孤独で寂しいという思いはありません」（前回紹介）と書く篠田さんとは対照的に、私は、思春期・青年期に、ことさら寂しがり屋で孤独を恐れていた。それは、その後、軽減されてはきたが、組織やつながりは必要不可欠なものであることは、今もなお続く。

このように大きく異なるのだが、それでも篠田さんは、つながりを豊かにもっておられるし、広い意味で組織にも属しておられるだろう。私との違いは、つながりや組織とのかかわりのありようの違いのように思う。また、「自らの足で立っている人は、過度な依存はしない。そもそも介入しない、期待もしない、負担にならない」p19とも書かれる。私も、徐々にだが、この境地に近づいてきたのは確かだろう。

違いのありかは、私は依存を自覚しつつ、それをゆっくりと減らしていくように努めていることにあるのだろう。そして、つながり・組織との関係のなかで、自分としての主体性を持って生きることの比率を高めてきた。それは、若い時代には、依存と結びついていた権威主義的なものから、徐々に卒業してきた、ということでもあろう。それは、決められたコースを生きることを減らし、ついにそれを止めるということでもあった。そんなのを見て、私を自由人だと評した人がいるのだろう。私にしては、結構葛藤苦勞しているのだが。

だから、私自身は、自分の「独立性」を前面に出したり、高く評価することはしていない。他者から見れば、そう見えるらしいが。

むしろ多様な人々・世界との付き合いを大切にしてきた。決して「過度な依存」ではないが、依存を含む付き合いが、私を随分豊かにしてくれたと思う。あえて言うと、そういう多様な付き合いをすることが、私にとっての自由ということだろう。だから、異質なものと感動的なほどの出会いと協同作業は、それにのめり込むような「過度の依存」ではなく、自分自身が豊かになるための過程を作り出してくれたといえよう。

そうなるには、20代後半から現在に至るまでの長い長い歴史がある。その出会いのなかで決定的なものとして、人生パートナーとの出会い、沖縄との出会いがあった。この二つの出会い、そして協同作業は、今なお新鮮なものを私に与えてくれる。そしてそれらが、私の「孤独で寂しいという思い」を著しく緩和してくれた。

そして、それが、多様な異質なものが出会い協同することで豊かなものを生み出すという確信、そしてそれを促進するコーディネイターとしての生き方を、私の中に育んできたと思う。だから、「異質協同」というキャッチフレーズを30年近くも使い続けてきたのだ。

3. 「歳をとるということは、クリエイトする」こと

今回抜き書きするものは、「同感だ」というものだ。

「歳をとるということは、クリエイトするということです。作品をつくるよりずっと大変です。すべてのことが衰えていくのが、歳をとるということなのに、二重のハンディで、毎日を創造的に生きていかなければなりません。楽しいことではありませんが、マンネリズムはありません。」 p 23

「日々、違う。生きていることに、同じことの繰り返しはない。」 p 25

歳をとると、「毎日が同じことの繰り返しでマンネリで、新鮮さがなく退屈だ」という発言をよく聞く。だが、現在の私にとっては、篠原さんが言う通りです。毎日が新しい発見・出会いで、クリエイトすることばかりです。本を読むことはまさにそうですし、書くことは、まさに創造そのものだ。畑や庭作業も、新しい発見の連続だ。とくに授業では、受講生たちが出して協同で作り出すものは、まさに新鮮そのもので、私にとっては喜びとっていいほどのものだ。

「二重のハンディ」ということの、「二重」はよくはわからないが、また「楽しいことではありません」と篠原さんはいうが、私にとっては、かなり楽しいことだ。自由だからこそ、他者から強制されないで、自分なりに受け止めるわけだから、楽しいと思う。無論、楽しくない発見も入ってくる。それらを受け止める緊張感がある。ときに「いやな気持」を感じたりもするが、「わくわく感」をもつことも結構ある。

無論、いやなことに出会ったり引き受けたりして、心や体の調子が悪い時も、それなりにある。そんなことが重なる時は、「老人ですので」といって辞退できる「特権」があるのも、私にとって好都合だ。

「過去を見る目に変化が生まれる」 p 26

そうだと感じる。同じことなのに、かつての見方とは異なる見方をしてしまうことが結構ある。その時気づかなかったことを、今改めて、発見したり捉えなおしたりすることが、しばしば出てくる。

「未来を見る日にも変化が起こります。若いときは、頭にひらめいたことはなんでもやればできる、やれそうな気がどこかにあります。しかし、今、未来を見ると、その瞬間、その未来を肯定する気持ちと否定する気持ちが同時にやってきます。頭にひらめいたけれど、もうできないだろうという否定が生じるのです。歳をとれば、人にはできることと、できないことがあることを思い知ります。そしてやがて悟りを得た境地に至ります。

それは、できなくて悲しいというよりもあきらめることを知ります。ここまで生きて、これだけのことをした。まあ、いいと思いましょと、自らに区切りをつけなくてはならないことを、次第に悟るのです。」 p 28

このブログでも、あきらめるについて書いたことがあるが、何人かの方が、「あきらめるとは明らかにすることだ」と発言している。

やりたい気持ちがあきあがり、以前なら猛然と突っ走ったりことでも、いまでは「できないな」と思うことは日常的だ。そんなことは、よく夢にでてくる。そして「やはりできないな」と断念するオチまで夢にでてくる。

できないことを自覚することは、悪いことではない。そして、自分一人でやりきってしまうよりも、だれかに引き継いでやってもらおうと考えれば、気楽なものだ。引き継いでもらおう見通しを持ってない時は「仕方がない」

とあきらめる。時がなんとかしてくれるかな、なんともしてくれないかな、などと思うしかない。

4. 「いい加減に」衰えていくことに成熟を見いだす

今回は、いわゆる老化・加齢にかかわって、である。

「今日は、昨日より少し下手になっている……。老齢期に入ってからというもの、日に日に老いていることが、そして、どのように衰えているのか、手にとるようにわかります。まるでスローモーションで再生されているように、わずかな変化も、鮮明にとらえることができるのです。」 p 31

「わずかな変化も、鮮明に」というほどでないが、私も同感することが増えてきている。段差でのつまずきが象徴的だ。段差にくると、意識的にゆっくりと丁寧に足を高くあげることに気をつかうようになってきた。

「歳をとると、ますます体の機能範囲は狭くなりますから、ちょっとした偏りが大きなダメージになります。食事、睡眠、仕事、家事労働、人間関係など、あらゆる面で、その人に合ったいい加減さを保つことができれば、もう少しの長生きを望むことができるのではと思うこのごろです。」 p 42

私も、ここ数年で、「いい加減さ」を見つけるようにしはじめた。その作業をつらいとか面倒だとか悔しいとか否定的には感じない。むしろ落ち着きを与えてくれると思う。

これまでの引用は、篠田桃紅「103歳になって分かったこと」(幻冬舎2015年)からだが、その続編、篠田桃紅「103歳、一人で生きる作法」(幻冬舎2015年)も、最近読んだ。以下は、続編からの引用だ。

「昨日よりも衰えている。しかし、人の成熟はだんだん衰えていくところにあるのかもしれない。」(続本) p 13

「老いたら老いたで、まんざらでもない。まんざらでもない、は含みのある言葉である。満足というほどははっきりしたものではないが、まんざらでもないのである。」(続本) p 30

この二つの引用は、刺激に満ちている。そして、「熟していく」という言葉を使って書いてきた私は、同感する。だから、老化や加齢を否定したり、抵抗したりして、若さを保ち、若く見せようとする営みは好きではない。年相応にふるまう、つまり「いい加減に」に振舞うことを大切にしてきたし、これからもそうしていきたい。

5. 〈目標・計画・規律・規則正しさ〉⇔〈ぼんやり・ポケっと〉

「いつでも、なりゆきまかせなので、私ほど無責任な人はいないでしょう。自分でなにかを考えて、プランを立てて、さあやろう、ではなく、その日の風が吹きやすいように、暮らしてきました。

自分に規律というものは課さないし、外からも課せられないようにしてきました。縛られたくないから目標も立てません。なにか目標を決めると、それに向かってやみくもに一生懸命になってしまいます。そうすると、ほかが見えなくなります。私は、ほかにすごくいいものがあったとしても、目標のために、見逃してしまうことがいやなのです。

人生は、道ばたで休みたいと思えば休めばいいし、わき見をしたければわき見すればいいと思っています。

今日中にあそこまで行かなければならないと決めるやりかたより、自然のなりゆきに身をまかせるほうが、無理がありません。そのほうが私の性に合っています。

規則正しい毎日がいい、とされていますが、なにをもって正しいのでしょうか。」 p 81

「趣味はぼんやりすること」（続編 p 169）

中学生以降の私は、篠原さんがいうこうしたありかたとは対極的な生き方をしてきた。目標を立て、その目標実現に向けての計画を立て、その計画遂行のために自己に規律を課して、規則正しい生活を送る、というものだ。〈目標・計画・規律・規則正しさ〉という言葉が当てはまる生活を送ってきた。

それは、私だけではない。私が中学にはいったのは1950年代末であり、高度経済成長が始まり、必死で働き、そのことが豊かさ・幸せをもたらすと信じ、頑張る時代になっていったころだ。たとえば、時間を守ることは絶対条件であり、私は分刻み生活のなかに入っていた。遅刻などありえないし、中学高校の6年間、科目ごとの学習時間を分単位で記録するなど、今となっては信じがたい生活だった。

だが、心身がそれについていかず、いろいろと漏れ出てきた。だが、それを「克己」などという言葉でスローガンにたてて「律」しようとしてきた。

そうした生活のありように異議申し立てをし、そこから、少しずつ脱け出るようになってきたのは、1972年からの沖縄生活であった。そのことが、心身が出す黄信号赤信号を少しずつ青信号へと向かわせ始めた。そして何十年もかけて、その黄信号赤信号をかなり減らしてきたのが、現段階だ。だから、この数十年間は、「脱け出る」歴史かもしれない。

同じことは、同世代の人たちの多くにも共通しているように思う。とてもじゃないけど、篠原さんのようなありようにはならない。

いまでも、私は、日々の仕事の計画を立て、それを着実に実行する生活をしている。目標の方は、かなりファジーになってきている。また、計画実行の規律もとても緩やかになっている。それでも、その計画に最近「ポケーツ」とする時間を加えた。そうでもしないと、「ポケーツ」をうまくできない体質になっているのだ。篠原さんのように「ぼんやりすることが趣味になる」境地には達したいと思うが。

今後さらに、緩やかな生活になっていくだろうが、計画を立ててそれを着実にやっていくスタイルがなくなるには、何年かかるのだろうか。それも時の自然な流れのなかで、「そうになっていく」のだと思うしかない。

6. 感覚を磨く

今回は、篠原さんの指摘通りだと思うことだ。

「今の人は、自分の感覚よりも、知識を頼りにしています。

知識は、信じやすいし、人と共有しやすい。誰しも、学ぶことで、知識を蓄えることができます。

たとえば、美術館で絵画を鑑賞するときも、こういう時代背景で、こういうことが描かれていると、解説を頭に入れます。そして、解説のとおりであるかを確認しながら鑑賞しています。しかし、それは鑑賞ではなく、頭の学習です。

鑑賞を心から楽しむためには、感覚も必要です。

感覚を磨いている人は非常に少ないように思います、

感覚は、自分で磨かないと得られません。絵画を鑑賞するときは、解説は忘れて、絵画が発しているオーラそのものを、自分の感覚の一切で包み込み、受け止めるようにします」 p 115-6

知識を頼りにして鑑賞するのは、以前の私そのものだ。とくに音楽にあってはそうだった。少しずつ「感覚を磨く」ようにしてきたが、なかなか進まない。でも、少しずつ進めている私だ。

「ジョン・キャナディ (中略)

「絵には作品名がないほうがいい。作品名があると、見る側がそれに左右されてしまう。自分の目で判断しているので、僕は展覧会へ行っても、作品名は見ない」

もちろん、キャナディ氏は、ギャラリーから作品の説明は一切、受けません。」 p 59

私などは、作品名を見ないと、落ち着かない。見て、理解不能の作品名だとまた落ち着かない。

以上とは少し異なることだが、友を自殺で失った人に対して、篠原さんは、次のように語る。

「私は、納得しようとするのは、あなたの思い上がりです、と言いました。人というものは、納得できないことのほうが多い。自分たちの知恵では、わからないことのほうがずっと多い、と長く生きてきた年の功で教えました。ですから、なぜ自殺したのかは誰にもわからない、と。

人というのは不思議な生き物、かんたんに割り切れるものではないと私は思っています。」 p 68

大いに共感する。揺れ・矛盾・ファジーさ・理解しがたさをもつのが、人間の特性かもしれない。これも、リクツで割り切ろうとするものではなく、磨いた感性で受け止めるものなのだろう。

7. 若い 死

まず、続編の次の一節。

「若いからといって、ちやほやしない。謙虚でなければ、相手にしない。」 p 20

言わんとすることはわかるが、私とは対照的かもしれない。謙虚過ぎる若者、謙虚でない若者、多様だ。大学授業などでは、そんな多様な学生を相手にしなくてはならないから、付き合い方も多様になるから、「謙虚」であることを要求できる学生は稀だ。むしろ「人見知り」して自分を出さない「謙虚過ぎる」若者の方が、私は気になる。

死をめぐるいくつかの小節。

「私には死生観がありません」 p 10

「生まれて死ぬことは、考えても始まらない。」 p 12

「人は老いて、日常が「無」の境地にも至り、やがて、ほんとうの「無」を迎える。それが死である。そう感じるようになりました。」 p 53

とても印象的な短文だ。私自身は、若い時、とても死が怖かった。近年では、死について考えることが激減した。2番目の文に近い。そして、1番目に近づく。というよりも、<自然の流れのままに行こう>に近いの

かな。3番目の文のような気持ちになるのもいいな、と思うが、そう思えるには、かなり年数がかかりそうだ。

印象的な文がたくさんあるので、思わず7回も書いてしまった。書きながら、自分の考えの輪郭を作る作業をしてきたといたらよいだろうか。また、そんな機会があれば、書いてみたい。

伊藤亜紗「目の見えない人は世界をどう見ているのか」光文社 2015年を読む

2016年06月22日

店頭で見つけた本だが、大変興味深い内容だ。

帯には、「本書のテーマは、視覚障害者がどんなふうに世界を認識しているのかを理解することにあります。」

「障害者は身近にいる「自分と異なる体を持った存在」です。そんな彼らについて、数字ではなく言葉によって、想像力を働かせること。そして想像の中だけかもしれないけれど、視覚を使わない体に変身して生きてみること。それが本書の目的です。」と書かれている。

また、福岡伸一氏の推薦文として、「<見えない>ことは欠落ではなく、脳の内部に新しい扉が開かれること。」と書かれている。

私の知識や気づきをはるかに超えた興味深いことが次々と出てくる。章タイトルも面白い。並べてみよう。

第1章 空間 ——見える人は二次元、見えない人は三次元？

第2章 感覚 ——読む手、眺める耳

第3章 運動 ——見えない人の体の使い方

第4章 言葉 ——他人の目で見ると

第5章 ユーモア ——生き抜くための武器

このなかの第3、4章から興味深く感じた所を紹介しよう。

「電車の揺れという偶発事に一人対応できていたあの目の見えない男性は、電車に「乗る」と同時に「ノる」

ことができているのでしょうか。難波さんも、電車の振動や揺れを楽しんでいる、と言っていました。（中略）常に注意力を要する生活にかかる労力は相当なものでしょう。しかし、だからこそ、見えない人は状況に対話的にやりくりする術に長けているのかもしれませんが。意志をかたくなに通そうとするのではなく、自分ではないものをうまく「乗りこなす」こと。そうしたスキルが、見えない人の運動神経には組み込まれているのかもしれませんが。」 p 134

「「乗りこなす」からには、単に相手の動きに従ってはいけません。それでは電車が揺れたときに、つられて倒れてしまうでしょう。対話的であるためには、柔軟に応じつつも主導権を手放さないことが肝要です。相手の動きにいったん乗ったうえで、それをふっと外す。そんな出方もあり得るわけです。合わせているばかりが対話ではない。いわば「はぐらかす」のです。」 p 137

「このように、自分以外の物や人と同調していっしょに仕事をなし



とげる力が体にはあります。「シンクロ力」とでもいうべきこうした力がなかったら、人の体にできることはかなり限られてしまっていたでしょう。さまざまな物や人とシンクロする可能性を秘めていること。障害のある／なしにかかわらず、体が本来的に持っているこの開放性は、人間の活動を密かに支えています。」p141-2

「はぐらかす」とか「シンクロ力」とかは面白い。関係性を豊かにしていく力にかかわることだが。それは、目が見える人と見えない人とがいっしょに美術鑑賞する取り組みにかかわっての次の記述にもつながる。

「「見る」が絶対的なものでないことを、白鳥さんは知った。そう思うことによって初めて、見えない人にとっても、見える人に対する関係が揺れ動き始めます。

「見えていても分からないんだったら、見えなくてもそこまで引け目に思わなくてもいいんだな、見えている人がしゃべることを全部信じることもなく、こっちのチョイスであてにしたりしなかったりでもいいのかな、と思い始めました」。

ある意味で、見える人も盲目であることを、白鳥さんは知った。障害が、「見るとは何か」を問い直し、その気づきが人びとの関係を揺り動かしたのです。福祉とは違う、「面白い」をベースとした障害との付き合い方のヒントが、ここにはあるように思います。(中略)

見える人と見えない人がいっしょになって、頭の中で作品を作り直していく過程は、「見るとは何か？」を問い直す作業でもありました。見える人が実は見えていないかもしれないこと、見えない人の方が実は柔軟に見ているかもしれないこと、そうしたことをお互いを感じるによって、関係が揺れ動きます。」p186-7

このように、既成観念をひっくりかえす記述が多い本だ。

親世代の仕事のありようが焦点 「共働き 共子育て」 NHK取材班「超少子化」ポプラ社2016年を読む

2016年05月31日

今年の2月20日に放映されたNHKスペシャル「私たちのこれから 超少子化 ～安心子育ての処方せん～」を一冊にまとめた本だ。私は、この番組を見ていないが、本の中身は、示唆するものが多く、共鳴できる

ところが多い。

いくつかのポイントをかいつまんで紹介しよう。

1) 非正規雇用の増加 「非正規雇用者への積極的な支援はされることなく、結婚したくてもできない若者は増加の一途を辿った。」p52

「平成27年度版 少子化社会対策白書」は、収入の低さが若者の非婚化・晩婚化に拍車をかけると分析した。」p52

2) 「すでに子どもが一人いる家庭で、2人目や3



人目が生まれる環境を醸成することだ。実は、そこに男性の家事・育児への参加が大きく関わっていることが分かってきた。(中略)夫が家事・育児をしない場合では、その(第2子生まれた)割合は11.9%ほどだが、参加時間が長ければ長くなるほど増えていき、6時間以上になると80%を超える」 p150

3)「子育てを経験した人たちに取材すると、誰もが「決して子育てをしたくなかったわけではない」と話す一方、なかなか実現できない環境を悔やむ声が多かった。」 p156

「週に49時間以上働く長時間労働者の割合は、フランス10.8%、スウェーデン7.6%に対して、日本は21.6%。これでは、男性がいくら子育てをしたくてもできない。」 p156

4)「中京大学教授・松田茂樹さんは、こうした日本独特の雇用システムのなかで培ってきた労働環境を、少しずつでも改めていくことが不可欠だと語っている。

「日本の長時間労働の根本には、正社員を採用する仕組みがある。企業はまず、ノウハウをもたない新卒の学生、若い労働者を大量に採用する。そこで一から学ばせて育成する文化がある。

また、専門性を極めるといふより、さまざまな部署を経験させながら育成する傾向があるため、労働時間が長くなりがちになる。欧州並みにドラスティックに労働時間を変えようとすれば、雇用システムそのものを大転換するしかない。」 p158

5)「社会学者の柴田悠さんによれば、

「いま少子化に苦しんでいるのは、伝統的に男性が外で働き、女性は家庭の責任をもつという性別分業が根強い日本・ドイツ・韓国。一方、少子化を打開したフランスやスウェーデンは、女性が働きやすく、子育てもしやすいように社会を『転換』した。こうした国では、多くの人が働きやすくなることで経済成長につながっている」と話す。

また、企業の同意を取りつけるには、男性が育休取得を通じて「父親としての自覚」をもち、「幼い時期にしか味わえない子育ての醍醐味」に触れ、子育ての楽しさを味わうことが、同時に、経済的にもプラスになる、という考え方が浸透する必要があるのではと加える。」 p164-5

6)「日本社会全体を「共働き・共子育て」ができるように変化させていくことが大切なのだ、と柴田さんは説く。

(中略)

これからの日本を考えるうえで「男性の育児参加」や「働き方改革」の先に、日本社会全体が子育て支援をするよう変化させる「子育てシフト」に舵を切ることが必要だ。」 p180-1

7)「大学などの学費が高騰し続ける一方で、長引くデフレや非正規雇用の拡大などの影響で、学生たちを支える両親世代の収入も伸び悩んでいる。

しかも、奨学金のほとんどが返済を必要とする貸与型だ。学生たちは、卒業と同時に数百万円の借金を背負うことになる。

そのお金をきちんと返済できるのか。結婚・出産以前に、どの職に就くか、正社員で働けるのかなど、就職自体がその後の人生を決める大きなハードルになってしまっている。

少子化の問題は、出会いから結婚、出産、子育ての段階に至るすべての局面で、企業や社会の多種多様な環境と複雑に絡み合っている。

個人の「選択の自由」の結果として晩婚化・晩産化したと分析できる時代は過ぎ、結婚したくても、子どもを産みたくても、経済的理由からできない不本意な未婚化が進んでいる。むしろ「選択の自由」の幅が狭まっ

ていると言えるのではないだろうか。」 p188-9

一つ一つの指摘が、思わず「そうだ、そうだ」と叫びたくなるものだ。若い世代自身の責任ばかり追求しようとする動向にたいして、働き方・働かせ方に焦点を当てた指摘などは、私の長年の主張と響きあう。

頑張って、長時間働くことが少子化を招き、かえって経済成長を抑え込み、「共働き・共子育て」が少子化打開の焦点になるという本論は、わかりやすい。無論、NHKなので、政治問題としての追求を抑え込み気味であるが、企業を含めて、ここ何十年間の政治のありようが問われ、その転換を示唆しているといえよう。と同時に、一人一人がいかに生きるのかという価値転換を含んだ生活転換を求めるものだといえよう。

外間守善「回想80年 沖縄学への道」沖縄タイムス社2007年を読む

2016年04月22日

3月末の沖展会場で販売していたものを購入して読む。外間さんの著書には学んだことが多いが、外間さんの人生については何も知らなかった。

著書を通して私が持っていた学術肌のイメージとは大きく異なる、まさに激動体験をくぐったものだった。とくに沖縄戦や妹を対馬丸で亡くした体験、戦後、本土に「出奔」し、働きながら学術の世界に入っていったことなど。あるいは短距離走や空手に優れて、泥棒を捕まえた話などは面白い。

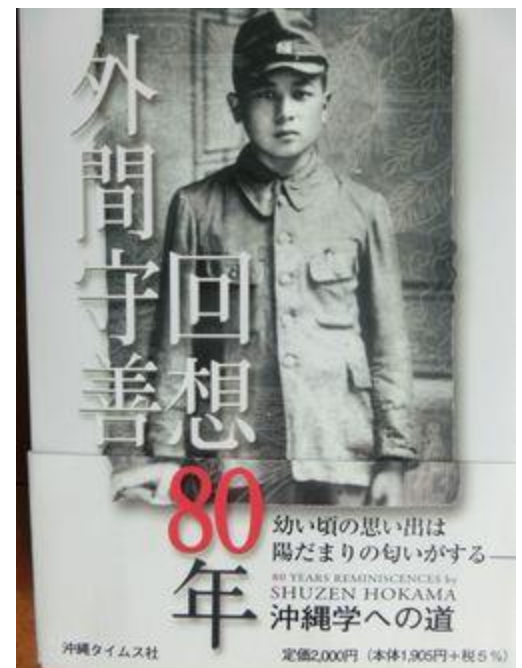
弱弱い私などとは、全く逆の「活劇」的歩みだ。大田昌秀とともに自らモデルになって、健児の像を作ったことなど、知らない話ばかりだ。

県立芸術大学や名桜大学創設にかかわる「秘話」は、全く知らないことだった。

多様な世界とのつながりがあるので、出てくる話は驚きの連続だ。この世代は、歴史がそうさせているのか、こうした激動と創造の人生事例を目にすることがしばしばだ。現代の時代劇といった感じだ。私たちの世代とはかなり異なる。

ふと、このブログに書いている私自身の人生・生き方の記録を思い起こしてしまう。比べようがない世界といえよう。私などは、真正面に進むというより、弱さのなかでなんとか生きてきたという感じがしてしまう。頑張りすぎた人生前半期、崩れかけながら、なんとか持ちこたえてきた後半期。対照的に、外間さんは一生頑張る、というよりも、自然体で奮闘し続ける姿を見せる。

羨ましいというよりも、こんなありようもあるのだ、と感心するばかりだ。



知らないことだらけだった「お経」 島田裕巳「お経のひみつ」光文社2015年を読む

2016年02月12日

浄土真宗地帯に生まれ、小さい時からそんな環境で育ち、中学高校は浄土宗経営の学校に通ったので、お経について多少は知っているつもりだったが、この本を読んで、全くの無知に等しかったことを思い知らされた。

小学校の時に通った日曜学校では、正信偈を暗記させられたし、しばしば泊まった祖父の家では、朝晩、正信偈をはじめとするお経を読む「お務め」に付き合った。しかし、その意味について教えられた記憶はない。

中学高校は浄土宗に触れたが、強烈な印象に残っているのは、なんとその学校が連れていった曹洞宗の永平寺。2年間にわたって、2週間ほど参禅し、一時は出家さえ考えたのに、浄土宗・曹洞宗のお経については、全くの無知だ。

本書では、般若心経、法華経、観音経、浄土三部経、理趣経が取り上げられている。

興味深かったのは、実に膨大なお経が存在し、なかには対照的な内容を含むものが存在していること。お経が教えている中味というよりも、それを読む（歌う）ことなどの雰囲気重視されることが多いこと。

インド・東南アジア・チベット・中国・日本という地域により、大きな違いがあること。その地域のもつ文化にもとづいて、お経が変わり創られていったこと。釈迦の教えが、一貫して継承されたというよりも、後代のものが「釈迦の教え」だといいつつ、作り出していったこと。…

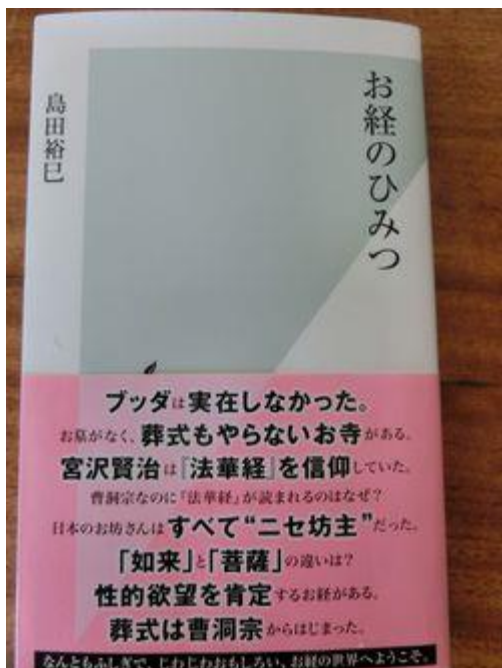
これらの融通無碍さ、というか柔軟性が、仏教の隆盛と衰退をとともに作り出していったのだろう。二千数百年の歴史、広い地域と人口を対象にしてきたから、当然のことだろう。

そして、教えの内容以上に、宗教的慣習という文化が信徒たちを包んできたのだと思う。日本での「葬式仏教」といわれるような、葬式と仏教との深いかわりもその一つだろう。

日本でいうと、仏教一般というよりは、浄土真宗、日蓮宗、曹洞宗、真言宗といった宗派の方が、強い意味をもち、宗派の違いが宗教の違いに相当するといつていいくらいだ。

私自身も、教えの内容よりは、慣習としての宗派に付き合ってきたが、それもかなり薄れてきた。

そんな仏教的慣習も希薄化が進行している。そのなかで、仏教はどうなっていくのだろうか。



藤田孝典「下流老人 一億総老後崩壊の衝撃」を読む

2016年01月06日～2016年01月09日

1. 身近で我が事の問題

朝日新聞出版から昨6月に出版されて、11月に13刷となるほど、すごい本だ。帯には「20万部突破」と書かれている。軽い本と思いきや、重い本だ。それだけ真面目に受け取らざるを得ない人が多い深刻な問題だからだろう。



50代までは数百万円という平均的収入だった人が、病気、認知症、子どもの問題、事故事件などで、生活保護水準以下に生活になり、生活保護をうけないで、ホームレスになる、孤独死するなどの事例が次々に出てくる。生活保護を受けても悪徳業者に絞り取られる例もある。

私自身の周辺にも「下流老人」になっている人、なりそうな人がたくさんいるのに、それに気づいていないことを気づかされた。そして、「現在の若者の多くは下流老人と化す」p213という指摘も、このままでいけば、そうなるだろうと思う。さらに、私自身にも、そうなる危険性が存在していることを感じてしまう。

そうしたことに気づかず、「他人事」だと思い込まされている実情が広汎にある。さらに多くの人々が「自己責任」だという発想にまき込まれている実情を感じる。

ということで、刺激が大きいだけでなく、学ばされることの多い本だ。

いくつか学び考えたことを並べていこう。

「これからの日本社会に、もはや中流は存在しない。いるのは「ごく一握りの富裕層」と「大多数の貧困層」の2つであろう。(中略)わたしたちは全員が緩やかに、しかし確実に貧困に足を踏み入れている。」p110

「現時点での高齢者は、高度経済成長の追い風もあり、資産形成に有利な条件も整っていたために、圧倒的に恵まれた世代と言える。つまり、現在の高齢者はこれから高齢者になる青年層に比べて、相当に豊かなはずである。それにもかかわらず、すでに、下流化が起りはじめていることの深刻さを、わたしたちはもっと危機感をもって受け止めなければならないのではないか。」p117

指摘の通りだ。現在のペースでいけば、一世代を25年と計算すると、世代代わりの25年後には、明らかにそうなることは、現在のアラフォーを見ればよく分かる。彼らの親世代がアラフォーの時と比べれば、経済力が歴然と異なり、相当に弱いのだ。非正規雇用だったら、なおのことだ。

そして、豊かなはずの日本の65歳以上の高齢者についての、次のデータは驚く。私も知らなかったことだ。
65歳以上の高齢者の就業率(平成25年時点)

・日本	20.1%	
・アメリカ	17.7%	
・ドイツ	5.4%	
・フランス	2.2%	p165

世界的に例を見ない深刻な率だ。こうしたデータでは、「アメリカに次いで」が多いが、ここでは、アメリカの先を行っているのだ。

私の周辺でも、60～70歳の人ほとんどが就業している。それは、健康で仕事を持ててよかったと単純に喜ぶべきことではないのかもしれない。

2. 生活保護 下流老人に陥る危険性 経済的事情で大学進学断念の増加

生活保護制度は、単語は知られていても、その中身は意外と知られていない。たとえば、保護のなかには、生活扶助・住宅扶助・医療扶助・教育扶助・介護扶助・葬祭扶助・生業扶助・出産扶助の8つがあることは、

私も知らなかった（p 206）。それらのなかの、もっぱら生活扶助しかイメージせず、医療扶助がかなりの比率を占めていることも知らなかった。保護を受けている高齢者が病気になった時に、大変有効なのだ。保護を避けて、保険証をもたず、治療断念して死期を早めたり、孤立死に至る人が多い中、生活保護は重要な制度だ。

その生活保護が本人申請を基本とするため、申請へのハードルが高くなり、保護が必要なのに、申請しない人が大変多いという。「保護が必要な人々が実際に生活保護を利用している割合を示すもの」p 141として、生活保護の「捕捉率」という用語が使われているとのことだ。それが、ドイツ64.6% フランス91.6%などと対照的に、日本では、「厚生労働省などの調査によると、現在の捕捉率は概ね15～30%前後である」p 141とのことだ。

憂慮すべき事態だ。

もう一つ、私が気づかなかったこととして、日本の住宅政策が、「持ち家取得のための優遇政策（住宅ローン減税など）は充実してきた一方で、低所得者が民間賃貸住宅を借りるための支援や軽減措置がとられることはなかった。」p 209ということがある。私の推理だが、政策が住宅産業の要求に従うことを軸にして作られ、社会的弱者に向けたものでなかったためだろう。公営住宅も不可欠だが、日本は他の先進国に比べれば、かなり少ないのではなかろうか。

こういう記述がある。「貧困は見えないのではなく、見ようとしていくこと。すでにわたしたちの周囲にあるという前提で制度を考える必要がある。そして、下流老人の問題を「自分事」として考えるよう意識を変えていくことから始めたい。」p 200

なるほどと思う。本書を読むと、下流老人に陥る危険性は例外的な人ではなく、一部の富裕層を除けば、だれにも可能性があるとのことだ。たとえば、私の年金額は200万円なのだが、都市生活では厳しい額とのことだ。病気・事故・事件などなにかがあると、私も下流老人に陥る危険性をもつのだ。田舎暮らししているので、なんとかなっているのだろう。

しかも、年金額は減少傾向にある。加えて、経済状況の悪化で、スーパーインフレなどがあれば、実質年金額が大幅下落する危険性もある。

加えて、若い世代に非正規者の増加が著しいなかで、「国民皆年金制度は、雇用の不安定化によって、緩やかに終焉を告げている。これに代わる社会保障を構築しなければ、若者の老後が「時限爆弾」のように、社会へコスト増をもとめてくることだろう。」p 211といわれる。確実に「時限爆弾」が破裂する時期が近づいている印象だ。

こうした下流老人の激増の進行の前に、老人になる20年ほど前の親の世代の貧困化の進行が、子ども世代の大学進学を押しとどめ、大学の存続に重大な問題をもたらしている。

普通の家庭にとってとりわけ大きな支出は、住宅費と教育費である。そのなかで、切縮めることになりやすいのは大学進学への断念である。かつてのように給費制度の奨学金がごく普通にあった時代と異なって、今は貸与制が中心となっている。事実上の教育ローンだ。だから、返済に苦しむ卒業生が爆発的に増加している。

このことは、日本では、大学進学が保護者の経済力に依存していることを示している。その結果、経済事情で大学進学できない子どもが激増するだろう。18歳人口減少が、大学入学者数の激減になることを危惧する声が聞かれた2000年ごろ、私は、親の経済力の低下が、入学者激減につながるという予測を提起したが、それが当たり始めている。

大学教育への公費支出が大幅増加しないなかでは、従来型の大学ではやっていけなくなり、大学の大変化、もしくは大学に代わる何かの創出が必要になってくるだろう。

本書のなかでも述べられているが、人々の平均所得の低下がすすみ、国に借金が大幅に累積しているなか、企業の内部留保（預貯金）は大幅増加している。そのあたりに、大きな問題構造が存在しているように思う。

また、余りにも金銭商品依存症体質が広がっているなか、そこからの脱却が不可欠だとおもうが、それはまた別に論じる必要があるだろう。